
魔法少女リリカルなのは～呼び出された霸王～

× ×

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜呼び出された霸王〜

【Nコード】

N1603N

【作者名】

x x

【あらすじ】

知らない間に英雄になってしまったチート主人公な転生者の僕・・・
・・・Fateの世界に行くと思いきやリリカルな世界にorz

こんな世界で生きていく自信ないんですけど？

だって無乳だぜ？

相も変わらず駄文ですが、お楽しみいただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

リハビリです

本当に凹む程何も浮かばない

ちなみに作者リリカルのアニメを見ていません

・・・原作？ナニソレ？美味しいの？

誤字脱字は報告お願いします

プロローグ

どうもユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。

あつ別に覚えなくてもほぼ毎回名前出てきますから安心してください

では初めましての人はこれからよろしくお願ひします。
以前お会いした方は末永くよろしくお願ひします。

と言つてもまあここで何をすればいいのかわかりませんが (´・`)
(´・`)

僕は転生者である。元の名前は花村 ユウキ

まあチート能力(後々説明しますよ・・・)面倒ですけど(貰つてゼロの使い魔の世界でおおはしゃぎしてたわけなんです・・・)・・・先日死亡致しました。(詳しくはゼロの使い魔(魔眼を持ちし霸王)で確認してください)

なんか死亡フラグ立てて(帰ってきたら恋人とハッスルするつもり

だった) 打ち破れなかつた駄目主人公的な感じですよ。よくあるジャンプの打ち切り漫画的なノリで死にました……………あぁうん笑えませんか。

ゼロの使い魔の世界で何故か召喚された魔神を封印するために自らを犠牲にして己が身に魔神を宿したわけなんです、その際に魔力が足りなくてつい《世界》と契約して力を得て魔神を封印したというわけですよ。

魔神を封印したということ、英雄になり、《世界》に認められたというわけですよ！！

ということ、今現在《座》的な場所にいるわけなんです……………
・何にもなくてつまらんとですよ。

なんか裸のお姉さんとかが待機してるのかと思いきや何もない、真っ白な場所です……………なんか精神病院に収容された感じがします。

おっなんか身体が引つ張られています。誰に召喚されるんですかね？次はFateの世界ですか……………巨乳率が低いから行っても微妙な気持ちになりそうですね。主人公が貧乳好きだから困りますね全く(; ;)

それにしても召喚されるなら桜さんがいいですね。あの乳に飛び込みたい……。しかし僕が召喚されるとライダーさんが……。くっ究極の選択ですね!!

まあとりあえずサーヴァント生活を頑張ってみます。

《続く》

プロローグ（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

うんユウキくん勘違いしてますWWW

次回もお楽しみに

1話：ん？Fateじゃないのか？（前書き）

連続投稿！！

誤字脱字は報告お願いします

ちなみに色々書き換えてあります

1話：ん？Fateじゃないのか？

side ???

私は今身動きのとれないよう手足を縛られ喋れないよう口にさるぐつわをされてどこかの廃工場の柱に縛りつけられています。

床には何か落書きなようなものがありあまり綺麗とは言えなかった。

どうしてこんなことになっちゃったんだろう？

9

ただ幼稚園から一人で帰ってただけなのに……

お父さんがケガして、お母さんもキツサテンのお仕事でいそがしいし、みんなが大変だからメイクをかけないようガンバってたのに……

どうしてジヤマするの！？

私は『一人で』メイワクをかけない方がいい子になろうとガンバっていたことをジャマされ隠しきれない苛立ちを感じると共に悲しくなり、涙がこぼれそうになるのを我慢し睨むように私をここにさらってきた人達を見据える。

「おいおいそんな目で見るなよお嬢ちゃんクツクツ興奮するじゃないか!」

「ちよっお前ロリコンかよ!洒落にならないな」

ゲラゲラ

男たちは余裕たっぷりな様子で私を馬鹿にして仲間同士でお喋りを楽しんでいる……こんなところに『一人』なんてイヤだよ

「それにしても本当にコイツはあの野郎に似ていらつく顔をしてるな」

男の一人が私に近づき髪を引っ張り頭をもちあげ私の顔を食い入るように見つめてくる。男が憎しみを籠めた眼差しで見てくるのに対して私は睨み返すことしか出来なかった。

(『一人』はコワくてサビしいよ)

男たちの話をきいたかぎりではお父さんに仕事のジャマをされた腹いせに私を誘拐したらしい……今みんなが大変なときなのに!!

私はいい子でいなきゃいけないのに!!

(だけど『一人』はやだよ……サビしくてツライよ)

怒りを隠しきれずさらに男をニラみつけると男は舌打ちをして私の頬を叩いた。

「チツ生意気なツラしやがって、殺してやるつか?」

今の一撃で口の中が切れてしまったのか私の口からさるべつわの間を通り血が地面に垂れた。

(誰か私を『一人』にしないで!!)

その瞬間、地面の落書きが金色に輝き出し何かが聞こえる。

それは……

『聖なるかな星なるかな』

悲しむ老人のような声だった。

金色の輝きが増していく

『愚なる世界が仕立てし英雄よ』

嘆くような子供の声だった。

輝きは脈動し大気が反応していく

『世界に望まれしはただの仄暗い絶望のみ』

哀れむような男性の声だった。

輝きはさらに光を増し目をつぶらなければならぬ強さになっていく

『されど神に逆らいし反逆者は絶望を焼き払い希望を渴望した』

苦しむような女性の声だった。

輝きはさらなる脈動を秘め今にも何かが生まれそうだった。

『七天を越え、顕れたまえ』

狂ったような笑い声が重なる。

脈動が止まり輝きが止んでいく

『墮ちろ、墮ちろ、墮ちろ、墮ちろ！！最大なる咎人よ！輪廻の果

て、抑止の輪よりいでよ!』

全ての負の感情を籠めた慟哭のような声が誰とも分からない声で発せられる。

そして輝きは脈動ともに再び活動し一際強い光が発生したとき

私の目の前に何かが現れた。

「サーヴァント、ディザーヴァー。貴方の《渴望（呼びかけ）》に応じて召喚に従い参上した。問おう、貴方が私のマスターか?」

私の目の前にいたのは腕を白い拘束衣で縛られ目を包帯でグルグル巻きにしたよく分からない黒髪の男の人だった。

「ん?あれ登場シーンミスりましたか僕?とりあえず君が呼んだんですよね?」

男の人は私に困ったような苦笑いを浮かべながら問い掛けてくるが、私は今口を塞がれていて喋れなかった。

「いやぁ英雄になつたばかりですからちょっと格好つけてみたんですが、失敗だったよですね」

周りの状況を気にせず（見えないから当然か）男の人は自分の考えに浸っていた……。しかし私を誘拐した男たちはそうではなく不思議な現象に啞然としながらもこちらを気にしない男の人に話し掛ける。

「だっ誰だ、てめえ!？」

「だから僕はディザーヴァーですって……。ん？誰ですかあなたたちは？ああもしかしてこの状況は誘拐だったんですか……。マスターがこの歳ですでに変態の趣向というか極みに到っていたのかと内心焦っていたんですが、杞憂だったみたいですね」

「何グダグダ言つてやがる!？」

男たちは持っていた拳銃を取り出し男の人に向ける。

危ない逃げて!!

声に出そうとするもののさるべつわがあるせいでうまく喋れない。

「フグッフグッ！」

「えっ実は縛られてるのが楽しかった？」

「フガウ!!」

「すみませんマスターの趣向に口を出す気はないので……
今度から気をつけます」

男の人はシヨックをうけたように私から距離をとり、男たちの方に近づいていく

引かないでよ!!

思わずツッコミそうになる中男たちの一人が男の人の後頭部に銃の

先を当てる。

「おいてめえなにもんだ？」

「僕はディザーヴァー、《渴望する者》です………で何の用ですか？」

男の人が銃を当てられたまま後ろを向き銃口が彼の口元にきた瞬間、その場の空気が変わった………今までのどこかふざけたような空気は消え去り、すぐに爆発するような首筋に鋭い刃物をあてられたような濃密な気配がその場を支配する。

「ひっ……!？」

そして銃を当てていた男はその空気を発している男の人に怯え引き金を引いた。

バーンっ!!

発砲音と共に男の人は倒れて、発砲した男は驚き腰を抜かしている。私は発砲音に怯えて目を閉じたが男の人が倒れた音を聞き目を開けてしまう。

「ハアハア・・・何だったんだコイツは!？」

男は怯えたように手の平で顔を隠し倒れた男の人から座ったまま後退りして離れていく

「だからディザーヴァーだって言ってるじゃないですか」

場が固まった。

撃たれたはずの男の人は立ち上がり何かを口から吐き出す。

「いやあ歯で弾丸を受け止めようとしたら失敗して喉に直撃しちゃいました。さすがに英雄でも喉に弾丸を受けたら痛いんですね」

口から吐き出されたのは男の人が身に受けた鉛玉であった。

そして男の人はニヤニヤ笑いながらとんでもないことを言っている。

「さあてもう飽きたことですし、マスターも次の蠟燭プレイに移行したいようですから……貴方たちは消えてください」

その声と共に男の人が掻き消えたように姿を消し、一瞬間に男たちの後ろに回っていた。

「いやあ絶好調ですね、封印がなきゃさらに最高なんです……」

再びふざけたような態度で私に近づいてくる。

まだ男たちが立っているのに！

疑問を感じた次の瞬間、男たちは崩れ落ち泡を吹きながら気絶して

いた。

どうやら男の人が倒したらしい、私には全く見えなかったが……

男の人は器用に足を使って私のさるぐつわと手足を縛っていた縄を解き、立たせてくれた。

私はあまりの急展開さについていけなくなりただ呆然とする中、男の人は悪戯っ子のような笑顔を浮かべて聞いてくる。

「もう一度問います。貴方が私のマスターですか？」

「えっあっ……たぶん」

よく分からないがうなずいておくことにした。

「そうですか……あなたの名前は？」

「あつ私の名前は高町なのはです」

「リリカルなお名前ですね・・・結構笑えませんが」

男の人は私の名前を聞き何故か引き攣ったような笑みを浮かべてくる。

「あなたのお名前は？」

「僕はデザイナーヴァーです。気安くデイズって呼んでください」

「デザイナーヴァー？」

「普通にスルーですか。はい、《渴望する者》って意味です・・・これからよろしく願いますねマスター？」

こうして後々魔王と呼ばれる少女と魔眼を持った霸王は出会い物語は始まった。

《続く》

1話：ん？Fateじゃないのか？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

リリカルな感じで頑張っていきます

次回もお楽しみに

2話・英霊VSシスコン(前書き)

しょうもねえーっ!!

誤字脱字は報告お願いします

2話：英霊VSシスコ

どうもユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。

一応英霊なんて仕事？してます。

英霊なんてヒモと変わらない気がするんですが………気のせいですかね？

というかですね………なんでリリカルな世界に召喚されたんでしょう？

僕リリカルな世界は全く知らないんですけど………知ってるのは主人公がボディーランゲージなO H A N A S Iが大好きで悪魔から魔王に進化したりとか、ライバルの女の子が青少年保護法に引っかけたりそんな服装をしてるとか主人公の相棒が某野菜少年のオコジヨ妖精ばりに淫獣であることしか知らないんですが汗

大丈夫なんですか僕？

それにしても厨二病くさいサーヴァントのクラスですね。なんでかディザーヴァーって？渴望？頭の痛い子にしか聞こえませんかよ

しかし有り得ない話ですよ

一応英霊となつた僕を呼び出すにはそれ相応の媒体がいるはずなんです、Fateの世界なら《聖杯》を媒体として英霊たちを呼び出していましたからシステム上問題はないんですけどね

それになんですかこれ？

半分受肉してるってどんだけの魔力を使ったんですか？しかも僕本体を受肉させるなんて……一応この身には死を司るクソツタレな魔神が封印してあるんですよ？

というかどんな魔法を使用したんですか！？

呼び出したリリカルなマスターを見つめると純粋な眼で不思議そうに僕を見つめかえしてくる……ああ見ないでください、そんな濁りのない澄んだ目で僕を見ないでください！！

「と、とりあえずお家まで送りますねマスター」

純粋な眼差しに怯えながらマスターに背を向けひざまずく

「えっなに？」

「肩車です、おんぶでもいいですが生憎手が塞がってまして……ちなみに頭の乗り心地には定評がある男ですから乗り心地をお楽しみください」

「……………」

マスターは困ったような顔していたが、僕が全く動かないのを見て渋々僕の肩に跨がった。

マスターが上に乗るのを確認してからトボトボとマスターの指示に従って歩いていく

「にしてもマスターは運がないですね？誘拐されるなんて……………」

「……………」

僕の微塵も気を使っていない問い掛けに身体を震わせるマスター・
・・・・ミスりましたね。小さな女の子はどう扱っていいか分かり
ません。

「マツマスター下着は大丈夫ですか？」

「えっ？」

「いえ怖くて漏らした」なのははそんなことしないもん!!」失礼・
・・まあ一応下着出しておきましょうか」

「出す？」

マスターは僕の言葉に不思議そうに首を傾げる。

「ええ出すんです」

僕は言葉と共に足でステップを踏み空間魔法でお子様用下着をそこからへんから転移させた。

空中からマスターにお子様用下着が降り注いだ。

「・・・・・・・・・・。」

頭上から感じるマスターの突き刺さるようなジト目が辛い。

「なっ!?!」

「どうしたんですか、マスター？」

頭上でお子様用下着を握りしめていたマスターが不意に驚くような声をあげた。

「どうして私のサイズを知ってるの!?!」

「ふっ僕には女の子なら誰でもスリーサイズが分かるという特殊能力が「えいつ!!」「むぐっ」

頭に下着を被せられた………ちょっとそういうことは成長してから………

さらにマスターが凍りつくようなジト目で僕を見つめている中

「なっ……なのは………?」

んっ? 前方から来た日本刀を持った青年がこちらを見て呆然としていた。

「あっお兄ちゃん!! デイズさんここが私のお家だよ!!」

あああれがお兄さんですか……原作知らないからどんなキャラか知らないんですよ。にしてもすごい嬉しそうな声色です、本当に家族が好きなんですよ。

僕がマスターの家族に対する暖かさを感じながら、感心していると奴は動き出した。

「貴様つーーっ！っ！なのはのパンツを被るとはいい度胸だな
！！刻んでやるっ！！」

マスターの兄は手に持っていた日本刀を抜き放ち僕に切り掛かってきた。とりあえずマスターを下ろしてかわしていく

「ちょっとお兄さん落ち着いてください！」

「貴様にお義兄さんと呼ばれる筋合いはないわっ！！死にさらせ！！」

煌めく凶刃が顔を掠り被っていた下着がハラリと落ちたシスコン馬鹿兄貴はその下着を握りしめ

「温かい！温かいぞっ！！脱ぎたてかつ！？」

暴走始めた。

明らかに話が通用しなさそうだったので逃げようとした瞬間

「喰らえっ!!！」

袈裟切りに切り掛かって来たので魔力で強化した右足の親指と人差し指で真剣白刃取りを試してみた……案の定失敗して親指と人差し指の間が切れて血が垂れていた。

うん、魔力で強化したる英霊たる我が身を人間が切らないでください。

切れ味のよさにビビっていると、あちらも皮しか切れなかったことに驚き本気になった。

「貴様何者だっ!!！」

「……じゃっ!!！」

とりあえず逃げることにしてみました。

シスコン馬鹿兄貴はそれを見てポカーンと口を開けていたが、ようやく僕が逃げたことに気づき追いかけてきた。

「待って貴様っ!!」

待ってと言われて待つやつはいないでしょう、内心そんなことを思いつつも魔力で強化した脚力で本気で逃げていた………にも関わらずシスコン馬鹿兄貴は日本刀を振り回しパンツを握りしめながら追い縋ってくる。

人外すぎる。なんで人間が英霊と追いかけてこができるんですか？

しかもたまたまに手裏剣みたいな投げてるし………笑えません。

一時間後

マスターの元に鼻歌を歌いながら普通に戻る。

マスターは一時間経っていたにも関わらず、家の前で僕を待っていたみたいだ……。まあお姉さんみたいな人もいますが

「ただいま帰りましたマスター……。初めましてお姉さん。マスターのサーヴァントを務めさせていただいておりますディザーヴァーと申します」

すると女の人は頬に手を当て微笑みながら

「あらあらお姉さんですって、私はなのはの母の高町桃子です」

若っ!!

危なかった……。あまりにも乳成分が足りなかったからこの人で補給しようナンパする手前でしたよ。人妻には手を出しませんから!

くだらないことを心の中で宣言していると、裾を引っ張られたのでそちらを見るとマスターが不安げな上目遣いでこちらを見ていた。

「お兄ちゃんは?」

「ああお兄さんなら・・・・・・・・国家権力に敗北しましたよ」

「えっ？」

まあ簡単に言いますと

僕と追いかけてつこを続ける

さすがに疲れて息を荒げていく

日本刀＋お子様用下着を装備している

わざと交番の前を通る

お巡りさん、息の荒い日本刀を振りまして下着を握りしめている不審者を発見

逮捕

という感じですね。

一連の流れを軽く説明すると桃子さんは「あらあら」と笑っていた。

マスターは啞然としたような顔をして

「良心とか感じなかったの？」

とか言ってくるので

「野郎相手に良心なんて感じるわけないでしょ？」

と笑顔で言ったらすごいジト目で見られた。

桃子がシスコンを引き取りに行っている間マスターの面倒を頼まれたので、お宅にお邪魔してマスターを寝かしつけた。(あからさまに不審者な格好の僕を安心した桃子さんの心情が計り知れなかった。)

暇だったので椅子に座って桃子さんの帰りを待っていると

「はあ・・・はあ・・・」

再び息を荒げながら妹のパンツを握りしめるかなり危なげな目をした青年が現れた。

・・・話し合いが出来るといいな(遠い目)

《続く》

2話・英霊VSシスコン（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

恭也さんズタボロwww

次回もお楽しみに

3話・こうして原作は崩壊した(前書き)

ああシリアス!

そして駄文!

誤字脱字は報告お願いします

3話・こうして原作は崩壊した

こんばんみ！ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスです！

「で貴様はなんなんだ？」

今僕は先程国家権力に敗北した変態男と子供を最低二人は産んだと思われる人妻と向き合って、僕が何者についてか問い詰められます。

さあてどうしますかね？真実を話しても信じてくれるとは到底思えないんですが……

「貴様だんまりか！！」

五月蠅いですよ変態

こっちら悩み事があるんです

しょうがない………本人に聞くか

アホだなあ〜僕

「おためごかしの話とまごうことなき真実どちらが聞きたいですか？」

わざと厭らしい笑みを浮かべて尋ねると案の定

「馬鹿にしてるのかっ!？」

変態が突っ掛かってきたが……

「恭也待って」

「母さん!？」

どこか僕の母上(チート能力を持っていた僕を拘束し、トリステイン王国に飲みたかったお酒の酒樽5つで僕を売ったDS女帝)に似た雰囲気を感じた桃子さんが虚偽は許さないと云うような鋭い目をして問いただしてくる。

「それはあの子……なのはに関係あることですか？」

その質問はまるでマスターに関係なければどんな話でもいいと言外に言っているような台詞に感じた……………

僕は悩みながら真実をつげた。

「ええ、僕を、呼び出した、のはマスター…………高町なのはです」

まあ令呪もないし、何故か魔力提供もなく自分で魔力を生成してるとてつもなく不思議な状況ですが

「呼び出した？」

僕の言葉に意味が分からないというように首を傾げ先を促してくる。

「ええ僕は英霊と呼ばれる存在で、過去・現在・未来の全時系列のどこかに存在した英雄たちの霊。実在したか否かを問わず、神話や伝説・歴史において偉大な功績をあげ、死後もなお人々からの信仰の対象とされた英雄の霊格が精霊・神霊・聖霊の域にまで昇華され、世界の外側にある“英霊の座”と呼ばれる領域に押し上げられることで、輪廻の輪からも因果の枠からも外れて不変の現象となつた存在です…………まあ僕は異世界の英雄なんで認知度はありませんが」

とりあえず引つ張てきた情報をつけてみると、信じられないと言った表情をする二人

「ちなみに僕は自分の命と引き返えに世界に顕れた魔神を封印した
ことにより英雄とされました」

「……………貴様が本当に英雄だという証拠があるのか？」

異世界の人なら魔神を見れば分かってくれるんですが……………

「そうですね……僕は、魔法、使いなので貴方が望む奇跡を一つ
だけ起こしてあげましょう」

僕の言葉に変態は苛立ちを込め歯ぎしりをしながら叫ぶ

「なら怪我で入院して意識不明の父さんを起こしてみろっ！！」

僕はニヤニヤと笑いながらその言葉を了承した。

「お安いご用です。ではそのお父さんのいるところを思い浮かべてください」

「くっ馬鹿にして!! やってみろ!!」

いまだに怒り狂っている変態を無視して魔法で変態の表層意識に入り込み、中にあった父親の位置情報を奪いとり、空間魔法で父親をここに転移させた。

ゴンッ

机の上には包帯がグルグルと巻かれている悲惨な状況の苦しむような呼吸をした男の人が横たわっている。

「「なっ!?!」」

いきなり現れた父親に驚き声をあげる。

そして

『彼の者を癒し給え』

治癒魔法で父親の怪我を治す、目の前にいた包帯で簀巻きにされかけた男の人の呼吸は落ち着いたように静かになっていく

「んっあれ……ここは？」

「父さん!？」

「……………」

父親が目を覚ましたことに驚き再び声をあげる変態、桃子さんは涙を流して信じられないと言わんばかりの無言になっている。

「さあて奇跡を起こしてさしあげましたよ？これで信じていただけますか？」

「くっ」

変態は悔しそうな顔をしていたが父親が起きた嬉しさもありなんとも微妙な表情だった、そして何かなんだか分からないという風なお父さんに事情を話し自己紹介をした。

「改めて初めまして高町なのはの《渴望》に呼び出されたデザイナーヴァーです」

「高町士郎です………助けていただき感謝しています」

深く頭をさげてくる士郎さん
それにたいし僕は首をふり、その礼を拒否する。

「いえいえ信用を勝ち取るためですから、等価交換みたいなものですよ」

「それでも私達は貴方にお礼を言いたいです」

そう言つてさらに頭をさげてくる土郎さん……困りましたね、お礼を言われるのはどうも苦手なんですが

別にあんたのためにやったんじゃないんだからね！

ツンデレみたいな思考をしていると不意に土郎さんが頭をあげ尋ねてくる。

「なのはの《渴望》に呼び出されたと言つのは？」

「本来英霊と言つのは、その英雄にちなんだ触媒がないと呼び出されないものなんです……彼女は《渴望》を触媒に《渴望する者》である僕を呼び出したんです。まあ触媒を用いずに召喚した場合は特に召喚者に近い英霊が選ばれるという法則もあり《渴望》したから僕が呼ばれたわけです」

「それで……なのはの渴望というのは？」

「一人で居たくない。それがマスターが心の底から『渴望』したことでです」

僕の言葉に一樣に無言となってしまう三人

「マスターはあの年齢にしては考えることが早熟してますよね？人間が急成長したとき、その成長の陰にはきつとすごく嬉しいことかすごく辛いことのとどちらかがあるとは言いますが………どっちでしょうね？」

僕は真つ正面から高町家の人々を見つめる。

「………そうね。私達はなのはがいい子にしてくれませんか？あの子に見向きもしなかった。私達はあの子をとて辛目にあわせていたのね」

桃子さんと土郎さんが悲しげに目を伏せ、変態は悔しそうに唇を噛み締めていた。

「なら話は簡単です。これからはマスターを一人にしなさいで
あげてくださいね」

僕は笑顔を浮かべて語りかけると桃子さんも笑顔で

「ええこれからは家族も増えたしなのは一人ぼっちにさせたりは
しないわ」

「what?」

桃子さんは都市伝説に出てきそうなお化け(どっかに引きずり込む
系)のような笑顔でおほざきになる。

「今日から貴方も私達の家族よ」

「はあああああああああああああーーーーっ?!!」

《続く》

3話・こうして原作は崩壊した（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

なんか説明ぽついorz

まあ次回がんばります

次回もお楽しみに

4話・新たなるサーヴァント（前書き）

やっぱりグダグダ
そして短いorz

誤字脱字は報告お願いします

4話：新たなるサーヴァント

どうも皆さんユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。

よくこの世界について考えたら………絶望しました。

なんとという微乳率！いや無乳率！！

乳帝を超え乳魔神となり再誕した僕にとってこの世界は辛すぎる。

r z

なんでみんな微乳なんだ………というかヒロインが無乳ですから

ああ、どうやって乳成分を補給したらいいんですか？

さらにうちのマスターはいつになったらリリカルな魔法少女になるんですかね？

というかりりカルな魔法少女になって何をするんですか？

魔女になるんですか？赤ん坊を育てるんですか？お菓子屋にでもなるんですか？もおっと〜ですか？シャアプですか？どっか〜んですか？呪文はピリカピリラ ポポリナペルトですか？ああおジャ魔女か………もう嫌だあああああああああああー

—————っ！！

どっちも無乳！！

んだよ魔法少女って！！魔法痴女でいいですよ！！畜生！

なんで巨乳がないんですか！？

畜生！！

ぶつくさとこの世界の巨乳率の低さに世界を憎悪しながら、僕が召喚された場所へと向かう。

4話目も書かれていてまだ一日も経ってないとか作者バカすぎる。そうか作者がいけないのか………僕をこんな無乳の世界に召喚しやがって（ブツブツ

まあそれはともかく、結局桃子さんに逆らっても無駄だろうし行く宛てもなかったたのでご厄介になることにした。でとりあえず部屋の用意が出来るまで道場で寝ていて欲しいと言われたんですが………
・少し気になることがあったので、外出中という訳ですよ。

にしても何回も言うけど……無乳を魔法少女にする理由が分からない。乳魔神の僕が貧乳教徒と分かり和える日は来ないだろう……確かに小さな子を愛でたいとは思うがそれは父性からであって、ほとぼしるパッションとはまた別の存在である。

やはり僕がほとぼしるパッションを解放すべきは巨乳に対してである。

くだらないことを考えつつさらに妄想は加速していく

振り切るぜ！！

リリカルな桜さん……堪んないです。魔法少女の衣装を恥ずかしがりそうな感じが！！

リリカルなライダーさん……おう鼻血があの人なら多分見えるか見えないかのギリギリな衣装に違いありません！！

ああなんで幼女……というか無乳orz
止むことのない世界への幾千の呪言を考えながら……妄想
がヤバい方面へと加速してしまった。

絶望が僕のゴールだorz

リリカルな言峰……オエツそんな服装で人生について解かれてもなんら説得力がわからない

さらにリリカルなバーサーカー……衣装からはみ出た漆黒のボディーから更なる吐き気を生む

というか吐いた。

……僕が召喚された魔法陣の上に

ああ、視る、気が失せます。せつかく足を運んだのにゲロまみれの魔法陣を見て何が楽しいんですか？

右足でゲロに触れないよう魔法陣の上の埃を払いながら見つめる。

ああ気持ち悪い。ダメだまた吐きそう……嘔吐したあとってまた嘔吐したくなるんですね。

貰いゲロとはまた違う・・・・・・・・・・ああうん止めましょう。
お食事中方は失礼しました。

さあて帰りますか、吐瀉物まみれの魔法陣に踵をかえし空間魔法で
高町家の道場に《転移》した。

・・・・・・・・後ろにあつた魔法陣が脈動していたとは知らずに

そして30分後、僕が呼ばれた魔法陣のあつた廃工場は突如として
現れた黄金の柱によりゴミへと姿を変えた。

ところ変わって《転移》先の道場に

引いてもらった布団の上に横になりながら思考の海へと潜る。

この世界で僕は何をすべきなのでしょう？《聖杯》もないですし、
求めるものなどにもない・・・・・・・・・・はあ。ああ手の封印しつぱ
なしでした、これDMの変態にしか見えないから嫌いなんですよ。

寝る時ぐらいは外しますか

『封印概念2：限定解除』

言葉と共に腕に付いていた拘束衣の金具が外れたので、腕の具合を確かめるように肩を回したりしていると……

『……………っ！！』

聞き取れない叫び声と共に黄金の光線が目の前を横切り、横になっていた道場が半壊にされた。

そして光線の先から金髪の眉目麗しい美人で鎧を纏った女の子が幽鬼のようにダラッとした様子で右手で輝かしい剣を引きずりながら現れた……そして何より女の子は吐瀉物まみれだった。

女の子は光の消えた瞳でこちらを見つめて

「サーヴァント、セイバー。召喚に従い参上した。問おう、貴方が

私の・・・・・・・・・・・・・・・・私を吐瀉物の下に召喚したマスターか？」

その目にはまごうことなき殺意が満ち溢れていた・・・・・・・・死にましたね。

そして女の子は無言の僕を見つめハイライトの消えた眼差しで低く笑いだしダランと右手に持っていた剣を大上段に構えた。

「ふっふふふ・・・死になさい!!」

女の子は笑顔を浮かべると共に右手に持った宝具に力を込める。

「 エクス(約束された)」

剣から放たれる金色の輝きは見えないほど眩しい

そして

「カリバーーーーーっ!!」(勝利の剣)

光は解き放たれた。

・
・
・
・
・
・
・
・
死ねる。

《続く》

4話：新たなるサーヴァント（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

まさかのセイバーさん登場

あれなんか予定より短い？

気のせい気のせい

次回もお楽しみに

5話・エンゲル係数はそんなに簡単には上がらない(ちょい改変)(前書き)

うんせいバーが壊れたWWW

誤字脱字は報告お願いします

5話：エンゲル係数はそんなに簡単には上がらない（ちょい改変）

どうもユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです……この始まり方は作者の才能のなさを体言しますね。まったく……今回5話目ですが、まだ一日目ですよ？どんだけ一日目に重点を置いてるんですか？こつというのは普通ラスボスとか倒す時だけでしょうが……すでにプロローグ5的位置なんです。アホの極みじゃないですか、これだから無計画なアホ作者は「聞いているんですか!？」

「もちろんっすよ、ペンドラ先輩。聞いてないわけじゃないじゃいつすか!」

勢いよく言ってみたのだが

「……………バカにしますね?」

再びハイライトが瞳から消えかける……………うん冗談ですから

だからカタカタと震えた手でエクスカリバーをあげるのは止めてください。

「にしてもよく僕の場所が分かりましたね」

《パス》（魔力を供給するラインのこと）も繋がってないのによく僕の位置が辿れましたね。

……そういえば召喚した記憶がないですね。

「勘です」

「はあ？」

本当にいつ召喚しましたっけ？

ペンドラさんと会話しながら記憶の糸を手繰り続ける。

「私を召喚してくれやがったコホン……してくださったマスターに対する殺意コホン……敬意を頼りにここまで辿りつきました。……本格的に迷った時はエクスカリバーの指した先へと」

つまりよく迷ったときにする棒を倒して進むやつをエクスカリバー
でやったと？ユルっ！！このペンドラさんユルっ！！

まあ確かに《約束された勝利の剣》なら百発百中でしょうけど！！

というか直感で途中まで来れるのも結構すごいですけどね！！便利
だな直感スキル！！迷子に適用されるとは思ってませんでしたけど
！！

くだらないツッコミをしながら不意に記憶の糸がひっかつた。

ん？あれ？まさか………ああ分かった！！魔法陣の上の埃を
足で払った時に変態ペドフェリアに切られた時の血がついて召喚さ
れちゃったのか

OK……黙っていきましょう。事故で召喚したってバレたら何され
るか分かったもんじゃありませんからね。

「あまり私の真名は知られなくなかったです、溢れんばかりの
殺意コホン……敬意でつい真名解放をしてエクスカリバーを放っ
てしまいましたからね。正体はお分かりになったでしょう？」

殺意なら分かるけど敬意で宝具ぶっ放す意味が分かりません。

「改めて我が名はアーサー・ペンドラゴン改めアルトリア・ペンドラゴンです。さあマスター《聖杯》を手に入れましょう！ああその前にマスターのお名前を！！」

なんかいきなりテンションをあげて片手をあげながら叫ぶペンドラさん

んっ？この世界に《聖杯》なんかないんですけど？あったらさすがに、視、つけてますよ

一応アーサー王の正体に驚いた振りをして

「ええアーサー王って女の子だったんですか（棒読み）ああ僕の名前はディザーヴァーですけど……この世界に《聖杯》なんかありませんよ？」

「……わざと臭いですって貴様っ！！サーヴァントとだったの……」

「か……あれ……《聖杯》が……な……い？」

サーヴァントとだって分かってなかったんですか!?

僕の言葉に一旦は驚愕し剣を抜こうとするも《聖杯》がないと言われ停止する。

「《聖杯》がない?ここは冬木市じゃないのですか!? 第五回聖杯戦争ではないのですか!？」

不意に動き出したかと思ったら僕の両肩を掴み前後させ揺さぶってくる……吐きます。

というか第五回とか言ってるからまだあの『正義の味方』には出会ってないってことですか?それにしても緩い気がします……

「ちよっ落ちて着いてペンドラさん!!よく自分の身体を調べて見てください!完全に受肉してるでしょ!？」

「なっ!?!?…えっ……本当だ……」

ペンドラさんはペタペタと無乳を触り自分を確かめる・・・本当に乳ねえな

チャキツ

「で《パス》もないから令呪もありません」

喉元に突き出されたエクスカリバーを恐怖により正視しないようにしながら、ブラブラと両手を振り令呪がないことを確認させる。

「何故完全な受肉を？」

元々ペンドラさんは他の英霊達と違ってまだ死んでおらず、死の寸前で「《聖杯》を手にすること」を求めて《世界》と契約し、生きている状態のまま様々な時空間に呼び出されています。《聖杯》を手にし、願いを叶えた暁には本来の時間に戻り、そのまま死を迎えてはじめて正式に英霊となることになるが、現時点ではまだ霊体化することができないから半分は受肉してるといふようなものなんです・・・今回は完全に受肉して魔力もマスターから供給されずに、自分で生成してますね。

言うなれば自家発電「チャキ」冗談デスヨ

「にしても……あの魔法陣壊されちゃったのは痛かったです
ねえ」

あれを、視れば一発で仕組みが分かりますからね。

壊した原因であるペンドラさんを少しだけジト目で見つめる。すると焦ったように目を泳がせながら

「しょうがないじゃないですか!! 召喚されたと思ったら吐瀉物まみれにされたんですよ! ? 八つ当たりぐらいしたくなるじゃないですか!! !」

言い訳ですか？

「騎士たるものが八つ当たりですか？それはよくありませんね」

（・）（ニヤニヤ

「ぐっそれは……………」

「騎士が言い訳ですか？とんだ雌豚だな！！」

「なっ！？雌豚？私が…………雌…………豚……………」

絶望したように四つん這いになるペンドラさん……………クツクク

「私は……………ない」

「うん？」

ペンドラさん何か小声でブツブツと呟いている。聞こえませんが

「私は……………なんか……………ない」

「聞こえませんが」

そして急に立ち上がりエクスカリバーを振り上げ叫ぶ

「私は雌豚なんかじゃないっ!!」

『エクス(約束された)』

『カリバー……っ!!(勝利の剣)』

ちよつと調子に乗りすぎましたね………テヘッ

金色の柱に飲み込まれたあと(ギャグパートなので10分ぐらいで回復した)半泣きで幼児退化して「ワタシはメスブタなんかじゃないもん!!」と叫びながらエクスカリバーを振り回すペンドラさんを説得し止めて、魔法で道場を直して寝ることにした。もちろん布団はペンドラさんに取られた。

次の日、桃子さんに居候が増えることを告げると簡単にOKされてしまった………お人よしすぎる!

起きてきたマスターは何故かこの場にいる父親に驚き、父親に喜びながら抱き着いたので、落ち着いたのを確認してから挨拶すると笑顔で「あつ手品師の人だ」と言われて………わりと傷ついた。マスターには魔法は受け入れられないらしく、結局不思議な居候と

言うことになってしまったorz

それでも異世界最強の《魔法》使いなのに（泣）

そんな様子を変態ペドフェリアが爆笑しながら見ていたのにムカついたので一時的にマスターの記憶から存在を消して、マスターに「あなた誰ですか？」と言わせたら泣きながらどこかに逃亡していった。きつと儂い現実が受け入れられなかったんでしよう（笑）

そしてもちろん腹ぺこ王により跳ね上げられた高町家のエンゲル係数をどうにかするためにバイトを探すことにした。

バイトをするサーヴァントなんていな・・・ああどつかの蒼い槍兵さんが働いてたか、釣りとかもしてたしなあの人。庶民的すぎるサーヴァント代表だな。

さあてバイトどうしよう？

《続く》

5話：エンゲル係数はそんなに簡単には上がらない（ちょい改変）（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ああ疲れたWWW

でも書いてるの楽しいです

次回もお楽しみに

6話・うっかりスキル常備の自分が憎い（前書き）

主人公はうっかりスキルをもっていますwww

よくやらかしますwww

というかこの作品から読みはじめた人っているんですかね？

なんか読者の数的にいない気がするんですよorz

誤字脱字は報告お願いします

6話・うっかりスキル常備の自分が憎い

どうしようユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペ
ラトリスです。

53・・・この数字が何か分かりますか？

別に僕が滅ぼした世界の数でもなく、某仮面ライダーのアンデットの数でもエッチの回数（童貞だよ！！悪いか！？）でも作者のエロ画像フォルダーの数でもありません、これは・・・でも作者のエロ・・・断られたアルバイトの件数です。何回断られ
とんねん！！意味分からんわボケが！

なんで53回も！？

確かに目に包帯グルグル巻きの状態で行きましたよ？それでもちゃんと見えることを証明するために女性店員さんのパンツの色全部答えたのに！！どうして！？どうして世界はこんなにも理不尽なんだっ！！くそっ！！

「何をブツブツ言っているのですか？モグモグ食べないならもらいますよ？」

「黙れ腹ぺこ王」

「なっ！？モグモグ騎士たる私に何て言う侮辱をモグモグ」

「せめて口の中の物を食べ終えてから反論してください」

やっぱり朝食中に考え事をしてぼっとしていたせいかな腹ぺこ王が絡んできた。

「モグモグもしかしてあるばいとのことですか？」

「・・・・・・・・・・。」

ムカつく直感スキルだ。

「モグモグすでに一週間モグモグですよ？どうしてあるばいとのモグモグーっや二つモグモグ出来ないのですか？」

イラッ

「……………そういつペンドラさんは何を？」

「私は翠屋で給仕の仕事をしています！モグモグ」

「それじゃあ収入にはなりませんから！！ただの家族の手伝いみたいなもんですから！！だいたい君がバクバクと量を考えずに食べるから」

「なっ！？モグモグそれではまるで私が大食いみたいな言い方モグモグじゃないですか！！」

「大食いに決まってるでしょうが！！朝からご飯三合食べるやつなんかいませんよ！！だいたいなんですかこの『セイバーちゃん専用炊飯器』って！食卓に専用の炊飯器を持ち込むやつなんかいないですよ！！」

「モグモグそれは私に供給される魔力がモグモグないからその代わりに」

「話しながら食つのやめろ！！というか自己生成出来るから代わりもクソもありませんよ！！」

「くっ……いいでしょう前々から白黒つけようとは思っていたのです。女子の後ろばかり追いかけて……真面目になさい！」

「何言ってますか!!この腹ぺこ王が!君なんか最初は『私は早く《聖杯》を手に入れなければならないのです!!早く元の世界に戻してください!!』とか言ってたのに、今はなんですか!?その有様は!完全に順応仕切ってるじゃないですか!!バクバク食いまくってるじゃ「桃子殿オカワリ」他人が話しているときにオカワリしてんじゃねえええええええーっ!!だいたい僕が追いかけてるのは女の子の前ですう!乳ですから!君みたいなツルペタ無乳王には関係ありませんから!!」

ブチッミシッ

「ふっふふ……表に出なさい。今日こそその考えを修正します」

「かかってきなさい!この無乳王っ!!」

光輝く剣と魔法により紫電を纏わせた拳を向かい合わせる。(勝てるわけないのに何故か強気)

「二人ともやめなさい」

「ぐっ」

ツルペタ無乳王と睨み合っていたら桃子さんにオタマで頭を叩かれた。

ちっ今日こそは巨乳の素晴らしさをその身に叩き込んでやるうと思っていたのに（勢いのあまり自分が喧嘩を売った相手が誰だか忘れてる）

結局桃子さんに止められて何故か僕だけ怒られた。

曰く「女の子の身体的部位の悪口はメツ！」だそうで、腹ぺこ王の大食いはいいのか聞いたら遠い目で「悪気はないのよ、悪気」はとか言われた……もはや悪気とかの問題だとは思えませんが

なんか最終的には僕の怒られ損だったので、拗ねて散歩をしている。

そして不意にセイバーに壊された魔法陣を思い出したので、見に行くことにした……別に見れないとは言っていない。

さあて前々から試したかった空間魔法《時間操作》をやりますか！！膨大な魔力が必要ですが、生憎この身に宿すは最強たる魔神、魔力の量なら英霊の一人や二人は余裕で呼び出せますしタイムスリップだっておちゃのこさいさいってやつですよ。

まずは魔法陣だな……よし！

丸書いてちょん

丸書いてちょん

お豆に根がでて

植木鉢、植木鉢

六月六日に、ユーフォーが

あっちいって、こっちいって

おっこちて

お池がふたつ、できました

お池にお船を浮かべたら

お空に三日月のぼってた

ひげをつけたら ドラ もん

出来上がりだ!!
うむなんかどっかの青い猫型ロボットの絵かき歌に似てたけど気のせいだろう

うん、ほら魔法陣って表現しにくいから

さてとあとは時間と……よしこれでセイバーに魔法陣が壊されるより前に見ることが出来ます。

じゃあ行きますよ

『聖なるかな、星なるかな』（以下中略）

『時の扉を開き、我を望む時間へと誘え』

その時風が吹き、どこからともなくブラジャー（推定Gカップ）が飛んできた………掴むしかないっ!!

『発動せよ《時間操作》!』

真上にきた瞬間を狙いジャンプしてキャッチした瞬間発動させる、完璧！……魔法陣の一部を踏み書き換えるとは知らずに

よし到着！

魔法が発動したことに安堵し周りを見回すと何故か気が生い茂る庭園と呼ばれそうな場所だった……あれ？廃工場に行っただけじゃ？

ようやく使うことになった第一の魔眼特殊な複写眼

元々は伝説の勇者の伝説の主人公の能力で、魔法を見ることで解析し構造を理解することが出来るというものだが主人公の目は伝説の勇者の伝説の主人公が物語後半で手に入れた複写眼の上の存在で魔法に限らず人や物、全ての構造を解析し理解することが出来るというもので解析し分解することも出来る、ただ分解の発動の代償がえげつないので魔力に置き換えて使用している。

使用時には瞳の中央に七色に輝る涙型の紋様が浮かび出る。

複写眼を発動して魔法陣を確認すると………テヘッ
足で踏んで時間が書き換えられてるorz

23年前ってなんですか？

キヨロキヨロあたりを見回すと山猫と戯れている金髪の少女を発見
したので話かけてみた。

「すみません」

「ん？なんですか？」

うわっ笑顔が眩しい。

「あの迷子になっちゃったんですが………ここどこですか？」

僕の問い掛けに少女は笑顔を浮かべて

「ここは時の庭園！私のお家なの！！」

………不法侵入で捕まったりしませんかね？

「ねえお名前は？」

「ええと僕ですか？僕はデイザーヴァーです」

「そう私はアリシア・テストロッサー！一緒に遊ばない？」

アリシア・テストロッサ？なんか聞いたことある名前ですね……
……ヒロインのライバルの名前は確か………フェイト………
……ティンダロスでしたね。そう確かクトウルフ神話に出てきそ
うな猟犬みたいな名前でした。

ならこの娘はモブキャラですね、もしくは作者のオリキャラか

「ええいいですよ、何して遊びますか？」

「愛と憎悪のドロドロしたオママゴト」

「はい却下します。なんでオママゴトなのドロドロしなきゃいけないんですか！！」

「お兄ちゃんナイスツツコミだね！」

なんか子供に褒められましたorz

「あっお母さん！」

アリシアちゃんは急に走り出し母親と思われる女の人へと抱き着いた。

そして女の方はこちらへと近づき自己紹介をしてきた。

「初めまして私はプレシア・テストロツサよ。貴方は？」

「僕はディザーヴァーです。実は迷子になりました」

事情を説明するとゆっくりしていけと言われたので何日かお世話になることにした。プレシアさんいい人（泣）

《 続 》

6話・うっかりスキル常備の自分が憎い（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

うんなんだかご都合主義 W W

まあハッピーエンドに向けて奮闘中

次回もお楽しみに

7話：僕はエロゲーの主人公のようにフラグを乱立させたくない（前書き）

超グダグダ！

テキトーっ！！

この原作崩壊感はある意味すごいですorz

誤字脱字は報告お願いします

7話：僕はエロゲーの主人公のようにフラグを乱立させたくない

「ひどいっ！！私とのカンケイは遊びだったのね！」

「ふっ騙される方が「ふんっ」痛いっ！！」

「私の可愛いアリシアをだまくらかすなんて……………ユルサナイ
「イ」

「遊びですから！！これ遊びですからね！」

「やっぱり遊びだったのね……………ひどい」

「キサマ……………ユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ」

「アリシアちゃん分かってやってますよね！？ねえわざとですよ

ね!!その『計画通り』的な顔は可愛い子はやっちゃダメだと思います!!」

どうも初っ端からクライマックスで絶体絶命なユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

いやはやそんなこんなで一ヶ月近くお世話になっちゃってますorz

なんか想定外の場所に飛ばされたから予定より魔力が削られちゃって戻るための魔力が足りないんですよorz
本来ちよつとしたタイムスリップぐらいおちやのこさいさいな筈なんですけどね・・・さすがに20年以上遡ったから魔力を五分の三も持っていけませんでした。

回復しないと元の時間帯に戻れないので今回復中というわけです。まあ一週間で全回復してますが・・・なんか匂うですよ。我が身に宿るバロたん通称：死の魔神バロールが過剰に反応しています・・・多分プレシアさんがアリシアちゃんのどちらかが死んじゃうのかもしれない。

それが嫌で残ってるんですけど・・・何も起きませんね

余計な心配でしたか………ならいいんですが

「どうしたのお兄ちゃん」

「なんでもありません………そろそろお家に帰ろうと思っ
て」

「えっ？」

僕の言葉に目を見開き驚くアリシアちゃん

「お兄ちゃん帰っちゃったの？」

アリシアちゃんは今にも泣きそうな上目遣いで見つめてくる。ぐっ
そんな目で見つめられるとHPが………ライフポイントがっ
！！

「ダメよアリシア。我が儘を言っでは・・・デイズにだって帰る場所はあるのだから」

「でも」

プレシアさんの言葉にいやいやと首を横に振り僕の袖を掴む

「なら約束しましょう。必ずまた会いに来ます」

「本当？」

「ええこれはその約束の証です」

地面に《錬金》の魔法をかけ、地面から羽根の銀細工のついたネットレスを作りアリシアちゃんに渡す。
ちよつとした細工をしてつと・・・

「なら約束ね!!」

「ウン」

無理耐え切れないっ!!

なんだかんだで約束させられ、後ろで殺意に満ちた目でこちらを見
てくるプレシアさんに向き直る。
そしてアリシアちゃんとお揃いのネックレスを渡す。

「お世話になりました。これはお礼です」

「いいのよ友達を助けるのは当たり前のことよ。ありがとう貴方の
ことは忘れないわ……。それでもアリシアはあげないけどギ
リギリギリギリ」

「友達ですか……。では我が友プレシア・テストロッサ。ま
た会えることを楽しみにしています」

「ええ私もデザイナーヴァー」

後半のアリシアちゃんについては無視して別れを告げる。

そして今度こそセイバーに壊される前、僕が召喚される前の廃工場へと《時間操作》する。

今度こそ成功したのだが何も書かれておらず、ただ汚い地面が広がっているだけだった。

あれ？いつ書かれたんですかね？今は僕が召喚される一日前のはずなんですが………

これから書かれるのか？
なんとなくこのまま待つのもつまらないので、何故かそこらへんに落ちていた白紙の紙とペンを拾い、どうやったら僕を呼び出す魔法陣が書けるかを考える。

色々書いてみたのだが上手くないかないですorz

失敗したらグシャグシャにして燃やす。

よし最初からゆっくり考えよう

まず何を触媒にして呼び出すかな・・・・・・・・魔神を呼び出すためとなると

ああ呼び出されたものを触媒にすればいいのか！魔神を触媒にして魔神を呼び出すのか！すごいなこんな発想は考えたこともなかった！

それに受肉させるための構造と・・・・・・・・どうしても触媒になる僕を完全には受肉させられませんね。

しかも契約を果たしたら消えるようになってますし

まあでも触媒としてはそういう方がいいかもしれませんね。あまり魔神がこの世界にいてもまずいですから

あとは基本の円は当たり前として目を表す三角を多量に使ってと・・・・・・・・ああでもセイバーが呼べたってことは普通のサーヴァントも呼べるようにしなきゃダメですよね。

本当にこれ書いた人すごいですね

となるとこれは失敗か、しかもこれだと血じゃなくて体液で召喚出来るようになってちゃってます。

うんちょっと感動したからこれは取っておこう、そう思い綺麗に折りたたみズボンのポケットにしまう。

あれ紙がなくなっちゃいました。あと少しで完成しそうだったんですが……

悔しいのでそこらへんにあったペンキを拾ってテキトーな場所に書く

98

よし！これなら壊されない限り他のサーヴァントも召喚可能です。
あと召喚後は触媒に影響されないようにして……と完璧！

多分これが僕を呼びだ……し……た……

僕が書いたのかorz

自分で書いた魔法陣で自分を呼び出したのか

つまり偶然ではなく僕がここに呼び出されたのは必然だったと？

最悪

何やらかしてんでしょう僕

しかも自画自賛？

ああ鬱になります

帰ろう・・・

再び《時間操作》をして、家を飛び出した直後の時間に飛び近くの公園につく

・・・はあ

なんて馬鹿なことをorz

落ち込みながら歩いていると・・・ミニミニと猫の泣き声が聞こえたので、なんとなくそちらに向かおう

見覚えのある山猫が横たわっていた。リニス？

近づいて手を差し出すと……

『助けて……』

……あれ？リニスって喋れましたっけ？

とりあえずなんか危ない感じがしたので

複写眼で解析すると、魔力が枯渇して消滅する直前だということが分かった。

あまりやりたくないのだが、しょうがなくリニスと《パス》を繋げリニスに多量の魔力を送りこむ。

『んっ……』

リニスは声をあげ呻いていたが、急に魔力を入れられたせいと思いあまり気にせず魔力を送り続ける。

一定量に達したので、今度は自分で魔力が生成できるようリニスの身体を複写眼を使いながら作り変えていく。

マスターの体内にあったあの丸っこい魔力生成機関をリニスの体内につくりあげる。あれ名前なんて言うんですかね？

やることを終えたのでリニスを家に連れ帰ることにした。

家につき桃子さんに事情を説明すると一発でOKが出ってしまった。
桃子さんいい人（泣

夜になっても目が覚めそうにないので毛布を敷き詰めた段ボールに入れ、ようやく用意された部屋の自分の布団の横に起き寝ることにする。

そして次の日、差しが目に入り眩しさにより目を覚ますと……
・ネコミミと尻尾装備の女の子が裸で横に寝ていた。

あれえ？どこで選択肢間違えたんですかね？

どこからエロゲー主人公ルートに？

そんなの変態ペドフェリアなトライアングルに任せておけばいいんです。

ってこの状況結構ヤバくありませんか！？

状況のまずさにアタフタしていると、

コンコン

「ディザスターヴァー朝で……す……す……す……」

セイバーにノックと共に部屋を開けられた。

一瞬の停滞のあとすぐに

☐ エクス（約束された）

☐ ☐

カリバー（勝利の剣）☐

躊躇いはなかったようだ

《続く》

7話：僕はエロゲーの主人公のようにフラグを乱立させたくない（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

色々考えた結果グダグダにorz

まあハッピーエンドに向かってるんで安心してください。

とりあえずリニスの登場

頑張った!!

次回もお楽しみに！

………セイバーとリニスの喋り方が同じだから混ぜりそうですorz

8話・サーヴァントアルバイターデザイナーヴァー推参っ!!(前書き)

ギャグ要素が段々薄くなってくる今日この頃

ああまたスランプがorz

誤字脱字は報告お願いします

8話：サーヴァントアルバイターディザヴァー推参っ！！

「初めましてリニスです。元はプレシア・テストロッサの使い魔をやってみました」

「ああどうもこれはごく丁寧に。僕はディザヴァーです。高町なのはサーヴァントをやってます」

「ディザヴァーさんですか・・・この度は助けていただきありがとうございますとございました。貴方の使い魔として「ああその必然はありませんよ」？どういうことですか？貴方と使い魔契約をしなければ私は生きていけないはずなんですが・・・」

「あまり《パス》を繋ぎ続けるのは嫌だったので、貴方の中に魔力生成機関を作りました。だから貴方は独立した存在ですよ」

「はっ？リンカーコアを作る？」

「あああの丸っこいのリンカーコアって言うんですか・・・へえ」

「そんなバカな・・・リンカーコアを作りあげるなんて」

どうもユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。

やはりリニスだったようで服を着せたあと挨拶をした。どうやら死んでしまったあと、その身体を元に使い魔になったら幸いです・・・女の子だったとは

なんかブツブツと言っているリニスのボディーラインを横目に見ながらアリシアちゃんと約束したのを思い出す。

「リニスちゃん、アリシアちゃんは元気ですか？」

「・・・アリシアは」

何故か悲しげに目を伏せて黙り込むリニスちゃん・・・っ！
やっぱりアリシアちゃんは

「死んでしまったのですか？」

「………はい」

「そうですか……」

アリシアちゃんの笑顔を思い出す。

太陽のような微笑みを明るく包み込むような元気を………

救えなかったわけですか………

涙は流さず空を睨む

手の平に爪が突き刺さるが拳を握りこむ

ただ悔しかった。

自分に対する怒りを飲み込みリニスちゃんにこれからのことを説明すると「使い魔ではなくなったとはいえ貴方に救われた身です。傍に置いていただけないでしょうか？」と言われ、男の子として断れなかったのです承してしまっただ

とりあえず事情が変わったので、またまた桃子さんに報告し、リニスに部屋を譲ろうとしたのだが寝るときは山猫になるので部屋は必然ないと言われなし崩し的に僕の部屋に住むことになった。

ちなみにセイバーさんは何故か朝のことをまだ怒っているらしく、額に青筋を浮かびあげながら朝食を取っている。

「マスター口に食べかすが」

リニスに口の横についていた米粒を取られる。

ミシッ

それと同時にセイバーの持っていた茶碗が軋む音がした。

「いやリニスちゃんそうというのは気にしなくていいですから」

「いえそういう訳にはいきません!」

何故か力強く言われることに

リニスのよく分からない行動に首を傾げていると、マスターがリニスに不思議そうな目を向けていた。

「ああマスターには紹介してませんでしたね。この娘はリニスです、新しい家族ですよ」

「また女の子拾ってきたんだね、デイズさん」

すごい冷たい目で見られました。

「それと私のことはなのはって呼んでっっていたなの」

「いえマスターを呼び捨てにするなんて」

「なのはー!」

「いえですから・・・」

「なのはっ!」

「了解しました。なのはちゃんです」

「それでOKなの!」

「なんだかんだで8人で食事を・・・8人？」

「あれ？桃子さん、土郎さん、変態ペドフェリアになのはちゃん、僕、ペンドラさんにリニスちゃん・・・と誰？」

「知らない女の子が食卓についていた。」

「あの誰でしょうか？」

とりあえず質問してみた。

「なっ!?!一週間も話し掛けられないから知ってると思ってたのに
!?!」

「ええとどちら様ですか?あまりの存在感のなさに全く気づかなか
ったです」

「うっうわ〜ん私は空気なんかじゃないもん!?!」

なんか泣きながら外に走りだしていった。結局誰だか分からず仕舞
いのまま終わってしまった。

まあいいやどつでも

そういえばようやく僕もアルバイト先を手に入れました。

一度断られた、近くのコンビニですが……別に第二の魔眼：ギアス（目があった人物に一回だけどんな命令でも下せるといふ絶対遵守の力。使用時には鳥が羽ばたくような形の紋様が浮かび上がる）とか使ってませんよ？店長に雇えとか言ってますんヨ

とりあえずなんだかんだで雇われたんです！！

いやぁこれで毎日リニスに「働かないんですか？」と寝るときに念話されないですみます。あの娘寝ようとする瞬間に何回も何回も）
泣（

好きでニートなわけじゃないんですよ！！

今もちゃんと働いています。

「いらっしやませー」

「………いらっしやませ

「いらっしゃいませー！」

「……………いらっしゃあせ」

「……………いらっしゃあせ」

「いらっしゃいませー！美しいお嬢さんー！」

「チツ……………らっしゃあせ！野郎かよ（ボソツ）」

「ちよっ花村くん！？接客態度！なんで男と女でそんなに違うの！？」

ちなみにコンビニで働くときは花村 ユウキです。

五月蠅い店長（はげ上がりのモヤシ）ですね、働いているからいいじゃないですか別に

「それはモチベーションの差ですよ、男相手にハッスルして何になるんですか？逆に若い女の子相手にハッスルするのは雄として当然のことじゃないですか！」

「いや確かにそうだけど接客はそういうのダメだからね！？あと雄とか言わないで生々しいから！」

なにげに店長はツッコミの達人である。まあ男はみんなツッコミの達人を夢見る・・・いやツッコミを夢見「うおい！！！」

「なんですか？」

「今地の文で下ネタ言ったでしょ！？」

「気ノセイデスヨ」

「目を見て言って！！！」

「チツ・・・ハゲモヤシが（ボソツ）」

「今ハゲモヤシとか言ったでしょ！？ねえ上司バカにしてる！？上司ナメてる！？」

「んなことないっすよ」

「完璧にナメてるでしょ！？」

まあこうして僕はリリカルな世界で頑張って生きてます。

サーヴァント始めました。

《続く》

8話：サーヴァントアルバイターデザイナーヴァー推参っ！！（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

アリシアちゃん（泣

さあてユウキくんは過去に戻ったとき何をしたんでしょうね？

次回もお楽しみに

9話：『キング・グリムゾン』だと?! なっバカなっ?!? (前書き)

連続投稿!

誤字脱字は報告お願いします

9話：『キング・グリムゾン』だと?! なっバカなっ!?

イヤッホー……っ!! ユウキ・エンドリオール・ル・デファ
ンス・ド・アンペラトリスです!!

あれから4年経ちました。

所謂『王紅病』ですね分かります。

僕もようやく見かけてもお巡りさんに通報されないほど街に馴染
みました。今では街の人気者です……まあ目を包帯でぐるぐ
る巻きにして拘束衣で腕を縛ってますからね。目立つと言っちゃ目
立ちますから、お巡りさんに捕まるたびにファッションですと言っ
のは非常に面倒くさかったです。

まあ散歩のときしかその格好で外出しませんからね。

お使いの時はちゃんと腕の拘束衣は解いて行ってます……
なんか拘束衣してないと落ち着かないときってありますよね?

ああ4年経つてもマスター……なのはちゃんの中では、僕はよく
女の人を拾ってくる手品師、ペンドラさんは大食いの騒がしい高町
家のエンゲル係数をガツンとあげる人、リニスちゃんはコスプレ好
きな優しいお姉さん……うん認識がおかしい。

まだ一番マシなのはリニスちゃんですからね。

だいたいなんですか、女の人を拾ってくるって僕はどこのフラグ乱立者ですか？どこのイマジンブレイカーですか？

なのはちゃんにそう訴えたが認められなかった、逆にジト目で何言ってるのこの人的な感じで見られます。

その時に変態ペドフェリアがまた爆笑していたので、嫌がらせになのはちゃんが「お兄ちゃん」と呼ぶたびに変態ペドフェリアには「高町恭也さん」と他人行儀に聞こえるよう、奴の聴覚を弄ってやった。

変態ペドフェリアはなのはちゃんに呼びかけられるたびに「どうしてお兄ちゃんって呼んでくれないんだあああああああー！ー！ー！」って言ってなのはちゃんに泣き絶っていた。

ざまあWWW

そういえばなのはちゃんにも友達が出来たらしく日村すずかちゃんとアリサ・バーニングちゃんだったかな？

僕がぶつ倒れた日に友達になったらしく家に連れてきていたらしい。その後お店で会って挨拶したのだがすずかちゃんには怯えられ、アリサちゃんには犬歯剥き出しで敵意を向けられ不審者扱いされました。

どうやらドMなのはちゃんと分かりあえる彼女たちにはドSの僕は受け入れられないようだった。

そのことをリニスちゃんに伝えたら呆れられたような眼で見られたあと、なのはちゃんがドMではないと懇切丁寧に説明された。

でも毎朝起こすときに目覚ましが鳴ると同時に縄がなのはちゃんに食い込んで上に吊すよう色々仕掛けたら悦んでいたと思うんですが……むうむう言っていましたよ？口にさるぐつわされた状態です。

今度はそれを伝えたら今度から私が起こすから起こしにいかなくていいと言われました……僕なりの優しさで接しているんですが。

そういえばこの前プールの時に縄で縛られた痕を見られたらしく、僕のせいにされ興奮して包丁を持って追い掛けられました。ツンデレですね？

まったく嬉しかったなら素直に言えばいいのに……シャイ
なんですね。

やれやれ

そうそう今日、なのはちゃんがフェレットを飼いたいと言い出して
きました、とりあえず桃子さんはOKを出していました。今更家族
が2〜3人増えても大丈夫と言っていました……本当にすい
ませんorz
ウチの腹ぺこ王が

そしてその日の夜耳元で拡声器を使って怒鳴られるような大きな声
量で《念話》が飛ばされてきました。

『助けて』だと？こんなバカみたいな大音量で助けを求めるやつが
いますか！？そんなに元気なら一人で頑張ってください！！だいた
い野郎のために動く気はないんですよ！！

ム力つきながらも眠れなくなりそうなのでしょうがなく外に出よう
とすると、なのはちゃんの靴が無くなっていた……ああ逢

い引きですか。さすがマイマスター、その歳で夜の女帝として君臨する気なんですね。

軽口を叩きながら《念話》が発せられている場所に向かっている途中で、《念話》が途絶えたのでくたばったかと思いきや途切れた場所に急いでいくと

黒い物体に追われるマイマスター高町なのはがいた……触手プレイかなんかですか？

追い掛けられながらフェレットと喋っていたので、どうしようか迷いつつもなのはちゃんの運動音痴では追いつかれそうだったので遠距離からテキストに魔力弾を放ち、物体Xを牽制し続けた。

何分か続けて大分飽きてきたので、マスターの方を見るとリリカルな服装になって杖を持っていた。

成る程今日から原作開始だったわけですか……イラついたからといって広範囲に《念話妨害》をしなくて正解でした。

邪魔したら被虐少女マゾカルのはが始まる所でしたね、大丈夫
そんな雰囲気だったので自分の部屋に《転移》すると

「「なのは（ちゃん）は大丈夫でしたか？」」

戦闘準備をしたペンドラさんとリニスちゃんがいた。どうやらなのはちゃんが外に出ていることに気づいていたらしい……………どうして貴方たちが行かなかったんですかね？

「何を変な目で見ているのですか？」

「私は一緒に行こうと行ったのですが……………セイバーが」

「なっ！？リニスその言い方ではまるで私が行くのを止めたみたいじゃないですか！！」

「事実じゃないですか」

「私はディザーヴァーを信用して……………」

「信用とは体のいい言葉ですよね」

なんか喧嘩を始める腹ぺこ王とコスプレ娘……………眠くて面倒
なんですよ

「ぐっディザーヴァー聞いてください！！私は「五月蠅い！」なっ
五月蠅いとはなんですか!?!」

僕の言葉に顔を赤くして怒鳴ってくるペンドラさん
眠いんです……………本気でまじで眠いんです

「貴女のご事は信用してますし、二人ともなのはを心配していたこ
とは……………分かりましたから早く寝かせてください……………グ
ウ……………」

「うっその心配したのは、なのだけではなく……………」

「セイバー……………無駄です。既にマスターは眠りました」

「……………分かってます。この男はこういう男だということは」

「ええマスターは基本的に人からの好意を信用してませんからね」

ため息をつきながら呆れた顔で二人が去っていくのを僕は爆睡していたので全く気がつかなかった。

《続く》

9話：『キング・グリムゾン』だと?! なっバカなっ?!? (後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか?

無印最終話に向けてガンガンストック製作中!

次回もお楽しみに

10話・やせいの たぬき が とびだし てきた。(前書き)

どうも××です

先日祖母が亡くなりました。享年81歳です。

祖母にはお世話になりました入退院を繰り返していたので覚悟はしていたのですが

やはり人の死というものは簡単に受け入れられませんね

誤字脱字は報告お願いします

10話・やせいの たぬき が とびだし てきた。

おはようございます、今日も清々しい朝です。ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです

マイマスター高町なのはガリリカルな魔法少女になった次の日新しく我が家の家族となったユーノとかいうフェレットを紹介された・・・こいつ変身魔法を使った人間じゃないですか。あとで士郎さんにチクろつ、着替えとか風呂の時は気をつけさせないといけませんね。

そんなことを考えつつも、垂れ流しになっている《念話》を聞いて情報を得ていく

昨日の物体Xはジュエルシードとかいう物体のせいで出来たもので合計21個あり、それを発掘して運んでる途中で事故に遭い、地球の海鳴市にばらまかれて淫獣がなんとか封印しようとしたけどへばったから変わりにマスターが封印していくわけですか・・・成る程成る程

しかもジュエルシードは持っていた人の願いを叶える石だけどなん

かバグが発生してて、願いを歪んで叶えると……ナニソレ怖い。どっかで聞いたことあるアイテムですね。

事情が分かってからバイトを休んで街に超超広範囲の探知魔法をかける。

実物があればすぐに搜索できるんですが……とりあえず怪しい魔力反応を感知できるようにしておき、感知したところに行き5個ほど青い宝石のようなものを手に入れた。

これを元に新しく探知魔法を展開しましょう……簡易的な封印を施しポケットに挟込んで、とりあえず休憩することにした。

公園で椅子に座っていると疲れたせいか眠くなりウトウトしている……車椅子で足を轆かれた。

「痛てええええええーっ!!」

「ああすみません、ついぼうとしてまして……」

若干ニュアンスが関西っぽい可愛らしい茶髪のショートカットの女の子だった。

慌てて謝っているので悪気はなかったようだ……とりあえず謝ってくれたので、こちらも言葉をかけることにした。

「いえ悪気がないなら構いませんよ」

「でも結構痛そうな……………」

「まあ痛かったです……………よくやられているので(泣)」

よくやられた折檻のダメージを思い出し涙を浮かべる……………
エクスカリバーは痛かったなあ

あとたまにリニスちゃんが食べ物にブレアーズ サドンデスソースを入れるのやつも辛いですね。

あれ注意書きに想像を超える辛さのため、お子様、心臓の弱い方は御使用しないでください。希釈または調味素材としてご使用ください。絶対にイタズラで使用しないでくださいとか書いてあるんですよ？

一つの鍋に1〜2適で十分ですとも書いてあるんですよ？鍋にですよ!?

決して叩き割って全部入れるようなものじゃないんですよ!?

ちよつと銭湯を覗いたぐらいで……

あのソースが入った食べ物を食べたあとはトラウマで三日ぐらい食べ物も口に入れようとは思いませんでしたね、もちろん理由の大部分に痛くて口が開かなかったのも入っています……

辛く苦しい過去に恐怖していると……

「あの大丈夫ですか？なんで泣いてはるんですか？」

女の子が心配してくれた……ええ娘や（泣）

「いえちよつと辛い過去を思い出して……」

「そうですね……ええと私は八神はやて言います、もしよければウチで治療を」

「僕はデイザーヴァーです。気安くディズって呼んでください。お心遣いはありがたいんですが……女の子が簡単に男を家にあげてはいけませんよ」

ちよつとからかった口調で言うと、少し顔を赤くして

「なっいやその」

混乱していた。

「冗談ですよ」

「うっからかわんといってください!!」

「可愛い女の子を困らせるのもまた男の性分ですからね」

ニヤニヤと笑いながら話し掛ける。

「もう!そんなんやと女の子に嫌われますよ?」

「ああ……よくエクスカリバラれます」

「?・・・よく分かりませんが、まあ気をつけてください」

「いえ反省はしていますが後悔はしてません!」

「ダメやないか!」

「・・・・・・・・・・やりますね」

「デイズさんもやね・・・・・・・・ついつつこんでもうたわ」

なんかライバル関係になり、車椅子の少女八神はやてと仲良くなっ
た。

「また今度会いましょうね」

「はいまた!」

少し世間話をしたあと、日も暮れてきたので別れることにした。夕食に遅れると悪いですからね
いつかまた会えるといいですね。

そんなことを望みながらとりあえず今日はもう探索をやめて帰ることにした。はやてちゃんを置き去りして走って帰る……ポ
ケットから落ちたものがあることを知らずに

「あれ？なんやるこれ？紙？デイズさんの落とし物みたいやな……
……中に書いてあるんは何これ？図形？まあええか、また今度会
ったときに渡せば……またお話したいし」

ところ変わって我等が主人公ユウキ・エンドリオール・ル・デファ
ンス・ド・アンペラトリスは

家に帰り次第桃子さんにぼかしつつも事情を話して

一応なのはちゃんが心配なので、とある作戦を立てることにする……
……クツククセイバーめ

その日が来ることを後悔するがいい

極悪人のような悪巧みをする顔で笑いながらその日を楽しみに待ち今日は床についた。

一週間後

私立聖祥大附属小学校の3年のとあるクラスに編入生が二人やってきた。

一人は

「どうも今日からお世話になるアルトリア・ペンドリーです」

美しい金髪を後ろで纏めた凜とした綺麗な顔をした少女

もう一人は

「……………ユウキ・アンペラトリスです」

薄い赤色の髪をボサボサに伸ばした目つきの悪い少年

この二人は外国人であること以外に共通点があり……………それは互いに不機嫌そうな顔を浮かべていることだった。

さらに二人とも小声で何かを込めて言っていた。

少年は絶望を込めブツブツと「確かにセイバーを嵌めることには成功したけど、まさか自分まで巻き込まれるとは……畜生！桃子さんを侮っていた！」

少女は殺意を込め「ディザーヴァーツブスディザーヴァーツブスディザーヴァーツブスディザーヴァーツブスディザーヴァーツブス」と壊れたラジオのように繰り返していた。

そしてもちろん、このクラスにはリリカルな魔法少女が在籍していた。

《続く》

10話・やせいの たぬき が とびだし てきた。(後書き)

お楽しみいただけただけでしょう？

お楽しみいただければ幸いです

次回をお楽しみに

11話：・・・私立聖祥大附属小学校3年生ユウキ・アンペラトリス・

うん小説はやっぱり難しいですね
特に語彙が貧相な作者なのでorz

誤字脱字は報告お願いします

11話：・・・私立聖祥大附属小学校3年生ユウキ・アンペラトリス・

・・・私立聖祥大附属小学校3年生ユウ
キ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスDea
th

編入させられて初日

何故かホームルームではなく自己紹介兼質問大会みたいなのが始ま
ってしまった・・・一桁に興味はありません。

「アルトリア・ペンドリーです。好きな色は青、好きなものはきめ
細かい食事、嫌いなものは大雑把な食事に装飾過多です。これから
よろしく願います」

「・・・ユウキ・アンペラトリスです。好きな色は肌色、好
きなものはきよ「パンツ」・・・嫌いなものはむに「パンツ」
・・・嫌いな人はたった今からアルトリア・ペンドリーです。
・・・なるべくよろしく願います」

自己紹介だから好きなものと嫌いなものを言おうとした瞬間に隣の
腹ぺこ王ちえいばーに叩かれた。

「あははは・・・じゃあみんな何か聞きたいことあるかな？」

担任の先生（女：微乳のため興味なし）がいきなりのちえいばーの行動に苦笑いを浮かべながら先を促してくる。

「二人はどこに住んでたんですか？」

「イギリスです」「・・・フランスです」

元は日本人ですが・・・

「好きな人はいますか!？」

「気になっている人ならいます」「・・・一桁には微塵も興味ありません」

ちえいばーの答えに沸き上がる教室、僕の答えは軽くスルーされた。

これがカリスマの差ですか……

「ずばり誰ですか？」

「秘密です」「……………。」（毎日ご飯を食べさせてくれる人でしょ？むしろ定食屋のおばちゃん）「

ドンッ！！

何も言っていないはずなのに、何故か正拳突きを頂戴した……………内臓に響きます。

「二人は仲がいいみたいですが……………どういう関係ですか？」

この質問に更に沸き上がる教室、しかし二人は互いに無表情にけれど告げる答えはバラバラに

「パートナーです」「赤の他人です」

答えの食い違いに困惑する教室……ちえいばーはこちらを
向き睨みつけてくる。

誰が小型化してまで相手をしてやりますか……ああ確かに
魔法でセイバーを縮めてちえいばーにしてやり小学生にしたのはい
いんですが。

まさか自分まで小学生にされるとはorz

桃子さんに「セイバーちゃんだけじゃ可愛そうだからディスクくんも
一緒に行ってみない？（行きなさい）」と言われれば行くしかない
だろう……高町家で最強なのは桃子さんなのだから

あの時浮かべられた桃子さんの笑顔を思い出し身を震わせていると

「そんな言い草あんまりじゃないですか!」

ちえいばーに絡まれた。

「……放せちえいばーが」

「なっ!? また私をバカにして!!」

「何を言ってるんだ。お前編入試験の時、鉛筆転がしたり文章読ま
ずに勘で書いてたの知ってるんだぞ!? ほとんど直感で解いたろ?」

「ソナワケナイジャナイデスカ」

「目を見て言ってみろ!!」

「ならそれならディ……ユウキはどうだったのですか?」

「先生!」

「あっアンペラトリスくんは全教科満点で合格してるわね」

先生から告げられた点数に勝ち誇りちえいばーを見下す。

「ふっ」

「くっ」

「セイバーカーめっ!!」

「なっ!?! なら問題を出してみてください! それに答えられれば先程の暴言は取り消してくださいっ!!」

「よし約束しよう! 次のウチ王水で溶けるものはどれ? A鉄 B銀 C錫 D鉛」

「Bです!! (ふふふ私に直感スキルがあることを忘れていたようですね!!)」

「はい残念!! 正解は全部でした! 別に一つ選べとは言ってません」

「なつ卑怯ですよ!?!」

「直感に頼るからそういう羽目になるんだよ!?!このセイバーカー
がつ!?!」

「なつ!?!また言いましたね!?!もう許しません!構えなさい!そ
の腐った性根を叩き直します!?!」

「先生え〜ペンドリーさんが暴力で物事を解決しようとしています」

「そつそれは卑怯ですよ!?!」

「こつやっつて人間は卑怯なことを覚えて大人になっていくんだよ!」

「ハイハイ、喧嘩は止める。アンペラトリスくんの発言は色々問題
があるけどペンドリーさんも暴力で物事を解決しようとしてはいけ
ませんよ?」

「ぐっ……了解しました」

「アンペラトリスくんもペンドリーさんをからかわないの」

「以後気をつけます」

担任に注意され睨み合いながらも喧嘩をやめる。

「じゃあ二人にはどこに座ってもらおうかしら……」

「ペンドリーさんとは近くない場所にしてください」「ユウキ!?!」

「コラ! そっやってすぐ喧嘩しようとしないの!?! ならアンペラトリスくんは高町さんの後ろペンドリーさんはアンペラトリスくんの右隣ね」

なんでそこでののはちゃんに?!

「高町さんは二人の面倒見てあげてくれないかしら？」

「はあ〜い分かりました！よろしくなの！ペンドリーさんにアンプラトリスくん！」

「「よろしくお願いします」」

珍しく息の合った行動をとり、なのはちゃんに頭を下げる……………
……………どうやっても逃げられないorz

悪魔に囲まれたような状況に絶望しながらもウダウダとホームルームを過ごすとは休み時間になり、再び質問地獄が始まったが全て「特にありません」と中学生の自己紹介のような方法で乗り切った。

ちえいばーは人の波に埋もれる中でアリサちゃんに救出されたようだった……………そのままズタボロに

他人の不幸を祈っていると録なことがないとはよく言ったもので

現在昼休み

「ちょっと 안타ー！」

くぎゅうボイスのバーニングな女の子が絡んできた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

とりあえず無視した。

「聞けえ！！！」

座っていた椅子を蹴られしょうがなくそちらを見る。

「なんだ？」

「あんた編入試験で満点取ったって本当なの！？」

歯を剥き出すように突っ掛かってくる………犬か

「先生に聞いてくれ」

面倒なので担任に丸投げしようとしたがそうはバーニングが許さなかつた。

「あ・ん・た・に聞いてんのよ!!」

「知らねえっす………死にかけの婆ちゃんが呼んでいる気がするんで、じゃあこれで!!」

果てしなく面倒なので逃げた。

「待ちなさいよおおおおおおーっ!!」

後ろで更に燃え上がっているような声が聞こえたがこっぴつのは無視に限る。

とりあえず昼休みなのでリア充スポットである屋上で昼食をとることにしたのだが……またイベントに巻き込まれた。

目の前には一人の女の子を虐めている上級生らしき輩がたむろっていた……野郎ならガッツリ無視をするのだが女の子なら助けないわけにはいかないのでとりあえず手に持っていたペットボトル2Lを主犯格らしき男の股間に投擲した。(僕は野郎相手なら基本的に股間を狙う)

女の子を水浸しにして楽しむならもっと個人的にやれ……というか巨乳にやれ巨乳に、その時は是非呼んでくれ!!

リーダーを再起不能にされ少女を虐めていた奴らがこちらを向き尋ねてくる。

「だっ誰だてめえ!?!」

「通りすがりのイカレポンチだ！忘れて永眠しろ！！」

わりと投げやりだった。

《続く》

11話：・・・私立聖祥大附属小学校3年生ユウキ・アンペラトリス・

お楽しみいただけただけでしょうか？

ストックがなくなってきましたorz

とりあえずゼロ魔復活予定日までには無印を完結させます

振り切るぜ！（読者を）

次回もお楽しみに

12話・正義のミカタ（笑）ならわりと世の中にいる。（前書き）

ユウキくんが臭い台詞言っちゃったよ！

誤字脱字は報告お願いします

12話：正義のミカタ（笑）ならわりと世の中にいる。

どうもなんか今現在正義のミカタ（笑）的なポジションにいるユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです！

つい女の子が虐められてたんで2Lペットボトルを主犯格につい投擲しちゃいました。
よくあるうっかりですよ！

そう説明したのですが、彼らとは分かりあえないようで血気盛んに挑んで来ようとしています。英霊が小学生相手に本気で戦うのはストーリー的にいかなものだろうか？

作者にこの展開の疑問を投げかけるものの作者はソフマップに1470円で売っていたFateのアンドリミテッドコードに夢中で全くこちらを見ようとしてはいなかった。
黒桜を使用キャラにするなよ

作者にしようもないツッコミを入れながらどうしようもない現実に向き合う……ニヤニヤと下品に笑うアホな子供達。自分の優位を疑っていないようだ、目の前にいるのは化け物なのに

ニヤケ面が不快だったので

『秘技：貫通下着脱がし!!』

技名を大声で叫び一瞬で女の子を虐めていた餓鬼どもの背後に周りに女の子を背中に庇うように立つ。

そしてその前には《転移》で奪い取った餓鬼どもの下着を陳列させる。あっ一人黄ばみブリーフがいる！汚っ！

餓鬼どもは最初はイカれた下級生が奇声を発したと勘違いしていたが目の前に鎮座する自分たちの下着を見てズボンに手を突っ込み自分の物が確認したあと、驚愕していた。

何故ズボンを履いていた自分たちの下着が取れるのかと？
こいつはヤバいんじゃないかと？

今更気づいても遅いのだよ!!
主犯格は潰したので残り4人!

「いくぞクソガキども　股間の防御は十全か?　ご覧の通り、
貴様らが挑むのは痴漢の頂き。変態の極地!
恐れずしてかかってこい!!」

どこかの弓兵さんに怒られそうな台詞を吐きながら500MLのペ
ットボトルを二本ずつ両手の指と指の間に挟み込み投擲する用意を
する。

「「「ひっ!?!」「」」

餓鬼どもは主犯格の有様(股間を抑えたままうずくまっている)を
見て、同じようになりたくないのかパンツを捨てて逃げ出した・・・
・・・汚いのであとで吊しておこう。

そして虐められていた少女に向き合う。
薄紫色の髪をした少女は先程の餓鬼どもとは同じ年には見えず、そ
こはかとなく儂い印象を醸し出していた・・・・・・なんか見たこ

とあるなあ

少女の顔を見ながら記憶の糸を手繰っていると少女に話し掛けられた。

「……助けて……くれてありがとう……」

なんか暗かった。

事情を聞いてみると彼女は三年生で二つ上の姉がいるらしく、自分とは違いその姉が優秀で先程の男子たちは姉に嫉妬した少年たちで、姉には手を出せない（ボディランゲージが得意らしい）から少女に手を出しているとのこと……そして何より事故のせいで髪の色が抜けたせいで姉と似ておらず、優秀な姉に比べられ虐められたらしい。

……ふうん。

少女は優秀な姉に比べられ出来損ないの自分はこのいう目にあうのは当然だと思っっているので、助けを求めたりはしてないようだった……くだらねえ

「どうして助けを求めなかったんですか？」

「……私みたいな出来損ないのお話しなんか誰も信じてくれないから。もし信じてくれたとしても上級生相手じゃ……それに私には友達いないし。」

もし先生に言っていればまた違うかも知れないけど……先生も私みたいな子の話は……」

「もしかか、たらとか、ればとかそんな曖昧なもんはどうでもいいんだよ」

「えっ？」

「僕はアンタに《渴望》したかを聞いているんだ！！《渴望》することは生きることだ！！人間は何かを《渴望》せずにはいられない生き物なんだ！アンタは《渴望》したのか！？最初から諦めて何も望まなかっただけじゃないのか！？あんなつまらない奴らに負けてこんなところで立ち止まるな！」

「……だつて……怖かつたんだもん！！お姉ちゃんに迷惑かけたくないし！！もしお母さんやお父さんに知られてまたお姉ちゃん比べられたら……」

僕の言葉に本音をぶちまけてくれる少女

「仮定の話なんざどうでもいいって言うてるだろ!!アンタは自分の家族を信用出来ないのか!？」

「そんなことないもんっ!!！」

「なら言っつてやれよ!娘を心配してない親なんか普通はいないんだよ!!それでも・・・どうしても怖かったら・・・」

「どっつしたの?」

しょうがなくポケットからリボンを二つ取り出し女の子の手を取り、その上に載せる。なのはちゃんのご機嫌取りに使っつもりだったんですが・・・まあいいです。

「これに立ち止まらないことを誓っならいくらでもアンタを裏切らないアンタの友達になっつてやるよ!!！」

「・・・えっ?」

「..」

「.....友達になっってくれるの？」

「立ち止まらないと誓うなら」

「.....誓う.....グスッ.....いくらでも誓うよ.....グ
スッ.....」

何故か泣き出す名前も知らない女の子.....

「なんで泣くんだ!？」

「.....その嬉しくて.....グスッ.....」

そんなに泣かれると.....

「「何やってんのよ!?!アンタっ!?!」」

ほらバーニングなやつが嗅ぎ付けてきました。

「死ねええええええーっ!!」

そういえばスカートでしたね。

ムカつくから蹴り足を掴んで宙吊りにしてやるう

そう思いバーニングな飛び蹴りを片手で止めたのだが……

「ぐふっ!?二連脚だと!？」

何故か二本目の足が僕のお腹に突き刺さっている。

突き刺したのは黒い髪をリボンで二つ結びとめている小学5年生ぐ
らいの少女だった。

「大丈夫!?桜!?こいつに虐められたのね!?待ってなさい!!
今からこいつ殴ッ血k i l lから!」

「いい度胸ね！！転校生初日から同じクラスの人を虐めるなんて・・・このっ！！このっ！！」

止める！二人揃ってダメージによって亀になっている僕にスタンピングするな！！

堪え難いダメージにより悶えている中、屋上の入り口を見ると慌てているのはちゃんとすずかちゃん・・・そして10段ぐらの重箱を抱えてどうせ勘違いでしょうから気にしなくていいです。的な顔をしているちえいばーの奴がいた・・・貴様の食事は今日から蛸尽くしだから覚悟しておいてください。

「ちっ違つよお姉ちゃんにバニングスさん・・・その人は私を助けてくれたの！！」

「えっ！？まじで！？」

ようやく少女が助けてくれ、勘違いしていたアホっ娘二人はスタンピングを止めた。

「すみませんでした」

「ああ聞こえないなあ〜さっきからスタンピングされ続けたせいか耳が遠くなっちゃったのかなあ〜？」

「耳が遠くなるわけないでしょうが（ボソツ）」

「腐って死ね（ボソツ）」

「あ痛たたた！どっかのアホな勘違い娘たちにやられたところが痛むなあ〜」

「くぐつ」

とりあえず謝らせることにした……………まあもちろん弄りますが

「くぐついのよ…！」

とうとう逆ギレされました……………全面的にそちらにしか非がないにも関わらず

アホっ娘たちから制裁をうけ、ようやく少女の名前を聞くことにな

った。

「……そのお……私は遠坂桜です」

「……ユウキ・アンペラトリス」

……名前からして友達になるには少々早かったかも知れない

やはりというかなんとというか少女の姉の名前は遠坂凜だった、うん
混ざってる!!

そして今ようやく分かったのだがバーニングではなくアリサ・バニングスと日村ではなく月村すずかだったらしい。

さらにリボンをつけたせいで桜はどっかの黒いヤンデレさんにそっくりになってしまった……人生早まりましたね。

学校も終わりデイザーヴァーの姿に戻り自分の迂闊さを憎み自分の人生に絶望して部屋に籠っていると

バーンっ!!

扉が何が爆発するような衝撃音と共に破壊され吹き飛び部屋のプラ
イバシーが消し飛んだ。

そして扉を破壊した腹ぺこ王は僕の両肩を掴み揺すりながら言う

「バレましたっ！！」

・・・・・・何が？

《続く》

12話・正義のミカタ（笑）ならわりと世の中にいる。（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

しょうがないんです

ユウキくんはディザヴァー

渴望のサーヴァントですから

あの臭い台詞は彼の意志ではありません（笑）

次回もお楽しみに

13話：救いたかったものは所詮過去形でしかない（前書き）

あの人の登場！

誤字脱字は報告お願いします

13話：救いたかったものは所詮過去形でしかない

「何バレちゃったんですか！？せいっ！！」

「痛っ！？」

とりあえず話が分からないにも関わらずデコピンを食らわしておく
ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスで
す。

「何をするのですか、ディザーヴァー！？」

「バレちゃったんでしょう！？それなら甘んじて罰を受けなければ
騎士資格なんじゃないんですか？」

デコピンされたセイバーは怒り突っかかってくるがテキトーに言い
くるめ

事情も知らずただセイバーを弄りたいがためだけにセイバーに詰め

寄る。

「確かにそうかも知れませんが……」

「何がバレたんですか？」

詳しく話を聞くとどうやら打ち合わせ通りなのはちゃん護衛としてストーリーキングしていたのだが、途中あまりにも不手際だったのでついちえいばー形態で手を貸してしまいアルトリア・ペンドリーが魔法関係者であることがバレたとのこと……別に問題ないですね。無駄なデコピンだった（笑）

まあでもそれを言ったらエクスカリバラれるんで口に出したりはしません……

「バレたものはしょうがありません。とりあえずマスターと行動を共にして安全を確保してください」

「分かりました。剣にかけて、なのはを守りましょう」

「じゃあ僕はジュエルシードを探しに行ってきます」

ボロが出ないうちに部屋から飛び出し外に出る。

ブラブラと歩きながらゆつくりと《探査魔法》で発見したジュエルシードを拾っていく・・・今日はこれで三個目ですか。

前回収めた分とマスターが持っているのと合わせて10個ですか・・・あと11個のんびり探しますか

んっ!?!巨乳の匂い!?!どこからですか!?!
女性には子供の方が受けがいいですからユウキ・アンペラトリスに変身しておきましょう。かなり不純な動機で肉体年齢を変更してから匂いがした場所に向かう。

着いた先はよく分からない公園だったのだが・・・人っ子一人いなかった。僕のリーダーも鈍ったなあ

その代わりジュエルシードを発見したので、近づき手に取ると・・・

・・・

「それをこっちに渡してください」

背後から女の子に呼び止められ、ジュエルシードを渡すよう言われる・・・この娘が巨乳に違いないっ！！自分のリーダーを信じ振り向いた瞬間・・・愕然とした。

「・・・アツ・・・アリシアちゃん？」

自分が救えなかった少女がそこにいたから・・・

「誰のことですか？」

そのアリシアちゃんそっくりな少女は額に宝石をつけた橙色の犬を隣に従え、不思議そうに首を傾げ尋ねてくる。

・・・アリシアちゃんじゃないのか？
こんなにそっくりなのに

余りにも似ているのでつい名前を聞いてしまった。

「……君の名前は？」

「いいからそれを寄越しなっ!!」

隣にいた犬が喋っていたが、それどころじゃないんだ……

「僕の名前はユウキ……ユウキ・アンペラトリス。君の名前は？」

「……フェイト。フェイト・テストロッサ」

「フェイト!?!」

少女が名前を答えたことに驚く犬……うるさいやつめ

「テストロッサってことは……プレシアを知っているか？」

「「っ!?!」」

僕の問い掛けに驚いたように目を見開く一人と一匹

「・・・プレシアは私のお母さん」

「・・・また子供産んだのか、あの人」

確かあん時26歳ぐらいだったから今50過ぎだよな？

女性に対してかなり失礼だが年齢を計算して感心した・・・
新しい旦那さんに挨拶しに行くか・・・

「また？私に姉妹はいないけど・・・」

「えっ？」

フェイトとは僕の言葉に引つ掛かりを覚え、言葉を返してきたが・・・
・・・聞き捨てるわけにはいかなかった。

「アンタはアリシア・テストロッサを知らないのか？」

その問い掛けにフェイトはまるで何も分からないというような顔つ

きで

「アリシアなんて人知らないよ？」

どういうことだ？

どうして妹にあたるフェイトちゃんがアリシアちゃんのことを知らないんだ？

・・・プレシアがまだ辛いから打ち明けてないだけかも知れないな。ポジティブに物事を考えとりあえず今までの話は流すことにする。

「そう・・・でこの青いやつが欲しいんだっけ？」

「うん」

そんなに見つめながら首を振るなよ

微笑ましげな様子について口元を緩めながらフェイトちゃんを見つめる。

「渡してもいいよ」

「本当!？」

僕の言葉に嬉しそうに目を輝かせるフェイトちゃん……可
愛いは正義だな。無乳なのが残念だけど……そうだった!
突然閃きが冴え渡った。

「ただし……これを毎日やってくれれば」

そう言って明らかにポケットに入り切らない大きさのノートをポケ
ットから引きずりだし、フェイトちゃんに渡す。

そのノートのタイトルは……

「『秘伝!バストアップ体操!』……これは?」

「バストアップ体操だ。毎日それを欠かさずやってくれるというの
であればこれを渡そう」

フエイトちゃんはよく分かってないのか困惑していた……
先程はリーダーが変な反応を示していたが、きっとあの反応は将来性を含めての反応だったのであろう。そう信じてさらに可能性を高めるためにノートを渡した。グツジョブ僕！

「そんなことをしなくても力尽くで奪えばいいんだよ、フエイトっ
！！」

駄犬がボディーランゲージで物事を解決させようと主人に迫る……
……チツ余計なことを

駄犬のあまりの駄犬行動に苛立ちながらも冷静に物事を進めようとしたが……

「……そうだね、アルフ」

遅かったorz

駄犬がああああああーっ！！駄犬への怒りを高める中フエイトちゃんは鎌のような武器を構える。デスサイズ！？

「行くよバルディッシュ！」

『sir』

『ソニックムーブ』

そして高速で僕の背後に周り武器を振るってきたので………

「遅いよ」

フェイトちゃんよりさらに速く動きフェイトちゃんの背後にまわる。

「「なっ!?!」」

僕に背後を取られたことに驚くフェイトちゃんと駄犬
さらに僕はフェイトちゃんの背中に手を置き

「力を……喰らう……」

第三の魔眼：殲滅眼（魔法を吸収し自分のエネルギーに変え、自分の肉体を強化・再生させるというものでこれもまた伝説の勇者の伝説のキャラクターが使っているものである。あれは魔法だけではない人からもエネルギーを奪っていたが、それは人を食べなきゃいけないので頑張つて改良し接触により吸収できるようにした。使用時には瞳に赤い十字が浮かび上がる）を発動させ、フェイトちゃんの魔力を奪う。

「なっ・・・なにを？」

「フェイト!？」

魔力を奪われたせいでフェイトちゃんは気を失ってしまった・・・
・・・
・ ・ 駄犬がキャンキャン煩い

五月蠅い駄犬にフェイトちゃんを渡し、無事なことを告げる。

「大丈夫だ、気絶しただけだからな」

「くっ」

駄犬は悔しそうな顔をしてフェイトを受け取り警戒して僕から離れ

る。

しょうがないので駄犬に向けて持っていたジュエルシード一つとノートを投げる。

「先払いだ。ちなみにバスタップ体操をすると僕より強くなれるぞ」

口から出まかせを言い、呼吸するように嘘をつく

駄犬はその行動に驚いてはいたものとりあえず目的は達したと言わんばかりにフェイトを背負って去っていた。

やれやれ面倒なことになったな

《続く》

13話：救いたかったものは所詮過去形でしかない（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ユウキくんはフェイトちゃんの将来性に賭けましたWWW

次回もお楽しみに

14話・君の心に響けっ!!.....特に伝えることはないけど(前書き)

最終話まで間に合うかな

誤字脱字は報告お願いします

14話：君の心に響けっ！！……特に伝えることはないけど

……はあ現実とは問題を解決すればするほど更なる壁が待ち受けているとはよく言ったものですね。みんなのマケル・ジャソン、ユウキ・エンドリオール・ル・デフアンス・ド・アンペラトリスです。

まあそんなにマイルについては知りませんがポウ！

にしても今日は日曜日で小学生生活をようやく休めたのですが……
……なのはちゃんがめがっさ落ち込んでます。

今日は全日本巨乳連盟に……用事があって海鳴市にいないか
ったんですが

セイバー曰く、昼頃ジュエルシードの暴走があり町が木で覆われそうになったらしい。どうやら人間の願いだとジュエルシードの被害が大きくなるようだ。

で我がマスター高町なのはは発動前にジュエルシードを確認していたらしいのだが、見過ごしてしまい町に被害が出たことを悔やんで

いるらしい・・・割りと今更ではないでしょうか？ただ規模が違っただけで全力全壊してることには変わりないと思いますけど・・・

内心そうツツコミながら口には出さず、面倒なのでセイバーの話を左から右へと聞き流す。

「・・・分かりましたか？」

「ええ」

「ではなのはを慰めてきてあげてください」

「了解・・・つてええ!？」

まさかそんな話になっているとは・・・

「・・・まさか聞いてなかったのですか？」

「しよんな馬鹿なことあるわけなかるうもん!！」

噛み噛みな上によく分からない方言が混ざってしまった。

「では逝きなさい」

エクスカリバーをちらつかされ、なのはちゃんの元に行く・・・逝くよう促される。

字が違うことは言つまでもありませんね。

ウダウダと会話を続けている間になのはちゃんはどこかに出掛けてしまったらしい・・・セイバーの直感曰く近くの公園のとこと。なんとという落ち込み青春スポットさすが主人公ですね

軽口を叩きながら公園に向かい、ベンチの上で体育座りをして丸くなって俯いているなのはちゃんに近づく・・・そういえばここ昨日フェイトちゃんと遭遇したところですね。

「迎えにきましたよ」

「……………」

「何か辛いことがあったんですか？」

「……………デイズさんは失敗しちゃったことある？」

僕の呼びかけに答え質問してくるなのはちゃん……………やれやれギャルゲーの主人公じゃないんだからこういう展開は苦手なんですよね。僕はモブキャラDとか最初に悪役に殺される村人とかが似合うキャラなのに……………」

内心愚痴りながらも真っ直ぐになのはちゃんの質問に答える。

「いくらでもありますよ。失敗しないことなんかありませんでした」

失敗してお姫様と一緒に3分の2ぐらい死んでる状態で生き埋めになったりとか、失敗してアホなお姫様の護衛になっちゃったりとか、失敗して巨大なドラゴンとタイマン張ったりとか、失敗して杜撰な管理により自作の最悪の魔法ばかりが書かれた魔導書を盗まれたりとか、失敗して魔導書に書かれていた魔神を召喚されて封印して死んだりとか……………苦勞の絶えない人生でしたね。

「でも失敗したからといって立ち止まることはありませんでした」

「……………怖くなかったの？また失敗して誰かに迷惑をかけちゃうことが怖くなかったの？」

「めっちゃくちゃ怖かったですよ。僕が作ったもの（魔法）で他人が殺されると思ったたら怖かったですし何より……………殺意が沸きました」

少し昔を思い出し殺気を噴出させる……………なのはちゃんは自分のことで手一杯で気づいてないようですが

「でも諦めませんでした。そこで立ち止まったら、さらに犠牲者が出る、誰か友達が傷つくかもしれない。僕の大切な人達が傷つくかもしれない、僕の大切な人達の笑顔を見れなくなるかもしれない……………そう思ったら案外簡単に進めましたよ」

「……………。」

「……………マスター」

「……………なに？」

呼びかけに対してマスターは緩慢に顔をあげ、僕を見つめる。

「貴女が不屈の心レイジングハートを持ち続ける限り、僕は貴女のサーヴァントです・
・さあ立ち上がってくださいマイマスター。僕は貴女を慰めたり
はしません・それは貴女が背負うべきものです。
それを背負ってからこそ前に進める」

「……………うん」

「今は休憩中です。ちょっと重いから勢いをつけて背負うのを待って
るだけですよね？」

「……………うん」

「ならいきましよう……………契約が完了するまで共に」

そう言って手を差し出す。

「……………うん」

マスターは元気よく僕の手を握り立ち上がった……やれやれ手のかかるマスターだ。困ったように肩を竦めるもののそんなマスターに対して微笑みが止まらなかった。

強くなったもんですね、あの泣き虫マスターが……昔はよく虐めすぎて泣かせていたんですが、最近はスルーされますし……間違った方法に成長してないといいなあ

なんか希望的観測に突き進む僕

なのはちゃんと手を繋ぎながら、公園を歩いていると……どごぞで見た金色の少女が前方を通って行った。なんとという遭遇率、作者の頭がおかしいとしか思えません。

無駄なイベントを発生させる作者にホトホト呆れながら、どうするか悩んでいるとあちらから接触してきた。

「あの……」

可愛い顔で上目遣いをされながら見つめられる……お持ち帰りしましょう。大丈夫です、プレシアには事情を伝えておきますから……淫獣キルが。

伝えに言った人はまず殺されますね、娘にただ甘ですから

しょうもないことを考えながらフェイトちゃんと会話をする。

「なんでしょうか？」

「デイズ……さんですか？」

マイマスターが握る手が軋みました。

「ええ……どこかでお会いしましたか？」

「あの……昔会う約束をした……フェイト・テストロッサです。あのペンダントをくれた」

真っ赤になりながらナイチチから銀細工の羽根飾りのついたペンダントをみせてくる……これは僕が作ったものじゃありませんね。

「ええ覚えてますよ。あまりにも可愛いくなっていたので、誰だか分かりませんでした」

「そっそんな」

あわあわしながら真っ赤になるフェイトちゃんとは対照的にブリザードのような冷気を発しながら万力のような力で僕の手を砕かんばかりに握ってくるのはちゃん・・・今ミシッって言う音からゴキヤッって言う音に移行しました。スライドエボリューションですね・・・分かりたくありませんが、分かります。あれ？涙が止まりません（痛みで）

「久しぶりですね・・・フェイトちゃん」

「あっあの昔した・・・約束覚えてる？」

「ええ覚えてますが・・・それはまたプレシアに会ったときにお話ししましょう。そろそろ手が粉碎されそうなので・・・失礼しますね、また会いましょう」

終始空気だったなのはちゃんには触れず、他愛もない（手を犠牲に）

ことを言いながらフェイトちゃんに別れを告げ考える……………
なぜフェイトちゃんがアリシアちゃんの記憶を？

これは本当にプレシアに会ってお話ししなければいけないですね。
……………ああその前にリニスに聞きましょうか、元はプレシアの
使い魔らしいですから

最近ウエイトレスの服装が板について来た家族に思いを馳せながら、
粉碎されかけた手に《治癒魔法》をかけつつ帰宅した。

その間マイマスターは終始ニコニコ笑顔で握った手を握りつぶしな
がら帰宅していたのは言うまでもありません

あれなんか握られてた手が棒みたいになって……………治
りますかね？

《続く》

14話・君の心に響けっ!!.....特に伝えることはないけど(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

なんだかんだで臭いセリフを言って乗り切るorz

次回もお楽しみに

15話…いでよっ!!我が最強にして不滅なる宝具よっ!!!(前書き)

ようやく宝具の登場っ!

がんばれユウキWWW

誤字脱字は報告お願いします

15話…いでよっ！！我が最強にして不滅なる宝具よっ！！

ちえいばーが役に立たねえ……そんな愚痴を思い浮かべながら何故か桜ちゃんが作ってきてくれた弁当をつまむユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスです。

ちえいばーの役に立たなさはこんな感じ

僕がグダグダしている間にたまたま行つたすずかちゃんの家でジュエルシードが発動

ジュエルシードを封印すべく向かうものはちゃんがフェイトちゃんに遭遇

ジュエルシードを賭けバトル

ちえいばー「1対2は騎士に反する」などとおぼざきになりバトルを静観

なのはちゃん敗北

フェイトちゃん逃走

ちえいばーフェイトちゃんを相手にせず、なのはちゃんを起こす
なのはちゃんストレスが溜まる

「あの子と絶対お話しするの！」などとバーニング溜まったストレスとバーニングのツケは全て僕に

疲れましたorz

僕に厄介事が回ってこないように君に護衛を頼んだんでしょうが！！
何とち狂ったことしてるんですか！？縄で縛ってでもフエイトちゃん
んの動きを止めて亀甲縛りで待機させてなのはちゃんとお話しさせ
るのが君の仕事でしょうが！？

「ちよつとなんでアンタがここにいるわけ！？」

知らねえでござえますだよ

「遠坂「桜です」・・・遠坂「桜」・・・桜に昼食を食べよ
うって誘われたただけだ」

無愛想な顔をしながらバーニングな少女に答える。

「私は桜だけを誘ったのよ！！アンタなんか誘ってないわ！」

バーニングが燃え盛る中、やはりなのはちゃんとすずかちゃんはオ
ロオロしていたが・・・ちえいばーのアホタレは平然と重箱
を突いていた。

平日小学校に通い始めたからもう働いてもいない、ただの大飯食ら

いの居候の分際でよくそんな重箱十段の弁当を作ってもらおうと思
ったなとちえいばーのあまりの傍若無人ぶりに呆れながら・・・
・外的年齢を変更したせいで中身まで影響を受けて口調と思考が変
わったな・・・変わりましたねと今現在の自分を冷静に自己判断し
てみた。

まあその際バーニングのお話しは軽くスルーされているわけで・・・
・・・

「ちよつと!!聞いてんのアンタ!?!」

「微塵も・・・Not speaking」

「バカにするなああああああーっ!!」

僕のふざけた答えに更に燃え盛り激情するバーニング・・・
うらさいっす

「あつ・・・この卵焼き美味しいな」

「はい、出汁を入れて作ってみました」

「出汁巻き玉子ってやつか」

「喜んでくれたら……嬉しいです」

薄く紫掛かった髪にリボンを二つ付けた桜が少し頬を赤くしながら嬉しそうに微笑む……平和だなあ

桜とほのぼのしながら昼食を取り、当たり前のようにバーニングを無視した。

「無視するなああああああーっ！！」

「アリス」

バーニングが暴走しているのを見て食事を終えた（早っ！？）ちえいばーがアリスちゃんに話し掛けた。

「食事中は静かにするものです。あまり騒いではいけません。私のように静かに食べなければ……」
「ただ口を開く暇がないほど食べ物をお口に入れてただけだろうか」

ドンッ

余計な一言を言った僕に対して、震脚のような力強い足踏みをしてこちらを睨みつけてきた。

「どうしてそんなに私を侮辱するのですか！？私が嫌いなのですか！？」

そして何故かキレられ怒鳴りながら胸倉を掴まれる・・・眼がヤル気だ。

ここでふざけて頷くようなことがあれば、間違いなく殺される・・・
・・・そういう覚悟でとりあえず生き残るための言い訳を模索し続ける。まずい！まずいぞ！全然思い付かない！！

内心超冷や汗をかきながら考えるが、最善の策が見当たらない。

畜生！！最終手段だ！

「いや大好きだぞ？ほらよくある小学生が好きな女の子をイジメたくなるってやつだよ。アレだよアレ、シャイな僕だからついそういう態度を取っちゃうんだよ」

「「なっ!?!」」

何故か驚愕するちえいばーと桜、互いに驚きはしているものの片や嬉しそうに顔を綻ばせて、片や絶望に染まったような黒い眼差しなのに笑顔で……桜さんその表情はおかしいっす。

あまりの恐怖に下手に出てしまっぐらいだった。

「……本当ですか、ユウキくん？」「本当ですか、ユウキ？」

二人とも声のトーンが全く違うので……助けを求めようと仲良し三人娘を見たがほのぼのと食事を取っていた。畜生っ!!

桜の背後からはゴゴゴとまるでスタンドが出るんじゃないかと言わんばかりに何かが噴出していた。

ごめん・・・・・・・・無理

「嘘に決まっているだろうが・・・戯けめ」

「そうですね・・・こんな金食いの大食いなんか好きなわけないですよね」

とても素敵な笑顔なのだが、若干黒いのでコメントは控えさせていただきます。ただきたかったです。

ちえいばーは俯いて肩を震わせている・・・・・・・・どんなリアクションを？

「ふっふっふ赦しません・・・・・・・・今日こそは殺します」

案の定ブチ切れていた。そしてその手にえくちゅかりばー（ちえいばー化に伴いエクスカリバーもサイズが小さくなっていた）を呼び寄せ握る。

「ダメなの、アリアちゃんっ！！（アルトリア略してアリア）」

そんなちえいばーを見てなのはちゃん、ちえいばーを呼び止める。
……助けてくれるのか？

なんかちよつとだけ無乳を見直したよ。
少しぐらいなら和解してもいいよ

突然舞い降りてきた救いの女神を崇めていると……

「屋上汚したらダメだから終わったあとで綺麗にしてね！」

ブルータスーーーーッ！！

だから無乳なんか大嫌いなんだよ！

とかツッコめよ！まず銃刀法違反だろうが！それにあのえくち
ゆかりばーはどこから出したとか気にならないのか！？

こんなにも有り得ない現実に対して違和感を持ってない我等が主人公
にツッコミながら、ちえいばーに恐怖を感じ後退りしていく……

・逃げ場がない！すでに屋上のフェンスまで追い詰められた。

そつだ！宝具だつ！！僕にもなんらかの宝具があるはずっ！！

そつ思い振り下ろされたえくちゅかりばーを防ぐべく、フィーリングでなんか出てくるイメージをして前に出し横に倒しておく。

カッ

何かがぶつかるとような音がした。

よつし成功したっ！！恐怖により閉じていた目を開き、えくちゅかりばーという死の恐怖から救い出してくれた相棒（宝具）の姿を確かめた。

「なんだ・・・と・・・」

まさに相棒だった・・・全長40cmぐらいの木の棒が自分の手のうちに握られていた。

これが僕の宝具？

．．．．．解析するまでもなく棒だった。

木の棒．．．．．orz

もはや二撃目を防ぐという考えはどこにもなかった．．．．．い
っそギャグ補正もなく、そのまま殺して欲しかった。

《続く》

15話…いでよっ!!我が最強にして不滅なる宝具よっ!!!(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

宝具が棒とかWWW

ユ「貴方のせいでしょうが!!死ねっ!!」

あべしっ!!!

ユ「次回もお楽しみに」

16話…いいんだよ、いいんだよ…家出してやる…！（前書き）

キャツホー

怒涛の三連続更新！！

正直明日までに終わらせられる自信がないぜっ！！

16話：いいんだよ、いいんだよ・・・家出してやる！！

・・・・・・・・犬も歩けば棒に当たる。

サーヴァントも頑張れば棒が出る。

・・・・・・・・藪から棒。

サーヴァントから棒。

・・・・・・・・箒にも棒にも掛からない。

箒も棒も大差ない。

・・・・・・・・棒ほど願って針ほど叶う。

宝具願って棒が出る。

・・・・・・・・針ほどのことを棒ほどに言う。

棒は所詮たかが棒である。

・・・・・・・・所詮宝具が変哲のないただの木の棒だったユウキ・エ
ンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。

あのあとあんなもんすぐにぶん投げました・・・・・・・・死ねばいい
のに

何アレ？杖がわり？バカにしすぎですから

あんなもんそこらへんの最近の室内犬ですら拾ってきませんよ、木
っ端ですよ木っ端。

材木店にいけばタダでくれるレベルですよ。

……萎えます。

あたりにも絶望したのでここ2、3日はずっと自室に引きこもって
ます。

たまにリニスちゃんが「大丈夫ですよ！私はマスターの武器が棒で
もついでいきますから！ほらビキニアーマーとか装備させられるよ
りは主人公の武器が木の棒の方がいいじゃないですか！！」

なんら慰めにはなっていないかった。そんなリニスちゃんはメガテン
派というかP3派ですね……。ビキニアーマーとか。ちなみ
に僕はパーティー全員メイド服にして楽しんでました。

たまにセイバーが部屋の前を通る時に

「宝具が木の棒・・・クツ」とか言って笑って通っていくので、あ
いつの弁当箱に食べる直前になって中身が掻き消えるよう《転移》
をかけておいた。

この前叫び声をあげて泣きながら帰って来たので成功したのである
う。

その話を変態ペドフェリアも嗅ぎ付けたらしく、部屋の前を通るたびに棒のつく諺を言ってくるので……なののはちゃんの記憶から完全に存在を消して怖がるようにさせた。

その後悲鳴と共に「知らない人が！不審者が家にいるの！」という声が聞こえ「俺はお兄ちゃんだあああああーっ！！」という泣き声と扉を壊して駆けていくような音がしたので同じく嫌がらせには成功したみたいだった。

ざまあ

そういえばたまによく知らない女の子が励ましに来てくれたが誰だか分からなくて怖かったので

「妖怪……座敷童子に慰められるなんて」と呟いたら外に聞こえてたらしく「まだ覚えてなかったの！？それに私は妖怪じゃないもん！うわあああああゝゝゝんっ！！」とか言っただけで成仏してしまっただけです。可愛い声だったからちょっと癒しには最適だったのに……

そんなこんなでただひたすらライフポイントが削られる日々が続い

たので、ユウキ・アンペラトリスとなり高町家を飛び出した・・・
・ニートでヒモなサーヴァントなんかやってられますか（泣）

現状に耐え切れなかったorz

大人状態で落ち込んでいるとただの痛い人なので変身したわけだが・・・
よく考えたらユウキ・アンペラトリスも目立つには変わ
りないか、赤髪だし

・・・まあいいか

最終的には投げやりになり、なのはちゃんが落ち込んでいた公園で
なのはちゃんと同じように体育座りで落ち込んでいると・・・

「ユウキ？」

たまたま公園を通りかかった金髪の少女フェイト・テストロツサが
橙色の駄犬を引きつれ、体育座りでふて腐れている僕に話し掛けて
くる・・・スパーの帰りらしく大量のレトルト食材とドッ
グフードが入ったビニール袋をぶら下げている。

・・・ここらへんに住んでのか？

というかレトルトってプレシアさん、料理作れなかったっけ？

ふて腐れてすっかりリニスにフェイトについて聞くのを忘れていた
せいでテストロッサ家の情報がまったくなかった。

やっちまったな僕。落ち込んでいるにも関わらず結局他人の心配を
しているユウキくん……お人よしめ

色々考えて心ここに在らずの僕に
不審に思ったフェイトが話し掛けてきた。

「どづしたのユウキ？」

「いやなんでもない。ちょっと落ち込むことがあってな……」

「そう……なんだ」

「例えるなら……新婚初夜ときに頑張ろうとして、いざ構えたら
水鉄砲のままだった的な」

「どづいづことなの？」

僕があげた例が理解出来ず首を傾げ意味の分からないと言った顔をするフェイト

しょうがない

「だから・・・やる「フェイト！耳塞いでっ！！」ちっ」

ちよつとしたセクハラを敢行しようとしたのだが駄犬に邪魔された・・・興奮させることにより女性ホルモンの分泌を活性化させ、更なる巨乳へと進化させるために協力したまでなのだが

実際はただセクハラしたかっただけなのだが、なんだかんだの理由をつけ正当化させる。

ぼかして事情を話し、行くところがなく今日は野宿すると告げたら

「ダメだよ！風邪引いちゃうよ！！」

と腕を掴まれ、どこかのマンションに連れていかれた。どうやらフ

エイトの家らしいのだが一時的に部屋を借りているだけらしく、プレシアさんは住んでいないらしい……。ちなみに大家を魔法で騙くらかして借りているので、普通に不法侵入そして不法占拠である。

とりあえず今夜だけお世話になることにして、一緒にベッドで寝るわけにもいかないのでソファを借りることにした。

そして一応確認したのだがフェイトは言われた通り、バストアップ体操をやっていた……。ええ娘や（泣）

寝たふりをしてソファに横になっているとコソコソと僕にバレないように外に出ていくフェイトと駄犬（今さっきアルフという名前を聞き人間になれることを知った）。

まだ眠たくなかったのでついていくことにしたのだが……。

なのはとフェイトとがガチでバトっていた。初めて二人が戦うところを見たわけだが……。本当に9歳かよ？

フェイトが自身の速さを活かした戦い方に対して、なのはは強固なバリアーを張りつつ誘導弾で牽制して隙が出来た所に大技をぶち込むといったスタイルだろうか？

フェイトは洗練された戦い方だったが、なのははまだ粗削りで防御も誘導弾の制御も甘くまだ確立した戦い方とは言えなかった。

これならフェイトのすぐ勝つだろうあと静観しつつ、封印されたジュエルシードを眺めていたら……周りであんなだけ魔力を発生させていけば充てられるのは当たり前なわけで、暴走を始めた。ただ空気の壁を発生させているだけなのだが、バトルで多少疲れているのはとフェイトとは辛そうであった。

しょうがなくジュエルシードに近づこうとした瞬間、発生している空気の密度が増した。まるで近づいた何かに恐怖するように……

フェイトは空気の密度が増したことを察したのか、危険を感じジュエルシードに飛び掛かり素手で無理矢理封印を行っている。

「止まれ、止まれ、止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれーっ！
」

手に無理矢理魔力を押し流し、ジュエルシードを魔力で抑えつけ封印しようとしているようだ……押し流された魔力に耐え切れず手から血が噴き出し始める。

「ちっ」

見てはいられず、フェイトを吹き飛ばしジュエルシードを握り潰す。
……魔神の魔力を使用して完全に、塵も残さず破壊した。

「「「「なっ!?!」「」「」」」」

それを見て驚く、その場にいた全員……ちえいばーを除く

「にゃっ!?!ユウキくん!?!」

なのはは僕が出てきたことに驚いていたらしい。

「すまないフェイト。余りにもうざたかったからつい粉碎してしま
った……お詫びにこれを」

そう言ってポケットから今まで封印したジュエルシード8個を全て
取り出しフェイトに渡す。

「「「「なっ!?!」「」」」」

再び驚くちえいばーを除く全員

「君!?!それが何か分かってるのか!?!」

淫獣^{ユウシュ}が偉そうに何か文句を言ってくるが無視して、血まみれのフェイトの手に《治癒魔法》をかける。

「あつ暖かい」

216

フェイトは魔法によって発せられ暖かさに目を細め微笑む。
そして手が治っていくことに驚きながらも更に微笑みを深めてお礼を言ってきた。

「ありがとう・・・ユウキ」

「気にするな」

そう言っつてフェイトに手を差し出し立たせた。その時何故かちえいばーが面白くなさそうな顔をしていたが、気にしたら負けだな。

「さて引「待てっ！！時空管理局だっ！！今起きた次元震について聞きたいことがあるっ！！」……誰だ、アンタ？」

なんか真っ黒いのが中空から現れた。

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。先程発生した次元震について詳しく話を聞きたい、大人しくついて来てくれ」

「ごめん被るな」

「なら力尽くで連れていくまでだっ！！」

そうやって黒いのが魔力弾を形成しようとするので

「《Regurgitate（逆流）》……あっ力加減間違えた」

つい力み過ぎて過剰に逆流させてしまった。放出されていた魔力を

逆流させ、武器に流しこんでやったのだが……爆散した。

黒いのが持っていた杖らしきものは飛び散り、黒いのは魔法が使えなくなったのか叫びながら墜落してきた。

「うわあああああ~~~~っ!？」

子供をいたぶるのもアレなのでしょうがなく近くの噴水の上に《転移》させ、水面に落とし落下のダメージを軽減させた。

そしてその後が面倒くさそうなのでフェイトとアルフをマンションのフェイトの自室に転移させた後、一旦《転移》をして距離をとり、また《転移》をして再び近くの木の上に身を潜めデザイナーヴァアの姿に戻る。

どうやら話を盗み聞きしている限りでは黒いの武器が爆散した時点デバースといふらしいで終わりらしく、詳しい話をなのはちゃんとちえいばーから聞くところどこかに連れていくらしい。

「ではアースラに「ちょっと待った!!」………はあ？」

枝に足を引っ掛け逆さまになった状態で黒いのに待ったをかける。

「誰だ君は？」

「高町なのはの保護者代理・・・ディザヴァーです」

黒いのに誰かと問われたので、胡散臭い笑みを浮かべて挨拶をした。

《続く》

16話：いいんだよ、いいんだよ・・・家出してやる！！（後書き）

お楽しみいただけただけでしょう？

クロノくんの登場ですたい

というか主要キャラは全員主人公に瞬殺されてるなあ（遠い目）

まあいいかWWW

次回もお楽しみに

17話・真っ黒クロスケ出ておいで〜出てこないと……………(前書き)

長いつー！

まあ色々なSSと似たような感じに

誤字脱字は報告お願いします

17話：真つ黒クロスケ出ておいで〜出てこないと……

手品師ではありませんねっつきとした《魔法》使いのユウキ・エンド
リオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスことディザーヴァ
ーです。

なのはちゃんがあまりにも遅くに知らない人のお家にお世話になる
と聞き慌てて飛び出してきた次第であります。

ちなみに僕の登場でなのはちゃん、淫獣^{ユウジュ}、黒いのが硬直した隙にち
えいばーに《念話》をして姿を隠し家に帰るよう告げた。

222

桃子さん以下士郎さんたちに事情を伝えるためである。

ちえいばーは素直に了承し、《風王結界》（剣を幾重にも覆う風で
光を屈折させて不可視とする宝具）で光の屈折率を弄り自分の姿を
隠した後、セイバーに戻り姿を隠したまま家へと帰っていった。

いまだ硬直する場をどうするか迷ったが時が解決してくれるだろう
と丸投げしていくばくが待つと復活した黒いのが

「とつとりあえずついて来てくれ」と言ったので潔くついて行った。

そして僕が用いる空間魔法とはまた違った《転移》で次元航行艦アースラへと飛ばされた。成る程これが《次元転移》魔法ですか・・・
・・・複写眼による解析で魔法を記憶し、使いやすいよう改良していく。ウヒヒ新しい魔法を見つけると弄りたくてたまりませんね、マッドの才能があるようです・・・ニヤニヤと厭らしいどころか危なげな笑みを浮かべながら上の空で黒いのについていく・・・
・・・何やら淫獣（ユル）がエボリューションしたとか騒がしかったが《次元転移》（新しい玩具）を弄るのに夢中で全く気にしていなかった。

「どうも始めまして私が時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

緑色の妙齡な女性が挨拶をしてきた。

「こちらこそ始めまして・・・こちらにいるリリカルでマジカルな魔法使い高町なのはの保護者代理を務めさせていただいております
ディザーヴァーと申します・・・
・・・気軽にディズとお呼びください」

「では私もリンディとお呼びください」

「ええではよろしく願いしますね、リンディさん」

挨拶をしながら微笑んだのだが……やけに背後から感じる視線が痛かった。

「……ねえどうしてリリカルでマジカルとか言ったの？」

「おや？何をおっしゃいます。なのはちゃんが自分で『リリカルマジカル』とか言い出したわけではありませんか」

ニヤニヤ

「……もしかして……全部見てたの？」

「ええちゃんとハイビジョン撮影でバッチリと録画してあります）
ちえいばーに頼んだ」

更に厭らしい笑みを浮かべる

「にゃあああああー！消してっ！全部消してっ！」

胸ぐらを掴み前後に揺すってくるが笑いながら拒否する。

「Hahahaアレは近所（同じ家）のロリコンペドフェリアに高く売れるから嫌ですよ」

「にゃあああああー！っ！！」

叫んで暴れ回っているがとりあえず無視をしてリンデイさんとお話しをする。

まず時空管理局とは超簡単に短絡的に投げやりにぶん投げた形で言えば、数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関のこと。

次にこの船

Administrative Bureau L-class
inspection ship
通称”Arthra”

時空管理局・巡航L級8番艦。次元空間航行艦船であり、艦長はリンデイ・ハラオウン提督

そして主な乗員は執務官クロノ・ハラオウン、執務官補佐兼管制官
エイミイ・リミアッタ、オペレータのアレックス、ランディ、捜査
スタッフのギャレット等。医療班や、武装局員も20名前後乗って
いることがあるらしい

でそのアースラがたまたま近くの次元世界を航行中に次元震の発生
を確認し、映像に移したところ周辺でバトルしている女の子二人を
発見。危険に思い執務官の一人を送ったとのこと……まあ
なんで近くいたかとかはかなり気になりますしリンディさんの机の
下にアニイトとかとらあなとか書かれた袋やゲーズとか書
いた袋があるのは特に見えませんか……こっちの世界にも
あつたんだなあ（遠い目）

で今度はこちらの番で淫獣からスライドエボリューションして人間
体になったユーノ・スクライアが淡々と説明してる中
とてつもなく暇だったので、お茶を持ってきてくれた女の子と楽し
くお話しをしていたら……

「おい！その不審者！！」

「あそこのシュークリーム美味しいんですよ？」

「本当ですか？僕が厄介になっっている「貴様だっ！！貴様！その

目を包帯で覆って手を拘束している貴様だ!!」……えっ
僕ですか?これはファクションですから……それに真っ黒な子供
に人のファクションについてどうこう言われるのはちょっと……」

本当に嫌そうな顔をして黒いのに言葉を返す。

「僕は14歳だっ!!それと……黒を馬鹿にするなあああ
ああああ……っ!!」

何故か殴りかかってきた。

「黒はな!!どんな色とでも組み合うことのできる偉大な色なんだ
ぞっ!!黒がなきゃテレビを消したときに困るだろ!?画面消えた
後白だったり赤だったりしたら嫌だろ!?フォーマルな服装が白だ
ったり緑だったら嫌だろ!?黒を馬鹿にするなああああああー
……っ!!」

リンディさんと茶髪の女の子に羽交い締めになれ止められながら熱
い青春の雄叫びをあげていたが、こちらは……

「あっこの手相はいいらしいですよ」

「えっ本当ですか？」

「ええ親指の方に線が行っているのは……………」

絶賛ナンパ中だった。さりげなく手相を見てあげると言ってボディ
ータッチもしている……………てんで相手にされていなかった。

だってほら熱い青春の主張とか聞くより女の子とイチヤイチャくつ
ちやべってる方が有意義じゃないですか

そう言いながらもさらに会話を続けていたので、黒いのがうなだれ
ながら何かブツブツと隅のほうで言い始めてしまった……………
まあ気にする必要はありませんね。茶髪の女の子が慰めに行つてま
すし、ああいうのがエロゲの主人公みたいにフラグを乱立させるん
ですよ。リア充、モゲる。

冗談はともかく話を進めていくと淫獣：人間体がリンディさんと黒
いのに説教をされ、時空管理局がこの一件を取り持つこととなり、
民間人である淫獣：人間体となのはちゃんには危険なので捜索を辞
めて欲しいとのこと

で一日待つのでよく考えて欲しいと言われました、マル。

「……厭らしいやり方ですね。淫獣：人間体だけだったら文句言わないんですが……マイマスターがいますからね。口を出させていただきますよ？」

「ではご命令通り引き下がるとしましょうか……行きますよマイマスターと淫獣（キルビ）」

「ルビ振りがおかしいんですけど!？」

淫獣：人間の魂のツツコミを軽やかに無視して

「でっでもデイズさん」

「なんですか、マスター？魔法を完璧なものにしたいのですか？それなら僕がいくらでも教えてあげますよ」

そう言って人の頭程の魔力弾30個程作り空中に待機させる。

「「「「「なっ!?!」「」「」」」」」

それを見てその場にいた皆さんは驚きの声をあげた。

「デイズさんも魔導師だったの!?!」

今更ながら驚きの声をあげるマスター……昔から魔法使い
だって言っていたじゃないですか

「貴様! デバイスも魔力もなしにどうやって魔力弾を!?!」

こちらは違うことに驚きを覚えたようだった。

「自分達が知っていることだけが真実だと思わないでください。魔力は君達とは生成方法が違うだけで言うなれば電圧や電流の強さが違う電気みたいなものです」

その説明に感心しているリンディさんと茶髪ちゃん……黒いのはただ怒り心頭でしたが

「でもでもデイズさんが魔導師だったなんて」

まだなんか言っているマスター

「僕は魔法使いです。幾千の魔法を操り、幾万の敵を屠るものデイズ・ヴァーです……。マスターのいう魔導師とやらではありませんが、マスターの使う魔法は全て《理解》しました」

「でもでもフェイトちゃんをつ！？」

「あああの黒い女の子ですか？あの子とお話したいんですか？大丈夫ですよ、マスターのご命令があれば一時間で探せます……。ああもちろんジュエルシードとやらも全て探せますが」

まあフェイトちゃんに関しては場所知ってますし

「……………えっ！？」

またまた驚く一同

「本当なの！？」

「ええサーヴァントたる僕は基本的には、基本的にはマスターたる貴女に嘘はつきません」

途中大事なことなんで二回言いました。

「ですから、こんな組織に協力を得なくてもパッツと貴女の望みは叶います」

「待つてっ!!」

僕のマスターへの提案に待ったをかけてくるリンディ・ハラオウン提督

それに対してニヤニヤと厭らしく口元を歪める。

「どうしたのですか、時空管理局のリンディ・ハラオウン提督？」

「……貴方は分かってて言ってるのね？」

「ええマスターを利用されるのは、こちらとしてはかなり不快なんですよ。ですから邪魔をさせていただきました」

「……………そう」

僕とリンディさんの言葉を理解出来ず周りが首を傾げる中、僕に言われた言葉により急にしおらしくなるリンディさん、そして不意に顔をあげ決意を宿した目でマスターを見つめる。

「高町なのはさん」

「はっはい!!」

不意に名前を呼ばれたマスターは驚いて吃ってしまった。

「協力してくれないかしら?」

「母ちゃん……艦長?!?」

リンディさんは黒いものの母親だったらしい、知りませんでしたね
リンディさんの言葉に対して驚きの言葉をあげるクロノ・ハラオウ
ンくん14歳

「でも・・・ディズさんが・・・」

チラチラと僕を窺ってくるマスターに笑顔で返して

「マスターのお好きなように・・・というか直接頼んできた
から許します」

「どっぴいっことなの?」

マスターは意味が分からないと言わんばかりに首を傾げ詳細の説明
を僕に求めてくる。

「最初リンディ・ハラオウン提督はマスターが自分から手伝うと言
い出すように仕向けていたんですよ」

「なっ!?!母さんがそんなことするわけないだろ!?!」

僕の言葉に黒いのが逆上して怒鳴ってくるが・・・

「いいから黙って聞いてろ・・・頸るぞ」

凄まじい威圧感を発生させ、黒いのを黙らせる。

「くっ」

向けられた威圧感に黒いのがビビり目的が達せられたで威圧感を消して説明を続ける。

「民間人であるマスターを危険から遠ざけるのは当たり前ですが・・・何故一日待つんですか？まるで何かを待ってるみたいですよね？」

「なっ成る程」

感心しながら話を聞いている淫獣：人間体に対してリンディさんは口笛を吹いてそっぽを向いている。

「で様子見と嫌がらせの2…8ぐらいで口を出したら案の定釣られたというわけですよ」

僕の説明が終わり皆がリンディさんの方を見ると「テヘツ」と言いながら舌を出しているリンディさんがいた……年齢考えてくださいよ、年齢

カッ

「とつともかく、思い通りにされるのがムカついたんですよ。それに協力してくれたら戦力増加で時空管理局的にはウマウマですからね……で頼まれてもいないのに協力するのはアレなのでお止めしたのです」

どこからともなく（間違いなくリンディさんの方から）飛んできたカッターにビビりながら話を終わらせた。

「そう……でも私は協力したいの!!」

僕の言葉に力強く返してくるマイマスター

「ええですからお好きなように、と言ったじゃないですか」

「うん!!」

こうしてマイマスター高町なのはは時空管理局と協力することと相成ったのだが、僕も協力するよう言われもちろん僕は拒否……
・今はフェイトちゃんが気になりますからね。

マスターに事情を話すわけにもいかないので、アルバイトが忙しいとごまかし、アースラから自力で《次元転移》をしてユウキ・アンペラトリスの姿となり、フェイトの家へと向かう。

部屋につくとそこにはフェイトの姿はなく《次元転移》を使用したような魔力反応があった……プレシアさんの元に向かったのだろうと読み、複写眼で魔力反応を解析してフェイトと同じ場所に着くよう《次元転移》を使った。

そして《次元転移》を用いて着いたのは20数年前に見たあの懐かしき《時の庭園》だった。

《続く》

17話：真つ黒クロスケ出ておいで〜出てこないと……………（後書き）

お楽しみいただけただけでしょう？

エンディングに向かって一直線なわけですが……………今日中に終わるかが不安です。

まだゼロ魔も書いてませんし汗

テヘッ どうしよう汗

というかりリカルの続きA・Sを書くか若干迷ってます。

だいたい構造は……………残念なことにすでに完成してますW

W
W

ただゼロ魔が全く浮かばねえ（泣）

どうしよう汗

次回をお楽しみに

18話・SMプレイに必要なのは・・・羞恥心を棄てること(前書き)

今日中に終わらないな、うん

リリカルの最終回はお預けということだ

誤字脱字は報告お願いします

18話：SMプレイに必要なのは・・・羞恥心を棄てること

久しぶりにきた《時の庭園》を懐かしく感じブラブラと散歩するユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

懐かしか〜この木はよくアリシアちゃんと一緒に登った木だばってん。

懐かしすぎて方言が出てきた……………まあ冗談はおいておいて

20年ぐらい前に来た時とまったく変わっていなかった。

普通にとことこ歩き、プレシアがいると思われる部屋に向かうと・・・

ピシッピシッ

「んっ……………あっ……………」

部屋の中から鞭の音と女の子の痛みを耐えるような声が聞こえた……………SMプレイか……………そんなもの……………覗くしかないじゃないかっ！！漲るぜっ！！わりと暴走に近いテンションに陥り

ながら音のする部屋を覗くと……

そこには想像とはまったく違うものが広がっていた。

拘束具により手を縛られ空中に吊されたフェイトとそれを鞭で無表情に叩くプレシアがいた。

何かが切れた音と共に無意識の内に扉の間から《鍊金》してつくりあげた剣を投擲し、拘束具を断ち切った。

そして墮ちてくるフェイトを受け止め、地面に寝かせ先程と同じように剣を作り上げプレシアに投擲しようとして……
……止めた。ある物を見てしまったから

プレシアは僕の登場に驚愕していたが、それを無視してフェイトに向き直り全身に《治癒魔法》をかけた。

するとフェイトは目を開き僕の顔を確認して微笑んだ

「ありがとう……ユウキ……」

そう言った直後に気絶してしまったので、僕が入ってきた扉とはまた違う扉の前で待機していたアルフにフェイトを引き渡し連れ帰るよう言った。

アルフはフェイトの有様を見て泣きながら頷き去っていた……
・そして僕は20数年ぶりに我が友プレシア・テストロッサに向き直った。

「貴方は何者かしら？」

フェイトをいたぶった鞭を左手に携え、そう尋ねてくる。

「何故……辛い顔をして鞭を振るう、プレシア・テストロッサ？」

その言葉にプレシアは一瞬の動揺を見せたが、すぐに無表情となり艶やかな黒髪を撫でながら

「辛い顔？気のせいよ……いくら人形を痛めつけようと私の心は痛まないわ」

淡々と無表情に言うが……僕には見ていらなかった。

しかし今は聞かなければならない……フェイトについて全てを……

「人形だと？」

「ええそうよ……あの人形は死んでしまった私の娘アリシア・テストロツサを蘇らせようと計画したプロジェクトF・A・T・Eにより私が作り出したアリシアのクローン。アリシアの記憶は持つていても所詮は人形……アリシアではないわ」

フェイトはクローンでアリシアの記憶を植え付けられていたってわけか……確かにアリシアとフェイトは別人だな。例えるならアリシアが太陽でフェイトは月だ。まるで違う

「では何故フェイトにジュエルシードなんてものを探させたんだ？」

その問い掛けに無表情を貫きながら淡々と答えるプレシア

「ジュエルシードの力で失われし都を探すためよ！！《アルハザード》に行けばアリシアを蘇らせる術が必ず見つかる。そのために私はあの人形を使ってジュエルシードを探させたのよ！！」

どうやら《アルハザード》とやらには失われた魔法やら何やらが沢山あるらしくその中に死者蘇生の魔法があるとのこと……ああこれは

「嘘だな……僕にそんな嘘が通用するとも我が友プレシア・テストアロッサ？」

僕の言葉に不振げな顔をして眉を寄せるが、次の瞬間気づく

「まさか……ダイザーヴァー？」

ただ驚愕を貼付けたやうな顔をするプレシアに対して僕は変身を解き、ダイザーヴァーの姿に戻った。

「ええダイザーヴァーです」

「くっ」

僕が姿を現したことにより何故かすごく辛そうで悲しげな表情を浮かべるプレシア

「……………ダメよ」

「何がですか？」

「貴方がいてはダメなの……貴方がいては……………ダメなのよっ……！」

プレシアはそう言って紫電を僕に向け解き放つが、僕はそれを魔力で障壁をつくり防ぐが……………

「なっ!？」

地面に浮かぶ《次元転移》魔法に気づかず……………《次元転移》させられてしまった。

飛ばされる直前に見たプレシアの表情が忘れられなかった……………
・まるで大切なものを壊されたくないと言わんばかりに唇を噛み締

め、涙を浮かべそうなあの表情を

そして《次元転移》により飛ばされた先が地球であることを確認した後、トボトボと歩いて高町家へと帰る。

何故プレシアはあんなことを？何故自分の爪が突き刺さるほど拳を握りしめ、血を垂れ流しながらフェイトに鞭を振るっただんですか？何故あんな全ての感情を押し殺したような無理矢理作った無表情を浮かべていたのですか？何故……何故僕は友を助けることが出来ず、拒絶されてしまったんだろうか？

分からないことだらけだった。

そして悩みながらもなんら変わらない日常を続ける中……
今まで感じたことのない大きさのジュエルシードの暴走を感知して、その場へと急いだ。

どうやら方角からして森のようなので、走ることを止め《飛行》魔法で空中を飛び高速で森へと飛んでいったのだが……着いたときにはすでに全てが終わっていた。ジュエルシードが3個全て同時に暴走して自然災害のようになっていたらしい、で珍しくちえいばーが活躍してえくちゅかりばーで発生していた台風を吹き飛ば

しその間になのはちゃんが封印したとのこと……その際に
フェイトちゃんは現れなかったらしい。

さあてフェイトちゃんはどっしているんですかね？

ジュエルシードを封印に来なかったフェイトちゃんに疑問を感じな
がらもなのはちゃんと一緒に一時的にアースラに行くことにした。

少し話を聞くために……

《続く》

18話・SMプレイに必要なのは・・・羞恥心を棄てること（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

リハビリのつもりだったのにガチで書き続ける僕

バツカでえ〜（泣

次回もお楽しみに

19話：まあ続きがないから最終的なノリで（前書き）

はい最終話です

今日中に終わらせられなかったので

次回はまたいつか！！

続き書かないと家の前に吐瀉物ばらまくぞっ！！って人がいたら別
ですが・・・・・・・・まあいないので

残念

誤字脱字は報告お願いします

19話：まあ続きがないから最終話的なノリで

残り4個のジュエルシードの位置はだいたい分かってはいるが、あまり協力する気はないユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことディザヴァーです。

ただ《アルハザード》について聞きたかったので、アースラに来たまでのこと……ただそれだけなんだからね！勘違いしないでよね！！

つまらなくてしょうもないツンデレごっこをした後にアースラに乗っている乗組員に《アルハザード》について聞くが、フェアリーテイル……要はお伽話としか思っていないようだった。

人の口伝により伝えられたものをあまりナメることは出来ないもので、大言壮語にはなるもののわりかし真実を言っている場合が多い……まあそれとこれとは話が別なわけで《アルハザード》があるかないかと言われたら《悪魔の証明》みたいなものでただの水掛け論なわけである。

まあ要は一切信用出来る情報がないって訳です。《無限書庫》とやらに行けば情報があるかもしれないと、淫獣：人間体が言っていましたか……”かも”で行動して時間が潰されるのは得策じやありませんから、その案は却下させていただきました。

でリニスちゃんに問い詰め、プレシアとアリシアちゃんについて詳しく教えてもらおうと……

過去に仕事上の重圧や、所属していた組織上層部からの無茶で無謀な指令の数々に追われる内、アリシアちゃんを事故で亡くし、それが原因となって精神の均衡を崩す（アリシアちゃんの死亡の原因は、当時プレシアが開発し、上層部からの安全基準をほぼ無視した命令の結果であり、これに関してはプレシアは被害者だと言えますね）。

253

その後「F計画」に参加して人造生物の開発と記憶移植の技術を学び、アリシアちゃんのクローンであるフェイトちゃんを生み出す。

しかしどちらも本物とは成り得ず、数々の相違点を有する様になったので、プレシアは「アリシアの代わり」ではなく、「アリシアを蘇らせる」ために死者蘇生の秘術を求めて忘れられし都「アルハザード」を目指すことを決意する。

そのための手段としてフェイトにジュエルシード確保を命じたと……
……こんな感じですかね？

リニスちゃんはフェイトちゃんの教育係として使い魔契約をして、
だいたいのが教育が終わったときにプレシアさんの計画に気づき自分
で無理矢理契約を破棄して《次元転移》し逃走したとのこと……
・本当はフェイトちゃんを助けたかったのですが、迷惑をかける
ことが怖くて言い出せなかったそうです。

まあそれを聞いた際に少しだけムカついたのでリニスちゃんにお説
教をして……。「家族に迷惑がかけられないなら誰に
迷惑をかけるんですか!? 迷惑をかけあうのが家族なんです!!」
……と怒鳴りデコピンをかましておきました。

その後何故か……デコピンが痛かったんでしょうかね? リニスち
ゃんが泣きだし、僕に抱き着いてきて更にそれをセイバーに見られ
エクスカリバラれたのは御愛敬ってやつです。

少し気になることがあり、与えられた自室で机の向き合いながら椅
子の上に膝立ちで座っている。

まずリニスちゃんが海鳴市に来たこと……これはたまたま

とかご都合主義で片付けられるのですが。

あのプレシアがリニスちゃんにバレるように事を進めたりするだろうか？

正直な話すっかりスキルを保有している僕とは違いプレシアはわりと完璧主義者で細かいことにはこだわる方だ。

そんな彼女がすっかり机の上に計画書の一部を置いたりするだろうか？

まるでリニスちゃんを逃がして助けを呼ばせるか、リニスちゃん自体に罪が被らせないような・・・そんな風に感じてしまう。

下手をしたら最初のリニスちゃんが僕の元に来たことだってプレシアが《次元転移》魔法を弄り、高い魔力を持った人物の近くに飛ばしたとも考えられなくはない・・・確かに僕の魔力は管理局の機械では感知出来ないが、生き物なら敏感に感知出来る気持ち悪い魔力なのである。

プレシアにはその事を伝えてあるので、そんな魔力反応も考慮して飛ばしたのかもしれないですね・・・まあ所詮は仮定の話なので、今現在ウダウダグダグダ言ってもなんら状況は好転しないんですけどね〜

椅子でグルグル周りながら無気力オーラを発していく……
ああ考えることが山積みで萎えます。

そんな風に腐っていると急に艦内にアラームが鳴り響いた。どうせ行ってもやることはないでしょうね〜などと緩いことを考えつつ、ゆっくりとアースラのブリッジに行く。

するとそこには辛そうに唇を噛み締めたなのはちゃんと無表情にモニターに向き合うリンディさんと黒いのがいた。

皆がモニターを見ているので野次馬根性丸出しで覗いてみると……
……そこには荒れ狂う海の上に飛行しているフェイトちゃんとアルフがいた。

どうやら予想通り残りのジュエルシールド4個は海の中にあつたらしく、フェイトちゃんは海中に魔力を打ち込み無理矢理ジュエルシールドを暴走させ、姿を確認した上で封印するつもりのようなのだ。

まあ4個が同時に暴走しているので今までになく暴走するジュエルシールドの魔力は高く、更に海中に魔力を打ち込み疲れきった今のフ

エイトちゃんならたやすく墜落するでしょうね。

気軽にそんなことを考えて、管理局としては静観しフェイトちゃんが鎮めたジュエルシードを封印で弱りきった封印から掻っ攫うつもりなんでしょうね。でマスターはそれが嫌であんなふう唇を噛み締めしていると簡単に状況を分析し、自己完結してみた。

でようやくブリッジに入ってきた僕に気づいたマスターはチラチラと僕を窺って、言外にどうしたらいいかを尋ねてきたのでしようがなく

これみよがしにため息をついてみた。

するとブリッジにいた全員の視線が僕に集まってきた………
ナニユエ？

まあもう喋るしかないようなので、あまり大きな声ではないながらもブリッジに響き渡るような声で……

「『明日食べる』ご飯が美味しく感じられないような生き方はしない

方がいい』と『自分の子供に胸を張って生きられないようなことをするな』と『最良が最善であることと最善が最良であることは全く違う』……この言葉をマスターに送りましょう」

ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべてさらに言葉を重ねる。

「さあマイマスター……明日のご飯を美味しく食べるための御命令を、この《渴望》のサーヴァントたるディザヴァーに」

僕の言葉にマスターは輝くような笑みを浮かべて

「うん!!私をフェイトちゃんのところ連れてって!!」

「了解しました、マイマスター!」

丁寧にお辞儀をした後、こちらを見ているアースラの人々に慇懃無礼に頭を下げ

「ではマスターの命令なので、失礼させていただきます……あつところで皆さんはあんな子供が苦しんでいるのを見て、明日食べるご飯が美味しく感じられるのでしょうか?自分の子供に胸を張ってアースラの局員だと言えるのでしょうか?……ふふふ、んなわけねえよな?ただ見てるぐらいなら減給覚悟で突っ込んでみ

るよ……『人間』ども
では今度こそ失礼します《次元転移》」

超キツイ毒を吐き、フェイトちゃんのいる海の上に《次元転移》し
マスターとたまたま近くにいた、エセフェレットと共に空中に浮き
フェイトちゃんへと近づいていく……さすがに4個暴走し
ているのは面倒ですね。

あちらが何やら会話している中どうやってアレを掻き消すか考えて
いたのだが……どうやらあちらでは力尽くで消し去ること
に決まったらしい。若いですね〜

多少爺臭いことを考えつつもマスターとフェイトちゃんを見守る。

んですぐにオワタ〜(^ o ^) /

ナニソレコワイ

まじ未恐ろしい9歳児たちですね、本気で力尽くで抑えやがりましたよ……これなら『死合い』なら負けないけど『試合』には負けそうですね。未恐ろしき9歳児たちの才能に羨望を覚えながらも手持ち無沙汰なので、逆さまになって遊んでいると……
こちらを警戒した眼差しで見てくる駄犬：人間体・通称アルフがい

た。

暇だったので我が宝具を取り出しアルフの前でぷらぷらさせると・
・・・・目で追いはじめた。つい楽しくなりフリフリと振ると今に
も飛び掛かりそんな様子を見せている・・・・投げたら拾って
きますかね？

投げる前に一応危険がないか複写眼で木の棒を解析してみることに
した。まあたかが木の棒には過ぎた心配ですけど・・・・過去の
の経験則から思いつきで行動して録な目にあつた記憶はないので注
意深くなりすぎたのだ。

ふんふんやっぱりただの・・・・木の・・・・棒？

複写眼による解析結果を見た瞬間凍りついた

解析結果：解析不可能・・・・
神秘性に異常計数を観測した
ため

なんやねんこの棒

《続く》

19話：まあ続きがないから最終話的なノリで（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

かなり最後は引っ張ってますが続きないんでWWW

妄想して楽しんでください

ではさよなら？

どうしても続きが見たかったら感想かメッセージください

希望があれば血肉を削り頑張らせていただきますよ

20話………ちよつとだけなんだから!!勘違いしないでよね!!(前
まあ早めに書き終わったからあげてみたんですが………
まあ臭い台詞のオンパレードでして

こんな説教くさいキャラだったかなあ〜と思いつつも

頑張れ主人公と他人事のように見る僕

誤字脱字は報告お願いします

20話………ちょっとだけなんだから！！勘違いしないでよね！！

犬耳に尻尾という素敵アイテム装備の上に巨乳のくせに何故かエロさを感じられず精神年齢フェイトより確実に低いであろう駄犬：人間体・通称アルフの相手をしている最中に自分の相棒を見て凍りついたユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。

ああ相棒と言っても肉ではなく木です、木。初っ端から下ネタ全開フルスロットルなわけなんですけど………まじでこの棒なんなんですかね？

周りを見ている余裕はなく、ただ自分の宝具として現れた棒を訝しげな目で見回していく。

神秘性に異常ってあなた………もしかしてランクEXってことですか？

確かにランクEXの宝具なら細かい解析は出来ませんが、名前ぐらいならわかるはずなんですがね。

セイバーにエクスカリバーを借りて試しましたし……もしかして名前を知ってたから情報として解析出来たのか？

考えることを止められず、自分の思考に没頭して周りが完全に見えなくなる中。

とてつもなくバカデカイ魔力を頭上から感知し上を向いた瞬間、轟音と共にとてつもなく巨大な紫電がフェイトちゃんに突き刺さり、その場にあったジュエルシードが雷によって奪われた。

今の魔力はプレシア？

「おかあ……さん……」

フェイトちゃんの眩きにより、覚えのある魔力に確信を覚えながら持っていた棒を放り出し、急いで紫電が直撃し気絶してしまったフェイトちゃんに近づく……有様は酷いが、ダメージといったダメージはありませんね。もしかしたら母親に攻撃されたということに気づき、ショックを受けたことによる精神的なもので気絶し

たのかもしれない。

そう判断し、更なる確信を得た……やはりプレシアは……

アルフがこちらを涙目で見つめ、治してくれと言外にせがむので外的怪我のない今の状態にあまり《治癒魔法》をかける意味はないからとりあえず気付けに少し弱い電流を流し、無理矢理目を覚まさせた。

「大丈夫ですか、フェイトちゃん？」

「……デイズ……さん？」

目を覚ましたフェイトちゃんは僕の顔を見て確認するように名前をよんでくる。

「ええみんなのアイドル、ディザーヴァーです」
それに対し軽口で答え、微笑みかける。

なのはちゃんとアルフはそれを心配げにオロオロしながら見守って

いたので……とりあえずフェイトちゃんをアルフに渡し、身の安全は必ず保障するからアースラに来るようお願い。嫌がるフェイトちゃんを半ば無理矢理アースラへと《次元転移》させた。

アースラのブリッジに跳ぶと何やら局員たちが忙しそうに動き回っていたので、とりあえず目の前を通った局員の一人を縄で亀甲縛りに縛り上げて、どうしてこんなに慌ただしいか問いたですと先程の次元を越えて放たれた魔法により魔法を放った人物プレシア・テスタロッサの居場所が分かったとのこと……犯人すら分かってないと思ってたのに、さりげなくやりますねなどと内心褒めていたのだが後々聞いた話ではなのはちゃんにフェイト・テストタの名前を聞きそこから同じ姓であるプレシアに辿りついたとのこと。

成る程やはり役立たずな管理局（後日談より）

話を今に戻して

そのことを聞いたフェイトちゃんが逃げようとしたので腕を掴み、殲滅眼により魔力を吸いつづけ魔法が使えないようにした……
・腕を掴んだ際に顔を紅くしてアワアワしていたので、既に魔法を唱えようとはしていなかった気もしますが……まあ気のせいでしょう。僕に腕を掴まれて顔を紅くする理由がありませんし……
……ああ男が苦手なのかもしれませんね、それは悪いことをし

ました。

変なネガティブ思考をしつつフェイトちゃんに心の内で謝りながら、管理局がこれから何をするのかを盗み聞きした。

どうやらプレシアのいる《時の庭園》に武装局員で殴り込みに行くらしい。黒いのは後続部隊としてアースラに待機すること・・・
・・・することありませんね。

フェイトちゃんも落ち着いたのでブリッジの正面モニターに映る《時の庭園》突撃の様子をどこからともなく出したポップコーン片手に映画感覚で見ていると、どうやらプレシアと局員が遭遇したようだった・・・あれは？

プレシアさんの背後に緑色に光るカプセルが置かれていた。そして、それに近づいた局員に対して紫電を打ち放った。

「私のアリシアに近づかないで!!」

っ!?!?・・・まさか?

予想外の出来事に口に入るはずだったポップコーンをポロポロ落しながら、驚きモニターを食い入るように見つめる。

プレシアはとても苦しそうな表情をした後、不意に無表情になりカプセル型の水槽に近づいていく

やっぱり中にはアリシアちゃんが……………

「……………もう……………ダメね。時間がないわ……………15個のジュエルシードでアルハザードに辿りつけるかわからないけど……………やるしかないようね」

プレシアがアリシアちゃんの入っている水槽の表面を撫でる。

「でも……………もういいわ。アリシアを亡くしてからの辛く苦しい時間も、アリシアの身代わりの人形を……………娘扱いするのも、もう……………終わりにするわ」

プレシアがこちらを見据えて話し掛けて来る。

「そこにいるわね、デザイナーヴァー？……ならちよつどい
いわ。貴方ならきつと……」

最後に言った言葉は聞き取れなかったが……何かとても大
事な言葉のような気がした。

そして一瞬とても暖かい慈悲に満ちた目をした気がしたのだが……
……

「フェイト……人形とは……アナタの事よ」

一切の心のブレを見せずただ淡々と、とてつもなく重い真実を告げ
るプレシア

「人形ってどういうことなの！？」

そんなプレシアに怒鳴りかかるのはちゃん

「プレシア・テストロッサは昔起きた事故の時に実の娘である、ア

リシア・テストロツサを亡くしてしまっているの」

ただ無言でなのはちゃんを見つめるプレシアの代わりにリンディさんが答えていく

「そして、彼女が最後に行っていた研究は人造生命の構成。フェイトって名前は・・・当時彼女の研究につけられた研究コード、プロジェクトF・A・T・E」

人造生命・・・・・・・・・・ようはクローンってことです。

「せっかくあなたにアリシアの記憶をあげたのに・・・似ているのは見た目だけ・・・アリシアはもっと優しくったわ。

我が儘も言っただけれど・・・私にとても素直でとても優しくて・・・そうフェイト・・・あなたのような人形とはまるで違う」

プレシアの痛烈な言葉に身を震わせ、自分の身体をかき抱くように肩を持つフェイトちゃん

そしてなのはちゃんは辛そうに顔を歪ませていく・・・

「あなたは、アリシアには絶対になることは出来ない・・・だから人形として、私の操り人形として・・・ジュエルシードを集めさせ

たのに、それさえ果たせなただの失敗作。
役立たずで、何もすることの出来なかった私の人形」

ただ淡々とプレシアは語っていくのだが……僕は見た水槽を撫でる手に力が籠っているのを。不意に水槽を見たとき、モニタから隠れ水槽に反射した顔が酷く歪んでいたのを……我が友プレシア・テストロツサ。貴女は優しすぎる女性だ。

「作り物の命は所詮作り物……アリシアには似ても似つかない駄作だった。

失ったものの代わりには全くならなかつた。アリシアを取り戻すまでの……私にとっての幻想……でも、それももういらないわ。フェイト……あなたはもう要らないのよ。いらないわ……だから、どこへなりとも消えないさい!!」

プレシアは今までの無表情が嘘のようにとても強い感情を表に出し怒鳴るが……僕にはそれが慟哭にしか聞こえなかつた。

「お願い!!もう……やめてえ!!」

なのはちゃんは顔を泣きそうに歪め悲痛な叫びをあげるが……

プレシアは鼻で笑う。

「アナタが私の邪魔をしてくれた白い魔導師ね……アナタ
がいたからフェ……人形共々どこかに消えなさいっ！」

なのはちゃんにまるで助けてくれてありがとうと言っ暖かい眼差し
を向けたかと思っただが……すぐに表情が代わり怒鳴り
散らした。何をそんなに隠すんですか！？

そして狂ったように笑い始め

「ハハハハハハハハッ！ねえ……フェイト。私はあなたを作
り出してから、ずっとね……あなたのことがね……」

笑みを浮かべてはいるがそれは、優しい言葉をかけることはない。
フェイトちゃんにとって、ただ苦痛を強いるための……決別を与
える言葉

「あなたのことが……大嫌いだったわ。いいえ、もうあな
たなんて……どっでもいいのよ」

そう言い放ち音声と映像を拾っていた機械に雷を放ち破壊した。

フェイトちゃんはそれを聞き虚ろな目をして崩れ落ちた……
プレシア、もう貴女の魂胆は分かりました。だから……貴

女だけを犠牲にしたりなんかさせません。

なのはちゃんがフェイトちゃんに駆け寄り必死に抱きしめる中、僕は腕の封印を解き、目の封印も解きやすいよう緩めていく……
・絶対に貴女を止めて見せませす、プレシア・テストロッサ。

そう意気込み、ふと倒れているフェイトちゃんの方を見て……
・頬に光るものを見つけてしまった。

……はあ。バカな僕

ため息をつき自嘲しながらもフェイトちゃんに近づいていく

そして虚ろな目をして茫然自失しているフェイトちゃんを持ち上げる……お姫様だっこ状態になってしまった。

なのはちゃんはそれを見て治療室にフェイトちゃんを連れていくと思っただのか、案内しようとするが……

「治療室はこっちだよ、デイズさん！」

「治療室？いえ治療室には行きませんよ」

「えっ！？」

近くにいたなのはちゃんとアルフは僕の言葉に驚きの声をあげて、目を見開く……僕はお姫様だっこのまま《次元転移》魔法で強制的にセイバーを呼び出した。

「こい、セイバーっ！！」

「……………(c.。) もぐもぐ」

食事中だったようだ……あまりにもイラツときたので放置しようが迷ったが、とりあえず連れていくことにした。

「……なっ！？誰！？」

いきなり現れたセイバーに艦内にいた全ての人間が驚いた顔をしていたが、出て来たのがサマースカートにブラウスを着て金髪を結びあげ纏めた綺麗な女の子で更に食事中だったため、すごい和んでい

た……アホ毛がピヨピヨしながら食事のせいか若干へたれているせいもあるだろう。

話が進まないの、セイバーにとりあえず食事を中断させたのだが……呪い殺すというような目で見られた。

そんな目を無視しつつ、フェイトちゃんをお姫様だっこしたまま《次元転移》をして《時の庭園》に向かおうとしたら……

「フェイトちゃんをどうすり気なの!？」

となのはちゃんに止められ

「フェイトを休ませてあげてくれよ!！」

アルフには立ちはだかられた。

しょうがないので、いまだに虚ろな目をしているフェイトちゃんの顔を覗き込みながら片手で赤子をあやすように持ち、空いた手で彼女の頬を撫でる。

「フェイト・テストロッサ」

「……………」

優しく呼び掛けたのだが何も聞こえないようなそぶりだったので、語りかけるように話す。

フェイトちゃんの頬に光っていた涙を拭い

「男の子にとって泣いている女の子を見て何も出来ないのはとても悔しいことなんですよ……………どうやら困ったことに僕も男の子だったみたいでして」

困ったように苦笑いを浮かべながらなんらリアクションをしないフェイトちゃんを見ながら言葉を重ねる。

「今から僕は優しくて残酷な嘘をぶち壊しにいきます．．．．．
そしてプレシア・テストロツサに怨まれにいきます。アナタも来ま
すか？」

「．．．．．」

フェイトちゃんは僕の言葉に無言で返して来る

「フェイト・テストロツサ．．．．．人間とモノの違いは実に簡
単ですよ。

人間も物もそこに何か意味があつて存在しています。

ですが自分で自分に意味を与えることが出来るのは人間だけです．

．．．．アナタは自分に意味を与えて生きてきましたか？

母親のためと意味を与えましたよね？

ならアナタは人形なんていうものなんじゃありません．．．．

れっきとしたフェイト・テストロツサという人間です」

その言葉にビククリと身体を震わせながらも、虚ろな目に光を宿し
ていく。

「知りたいとは思いませんか？母親がついた嘘がなんなのか？知ら

ないことは罪じゃありません、知ろうとしないことが罪なのです。
このまま何も知らないのなら死んでも同然……さあ娘は
母親に我が儘をいうものです……今から一緒に我が儘を言
いにいきましよう」

ニヤニヤと人をくったような笑みを浮かべて頬を撫でていた手を離
し、再びフェイトちゃんをしっかりと持ち直す。

「さあ行きましようか……」

《続く》

20話………ちょっとだけなんだから!!勘違いしないでよね!!(後

お楽しみいただけただけでしょうか？

今回はユウキくんの宝具が火を吹きますwww

バーニングですバーニングwww

次回もお楽しみに

21話・トムとジェリーのよじに仲良くありたい(前書き)

まあ出来上がったので書いてみた

グダグダorz

シリアスパート長いなあ

誤字脱字は報告お願いします

21話・トムとジェリーのよじに仲良くありたい

かっこつけて跳んだのはいいものの目の前に広がるのはUFOに四肢を生やしたような機械の群れ……ざっと1000ぐらい、キヤツ死んだ。

フエイトちゃんを抱えたままお茶目ぶって舌を出してみるユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

そんな僕をジト目で見てくる自称僕の剣であり従者

「……………跳んだはいいものの先を考えていたかったって顔ですぬ」

「……………ユウユウユウユウユウ」

「……………。」

連れてこなきゃよかったかもしれない……とりあえず八つ当たりをするためにセイバーに抱えていたフェイトちゃんを渡して、相棒を虚空から取り出しホームランバットよろしく構える。

- - 轟! - -

風を切る音をたてながら振り回し

「かかってこいや!ぶっ飛び率が何%だろうが吹き飛ばしてやんよ
!」

「……………」

すっかりスマブラ気分だった。

そんな僕と一緒にきたのはちゃん、セイバー、淫獣：人間体、黒野、駄犬：人間体がジト目で見ると中（フェイトちゃんはいまだに呆然としているがまあすぐ目を覚ますでしょう）

試しに近くの機械を吹き飛ばそうと相棒に魔力を込めた瞬間・・・
相棒の姿がブレた。

「怖っ!?!」

-. 投っ! -.

あまりにも急に変わったので怖くなり、つい思いっきり投げってしまったのだが・・・よく考えたら魔力を込めたことにより宝具としての真なる姿を取り戻そうとしていたのかも知れない。

.....ヤッチマッタ

おっかなびっくりになりながらも、ぶん投げた相棒を呼び戻し再び
その手に握る.....行くぜ相棒っ!!

おふざけ半分に相棒に魔力を込めていく.....全力全快っ!!

すると相棒は共鳴するような音を出しながら振動し、その姿を変えていく

どうみても材質が木にしか見えなかった我が相棒が紅黒い金属へと成り代わり、先端が伸びていき途中で別れまた絡まるように巻き付きあいまた別れ最終的には鋭く尖った槍のような先端が二つ並び音叉のような形となり、相棒の真なる姿が現れた。

そしてその姿を見て理解した……この槍がなんなのかを……

いやいやこれ駄目ですって、確かに僕の根源とは一致してますが……僕が成したのは封印であって、まあ封印した僕自身と一緒に死んだから殺したことになるかもしれないが……いやそれでもこいつはやべえですよ。

神秘性に異常係数っていう理由が分かりました、間違いなくこいつはランクEXです……槍と言えば誰もが思い付く、アレですよアレ。

そう……アレです。

なんという14歳病……作者の頭は確実におかしいですね。

こんなもん僕の宝具にしないでくださいよ……

あんなものが出てくる自分に自己嫌悪していると

「デイズさんどうするの!?!」

とマスターが僕の服を掴み前後に揺らしてくる。

もはや名前が分かったのでこの気持ち悪い槍など簡単に解析出来る……OK使い方を把握しました。

「セイバー、合わせてください。一掃します」

そう言つて槍をまるで剣を扱つように腰で構える。

「分かりました！行きましよう！！」

セイバーは僕の言葉に了承し、エクスカリバーを大上段に構え、エクスカリバーに魔力を集めていく

僕もそれに倣い槍に魔力を集めていく、槍は姿を現した時と同様に鳴り響くような共鳴音を出し先端と先端の間に魔力が集中している。

そして

『エクス（約束された）』

『ロン（神殺しを為した）』

セイバーの剣には金色の光が
僕の槍には七色に輝く虹の光が

集まり

『カリバー（勝利の剣）っ！！』

『ギヌス（聖なる槍）っ！！』

- - 轟つ!!! - -

大上段から袈裟切りに振るわれた金色の光と真横から振るわれた七色の光は混じり合い目の前にいた機械を全て鉄屑へと一変させた。

それを見たマスター以下三名は啞然としフェイトちゃんはその輝きに目を奪われ、完全に意識を取り戻したようだった。

そう僕の宝具はロンギヌス……木の棒になっていたのは、セイバーのエクスカリバーと同様でもあまりにも有名であるため、姿を隠すためらしい……。まあ自動で行われていては世話がありませんが

本来ロンギヌスは長い槍もしくは槍を表す古代ギリシャ語「ロンケ」が訛ったものまたはロンギヌスという人物が使ったと言われた、神「イエス・キリストを殺害した」という聖装である。

本来僕なんかの手元に来るようなものではないのだが……。持ち主のいないこの槍が『神殺し』を為したという根源だけを頼りに僕を選んだようだ。

ぶっちゃけアレでも手加減したのだが……まあ気持ち悪い
威力だった。

更に異常なのが後二つ程種類の違う真名解放があるらしく……
・ぶっちゃけ宝具としては乖離剣エアに近いような気もしくはな
い。

ああ気持ち悪いもん手に入れちゃいましたね……緊急時以
外二度と使わないようにしましょう。そう思い犬と遊ぶような手輕
さで棒に戻したロンギヌスを放る。

ほら、取ってこい駄犬

アルフは若干反応を示していたが、目の前の惨劇を引き起こしたブ
ツだということに気づいたのか口元を引き攣らせていた。

そしてセイバーが

「二人での初めての共同作業ですね!」などと息を荒くしながらほざくので

「はっ」と鼻で笑ったら首襟を掴まれ、十字絞めといういと珍しき立ちによる絞め技を食らった。

おふざけを続ける中、眼前に広がる鉄屑の海の上に《転移》の魔法陣が現れカプセルインアリアちゃんを連れたプレシアが姿を現した。

そして激怒したような表情を浮かべ僕を睨みつけてくる。

「……………何をしにきたの?」

冷たい吹雪のような凍てつく声にフェイトちゃんが肩を震わせるが………彼女は僕に語りかけているのだ。

「何をしにきたのかと聞いているのよ、ディザーヴァーっ!」

燃えたぎるマグマのような怒りと共に紫電が振るわれたが、僕の前に立ちはだかったセイバーにより掻き消された。

「くっ……」

「邪魔をしにきました」

「っ！……私は止められないわ。私はアルハザードに行くのよ」

僕の言葉に動揺したように身体を震わせたが一瞬で無表情となりなかつたかのようにやりとりを続けようとする。

「いえそちらではなく……この茶番を打ち砕きに」

「……えっ!?」「」「」

茶番と聞きマスターたちが驚きの声をあげているが……プレシアは更に目つきを鋭くさせ、僕を睨みつける。

「全て……全て分かっている……邪魔をするというの？」

「ええ……僕は傲慢で強欲ですから」

その答えにプレシアは完全に激怒し、服の中から持っていたジュエルシードを全て取り出し暴走させた。

「まずいつー!!」

黒野さんが危険を感じ注意を促すが、既に遅く狂ったような魔力がジュエルシードから解き放たれ世界を揺るがし、《時の庭園》が崩壊しようとしている。

「これなら貴方でも止められないでしょう!？」

プレシアはやったと言わんばかりに笑みを浮かべるので同じように僕も笑みを浮かべ

「ええ僕なら止められませんね……ですが」

言葉を放つと同時に僕の影から漆黒の光すら侵食する黒を持った巨大な腕が飛び出していく

「バロたん（バロール）なら余裕です」

ニヤニヤとあくどい顔を浮かべ、更に影を広げて無理矢理飛び出してきた漆黒の魔神に向き直る。

『さあ願いを言えーっだけ叶えて「残念ながらシリアスパートです」マジで？ならいいや……ハイハイバロたんにお任せあれ』

そう言っつて魔神はジュエルシールドの暴走により崩壊しようとしていた《時の庭園》を力付くで止めてジュエルシールドの暴走すらも時を止め停止させた。

あまりの事態の展開に一同が呆然としている中プレシア・テストアツサだけがディザーヴァーに怒りに満ちた目を向けていた。

「どうして邪魔をするの!？」

怒りに満ちたその言葉に僕は笑みを浮かべながら答える。

「ある征服王の言葉を借りるなら『理由だの目論見だの、そういうしち面倒くさい諸々は、まあ後の世の歴史家が適当に理屈をつけてくれようぞ。』」

我ら英雄は、ただ気の向くまま、血の滾るまま、存分に駆け抜ければよかるつて『ですかね』」

「ふざけないでっ!!」

僕の答えに息を荒げ更に憤慨したように怒鳴ってくるプレシア

「まあ簡単に一つだけ理由を言うのであれば………友の為に
す」

ニヤリ

更に笑みを深くさせプレシアを見つめる。

「さあ友達同士仲良く喧嘩でもしてみますか!!」

《 続 》

21話・トムとジェリーのように仲良くありたい(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

うんFateネタが多い

あと2〜3話で終わらせる予定です

次回もお楽しみに

22話・裁きを与えるのはこんなつまらない世の中で（前書き）

クライマックスまで振り切るぜ！（何度も言っように読者をW）

誤字脱字は報告お願いします

22話・裁きを与えるのはこんなつまらない世の中で

バロールを召喚した状態でバロールとの接続を解き一時的に元の姿に戻ったユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

巨大な魔力の発生により風が吹き荒れ砂埃が立ち込める中、砂埃の中から現れたのは先程までいた黒髪の包帯男ではなく、ボサボサの薄汚れた赤い髪を生やした死んだ魚のような茶色い目をした青年が現れた。

「……誰!?」「……」

全員が疑問を持つ中一人だけふと声を漏らした。

「……ユウキ?」

フェイトちゃんが僕の中にあるユウキ・アンペラトリスの面影に気づいたようだ。そしてそれを聞きなのはちゃんも声をあげる。

「えっユウキくん?」

それに対して笑顔を浮かべ答える。

「ええユウキ・アンペラトリス時とは性格が違いますがユウキ・アンペラトリスことディザーヴァーこと皆さんのアイドオー、ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリス（真）です。某魔王を思い浮かべれば簡単ですよ……私を倒しても第2第3の的な感じですよ」

「ええ〜！？ユウキくんなの！？」

フェイトちゃんが呆然と目を見開きなのはちゃんが驚きの声をあげる中

先程はまた違ったニヤニヤと人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべてプレシアに向き直る。

「それが本当の姿だというの？」

プレシアは落ち着いたのか冷静に質問してくる。

「ええいつもは体内に宿した魔神ハロールのせいで身体が変化してしまって

いるんですよ……まあアッチの方が強いからコッチになる意味ないんですけど」

青年の言葉にプレシアは怒ったように肩を震わせる。

「馬鹿にしているの？わざわざ弱い姿になるなんて!？」

青年に怒鳴りかかるが青年はなんてことはないと言わんばかりの表情を浮かべ

「友と喧嘩するのに、何故他人のまして魔神なんかの力が必要なんですか？」

心底不思議そうな表情を浮かべて返した、その答えに更なる怒りを宿したプレシアは右手に宿した紫電をすぐさま青年に解き放つ。

「ならば死になさいっ!！」

「嫌なこった」

『・・・力を喰らう』

青年は自分の魔眼の力を用いてプレシアの紫電を魔力として吸収し己が力へと変える。

「くっ・・・」

それを見てプレシアは今にも舌打ちをしそうな憎々しげな表情を浮かべ更に追撃をかましてくる。

再び放たれた雷を殲滅眼による魔力吸収で吸い取る。

「さあてさあて喧嘩をする前に昔話でもしましょうか・・・昔々あるところにプレシア・テストロッサという綺麗な女性がいました」

話をし始めると同時に更なる雷がプレシアから放たれてくるが、それを同じように紫電を操り相殺させる。

「彼女には一人娘のアリシア・テストロッサという可愛らししくとても元気で浚刺とした娘がいました。しかしある日アリシアちゃんは事故に巻き込まれて死んでしまいます」

迫りくる雷に雷をぶつけ合いつつ周りが静かに聞きの体勢を取っているので話を進めていく

「事故で娘を亡くしたプレシア・テストロッサは絶望し娘を蘇らせようとプロジェクトF・A・T・Eという人工生命をつくる計画を実行させます」

僕の言葉にフェイトちゃんは身を震わせるが今は気にしている時ではないので話を続ける。

「計画は成功し、生まれた人工生命に自分の娘の記憶を植え付けたプレシアでしたが、目覚めた人工生命は彼女が渴望したアリシアではありませんでした」

「黙りなさいっ!！」

僕の話の聞くうちにプレシアは激昂し更に雷を打ち放ち続ける。

「しかし生まれた人工生命はアリシアとは別の存在でしたが……
・・彼女はその娘を心の底から愛したのです」

「「「なっ!?!」」」

「うるさいっ!！」

僕の言葉にフェイトが虐待を受けていたことを知っていた人たちは
驚愕しプレシアは取り乱した・・・・・ 眞実を知られたくないが
ために

「彼女は分かっていたのです・・・・・ 計画を進めるうちにアリ
シアとは違う存在が生まれるであろうことを。ですが、彼女は新た
に生まれてくる子を自分の娘として育てようとしたのです」

痛みで意識が飛びそうになったが歯を食いしばり堪える。

「つまり今回の事件はプレシア・テストロッサによる茶番だったのです……彼女是最初から愛しい娘のためだけに動いていたのです」

「」「」「……。「」「」

「やめてやめてよディザーヴァー！……ガフッ」

「プレシアっ!?!」

事実を知り皆が無言となりプレシアが泣きそうな眼を僕に向けていたのだが……急にプレシアが吐血し始める。

僕は焦りプレシアに近づこうとしたのだが、彼女が放った雷に邪魔をされ近づけなかった。

「……。そして寿命が近いから、フェイトちゃんを保護させようと決めたわけですか」

僕は唇を噛み締めプレシアを見つめる。

「どうして!?! どうして邪魔するのよディザーヴァー!?! コフツ・
．．．． 私は私の罪を受け入れるだけよ!! 私は許されない罪を犯
した! だから私は死ぬ前にフェイトだけでも!．．．． フェイ
トだけでも助けたかっただけなのに．．．．」

涙を流してフェイトちゃんに穏やか目を向けるプレシア

「神様はDSでクソツタレでド外道だけど．．．． だからこそ
罪は赦されるんです。我が友プレシア・テストロツサ．．． 貴女が
自分を赦せないというのであれば僕が裁きましょう．．．． 貴
女の友であるユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アン
ペラトリスが」

そう言ってプレシアに笑いかける。

「……………ディザーヴァー？」

僕の言葉に困惑の眼差しを送るプレシアに対して魔力で形作った二本の剣を向ける。

「行きますよプレシア……………貴女の罪を数えなさい、断罪の時間です」

僕は剣を持ちながらプレシアへと駆ける。

「くっ」

プレシアはそんな僕に対し紫電を放ち牽制してくるが、それを剣で切り裂きその剣をプレシアへと投げつける。

『咎人、灼熱の業火に身を焼かれ』

「くっ」

プレシアはそれを魔力を宿した手で弾いたので、更に自らの背後から先程放った魔力で形作った剣を弾丸のように9本放つ

『断罪、罪を罰にて裁きて』

更にプレシアはそれを雷で迎え討とうとしたので操作し、先程投擲した剣も背後からおそいかかる。

『輪廻、流転にて安寧を与えん』

「ちっ」

プレシアは操られた剣を破壊しようとしたが背後から迫りくる剣に気づきそれを弾く

『再誕、清くなりし魂は』

しかし弾こうとした瞬間剣は全て内包された魔力により爆発しプレシアの視界を奪い

「くっ」

『咎人に永劫なる誓いを与えん!』

視界を奪われたプレシアに背後から近寄り虚空より取り出した相棒に魔力を込めて真名解放をし

『ロンギヌス(死を刻印する聖なる槍)っ!!』

- - - - -

詩を歌う青年と母親が戦う中、煙りが立ち込め何かを叫ぶような声が聞こえた。

濛々と立ち込める煙が晴れたとき、母親の愛情を知った少女の目に

飛び込んできたのは……

「いやあああああああ————っ!」

無表情に自分の母親の胸を紅黒い槍で突き刺した青年と槍で突き刺されながらも微笑む母の姿だった。

そして少女の慟哭とも呼べる叫びが響き渡った。

《続く》

22話・裁きを与えるのはこんなつまらない世の中で（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

また何やら続きが気になる展開にWWW

途中鶴翼三連をパクった技がありましたでしたが気にしないでくださいW
WW

次回もお楽しみに

23話・時には真実をこまかす贗物のように……………(前書き)

ggggキヤッホー

あと2話で終わるかな？

誤字脱字は報告お願いします

23話：時には真実をこまかす贗物のように……………

「ガッ……カフッ……ああありがとうディザーヴァー」

ビチャッ

「……………」

「うわああああああーっ！！バルディッシュュ！」

「イエスサー」

「邪魔です」

母親を貫かれたことにより怒り迫りくるフェイトちゃんを魔力で形作った縄で縛り身動きが取れないようにした。

顔についた血を拭い槍を引き抜き、横に振り槍についた血を振り払

う。

液体が飛び散るような音と共に赤い血が飛散した。

「いやあああああああーお母さんーお母さんーっ!!」

フェイトちゃんが狂ったようにプレシアさん呼び続けるが槍で突き刺されたプレシアさんがその呼びかけに答えることはない。

フェイトちゃんは縛られたまま憎悪を込めた眼差しで射殺さんばかりに僕を睨みつけてくる。

「どうしてお母さんを殺したのっ!?!ギリッ・・・許さないっ!!
私は絶対に貴方を許したりなんかしない!ディザーヴァーーっ
っ!」

少女が歯ぎしりをして怒り狂い絶叫するが青年はまるで意に介さずに槍を霧散させ己が身に再び魔神を封印した。影に引きずり込まれて

いく魔神は黒い何もないはずの顔をニヤニヤと歪めて笑う

『クッククク……だから好きなんだよ我が眷属。お前さんは最高の英雄だなクッククク』

魔神は宿主たる青年を馬鹿にしたように笑いながら影へと戻り青年の姿も黒髪を目を包帯で覆った男へと戻った。青年は手を握ったり閉じたりを繰り返した後に

「やはり」と呟き何かを考えていた。

そして元の姿に戻った青年は暴走していたジュエルシードに近づき無表情でなんの躊躇いもなしに握り潰し塵へと変える。

青年はそのまま無言で《時の庭園》に踵を返し、そのあと彼の従者である宝石のような碧色の瞳、綺麗な金髪、青いドレスの上に銀色の甲冑を身に纏った美しき少女が青年の後に無言で続く

青年の主である茶髪を二つに束ねた少女は無言で自分の従者である青年を睨みつけ、泣きわめく金髪の少女の元へと向かう。

そしてジュエルシードの暴走により発生していた魔力により崩壊しかけていた《時の庭園》が再び崩壊を再開し始めた。

誰もいなくなった綺麗だった庭はひび割れ、白い屋敷は何もない虚空へと消え去っていく

そんな場所を青年はただ無言で見つめ、不意に虚空から再び相棒たる槍を取り出し魔力を込め始める。

腰溜めに構え七色に輝く魔力を解き放ち

『ロン（神殺しを為した）……』

『……ギヌス（聖なる槍）っ！！』

プレシアとアリシアが眠る《時の庭園》を無表情にふき飛ばし、船へと戻る。

船に戻り少女たちが青年に掴みかかる中、黒い少年が少女たちを収め青年にプレシアを殺した理由を尋ねたが青年は無言で何も答えよ

うとはしなかった。

「プレシアさんを殺す必要なんかなかったのにつ！！」

「どうしてお母さんを殺した！？答えるディザーヴァーっ！！」

少女たちはただひたすら自分の中にある怒りを青年へと向け続けた。

青年はそんな少女たちを包帯で覆われているせいで見えない目の奥から見続け、ため息をつき手をヒラヒラと振って緑色の髪をした女性リンディに近づき、「三会話をした後どこかへと消えていった。

少女たちはそんな青年の様子を見て更に怒りを募らせていくが、青年の従者たる少女はただ無表情に青年が消えた先をじっと見つめていた。

こうしてジュエルシードを巡る事件は幕を閉じた。

- - - - -

side ????

あれから何日か経ち私の裁判を行う日が来た。

結局お母さんが悪いということになり何ヶ月か管理局で奉仕活動を行えばお咎めなしという結果に成りそうだった。

最初は反対意見も多かったが途中手の平を返したように意見を変える人々が出てきてそういう結果となったようである・・・多
少作為的な物を感じるが、多分リンディさんが手を回してくれたの
だろう。

そういえばリンディさんに娘にならないかと言われたのだが断った。
・・・私の母親はただ一人プレシア・テストロッサだけなのだ
から

だからこそディザーヴァーが憎かった
あんな人を信用して・・・・・・・・母さんを母さんを・・・・・・・・く
っ！

ディザーヴァーへの怒りは数日経った今でも消えることはなく、逆にフツフツと怒りが増していた。

なのはは自分の家族がそんなことをしたことが信じられず、何か理由があると書いていたが・・・・・・・・私にはそれは信じられなかった。

何よりあの日以来まったくなのははの家に帰っていないことが証拠のような気がしてならない。

そして今日もまたディザーヴァーはおらず、今ミッドチルダへと渡る船に乗るために連絡通路の間でなのはとお別れをしていた・・・・・・・・
・・なのはから友達の証としてリボンを受け取り、それを胸元に抱き寄せる。

ああ母さんようやく友達が出来ました、そんなうれしいようで悲しいような気持ちでいる中

現れた

「……………」

久しぶりに見たデザイナーヴァアの姿に再び怒りが目覚めるが……
……何故か恐怖してしまった。その佇まいに

いつも笑顔を浮かべている口元は引き締められ、包帯で覆われ見ることの出来ない目から膨大な溢れんばかりの殺意を垂れ流している。

320

彼の従者を名乗るセイバーと言われている少女も青年のその有様に冷や汗を流し、後退りをしようとしていた。

そして不意に動いたと思ったら目元の包帯を乱暴に取り外し現れた血のように紅き目で私たちを見つめ叫ぶ。

「ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリス

の名において命ずる！高町なのは、フェイト・テスタロッサ以外の人間が許可なく動くことは出来ない！！」

それを聞いた瞬間一瞬意識を失い……気づいた時には周りの人間は指一本動かさずただ立ち尽くしていた。

そしてディザーヴァーはこちらを見つめ血のように紅い瞳を爛々と輝かせ顔を悪魔のように歪め言った。

「かかってこい餓鬼ども」

《続く》

23話・時には真実をごまかす贗物のように……………(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

ラスボスはなのはry

さてはてどうなるのでしょうか？

次回もお楽しみに

24話：闇夜に活躍するは主人公たる証なりっ！！（前書き）

誤字脱字は報告お願いします

24話：闇夜に活躍するは主人公たる証なりっ！！

ディザーヴァーが指を一回鳴らすと先程までいた連絡通路ではなく草原生い茂る世界へと跳ばされる。

私となのは以外にいるのはアルフにリンディさんにクロノ、セイバーさんにエイミーだった。

あとの人々は連絡通路に置き去りにされたらしい

そしてディザーヴァーはかかってこいと言ったわりには力を入れずだらんと腕をぶら下げ構えようとはしていなかった。

「……………どういつつもり？」

私は自分でも驚くような冷たく低い声でディザーヴァーに話しかける。

「ただお前らにチャンスをやったただけだ……………お前らが勝て

たら好きなようにしろ。ただし僕が勝つたら……」

三日月のように口を歪め笑う。

ただそんな表情がとてつもなく不快だった。

「バルディッシュ」

「イエス、サー」

『セットアップ』

すぐにバリアジャケットとバルディッシュを展開し構えディザヴァーへと相対する……。なのははいきなりの展開に動揺しデバイスを構えようとはしなかった。

「どうした高町なのは、構えないと……。死ぬぞ？」

ディザヴァーはその言葉と共に苛烈な殺気を私たちに叩きつけてくる。それを恐怖しながらも母さんを殺された怒りで自分を奮い立たせバルディッシュをディザヴァーに向ける。

「くっ」

なのははディザーヴァーに殺気を向けられたことが信じられないと言わんばかりに震えてデバイスを手から落としてしまう……なののはっ！！

そんななのははにディザーヴァーは襲い掛かるかと思いきや、苛烈な眼差しで私を睨みつけている。

326

「まずはお前からだ」

そう言った目が合った瞬間、恐怖のあまり身体が勝手に動きディザーヴァーに切り掛かっていた。

「はっ」

ディザーヴァーはそれを馬鹿にしたような笑い方をして皮一枚でかわしバルディッシュを抑えつけてきた。

「くっ」

そしてそのままバルディッシュを掴んでいた手を握られ、思いっきり投げられた。

「フェイトちゃん!？」

なのはがふき飛ばされた私を見て悲鳴のような声で私の名前を呼んでいる中………ディザーヴァーは直立不動で

「速いことは速いがただそれだけだな、まだ武器に慣れてないし決定的な一打にかける………高速移動しながら撃てる高威力の魔法を覚える。武器の使い方はあそこにいるアホ毛をピョコピョコさせてる奴に聞いてみる」

「えっ？」

「構える高町なのは！」

「はいつー!!」

デザイナーヴァーはアドバイスのようなことを言ったあとにすぐに私に踵をかえし、なのはの方を向いた。

なのははデザイナーヴァーの声に驚き、一瞬でデバイスを起動させバリアジャケットを展開している。

『無限の弾製』

ガラスが割れるような音と共に、握り拳程の大きさの弾がデザイナーヴァーの手の平の上から現れ、なのはの方に向かっていく

『 protection 』

なのはそれを魔力によるバリアで防ぐが、その弾から同じ大きさの弾が飛び出し再びなのはへと向かう。

『 protection 』

なのは再びバリアで防いだが、二つになった弾からまた同じ大きさの弾が飛び出したのはへと向かっていく……何回も繰り返し増殖したのはを取り囲む弾たち

『 連結：展開 』

なのはを取り囲んでいた弾から紐のようなものが飛び出し弾同士をくっつけあい、なのはを取り囲む檻と化す。

『 偽・ディバインバスターっ!! 』

なのはが身動き出来なくなった隙を狙いディザヴァーが右拳を突き出しそこから収束した魔力を解き放ちなのはに直撃させた。

「にゃああああーっ!!」

何も出来ずになのはが悲鳴をあげて墜落していくのをそこ意地の悪い笑顔を浮かべて見つめているディザーヴァー……何がしたかったの？

ディザーヴァーは撃墜したなのはを拾って（引きずって）くると、物を投げるかのように気軽に私の方に放ってくる。

「君は誘導弾の応用した使い方を学んだ方がいい、今みたいに使えば設置せずに固定してフルボッコに出来ますからね」とまたアドバイスのようなことを告げた。

そしてアドバイスを終えると不意に屈んで地面に座っている私たちに視線を合わせ、最初と同じ無表情で約束だからなと言って命令してくる。

「お前らは魔導師をやめろ」

「なっ!?!」

それを聞き私たちは目を見開き驚愕する……どうして魔導師をやめなきゃいけないの!?

「いつも思ってたんですよ……汚い大人のケツを拭くのにどうして子供の力を借りなきゃいけないのかって。万年局員不足とかいうくだらない理由はどうでもいい……大人が逃げて子供が戦わなきゃいけない世界なんかクソ以外の何物でもない」

「……………」

あまりにも怒りの籠められた眼差しに何も言い出すことは出来なかった。

「高町なのは」

「はい」

「君はこれから管理局の手伝いをする気なんじゃないっ？」

「……はい」

「両親には言いましたか？」

「……まだ」

「言えるわけじゃないですよ？危ないことをしてるんですから」

「……。。。」

その言葉になのは俯いてしまう。

「まあ……既に皆さんは貴女が魔法使いであることも管理局で働くことも知っていますが」「にゃ！？どうしてなの！？」
「……まあそれ置いておいてちゃんと親に言ってあげてください。心配をかけてはいけませんよ」

そう言っつてデイザーヴァーはなのはの頭を撫でた。

「フェイト・テストロッサ」

「……………」

今度は私の方に話しかけてきたが、私はそれを無視した。

「貴女も母親にそういうことを言わないと」「貴方が殺したんじゃないか！お母さんを貴方が」「殺してなんかいませんけど？」「……………はっ？」「……………」

何か今とても聞きたかった言葉が……………

「だからプレシア・テストロッサは生きてますよ」

「……………ええ！？」「……………」

「……………」

「あの時槍で突き刺したのはプレシアの中にあつた病気を殺すためです。ロンギヌスは殺す対象以外を傷つけることはありません」

「じゃあなんで《時の庭園》を吹き飛ばしたの!?!」

なのは飛び掛からんばかりにディザーヴァーに質問している。

私はお母さんが生きているという事実だけで……………それだけで……………よかった。

「あれはアースラが録っていた記録映像に証拠として残すためにです。あの時ロンギヌスで吹き飛ばす前に《時の庭園》をまるごと違う世界に飛ばして疲れたのに……………やれ説明しろや何やらうるさくて……………ついキレちゃって……………てへっ」

どつやらイラついたから何も説明せずに姿を消していたらしい・・・
・・・いい加減すぎだよ！マダオめっ！

「それにフエイトちゃんを無罪にするためにリンディさんから聞いた高官を脅し・・・とお話したりとか色々忙しかったんですよ」

ニコニコと笑いながら私たちの頭を撫でてくる・・・私の怒りはなんだったんだろう？

すごい肩透かしを食らっちゃったよ。

「まあでも魔導師をやめて欲しいのは本当ですからね」

「・・・どつしてっ？」

顔を引き締めこちらを見てくるデザイナーヴァーに対して上目遣いで尋ねる。

「君達には”普通の子供”として生きる選択肢があることを忘れて欲しくはないんですよ……貴女たちは頑固ですからきつと僕の話なんか聞きやしませんでしょうが、魔法を使っていけばこの先楽しい出来事だけではなく……辛く悲しい狂いたくような出来事も待ち受けているんです。僕はそれを君達に見て欲しくはないんですよ」

ディザーヴァーは困ったような笑みを浮かべて私たちを撫でつづけた。

そして何分か経ち不意にディザーヴァーは立ち上がり

「ああそういえばフェイトちゃん」

「なんですか？」

「家族が増えるよ」

よく意味の分からないことを言われたので聞き返すと

「えっ？」

「アリシア・テストロツサの蘇生に成功しちゃった。てへっ」

「「「「「はあ!?!?!?!」」」」」

その言葉でディザヴァーはとんでもなく出鱈目な存在であると認識を改めた。

「…………ディザヴァーにかかればなんでも出来ちゃうのかな？」

《続く》

24話：闇夜に活躍するは主人公たる証なりっ！！（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

次回もお楽しみに

忙しっ！

25話・終わりに必要なのは客席からの喝采（前書き）

最終話です。

終わり方は作るかも分からないA・S編に繋がるようになっていたため
気に入らない方がいるかもしれませんが

そこらへんは銀河より広い心で流していただければ大変うれしい限りであります。

25話・終わりに必要なのは客席からの喝采

どうも絶賛なのはちゃんからお説教中のユウキ・エンドリオール・ル・デファンヌ・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです……
……よくネタになるO H A N A S Iを己が身で体感してるんですよ〜

「どうして帰って来なかったんですか？」

なのはちゃんに混ざってセイバーも説教してくる。

「なんとというか若気の至りで女の子の家を西から東に「ではもう一枚石段を追加」「冗談です！フェイトちゃんの裁判に関係ある局員たちを強請るためのネタを東奔西走して探し回っていただけです！」「……まあ許してあげましょう。では何故なのはたちに喧嘩を売ったりしたのですか？」

さらに質問を重ねてくるセイバーだが現状をよく見て欲しい……
……そういえば皆さんは十露盤板ソロバンイタというものを知っていますか？
江戸時代に尋問するために使われていた道具で
こういう

感じになっている石で出来た板なんです。

使用方法は簡単でこれを地面に置き、その上に尋問相手を正座させ乗せて、情報を吐かなかつたら乗っている相手の膝に石段を載せていくというとても原始的な道具のことなんです

とても痛いです。

まず脛に自重で板が突き刺さりますし、まず最初の状態で三枚ぐらい載せられましたからね（遠い目）

それに首から紐で『自分はわるいことをしました』って書いてあるプラカードを吊らされてます……このプラカード使い回しですよ？

虚空を見上げ二番煎じな作者を睨みつけるが、その間に石段が追加された……足がちぎれます（泣）

涙目で自分の足の危険性（被害）を報告したのだがまったく受け入れてはくれなかったので、話を逸らすためにプレシアとアリシアちゃんを呼び出す。

数十分後漸くプレシアたちが来てくれてO H A N A S I Iから解放されたころには既にマイレッジは血まみれになっていた。

自らの足の被害状況を確認する中あちらではフェイトちゃん、プレシア、アリシアちゃん更にリニスちゃんにより家族の愛の確かめ合いが行われていた……やれやれ

だいたいなんでフェイトちゃんはブチ切れてたんですか？最初から喧嘩って言うてるのに殺すわけないじゃないですか。それに三連続の真名解放と莫大な質量を《次元転移》させて疲れてたのに……
……ブツブツと世の中の理不尽さに文句を言いながらも、あの時を思い返す。

342

あの時、最初からロンギヌスの真名解放でプレシアの病気だけを殺すつもりだったので……
……ロンギヌスは元々《殺す》という概念を高め神にすら届いた聖槍。

《殺す》モノの取捨選択など簡単なことだ。

あのバトルの映像を録画した後、ロンギヌスで吹き飛ばすふりをして《時の庭園》をまるごと違う次元世界に《転移》させ、リンディさんに高官たちの名前を聞いた後すぐに駆け付けプレシアの容態を確認して無事を確かめたわけですよ。

でたまたまアリシアちゃんの遺体を見ていたら・・・あげた
ネックレスが正常に起動してることに気づいたんですよ。
元々どちらかが死んでしまうのを防ぐために作り守りきれなかった
ら、魂をネックレスに保管するように作った代物ですから魂が入っ
ていることに驚きはしなかったんですが・・・複製眼でアリ
シアちゃんの遺体を解析したら魔力による魂の解脱により仮死状態
になってたことが判明してからは大変でしたね。

仮死状態なら魂を再び入れれば蘇生させられますからね。

あまりの驚きにプレシアの胸を揉んだらグーで殴られ、アリシアち
ゃんが蘇生出来ると言ったら殴れ・・・どうして速く来なかったの
かと殴られ続けフルボッコにされました。

アリシアちゃんは蘇生後すぐに僕に結婚するよう迫ってきて・・・
・・・再びプレシアにフルボッコにされる僕、プライスレス。

で色々と強請ネタも手に入れたので帰るとたまたまリンディさんと
マスターの会話を聞きマスターが管理局の手作りをすると聞き、前
々から気に入らなかったから最期にチョッカイ出してやろうと思っ
た次第であります！イエス、ママ！」

敬礼をしながら実は今まで会話だった話をなのはちゃん含めその場

にいる人達に教えた。

プレシアの胸を揉んだと言った時にエクスカリバー的な何かが投擲され頭上マイナス3cmぐらい（避けなければ間違いなく突き刺さっていた）のところに突き刺さっていたが気のせいでしょう。

全ての事実を話し終えたことにより完全に解放されたが………
まだやることがある。

正座していた状態から器用に片足で立ち上がりマスターに向かいあい、こちらを見上げてくるマスターの頬を撫でながら話しかける。

「マスターに魔法を教えたことはありませんでしたよね？」

「うん、いつも教えてって言うて逃げてたなの！」

元氣よく言外に責めてきたので苦笑しながら

「じゃあ今日だけ教えてあげます」

と言ひつゝ

「本当なの!？」

ととても嬉しそうな顔をするマスター……………こんな顔で笑えるようになってたんですね。

ガラスが割れるような音が響く中

「よく見ていてくださいね」

そう言ってマスターから距離をとり構える。

本来この世界の彼女が使うべき必殺技を教えるために……………

頭上に手を掲げ辺りから魔力を収束し続ける、一定量に貯まると同時に技の名を叫びながら虚空に向かって手を突き出す。

『スターライトブレイカアアアーーっ!!』

パッリン

極大な魔力の柱が放出され虚空へと消え去り頭上にあつた雲を消し飛ばした。

パッリン

それを興奮した様子で見つめるのはちゃんに対して周りの皆さんはあまりの威力に啞然としている。

「どうやってたら出来るの!?!」

パッリン

掴みかからんばかりに尋ねてくるので、優しい微笑みながら丁寧に教えていく

「簡単ですよ、周りに分散している魔力をかき集め収束し放出するだけですから」

パッリン

「やってみるなの!」

そうやってなのはちゃんが僕の右手を掴んだ瞬間、右手が硝子のよ
うに割れた。

「えっ?」

掴んだものを確かめるように手を開くのはちゃんに僕は微笑み
ながら

「マスター。マスターが最初に僕に《渴望》したことを覚えていま
すか?」

屈んで視線を合わせて問う。

「そんなことより手が・・・っ!」

なのはちゃんはよく分からない出来事に焦っているが、それを無視
して再度尋ねる。

「マスター。貴女の最初の《渴望》は？」

「……覚えてないの」

僕の言葉で漸く落ち着きを取り戻したが俯き言葉少なに答えるのはちゃん。

「マスターの《渴望》は孤独からの解放。契約もまた然り」

そして不意に立ち上がり告げる。

「これにて契約は完了した。我が主、高町なのはに孤独からの解放に対する《渴望》は消えた。これにより契約は果たされた！」

その言葉と同時に僕はドンドンと塵のようになっていく

マスターは呆然と僕を見ているので言葉を続ける。

「僕は契約が完了すると消えてしまう存在なんですよ。」

昔マスターに友達が出来た時から契約が切れかけてまして、あの時既に結構ガタが来てたんですよ。

だから倒れちゃいましたし……で今日フェイトちゃんと友達になり、家族の愛を再び知ったことで完全に孤独とは思えなくなつたわけです」

微笑みつつ身体が消えていくのを実感する。

「ああマスター。貴女たちとの生活は楽しかった……そしてセイバー、リニス、プレシア、アリシアちゃん貴女たちと出会えてよかった」

笑ってそう言ったのにも関わらずなのはちゃんは泣くように叫んでくる。

アリシアちゃんは泣きながらプレシアさんに抱き着いている……
先に告げておいて正解でしたね。

「嫌なの！いけないで！いけないでよデイズさん！私はマスターなんでしょ！？ならマスターの言うこときいてよ！」

「残念ながらその《渴望》はきけません．．．．．マスター。《渴望》することをやめないでくださいね、《渴望》とは生きるための力です」

ニコニコと笑いながらまだ残っている手でなのはちゃんを撫でる。そしてこちらを睨むように見ているセイバーを見据え

「ああ大丈夫です。僕が消えても貴女は現界し続けることが出来ます．．．ああとおまけで自由にアルトリア・ペンドリーになれるように魔法をいじっておきましたよ」

「．．．．．」

笑いかけたのだが、無言で返された．．．まったく

「リンディさんはフェイトちゃんのことお願いしますね。プレシアはちゃんと身を隠しておいてくださいよ？アリシアちゃんは元気で

いてください。フェイトちゃんも健やかでいてください。アルフは少し勉強しましょうか？クロノとユーノは以下略で」

皆に別れを告げていく……あと少して完全に身体が消える。

最期はやっぱり……

「なあセイバー」

「………なんですか？」

セイバーの方を向き笑いかけるとセイバーは眉を寄せながら答えてくる。

そして………

「僕はお前の……アルトリアのこと………そんなに嫌いじゃなかったよ」

ニヤリと悪ガキが浮かべるような笑みを浮かべそう告げた………
・その言葉を最期に僕はこの世界から消えた。

《無印・終了》

25話：終わりに必要なのは客席からの喝采（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

エクストラのセイバーが可愛すぎるWWW

最終話になんら関係ありませんねWWW

いやあ途中駆け足になりましたね
作者が愚か者せいでクダクダにでしたが楽しんでいただければ幸いです

.....もしかしてA・S編読みたいの？

なわけないですよね

じゃあまた本編で

・
・
・
・
・
こっちの方が面白いと言っなよ
(泣)
!

××話…いと傳き貴方のいない世界(前書き)

雑
O
r
z

誤字脱字は報告お願いします

××話…いと傳き貴方のいない世界

『ねえセイバー、この世界は綺麗だと思いませんか？』

『……そんなことより、早く私を《聖杯》の元へと帰してください』

『はぁ……やれやれ。何故貴女はそんなに《聖杯》を望むのですか？』

『……やり直しを、滅びてしまった国を救う為に私の代わりになる人物を選定しなおしてもらおう。それが王として剣を執った、私の最期の責務です』

『……そうですか……どこぞの正義の味方の代理で言うのはちょっと不快ですが、しかたありませんね』

『……何をブツブツ言っているのですか？』

『なあくに、ただ……「貴女の願いは間違っている」

そう思っただけですよ』

『……貴方に何が分かる!?!』

『分かるわけないでしょうが僕は貴女じゃないんだから貴女の気持ちなんて微塵も分かりませんよアルトリア・ペンドラゴン。ただ・
・貴女は今のこの世界を見てどう思う?』

『話をすり変えないでください!』

『すり変えてなんかいませんよ。とても大事なことです』

『……………』

『素晴らしいとは思いませんか?この世界は貴女が作ったのですよ
?』

『なっ！？』

『貴女が礎となり世界は続いているんです。貴女がやり直す必要などなくそのままこの世界は平和なんですよ？』

『それはそうですが確かに未来は平和ですが……しかし私はっ！！』

『まあ悪の高説なお言葉を借りれば「世界は続いている。瀕死寸前であろうが断末魔にのたうちまわろうが、今もこうして生きている。それを　　希望みらいがないと、おまえは笑うのか」ですかね？ようは貴女がやり直す必要など皆無なんですよ、だいたいそんなに臣下たちが嫌いなんですか？』

『聞き捨てなりませんね……どういう意味ですか？』

『だって貴女はやり直して臣下たちを否定するのでしょうか？貴女のために死に、貴女のために生き、貴女のために戦った臣下たちを侮辱して、なかったことにするのでしょうか？』

『っ!?!?.....』

『今この世界が平和なのに.....やり直す意味と意義がどこにある?やり直したい?誰が望んだ?民か?臣下か?その願いはただの貴女のエゴだ.....ならば.....理想を抱いて溺死しろ』

.....

昔の夢を見た。

あまりいい夢ではありませんでしたが、デザイナーヴァーと町を歩いていた時に話した内容でした。

私の願いを話しデザイナーヴァーに微塵も躊躇いもなしに拒絶されましたが.....確かにデザイナーヴァーの言う通りこの世界は素晴らしかった。争いはなく、笑顔が溢れ、苦しんでいる人には手を差し延べられる人々がいる.....とても素晴らしい世界だった。そう、やり直す意味が感じられないほどに

寝ぼけた頭で目覚まし時計を確認する。

6時ですか……そろそろディザーヴァーを起こさなければなりませんね。

いつも私が起こすまで死んだように寝ていますからね……困ったものです。

嘆息しながら微笑み若干寝ぼけて寝不足気味の眼を擦りながらディザーヴァーの部屋にノックせずに入る。

いつもは自らの身支度をちゃんと終えてから起こしに行くのだが……何故か今日は一秒でも早く彼を見たかった。

「ディザーヴァー、朝です……よ……」

そして扉を開き、目の前にある綺麗な寝具を見てようやく目が覚めた……彼はいなくなっただ。

私の目の前で消えてしまったのだ。

「……………」

悔しかった。

何も出来ない自分が・・・

だから何も彼に言うことが出来なかった。

『僕はお前の・・・アルトリアのこと・・・そんなに嫌いじゃなかったよ』

ギリッ

あの笑顔が忘れられない。

いつも飄々としながらも皆を見守っていてくれたあの笑顔が
からかいながらも楽しげに笑うあの笑顔が

悪戯をする子供のようなあの笑顔が

楽しそうにする皆を見つめながら浮かべるあの笑顔が

消える前に浮かべた愛しげなものを見るような眼差しをしたあの笑
顔が

でもその笑顔も・・・もう見られない。

塵へと消えてしまった。

ギリッ

「クツ……………」

私はどうしてこんなにも・弱いんだっ!!

堪えなければならぬのは分かっている。

幼いのはさえ堪えているのに騎士であり、王である私が堪えないわけにはいかない…………でも…………それでも…………貴方がいないことがこんなにも苦しいなんて!!

「この世界で王でいる必要なんかないでしょう？何を気取ってるんですか？だいたい騎士だろうが王だろうが女の子は女の子でしょうが」

貴方の言った通り…………私は女の子だったようですね。

好いた人間がいなくてだけでこんなにも恋い焦がれ、失ったらこんなにも弱くなるなんて…………

苦しい

辛い

堪えられない

こんなにも貴方を《渴望》しているのに、どうして貴方は答えてはくれないのですか？

貴方は《渴望する者》なのでしょう、デザイナーヴァー？

私の《渴望》は何も呼ぶことは出来なかった。

既にデザイナーヴァーがいなくなつて2ヶ月も経っているのに、女々

しい限りですね。

自分自身に嘆息しながらも思う。

私はこんなにも彼のことが好きだったのだと……
いなくなつて初めて気づいた、半身をもがれたようだった。

暗い思考を振り切り、なのはを起こすためになのはの部屋へと向かいドアノブに手をかけ、扉を開こうとして止めた。

中から悲しみを押し潰したようなうめき声が聞こえたのである。耳を澄まし聞くと

「ぐっ……デイズさん……私……いい子でいるよ……ぐっ……だから……だから帰ってきてよ……」

なのはが泣いていた。

……やはり貴女も苦しかったのですね、なのは。
よく考えれば当たり前なのだ。

彼はなのにはにとって家族なのだから、家族を無くして悲しまない人間などいない。

貴方のマスターが泣いているのですよ？

どうして現れないのですか？

ドアから離れ自室へと向かう悲しみに埋もれそうになり、唇を噛み締め堪える。

確かに今の世界は素晴らしかった……でも貴方のいない世界を私は……いえ私たちは楽しいとは感じられません。

「どうしたらいいのですか、デザイナーヴァー？」

私の独白は青い空へと消えた。

F i n

××話：いと傳き貴方のいない世界（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

まじでA・S編読みたいんですか？

まあ幕話みたいな書いてて何言ってるんだとはお思いでしょうが
書かずにはいられなかった！

残されたセイバーの気持ちをどうしても書きたかったんです

まああまり上手く書けませんでした

お楽しみいただければ幸いです

……次回はどうしましょうかね？

「エラー」話・Fateノ…… アラウンドザワールど？（前書き）

暇つぶし……… だけど作るのに時間かかったorz

そして何より話を早く進めようとしてグダグダにorz

本末転倒すぎる

ああ頑張ってA・S編書いてみようかと思えます。

まあゼロ魔の更新がまた止まりますがorz

どうして中一ぐらいの時は漫画とかでパンチラしそうなシーンがあると本を持ち替えてページを下から舐め回すように見てしまうのかが分からないユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。

召喚されていないのでクラス名は失ってしまったのですよ。

あれですね。

下から覗く時の気持ちは週刊誌の袋とじにろくなものがないと分かりつつも見てしまう時のような気持ちですよね？

そんなくだらないことを思いながら何も無い真っ白な空間で横向きに寝て尻をかく・・・つまり、リリカルな世界から弾き出させて幾星相

あの世界が楽しすぎたせいかな今現在非常につまらないです・・・
・やれやれ未練がましいことこの上ない

自嘲しながら仰向けに寝て空・・・いや上を見る。
こんな真っ白なものを空というのはおこがましい。

というか《座》なんだから他の英霊はいないんですか？
そう思い辺りを見回した瞬間まばゆい光に包みこまれた・・・
ああ言葉を借りますね？

・・・なんですか？

まばゆい光が消え目の前にあったのは、迫りくる禍々しい紅き槍だ
った・・・畜生！

思わず叫びそうになったが、迫りくる槍を強化した拳で弾く

ちっ宝具かつ！？強化したのだが弾いた時に槍先に触れたことによ
り手が切れてしまった。

宝具であることが分かったので拳に更に魔力を送り込み強化する、

一応弾ける程度までには強化出来たと思われる。

槍を放ってきた人物は舌打ちをした後に下がっていった。

どうやら室内に呼び出されたらしく襲撃者は部屋の外で歓迎してくれるらしい……。そんなに殺気を向けないでください（泣

あまりの恐さに多少涙目になりながら後ろにいると思われるマスターを見て驚愕した。

赤茶色の髪青年・・・衛宮士郎がいた。

おいおいマジですか？まじてFateの世界ですか！？

という事は僕のバトルの相手はランサーですか！？くっ無理ですよ！？

ものそっぴ投げやりになりながらも

一応宣言する。

「サーヴァント・・・ああ？セイヴァー？嫌味か？すみませんやり直して」

「えっ？・・・ああ」

「サーヴァント、セイヴァー召喚に応じて参上しました。問おう・・・貴方が私のマスターか？」

「えっ？あついや・・・」「すみませんマスターちよいと外のお犬様がキャンキャン煩いので追い払ってきます」えっ？ちよつと待て！」

なんかハッキリしないマスターを置き去りにして土蔵から飛び出し槍を構えて待っていたランサーに向き合う。

「やれやれ冗談のつまりだったんだがまさかあの小僧が七人目とはな」

紅い槍を持ちながら、肩を上下させ手を広げるランサー。

「いや僕も呼び出されるとは思ってたんですけど・・・これはバトオーの流れですかね？」

頭を掻きながら尋ねてみたのだが

「そりゃあそうだろ。サーヴァントが出会って戦わない道理がねえじゃねえか」

駄目でしたorz

「君のおじいちゃんを身に宿す僕としては貴方とは戦いたくないですがね」

ランサーは僕の言葉に首を傾げ何を言ってるんだという顔をする。

「何言ってるんだてめえ?」

「バロールは君のおじいちゃんでしょう? ケーフリーン?」

「なっ!?!? てめえ!?!」

真名を呼ばれたことに驚き殺気をぶつけてくる。

「おっ時間稼ぎは出来ましたね、ほらランサー後ろからサーヴァントが来ますよ？」

ニヤニヤと悪戯の成功したような笑みを浮かべる。

「ちっ……てめえ覚えてろよ」

サーヴァントが来たことを感知しランサーは捨て台詞をして去っていく……フッフッフ計画通り（ー）

アチャ男さんが来るの知ってましたし、口先だけでランサーを追い払ったぜ！

上手く言ったことに安堵しながらも衛宮邸の塀を飛び越え、外にいたアチャ男さんの前に立つ。

「なっ!?!」

アチャ男さんはセイバーではなく僕が出てきたことに驚いていた・・・後ろのあかいあくまは構えているけど

「どうも初めまして・・・セイヴァーです」

「クツ・・・本当に貴様はセイバーか？」

アチャ男さんは鷹の目を鋭くし、両手に白と黒の夫婦剣を出し殺気をたたき付けてくる。

「発音は正しくセイバーではなくセイヴァーです。バーではなくヴァーですよ。それとあんな腹ぺこ王と一緒にしないでください」

ニヤニヤと笑いかける。

「なっ!?!? 貴様何者だっ!?!」

腹ぺこ王を知っていることに驚くアチャ男さん・・・そんなに見つめないでください。怖くて泣きたくなります。

「セイバーと言つわりには剣を持ってないのね？」

僕の怪しげな様子を見ながら警戒し質問してくるあかいあくま。

「だからセイバーではなくセイヴァーです」

「ちよつとした発音の違いじゃない」

「いえ意味が違つんですが……まあ敵に「ちよつと待て！」
あああれがウチのヘツポコマスターです」

後ろから飛び出してきた正義の味方を指差す。

「えっ遠坂!？」

「……………はあ」

マスターはあかいあくまを見て驚きの声をあげている……まあいいか

多少面倒になったので、アチャ男さんを見つめながらマスターとあかいあくまの会話を聞き流す。

ニヤニヤとアチャ男さんを見ていると心底不快そうな顔をされたので笑みを深くする。

どうやらふざけている間にマスターとあかいあくまの間で話がついたらしく、家にあがることになった。

家上がりマスターが呑気にお茶を出し、あかいあくまが聖杯戦争についての説明をしているのでテレビをつけ近くにあった煎餅をかじる。

ああこのドラマ僕の世界でもやってましたね

暢気なことを考えていると湯呑みを投げら後頭部に直撃した。

「痛てええええええええーっ!!」

あまりの痛み悶え狂う。

どうやら湯呑みを投げたのはあかいあくまらしく

僕の悶える様を見て笑顔を浮かべている……ちくせう（泣）

ダメージを受けた後頭部を押さえながらもマスターたちの方に向き直る。

「なんですか？今綾子と純也のラブシーンだったんですが？」

「……何この俗物な英霊」

あかいあくまに馬鹿にされた。

「やれやれ英霊とて人間なのだよ？俗事に興味が惹かれるものさ、そんなことも分からないのかね？」

「くっ」

アチャ男さんの口調を借りて厭味を言ってみたのだが、案の定嫌そ

うな顔をしている。

「どう君のサーヴァントに似てましたか？」

厭らしげな笑みを浮かべてあかいあくまに尋ねる。

「ええウチのサーヴァントに嫌というほど似ているわね!!」

怒鳴りながら指を指してくるので、指先からガンドを喰らわないように指先を避けながら笑う。

あかいあくまをからかい終え、テレビに向き直りテレビを見ていると何やら聖杯戦争の参加者として教会に登録をしに行くとのこと・・・やれやれ麻婆に会いに行くのかと内心嫌気がさす中渋々マスターの後についていく

歩いているとあかいあくまが不意にこちらを向き

「あら貴方霊体にならないの？」

と言ってきた。

いやまあ貴女の疑問は当たり前なんですが・・・

「残念ながらマスターとのパスがちゃんと通っていないので、霊体化する魔力が取り込めないんですよ」

まあ大いに嘘だが、魔力なんか空気中からいくらでも取れます。ただちよつと実体が必要な理由があります・・・

「・・・・・・・・ヘッポコですからね」

「ええ残念ながら」

あかいあくまと心が通じ合った。

うちのマスターはうなだれていたが・・・

で教会に付き麻婆神父とマスターたちがお話しをしている間、アチヤ男さんと外で待機しているんですが・・・アチヤ男さんが無視します。

「アチャ男さんや、アチャ男さんの好きなアダルト女優は誰ですか？」

「・・・・・・・・。。。」

「アチャ男さんや、アチャ男さんは童貞で死にましたか？」

「・・・・・・・・。。。」

「アチャ男さんや、アチャ男さんはおっぱいは巨乳が最高だと思いませんか？」

「・・・・・・・・。。貧乳をナメるな」

やっと会話に応じてくれたけど、まさか乳ネタとは・・・・・・・・さすが性技の味方・・・・・・・・間違えた正義の味方でしたね。

まあ・・・・・・・・

「貴様貧乳だと？巨乳こそ至高にして究極なのだ！貧乳など認める

わけにはいかん！」

「くっ貴様は貧乳を分かっていないな貧乳というのは「何やってんのよ！その馬鹿サーヴァント2人！」くっ待て凜！今この愚か者に貧乳の素晴らしさを・・・「黙れっ！」くっ待てガンドはまずい！！ガンドは！」

ふっ貧乳恐るるに足らず！

「もちろんマスターは巨乳派ですよね？」

どうせならマスターをこちらに引きずり込もうとしたのだが・・・

「いやおっぱいはおっぱいでなんでもいいだろ？」

チツ・・・このおっぱいブルジョアがっ！！

確かに貴様はちっぱいもおっぱいも全てを手に入れられる可能性があるが・・・クツ許せん！許せんぞコイツ！！

「アーチャー！この野郎をぶち殺しましょう！こんなおっぱいブルジョアはこの世にはならない！！」

「くっ色々と同意したい所はあるが・・・今は・・・無理だ」

「何故・・・すみません・・・・・・・・。」

猛る思いをぶつけアーチャーに同意を得ようとしたら、拒否されたのでそちらを見るとあかいあくまにマウントポジションでガンドを連打されているアーチャーがいた・・・・・・・・ナニモミエナイキコエナイ

辛い現実から目を背けていると目の前に漆黒の大男を引き連れた銀髪紅眼の少女が現れた・・・・・・・・ジーざす。

「ねえもついいかしら?」

「なっ君は!?!」

「お兄ちゃんもサーヴァントの召喚に成功したみたいだね。まあ変わったサーヴァントみたいだけど」

少女は微笑みながらマスターに話しかけ自己紹介をした。

「私の名はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「アインツベルン!!」

あかいあくまはイリヤちゃんの名前に反応してマスターに説明するが、正直それどこじゃないバーサーカーから吹き出る魔力がヤヴァいのだ。

一瞬足りとも目が離せませんね

マスターたちが会話する中油断なく右手に魔力を込め続ける。せめてバーサーカーを一回殺すぐらいの魔力を練らなければ……

そんな中イリヤちゃんが僕に話しかけてきた。

「ねえお兄ちゃんのサーヴァント」

「なんですか？ちなみにセイヴァーと呼んでくださいね」

「うん！セイバーはどんな英霊なの？貴方みたいなサーヴァントは想像つかないわ」

まあ確かに目を包帯で覆ってますし服装は拘束衣ですからね

ただの精神異常者の犯罪者にしか見えませんかね、多少落ち込みながらもイリヤちゃんの質問に笑顔で答える。

「僕はセイバーではなくセイヴァーです。発音は正しく！で僕は異世界の英雄ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスです。ですからこの世界の住民は僕を知ることには出来ませんよ」

「「「はっ？」「「「

僕の答えに疑問の声をあげるマスターたち

「ちよつちよつと待って！異世界って！？本当なの！？」

あかいあくまが焦ったような声を出し尋ねてきたので真面目な顔をしながら質問に応答した。

「まじまじまーじです。まあ成し遂げた伝説は神殺しとだけ教えておきます」

「「「なっ!?!」」」

また驚きの声をあげるマスターたち……まあ僕の実在はびつくりの玉手箱みたいなもんですからね。

「ですから神性の高いヘラクレスのような相手は相性が悪いですよ?」

「ヘラクレスですって!?!」

あかいあくまがバーサーカーの真名を知り驚く中イリヤちゃんは目を細めこちらを見てくる。

「ふくんバーサーカーの真名が分かるんだ」

「ええもちろんです、《聖杯》の担い手」

僕の言葉に反応し目を細め殺気を高めるイリヤちゃん……
女の子がそっという顔をしちゃ駄目ですよ

「……………貴方、何を知っているのかしら？」

「知っていることだけですよ、どうです？これから貴方のお父様の家でお茶でも飲みませんか？……………家族と一緒に」

「っ！！……………どうして知ってるの！？」

僕とイリヤちゃんの会話を回りはわけもわからないで聞いている。

「秘密です」

ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべて答える。

「くっ……………今日のところは帰るわ！セイヴァー……………言ったら殺すわよ？」

「OK姫君……………我が名に誓って」

イリヤちゃんがバーサーカーに乗って僕たちに踵を返すのを呆然と

見守るマスターたち……ちよつかい出しすぎましたかね？

まあいいや……好きにやりましょう。

まだ一番救いたい人物に会ってないことですし……

ほんのすこしだけ殺意をたぎらせる中

「ちよつと！あんた何を知ってるのよ!？」

あかいあくまが突っ掛かってきた。
それに対してわざとため息をつき

「等価交換でしょう、魔術師？」

「くっ」

あかいあくまが悔しげに顔を歪ませたので、条件を出す。

「僕たちと同盟を組むというのであれば……好きなことを

「一つだけお教えしますよ？」

試すような笑みを浮かべて言い放つ。

あかいあくまは少し悩んだそぶりを見せた後了承した。

「………いいわ。その条件飲むわ、確かにあのバーサーカー相手に一人で立ち向かうのは無謀ですからね」

交渉を終えマスターに向き直るとマスターはいまだに呆然としている………これが本当にあんな紅いになるんですかね？

若干の疑問を覚えながらもマスターの正気を取り戻させ、衛宮邸へと向かう。

あかいあくまがゆっくりと聞きたいことがあるらしい………狙われてましたね。

引き攣った笑みを浮かべながらある人を助けなければいけないのを
思い出しマスターを呼び止める。

「すみませんマスター落とし物をしたので、先に家で待っていてく
れませんか？」

「ああ別に大丈夫だけど……………」

「すぐに戻ってきますのでご心配なく」

会話をしている途中あかいあくまが呆れたような顔をしていたが、
僕から情報を手に入れる前にマスターを殺せないと分かっているの
で無視した。

マスターたちと分かれ、人気のない路地裏を探し回る……………
早く見つけないと……………

そしてようやくよく見つけた。
バゼットさんを……………

片腕を失い血まみれで気を失っているので、とりあえず止血し《治

癒 魔法をかける。

『彼の者に癒しを』

バゼットさんの落ち着いた寝息を聞き安堵してからバゼットさんをプリンセスホールド（お姫様だっこ）で衛宮邸へと運ぶ。

しばらく走ると無事帰宅

「ただいまマスター！」

お姫様だっこをして腕が空いていないので足を使い器用に扉を開け、マスターに報告をした。

「ああお帰りセイ・・・ヴァー・・・」

マスターはあかいかくまとのんびりお茶を飲んでいたので、バゼットさんをプリンセスホールドしながらマスターに詰め寄り

「マスター今すぐ部屋を貸してください！彼女をどうにかしなきゃいけないんで！」

するとマスターはあかいあくまとアイコンタクトをとり

「すみませんウチに不審者が・・・」

110番に連絡し始めた。

「いや！ちよつよく見てください！ほらこの人怪我してるでしょ！
？それに貧乳に興味はありませんよ！貧乳に興味はありませんよ！
！」

大事なことなので二回言ったらあかいあくまがコメカミをヒクヒク
させていた。

引き攣ったような笑みを浮かべあかいあくまはバゼットさんを指差
し尋ねてくる。

「まあ今のは後で潰すとして・・・その人は誰かしら？」

「ダメッ・・・バゼット・フラガ・マクレミッツさんです。」

言い間違えそうになったのを訂正して伝えるとあかいあくまは目を見開き驚いて怒鳴ってくる。

「協会に所属する、封印指定執行者じゃない！なんでそんなの捨てくんのよ！」

「死にかけの女の子が目の前にいたら助けないわけにはいかないでしょう？」

言外に野郎だったら助けないことを伝えながらも怒り狂うあかいあくまを無視してマスターに空いている部屋へと案内させ、バゼットさんを横に寝かせる。

「大丈夫なのか？」

血まみれで腕を失っているバゼットさんを見てマスターが容態を尋ねてきたので、安静にしていれば大丈夫だと伝え居間へと戻った。

居間でまったりしていると段々とあかいあくまのコメカミの青筋が増えていく……ストレスか

「どうしたんですか、凜？ストレスですか？皺が増えますよ？」

「お前のせいだっ！」

僕の言葉に怒り狂い再び湯呑みを投擲してきたのでかわすと後ろにいたマスターに直撃した。

「ぐあ！？熱痛い！」

熱さと痛みで悶えているマスターを無視しながらあかいかいあくまと向き合いからかうことにした。

「なんてことを！同盟を組んでいるのにマスターに攻撃するなんて
！」

「あんたが避けるからでしょうがーっ！ー！」

「《聖杯》は七人の英霊たちの魔力を取り込んでようやく完成するんです。つまり聖杯戦争が終わらない限り《聖杯》が生まれることはありません」

「・・・本当かしら？」

あかいあくまは疑いの眼差しで僕を見てくる。

「まあ証明のしようが・・・ああ明日まで待ってくれればどうにかなるかもしれませんよ？」

「・・・いいわ。明日まで待ちましょう」

とりあえず証拠を提出するために提案すると少し悩んだすえに了承した。

他のことも尋ねてくると思ったのだが、どうやら今の情報だけで満足したらしい。

そしてとりあえず今日は寝ることになったのだが、あかいあくまのお泊り宣言にマスターがパニックになったりバゼットさんの部屋で寝ようとしたらボディーランゲージで止められたり・・・色

々と騒がしい夜だった。

そして翌日寝ぼけ眼を擦りながら与えられた部屋から居間へと向かうと……

「キヤッ」

女の子とぶつかった、僕にぶつかった女の子は倒れてしまったのであまり見えてない目で手を差し出した。

「大丈夫ですか？」

「えっ？ あっはい」

手を取ったところで目が覚め目の前の人物が誰か気づいた。

青みがかった黒髪の女の子……間桐桜だった。

とりあえずこちらを隠れて見てくる不躰な視線を理解した上で手を

取ったまま肩膝をつき

「乳を揉ませて」「このバカがつ!」「ぐっは!?!」

おっぱいを触らせてくれるよう頼もうとしたらたまたま側を通りがかり様子を伺っていたあかいあくまにドロップキックを喰らった。

そのまま桜ちゃんに近寄り桜ちゃんの衣服が乱れてないかを確認かめていた……………最初から見てたくせによくやりますね。

「大丈夫、桜!? 駄目よ! あいつに近寄ったら妊娠させられるわよ!?!」

「えっ? あっ?」

「……………僕はどんな生命体なんですか?」

立ち上がりながら蹴られた場所を抑えて人を人外扱いするあかいあくまに文句を言うと

「はっ、変態め!」

鼻で笑われて馬鹿にされた。

「やれやれ・・・まあ姉妹で仲良くしててください」

「「なっ!?!」」

知られているはずのない血縁関係を指摘させ驚愕する二人

「どうして知ってるのよ!?!」

あかいかくまは噛み付かんばかりのいきおいで問い詰めてくるので

「僕の特特殊能力です!」

嘘八百を並べてみた。すると

「本当かしら?どうも信用出来ないわね」

疑惑の眼差しを向けてきたので・・・

「身長159cm体重47kgスリーサイズB77・W57・H80と身長156cm体重46kgスリーサイズ：B85・W56・H87」

「「なっ!?!」」

身体データを暴露してみた。ちなみにこれは元来装備されていたスリーサイズ測定パワーによるものである。

「私のスリーサイズじゃない!?!」

「あっ・・・体重まで・・・」

目に見えて驚愕するあかいあくまと体重を言われ落ち込む桜ちゃん

「信用してくれなかったんで・・・ちょっとした個人情報・・・」

「・・・85」

既に僕の話は聞いておらずあかいあくまは桜ちゃんの胸部を親の仇のように見つめている。

桜ちゃんはそれにビビり胸を両腕で抱き寄せるが………それでは更に胸部が強調されるだけである。

楽しいな姉妹のやり取りを見つめ巻き込まれたくない一心で逃げる………台所にいたマスターに食事はいらないと告げるとウダウダと言われたので、今ご飯の匂いを嗅ぐと………うっ

と妊婦の振りをして待避すると

「じーーーーーろーーーーーうーーーー朝あさーーーー
はーーーーーん……！」

と言う声が聞こえた。虎が襲来したせいでマスターが僕を構う暇がなくなっただけだと思えば、与えられた自室に籠る。

そして何十分か経ち今度は玄関の戸が閉められる音を聞き、居間へと向かう。

そこには打ちのめされたあかいあくまと二人仲良く洗い物をして
いるマスターと桜ちゃんがいた。
どうやらあかいあくまはマスターの美味なる料理に劣等感を覚えた
ようである。

そんなあかいのを無視してマスターと桜ちゃんが楽しげに会話をし
ながら洗い物をしているのを微笑みながら見つめ……歯ぎ
しりをする。

あんな笑い方をする女の子が近くにいるなんて赦せませんね。

この人たちは近くにすぎであの笑顔の裏に何があるか気づけない
んでしょう……己が身から噴出する怒気を抑えながら微笑
み、マスターと桜ちゃんの元へと向かう。

「やあやあマスター朝から素敵な青春していますね？」

僕はニタニタと厭らしい笑みを浮かべながらマスターをからかうと
マスターはこちらを見て

「なんだよセイヴァー？」

と普通に対応された。

そして僕の名前を聞いた桜ちゃんはビクツと身体を震わせ確かめる

ように僕の名前を呟く

「・・・セイバー？」

「いえセイバーではなくセイヴァーです。発音は正しく！」

同じ注意をしながら微笑むとマスターが不思議そうな顔をして

「セイバーとセイヴァー何が違うんだ？」

とかおほざきになるので

「セイバーでは剣兵、セイヴァーは救済者です・・・僕は聖杯戦争におけるイレギュラークラスというわけですよ」

暴露してみるとマスターはよくわからないと言った顔をした後に桜ちゃんの前で余計なことを言うなよ的な顔をして僕を見るが、桜ちゃんは完全に怯えて後退りを始め、あかいあくまは驚愕の声をあげこちらを睨みつけてくる。

やれやれこんなリアクションをされるとは・・・ちょっとシヨックですorz

美少女から怯えられたことによりライフポイントに8000ダメージをうけワンターンキルされる僕

落ち込みながらもチャンスを見計らう、まだですね………
「zポーズでいると

洗い物をしているマスターがそんな僕を無視して桜ちゃんには分かりにくいようにぼかして更に質問してくる

「そっいえばセイヴァーは何を望んでいるんだ？」

僕はそれに満面の笑みを浮かべ答える。

「望むものはありませんが叶えたいものはあります」

「へえなんだ？」

「バカバカしくて笑っちゃうぐらいのハッピーエンドを！マスターも凜もアーチャーも桜ちゃんも！今回いる奴らを全員《救済者》（セイヴァー）の名前にかけて救ってやります」

そう叫ぶようにいった僕に全員が驚きこちらを見る中さらに笑みを深くして

「まずはアナタたちからです」

そして唐突に叫ぶ

「きょうつけ！」

するとマスターと桜ちゃんが反射的にきょうつけしたのを見計らい・

・

『ロンギヌス（死を刻印する聖なる槍）っ！！』

虚空から取り出した相棒に魔力を込め一瞬で真の姿にして真名解放をして桜ちゃんの心臓に突き刺した。

「えっ？」

桜ちゃんは貫かれたことに驚き呆然と槍と僕を交互に見つめている。

「動くな」

首に黒い刃を当てられた……アチャ男さんですか
そして目の前には宝石を構えたあかいあくまが仁王立ちしている。

「……………どういつつもりかしら？」

あかいあくまは静かな激怒を込めた目で睨みつけてくるので、その
目を見つめ返しながら答える。

「ただ敵のマスターを刺しただけですが？」

「「なっ?」「」

驚愕しすぎじゃないですかね？

「桜ちゃんはライダーのマスターですよ」

更に情報を明かしたのだがどうやら信用しきれないらしく場の雰囲気
気はドンドンと冷えたものになっていく

「・・・・・・・・・・はあ」

ため息をつきマスターを見つめる。

本当はこんなの僕の役目じゃないんですがね・・・・・・・・・・

「どうですかマスター？死を理解しましたか？これが聖杯戦争です。貴方が全てを救ってみせると思った矢先にこれです・・・・・・・・・・正義の味方なんて止めてしまえ」

その言葉にアーチャーが動揺し、首に突き付けられた剣がぶれる。

「お前が・・・・・・・・お前が桜を殺したんじゃないか！！」

マスターは桜ちゃんを抱きしめながら吠える。

「この程度で囁るなよ、衛宮士郎・・・・・・・・あんたが選んだ道に待っているのはこの程度の絶望じゃないぞ」

殺気を込めてマスターを睨みつけるとマスターは畏縮もせず睨み返してくる。

……そろそろ怖いんでネタバレしますか。

「だいたい誰も桜ちゃんを殺したとは言ってませんよ」

「ふざけるな！こんな槍で突かれたら……誰だって「駄目だ！それを解析したら！」……なっ！？ぐっ！？」

僕の言葉に反発し激怒しながら桜ちゃんに突き刺さった槍を抜こうとしたので、止めたが既に遅くマスターは槍を解析してしまい気絶した。

そしてその手には変色し骨子の崩れたロンギヌスが握られていた……
・やりやがった。

ロンギヌスを贗作しかけましたよ、この人！

でもヤバいな結構まずいぞ

荒い息をしているマスターを見て危機感を覚えているとマスターは槍を片手に心底辛そうな顔をして膝立ちをしている。

「その槍の名前は『ロンギヌス』《殺す》ものを選べる聖槍です・・・
・・・僕が殺したのは桜ちゃんじゃありません」

そう説明しながら桜ちゃんに近づき槍を引き抜くとその先端には気
持ち悪い蟲が付いていた。

「刻印蟲ですって!?!」

あかいあくまはそれが何か気づき叫び・・・気づく妹が何を
されていたかに

そして蟲と同化していた物体を引きずりだし皆に見えるよう前に出す

「これが《聖杯》のかけらです」

《続かない》

お楽しみいただけましたか？

まあ無理でしょうorz

ちなみにA・s編のスタートは熱心な読者の言う通り
はやてちゃんサイドから始まりになります。

よくあんな伏線覚えてましたねWWW

ではお楽しみに

次回は嘘予告をあげます

話・とある夏休みの挽歌（前書き）

なんというかうん不意に思い付いたWWW

書くしかない！

誤字脱字は報告お願いします

話…とある夏休みの挽歌

「ほおくらカンナ」

「キヤッ！？あつやつたわね？タロー！お返しよ！」

「うわぁ！？やったなあこっちもだよ！」

「キヤッ！もう！」

「アハハハ」

「ウフフフ」

ブチッ

『ロン（神殺しを為した）』『待ちなさい！』

「止めるな！！ここに存在する全てのバカップルを滅殺するまで！」

「・・・・・・・・・・はあまつたく何をやっているんですか」

「行きたくなかったのにお前らが僕を拉致したんだろっがっ！！」

ある日紫外線が人体を貫きかねない暑さの夏休みだからと言ってウダウダ過ごしていたら携帯にバーニングから電話がかかってきてので急いでユウキ・アンペラトリスに変身し電話に出ると

『今からプール行くから』「拒否する」

プーッツウーッウー

アホなことを言われたので出てすぐに電話をきり、あのまま部屋にいたらチェイバーに捕まることが見えていたので高町家を飛び出して公園にいと黒づくめの集団に誘拐及び拉致され

アトラクションのあるプールへと連れていかれたユウキ・エンドリ

オール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスことディザーヴァー
ことユウキ・アンペラトリスです。
ちなみに海パンはなぜか用意されていた。

正直小学生の水着姿を見てもなんら楽しくない。前世の友達である
「第二次性徴が憎い」と言い放った渡邊君とは違うのだ。

チエイバーは白のセパレートタイプの水着を着て惜し気もなく、その貧弱な乳を不様にも晒して「カツ」……。眉目麗しい真っ白な肌を見せている。言い換えたのは決して股間の近くにエクスカリバーが突き刺さったからではない……。本当に嫌な直感スキルだ。

「もう帰らないか？」

「まだ来てから10分も経ってませんよ」

にべもなく切り捨てられた。

ちなみに他のメンバーであるのは、すずか、アリサ、すずか姉、
メイド×2はいまだにこの場に姿を現してはいない……。あ
あそつえば変態ペドフェリアも来てたな。

なんかぶつぶつと「なのはの水着なのは水着・・・と忍の水着」とか言っているのでもあまり近づかないようにしている。拉致された車の中の話ではすずか姉・・・忍さんとシスコンはお付き合ひしているらしい。まあ正直リア充モゲロとしかコメントしようがないが・・・

ああ隣をFなお姉さんとかが通るのに、声をかけられないなんて・・・いや待てよ。子供であることを利用して・・・

悪巧みをしていると女子メンバーが着替え終えたらしくこちらに来たのだが・・・描写は割愛する。

作者と僕は今時のファッションとかにはうとすぎて何がなんだか分からないのだ・・・まあ外出時にビーサン履くような男だからな。

多少作者を馬鹿にしながらも敢えて女子メンバーを褒めずに・・・

「あそこのお姉さんの水着は素晴らしいな」と言ったらバーニングにプールに蹴り飛ばされた。

皆が遊びに誘ってくるのを断りウォータースライダーの出口のプール前に座る。

ずっと出口を凝視しているとチェイバーが近寄ってきて

「何をしているのですか？」

と尋ねてきたので、つい夢中になりすぎたせいで正直に答えてしまった。

「スライダーで水着が食い込む様子を見ている」「死になさい」

聖剣を使うのに躊躇いはなかったようだ。

ダメージを負いプールサイドを引きずられながら移動する僕……
……どうやらこれから昼食を取るらしい。

プールサイドで昼食を取るのは微妙な気分になるんだよねあと思いつつも足を掴まれ引きずられているので抵抗する余地やら拒否する余地は皆無であり、大人しく腹ぺこ王（小）に従うしかなかった。

プールサイドにある水着でも入れる飲食店の中へと連れられ、皆と合流する。皆に何をしていたのかを尋ねられ、「ウォータースライ

ダーで楽しんでいた」と言ったら

「ウォーターライダーをじゃないの？」と更に尋ねられたので詳細を云おうとしたらチェイバーに箸で目を貫かれた。

痛みに悶えた後、とりあえず食べるものを決めたのだが……それが作者からの嫌がらせとは気づかなかった。

「こちらを頼んだ方は……」

「僕です」

ようやく料理が届き暑い日には熱いものが食べたくなるんだよなと思っ一口食べようとした瞬間

「待ちたまえ少年」

誰かに腕を掴み止められた。掴まれた腕の先を見て驚愕するしかなかった僕は決して間違っってなんかいない……

「この麻婆豆腐は駄目だ。麻婆豆腐というものをなんら理解していない」

黒いビキニタイプの海パンを履いた一目見ただけでこいつが黒幕だなあと思う怪しさを秘めた麻婆神父もと言峰にそっくりなオッサンだったのだから

「少年、君は運がいい……今から本当の麻婆豆腐というものを食させてやろう」「結構です」

即断でお断りしたのだが

「待つんだ、少年！」

再び手を掴まれ止められる。離せ！クソ神父！あんなラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげくオレ外道マーボー今後トモヨロシクみたいな料理が食えるか！

必死に抵抗するのだがいつの間にか空いていた手に持っていた紅！

赤！朱！と大変自己主張の激しい麻婆豆腐を押し付けてくる言峰（偽）。

そしてそれが目に映らないのかこちらを断固としてみないチエイバ―たち……これがご都合主義か！？

そんな世の中に絶望した瞬間口に麻婆豆腐を突っ込まれた。

そして味とか風味とかよりも何より激痛が走った。ナイフで舌を突き刺されているんじゃないかと言わんばかりの激痛が口内を駆け回る。

痛みで悶える中言峰（偽）は顔色を変えずに普通に食していた……
……違う世界でいつか必ず嫌がらせをしてやるからな。

いつ叶うか分からない願いをしながらも言峰（偽）を睨んでいると……
……銀髪の女の子が言峰（偽）に近寄り

「……フィッシュ」

と言って手にもっていた赤い布でグルグル巻きにして連れていく、連れ去る途中舌なめずりをしてこちらに微笑みかけてきたが、怖かったので目を背けた。

言峰（偽）は赤い布で口を封じられたせいでムウームウー言いなが

らも引きずられて途中敢えて通ったと思われる子供用プールで溺死しかけている。

あの親子らしき人物たちには二度と関わりたくないと思う今日この頃

ようやく皆も正気に戻りこちらに話し掛けてきたので、何故かまだ机の上に置いてあった言峰（偽）特製麻婆豆腐を押し付けその場から去った。

その後食べ物に関しては意地汚い某腹ぺこ王（小）が唇を真っ赤にさせながら刃物を振り回し僕を追い掛けてきたのは余談である。

そして食事終えた後は普通に皆と遊びなんらイベントという名前の僕の不幸は起きずにその日を終えた。

次の日から何故かリニスの僕専用お仕置き食事メニューに言峰麻婆というものが追加されたの更なる余談である。

話：とある夏休みの挽歌（後書き）

お楽しみいただけましたか？

言峰さんの救い方を色々と考えていたら不意にネタが浮かんだので書いてみたwww

まあでも全然続きが浮かばんorz

話・君の家までおっ持ち帰りたいいいたいいいたいいいたいいいーっ！

ペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタ

ペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタ

「。。。」

ペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタ

ペタペタペタペタペタペタペタペタペタペタ

「。。。」

ペタペタペタペタペタペタペタ

ペタペタペタペタペタペタペタペタ

「。。。」

ペタペタ

ペタペタペタ

「……………なあ遠坂桜「桜ですよ」……………遠坂「桜です」……………とおさ」さ・く・ら」……………桜。これはなんだ？オヤシロサマごっこか？それとも新手のスニーキングか？」

「一緒に帰っているだけじゃないですか」

「一緒に帰るって言うのは同意の元で発生するイベントであって、ましてや片一方が無言で嫌がらせのように背後に取り憑くことを言うんじゃない筈なんだが……………」

「三步下がった位置にいろということですか？」

「いやそれは夫婦「もうユウキくんったら夫婦だなんて！」……………」

・言っただけ違いますから、変な方向にポジティブなの止めてください。まあネガティブよりはましですけどさ……………」

思わず途中に敬語が入る程テンションの高い桜を止めようがない、最近帰りがけに毎日のようにオヤシロサマごっこ兼某蛇の人ごっこもといストーリーキングされているユウキ・エンドリオール・ル・デフアンス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーことユウキ・アンペラトリスです。

説明長いなあ〜

と作者の愚かさを馬鹿にしながらも真後ろにスタンドよろしく立っている桜を半眼で見つめる。

・そして気づいた…………この桜がF a t e世界の間桐桜と同じなら…………

桜の目を真っすぐに見つめて両肩を掴み

「桜」

「ユツユウキくん!？」

なぜか顔を真っ赤にしている桜を不思議に思いながらも無視して

「将来のためにマッサージや大胸筋トレーニング、下着による矯正、大豆イソフラボンやコラーゲン、ビタミンA等の栄養素を摂取してくれ。」

特に第二次成徴期にこれらを行うと効果的だから時期ははまだ突き進め。

後ノーブラだった場合、激しい乳揺れによりクーパー靱帯という乳房を支える靱帯が切れて垂れ乳になってしまうことがあるから、激しい運動の際は気を付けてくれ。そういう時はスポブラがおすすめだ」

今思い付く限りの巨乳になる方法を教えた。桜は途中何を言っているか分からないという顔をしていたが途中で気づきメモし始め必死に記録していた。

言い終え額の汗を拭うジェスチャーをして桜に向けてグッとサムズアップすると

「何してんのよアンタは!」

遠坂凜に襲撃もといドロップキックをくらい吹き飛ばされ、たまたま横にあつた茂みへと吹き飛ばされた。

ちなみに吹き飛ばされる際に少し遠くになのは、アリサ、すずか、チエイバーがいたのは確認済みである……どうやら奴らも人をストーキングしていたようであつた。更に蛇足だが何人か手にメモを持っていたことを追記しておこう……何人かとはチエイバー以外全員であることも。

チエイバーは既に成長する余地はないのでorzポーズになつて「昔私もそれをしていれば」とかほざいていたが、『理想郷』^{アウアロン}で成長止まっているチエイバーがどうやって乳を成長させるのが多少気になつたが、その頃には既に藪というか茂みの中だつた。

「……………」

無言で茂みから這い出た後に服に付いていた葉っぱを取り去り、歩いていると後ろから6つの足音が聞こえる……5つ増えてやがる。

苛立ちを隠し切れず後ろに向き直りストーキング中の奴らを睨み

「どっしてついて来るんだ？」

と詰問する

「アンタの家に行くことにしたのよ」
と言う、とても不明瞭な解答が帰ってきた。

「いや意味がわからんから」

「だってユウキくんいつも私のことを途中でまくから家の場所知らないし……」

「一緒に帰ろうとしてもすぐ帰るからなの！」

「うん、たまには一緒に帰りたいし」

「アンタと桜を二人きりにさせるわけにはいかないわ！」

という少女たち付き合ってられないので念話でチエイバーに話し掛ける。

『おいチエイバー』

『……………』

『チエイバー？』

『……………私はチエイバーなんて名前じゃありません』

『日本では親しい人にはあだ名をつけるんだよ。僕はセイバーに親しみを込めてチエイバーと読んでいるのに……………』

呼吸をするように嘘をつきチエイバーをだまくらかす……………
ちよろいぜ！

『っ!?!……………本当ですか？』

『ああディザヴァーウソツカナイ！・・・タコ焼き10船用意するから適当にごまかしておいてくれ』

『・・・・・・・・・・20で』

『・・・・・・・・15だな』

『わかりました引き受けましょう』

・・・・・・・・・・簡単に餌付けされるウチの腹ぺこ王（小）が多少心配になったが、まあチエイバーに勝てる奴はいないと思えばそんな危惧は取っ払い

足に力を込める。

いつでも振り切れるぜ！！

どこのそのアクセルでトリアルな人と同じ速度が出せそうな気分だった。

そしてチエイバーが・・・

「あっあんなところに巨大なおにぎりがつっ!!」

思わず背負っていたランドセルを地面に叩きつけた。

「そんなんでそっちを見るのはお前だけだからっ!!」

「なっ!?!私が食いしん坊のような言い方は止めてください!!」

「お前が食いしん坊じゃなかったらギル曾根とかはただの少食な人だからな!!」

「私をギヤ 曾根なんかと一緒にしないでください!!」

「お前が引き上げているエンゲル係数は大差ねえよ!!」

「くっ！？またそうやって私を責めて」

「事実だろうが！！」

「もうその身に教え込むしかないようですね！！」

「出たよボディーランゲージ！お前それじゃあどつかの駄女な『じやんけん死ねええええー』とか言ってる人と大差ないから！」

「誰かはしりませんが、そのような粗暴な人物と私と一緒にしないでください！！」

「かわんねえよ！！肉体言語に頼ってる時点で全くかわんねえ！」

「……………もういいです。分かってくれないと言つのであれば……………部屋にあった本を全て焼却処分します」

「なっなんだと！？貴様、人間か！？僕の魂の一部たちを焼却処分するなんて！外道すぎるぞ！」

《 続 》

「Not Reading」話： ・ 十 ！

（前書き）

色々書きながらもちゃんとリクエスト一つ目を果たしました！
なお初っ端からネタバレ満載！

よっしゃあ！

次行ってみよう！

誤字脱字は報告お願いします

「Not Reading」話： ・ + !

くそ！どうして動かないんだ！

動け！動いてくれ！

愛しいあの人が消え去ろうとしているのに

この世界にとっての異物であるご主人様を消し去ろうとする光

離れたくない

離れたくない

離れたくない

離れたくない

今まで過ごした時間。

今まで過ごした記憶。

走馬灯のように今まで過ごしてきた記憶が私をつき動かそうとする。
……しかし私は動けなかった。

「そんなの嫌です……！消えないで！」

あらん限りの叫びをあげ限界を超えんばかりに力を越えるが動くことが出来ない

どうして!?

「約束したのに……っ！ずっと……ずっと一緒に居るって約束したのにっ！」

私は叫び続ける。

愛しい彼を見失わないために！

愛しい彼が消えないように！

「消えないで……っ！戻ってきて……っ！」

彼を引き止めるために手を伸ばそうとするが私の身体は動かない。

「私を……私を一人にしないで……っ！」

あの人が消えてしまっ。

私の前から消え去ってしまっ。

悟ってしまったその事實は、私の心にギリギリと爪をたてる。

そんなの嫌……っ！

愛しい人

私の全てを捧げられる、愛しい人。

温かい眼差しが好き。

優しい声色が好き。

大好きで、大好きで、大好きで

。

私の存在する理由となったあの人が、消え去るなんて認めない……
……っ！

「行かないで……っ！帰ってきて……っ！」

言葉を出しても意味はないのかもしれない。

ただどかさずにはいられなかった。

目の前で白い光に飲み込まれていく愛しいあの人を目の前に

私たちは身動きをとることが出来ないのだからっ！！

くっどっどっして！？どっどっして！？

頭の中に渦巻くのは自分に対する怒りだった。

どうして！？どうして動けないんだ！関雲長！

悔しさのあまり唇を噛み締め、唇から血が垂れる。

そして地面に触れた瞬間、黒い輝くが私の下から満ち溢れた。

『カツカカカ！いいね！いい慟哭だ！』

聞くだけで嫌悪感を催す声が響き渡る。

「うるさい！私はそれどころじゃ 『お前に力をやるうか？』何！？」

『今この場をやり直す力をお前にやるうかと聞いているんだよ』

声だけなのにそこはかたなく気持ちの悪い笑みを浮かべたような印象を感じる。

けれど………

「なんでもいい！！この場を切り抜けられるのなら神だろうが妖だろうが構わない！力をよこせ！」

唐突に叫び声をあげる私に周りの皆は何を言っていると言つような眼差しで見てくる。聞こえないのか？この声がつ！？

『キャハハいいね！いいね！！ならお前には《最強》を与えてやるう！カツカカカ！お前さんの《渴望》でそいつは呼び出された！』

その男の不快な声と共に地面からまばゆい黄金の光が満ち溢れていく

そして光が失せると私の目の前には

「サーヴァント、デイズーヴァー。貴女の《渴望》に呼応し参上した」

真っ黒な外套を纏った、目を包帯で覆った黒髪の男が膝をつき私に對して臣下の礼をとっていた。

その声は先程の歪つで不快な声とは違い全てを覆い込むような暖かさを秘めている。

「貴様はなんだ!？」

あの人を消し去ろうとしている白い服の男……左慈がいきなり現れた男に警戒心をあらわに構える。

「おお巨乳なマスター!最高ですね!！」

包帯の男は左慈を無視して立ち上がりしげしげと私の胸をなめ回すように見ている。

「いやあ最高ですね、マスター！しかもサイドポニーとは！！今ならなんでも出来そうな気分です！」

男は親指を立て、力を込めて私にむけてくる。

「なんでも出来そうなら、ご主人様を！ご主人様を助けてくれ！」

私はいきなり現れた目の前の男に叫び声をあげて頼むと男は今気づいたと言わんばかりに光の中に消えていこうとするご主人様の方を見て

「ご主人様ですか？・・・ああ成る程！ここは恋姫ですか！」

と手を叩いて意味の分からないことを言っただけで頷いている。そしてご主人様に右手の指先を向けて

《固定：hold》

《解析：・・・完了》

《定義変更……完了》

よく分からない言語を呟くところ主人様を消し去ろうとしていた光が消えた。

「なっ!?!」

左慈はそれを見て愕然とした表情をした後に男を睨みつけた。

「貴様!何者なんだ!」

「……あれ?これだけじゃ駄目ぽいですね。変な修正力が働いて世界が消えちゃいそうな感じがします」

とまた左慈を無視して思考の中へと埋没している。

「ふむ・・・なら。マスター！」

すると不意に男はこちらを見て

「違うお話しから彼に出会ってみませんか？」

とご主人様を指差しながら試すような笑顔を向けて言ってきた。
私はそれに・・・

「ああ！ご主人様とまた会えるのならなんでもかわまない！」

と叫ぶと男は嬉しそうな笑みを浮かべて

「その《渴望》承った」

と言って腕を振るっていく
そんな中左慈は己を無視して自分に背を向けている男に殴りかかったが・・・

「邪魔だ、失せろ！」

と男が振り返って放った裏拳を喰らって

「ガッ!？」

骨の折れるような音と共に埃を撒き散らしながら吹き飛ばされた。
男は振るっていた腕を止めて私に近寄り

「では……『真』の世界に行きましょう」

微笑みながらそう言うと

世界が目を開いてはいられない程の光に覆われた。

光が消え去った時、目の前に広がっていたのは荒野だった。

そして

「愛紗ちゃん？」

透き通るような優しい声で真名を呼ばれてそちらを見ると

桃色の髪をした『胸の大きな！』女が心配げな目でこちらを見ていた。

「だっ・・・がつ!？」

唐突に走った激痛が脳内を駆け回る。

まるで直接頭に「情報」を叩き込まれているような感じだった。

頭痛がなくなると目の前の女の子が誰だか「分かった」。

劉備・・・桃香様。

私が生涯をかけて守り共に国を平和にしようと思った御方だ。

初対面のはずなのに彼女との思い出が次々に浮かんでくる。

「ぐっ!？」

再び頭痛が走り今度は頭の中に声が聞こえた。

『大丈夫ですかマスター？』

「お前は！？」

思わず声に出してしまい、再び桃香様に心配な顔をさせてしまう。

『貴女のセイジツな従者のディザイヴァーと申します。呼びにくかったらユウキで構いませんよ』

『貴様はなんなのだ！？』

声には出さず脳内で怒鳴りかける。

『だから従者ですよ。従者。貴女はあの時願ったでしょう？でそれを聞き付けた《最悪なる者》または《怨天大聖》がそれを聞き付け

貴女の上に僕を遣わしたというわけですよ』

『……………神の御遣いということか？』

『まあそんなところですかね』

頭の中から話し掛けてくる男は若干投げやりな感じで言ってくる。

『ご主人様は！？』

ふと辺りを見回して愛しいあの人が近くにいないことに気づく

『ここは先程貴女がいた《世界》とは違う世界で貴女とは違う貴女がここにはいました』

『そんなことはいい！ご主人様は！？』

『……………はあ。いいから聞いてくださいよ。ともかくこの《世界》にいた貴女に違う《世界》にいた貴女を上書き保存して貴女

はここににいるわけですよ。ようは二つの《世界》の記憶があるわけなんですが……」

『なんだ？』

『この《世界》にいるご主人様は貴女と共に過ごしたご主人様ではありません』

『なっ！？』

『あの消えゆく《世界》からさすがに二人は移動させられませんので。ですから……』

『構わない』

『……』

『あの人はあの人だ』

『………はあ青いですね。まあマスターを見守ってますよ』

『姿を現さないのか？』

『貴女を移動させるのに少し力を使いすぎたので二、三日休みます』

『そうか………』

『では、ボンボヤージュ（よき旅を）』

よく分からないことを言っつて男は消えた。
いまだに私のことを心配げに見てくる桃香様を見返し微笑み

「さあ行きましょう！流星を見に！」

「にゃ！なんか愛紗が急に元気になったのだ！」

いつのまにかいた鈴々が茶化してくるがそれを無視して駆け出す。

ご主人様 - 待っていてください。
また貴方に出会い。

また貴方と恋をしに行きます

《続かない》

「Not Reading」話：・
†
!

（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

まあ無理かなWWW

話：take out は可能か？（前書き）

どうやら恋姫は不評だったようで
残念デスネ

まあさほど期待はしてませんでした

というかFate編が書き終わらない
ようやくラスボス1的な奴を倒して
話が続かなくなりましたorz

誤字脱字は報告お願いします

話：take out は可能か？

ギャグ補整というものがいかに素晴らしくて偉大なものをその身に教えられ、いまだにオヤシロサマごっこもといストーカーをされているユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーことユウキ・アンペラトリスです。

先程まで何故か触手のように動くリボンのようなものに攻め立てられていましたが、ようやく解放されました。

今の心情を言葉で表すと狩人につけられているのに巣穴に帰らなきゃいけない狐とか猪の気分だな………帰ったら巣穴を荒らされるのは目に見えているのに

それに帰るにしても僕は高町家にお世話になっているわけだから必然的に高町家に行かなくてはいけないわけで、でも行ったら色々終わるわけで………どうしようもなかった。

先程のチェイバーカーの茶番のせいで桜が僕から視線を外そうとはせず、僕の一挙一動全てに目を光らせている。

動物園の人気者でもここまでじつくり………いやネットリ見られることはないだろうと自負できる視線である。

・・・・・・・・・・はあ、しょうがない。やおら嘆息しながらもトボトボと気乗りせずに翠屋と向かう。

困惑する後ろの連中を無視して翠屋へと入ると、この姿と後ろの連中を見て事情を把握したらしい桃子さんが獲物を見つけたと言わんばかりに微笑んでいた・・・・ブルータスっ!!!

おもむろに助けを求めるような視線を土郎さんへと送ったが逸らされ、味方が誰ひとりとしていなくなった・・・・・・あれ？目から汗が、なんかしょっぱいなあ（泣

涙目になりながらも渋々奥の方の席に座ると何故か同じテーブルにつきストーカー達・・・・・・対象と同じテーブルにつくのはストーカーの在り方としては間違っている気がしたが、余計なことを口走ると折檻されるのが目に見えていたのでとりあえずは黙認する。

ストーカー連中がきやははうふふと吐き気がするほど甘い物を頼む中（一人だけ頭のおかしい量の奴がいたが言うまでもない）アイス

レモンティーを頼み、チビチビと飲みつつストーリーカー連中の会話を聞き流す……あれ？今日マホツカの夜の発売日だったけ？

小学生なのに18禁ゲームのことを考える見た目は子供頭脳はエロい男なある意味コナンの僕……プライスレス

一人でおふざけをしていると皆が会話に夢中になっていることに気づいたので……トイレに行くことにした。

ガシッ

「……………」

「……………」

「……トイレに行くだけなんだが」

「じゃあランドセルは必要ないですよね？」

「……………アハハハハ」

「うふふふふ」

ギシッギシッ

マイランドセルが引っ張られ軋むような音を奏でるが桜は獲物をくわえた鰐よろしく万力のような力で掴み決して離そうとはしない……チッ読まれていたか

「チッ」

舌打ちをすることを忘れずに渋々ランドセルを手放し、トイレへと

向かう………というのは建前で厨房に入りデザイナーヴァーへと姿を変える。

いつまでも小学生なんかやってられないです。

ついてきたストーカー達に多少呆れながらもウェイターの格好に着替えてなのはちゃんたちがいる場所へと向かう。

そして今気づいたのと言わんばかりに白々しく話し掛けた。

「おや？なのはちゃんお友達ですか？」

「あっデイズさん！お仕事してたの？」

「ええ今日はアルバイトがおやすみだったのでお手伝いしようと思
いまして………僕はどこかの喰ちゃ寝する居候とは違います
からね」

なのはちゃんに話し掛ける中チエイバーにちよっかいを出すことは

忘れない……チエイバーはパフェを食べながら下から貞子
さんも裸足で逃げ出すような威圧感を発して睨みあげてくる（上目
遣いの応用編と言えるだろう）。

そんなチエイバーを「Hahaha」とインチキアメリカンの笑
顔で無視して、この姿では初めて出会った遠坂姉妹に挨拶しておく

「どうも高町家居候のディザーヴァーです。」

笑顔で挨拶したのだが凜ちゃんの不審者を見るような眼差しが突き
刺さる。

まあ確かに目を包帯で覆って胡散臭い笑顔を浮かべている人物なん
か信用できませんよね。小学生に通報されそうになりながらもふと
周りを見回すと何時ものようにすずかちゃんが僕が来たことにより
怯え始めた。

……じーむす。

凜ちゃんと同様に今度はアリサちゃんの目つきが悪くなっていく、
目で何すずか怯えさせてんのよ!?!と言いながら視線で射殺そうと
しているのがわかる。

とうかすずかちゃんに怯えられる理由がよく分からなかった。なのはちゃんが遠回しに聞いてくれたらしいのだが……返ってきた答えは「なんか怖い匂いがする」かららしい。怖い匂いつてなんですか!？と突っ込んだのはなんとも言えなかった。

多少だったのが多々落ち込み、チエイバーを見ると『パフェとケーキ追加で』とかおほざきになりやがりましたので……いじめることにした。

ちなみに桜ちゃんは「ユウキくんの匂いがする」と鼻をクンクンと鳴らしながら僕の体臭を嗅ごうとしていた……なんかどんどんキヤラ崩壊が……キノセイキノセイ

「ペンドリーさんはよく食べますね?」

「うん!いつもすごい大きな重箱を食べてるの!」

「へえ〜そうなんですか……」

「それにもう店の食べ物全制覇してるわよね。どんだけ食べるのよ？」

「いえこれはおやつであって「気をつけてくださいね?」……………
・何がですか?」

チエイバーは僕が何か言うのが分かったのか、警戒心をあらわに睨んでくるのでそれに応えることにして

「……………そのままだと脂肪の一級建築士になりますよ?」

笑顔でそう言い放った。

その瞬間場が凍ったかのように緊張感が高まりチエイバーが僕に敵意を向けてきたので、それをサラッと受け流して

「そういえば家にもよく食べる女の子がいるんですよ?」

「へえどんな女の子なのよ?」

ピク

なんかチェイバーの耳がピクピクと動いてアホ毛も揺れ始めた。どうやら自分の話題だから気になるようで……まあ僕が貴女を話すときは期待したら負けですよ？

と内心セイバーを嘲りながらも喋る。

「とても可愛らしくて眉目麗しい素敵な娘ですよ」

微笑みながら言うとチェイバーが赤くなりながらパフェをパクついている。

「あの娘もペンドリーさんと同じようによく食べますがスリムですね」

「なんか太らないコツみたいなのがあるのかしら？」

真剣な顔で悩む凜ちゃん。

そして少しづつ褒めていくとチエイバーのアホ毛が犬のしっぽみたいにブンブン動いている。

知ってますか、セイバー？

トランプタワーとかは積み上げて積み上げて高くなれば高くなる程・
崩すのが
楽しいんですよ？

「ええペット飼ってますからね。もしかしたらペンドリーさんも飼っているのかもしれないね」

「ペット？私の家も犬飼ってるけど、別に……」

「……体内にサナダ虫を」

再び凍りつく場

そして冷気を発してアホ毛をピンっと立て俯いているチエイバー

やっぱり言ばせた後に踏みにじるのが最高ですね！

清々しいぐらいにドSだった。

凍りついた場が不意に動き出し、何故か無言で僕の首襟を掴み厨房に連れていくチエイバー

このあと厨房からとある聖剣の名前が叫ばれたのは言つまでもないだろう。

《F.i.n》

話：take out は可能か？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

やはり雑な番外編orz

Fateキャラとリリカルキャラがたまに混ぜります

一番混ぜるのはアリサと凜

口調とキャラがおんなじなんじゃ！！ボケエ！

と咆哮しかけたのはお兄さんとのヒミツダヨ？

さてそろそろA's編始動ですかね？

まだなのはちゃんがり立ち直るシーン書いてませんが………ま
あなんとかなるか！

次回もお楽しみに

A・S編1話：アイウィルピーバック！まあ戻りましたが・・・何か？（前書き

出だしからグダグダだぜ（泣

ちなみにFate編が書ききれないという最悪な事態が発生しまし
たorz

いままだ製作中です

誤字脱字は報告お願いします。

A・S編1話：アイウィルピーバック！まあ戻りましたが・・・何か？

「はやく・・・もう夜も遅いことですし、眠りましょう」

水を流す音と共に食器を洗う音が部屋に響く中魅力的な声が車椅子に乗った茶髪の少女に眠るよう促した。

「いやまだ眠くないんよ」

「ですが睡眠不足は美容の大敵ですよ」

「それでもや〜」

少女のじゃれたような声が可愛らしく返答し、まだ眠気がないことを伝える。

「ですが・・・誕生日ぐらい起きて迎えたいやないか〜」・・・よく

分からない理屈ですが。しょうがありませんね、今日だけですよ。」

「ありがとうな！なら一緒に寝ようや！」

「……………はあ。まったくわがままですね、はやては」

「ダメ？」

少女が上目遣いで頼み込むと

「うっ……………今日だけですよ」

結果、甘やかしてしまうのだった。

「なあライダー。私は感謝してるんよ？ライダーが来てくれるから私は一人じゃなくなったんやから」

「はやて……………」

ライダーと呼ばれた赤い眼帯を付けた綺麗な女性は紫色の髪を振りながら少女に抱き着き、あやすように背中を撫でる。

「今日は一緒に寝ましょう」

「うん！」

女性は眼帯越しに柔らかい視線を少女に向け微笑むと少女も嬉しそうに微笑み返した。

女性は少女を車椅子から腕へと抱き寄せ、そのまま寝室へと運びベッドに寝かせた。すると少女が

「本棚にある黒い表紙で金の装丁の本を取ってくれへんか？」

と女性に頼み本棚から鍵で閉じられた本を持って来させた。
そしてその本に挟んでいた折り畳まれた紙を取り出して女性に見せる。

「これがライダーとの出会いのきっかけなんやで？ある人の落し物やったんやけど……」

少女が見せた紙には複雑な記号が混ざり合った円が書かれていた。

「これによつて私ははやてに召喚されました。……それにしてもすごい魔法陣ですね。こんなのを書ける魔術師がいるとは……
・気になるところではありますが、ともかく早く寝ましょう。明日と言つても後30秒程で誕生日なのですから」

女性は何故か魔法陣を見て感心したように頷き、夜も遅いので少女に寝るよう促したあと少女と一緒に横になった。
少女と女性の顔の間には本と先程の紙が置かれていた。

「うん……暖かいなあ」

少女は女性を抱きしめ、その温もりを感じとり温もりに涙した。

自分は一人じゃなかったと……
家族がいてくれてうれしいと

この幸せが続くよう何かに祈る。

涙が頬を伝わり紙に落ちた時、日付が変わり少女の誕生日となった。

すると少女と女性の間にあった黒い本が脈動し始める。
女性は黒い本から溢れ出る魔力を感知しすぐに本と紙をベッドから落として、自身の武器である鎖のついた短剣を本に対して構え少女を守るように背中に隠す。

474

そして
黒い本が浮き上がり
その中から

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にごぞいます」

「夜天の主の元に集いし雲」

「サーヴァント、ディザヴァー呼びかけに応じて参上した。問おう貴方が私のマスターか？」
「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

5人の男女が現れた。

一人はピンク色の髪をポニーテールにしたキリツとした顔をした女性。

一人は赤い髪をお下げにした可愛いらしい女の子。

一人は黒髪で目を包帯で覆い人をくったような笑みを浮かべている男。

一人は固い筋肉に覆われた肉体を持った男。

一人は肩まで伸ばした金髪を携えた優しい顔をした女性。

5人は少女に対して片膝をつき臣下のような礼をとっているが、下を向きながらも何やらボソボソと小さな声で話している。

「おい今一人多くなかったか？（ボソッ）」

「気のせいじゃないですか？（ボソッ）」

「いや多かった気がするぞ（ボソッ）」

「なら点呼をとらんか？（ボソッ）」

「分かった（ボソッ）」

「まず私からだな、1（ボソッ）」

「2（ボソッ）」

「さあ「縛札衣っ！（ボソッ）」んっ！？んん！？」「さあ！ん！

「ボソッ」

「・・・・・・4だ（ボソッ）」

「ちゃんと4人ではないか（ボソッ）」

「いや一人多かった気がしたんけどなあ（ボソッ）」

「気のせい気のせい（ボソッ）」

4人＋一個（着ていた服で縛られ糞虫にされた）は何やら自己解決をしたらしく再び静かに主である少女へと頭を垂れつづける。

「・・・・・・なんなんですか、貴方たちは？」

紫色の髪をした女性は少女を背中に隠したまま敵意を消さずいきなり現れた男女を睨む・・・・・・しかし

「あれ？デイズさんやないか？」

「んっ？もしかしてはやてちゃんですか？・・・・・・ってことは
またリリカルな世界ですか？」

少女は目を包帯で覆った男性に嬉しそうな笑みを浮かべて話しかけると男性は引き攣ったような笑みを浮かべて返した。

「んん〜!?!」

「「「なっ!?!シャマル!?!」」」

そしてようやく包帯の男性以外が仲間の一人である金髪の女性が服で縛られているのに気づき驚愕の声をあげ男性に敵意を向けた。

「貴様、何者だっ!」

ピンク色の髪の女性がどこからともなく剣を出して男性に向ける中、男性はニヤニヤと微笑みながら

「《渴望》のサーヴァント。ディザヴァーです。今後ともよろしく」

マイペースに挨拶をした。

こうして夜天の主と魔眼を持った霸王は出会った。

《 続 》

A・S編1話：アイウィルビーバック！まあ戻りましたが・・・何か？（後書き）
お楽しみいただけただけでしょうか？

ようやくA・S編スタートと相成りましたが・・・まあグダグダです

ネタが尽きはじめましたからねorz

次回もお楽しみに

A・S編2話・ちよつとした説明をば……………(前書き)

短い……………そしてグダグダ

最悪や

誤字脱字は報告お願いします

A・S編2話：ちよつとした説明をば……………

どうも乳の帝王ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスことオツパイ魔神ディザーヴァーです。

何やら僕と同時に現れたヴォルケンリッターという集団……………
最高ですね！
しかも何気にライダーさんとかいますし！！

跳ね上がる巨乳率！

今までの無乳率が気にならないほど、目移りする三人の巨乳美女！

堪らないですね！
キタコレ！僕の時代がカムバック！

前呼び出された時のことを思い出してくださいよ！

なのはちゃん、フェイトちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん、アリシアちゃん、セイバー………なんという無乳。
リニスにプレシアがギリギリ許せる乳のサイズのラインですね！

ああ………ええと座敷わら………なのはちゃんのお姉さんの
ミルコ・クロ………美由紀さんがいましたね。

あの人の名前なかなか思い出せないんですね。

まあなんだかんだでいまだに無乳率の方が高いのが残念な話なんです
が………

まあようやく巨乳に会えたのでよしとしましょう。

まあ現実逃避せずに事実を正面から受け止めると今現在闇の書について
の説明を受けている。

闇の書とは、ンカーコアという魔力精製する機関を吸収することで

白紙である闇の書のページに文字が記載されていき、全666ページを埋めると闇の書の真の所有者になることよって大いなる力を得ることが出来るというデバイスで、守護騎士ヴォルケンリッターは闇の書の蒐集を行って同時に主を守る闇の書のプログラム生命体らしい。

闇の書の所有者になる条件は、闇の書に合致する魔力資質の持ち主をランダムに選ばれるのではやてちゃんが闇の書の所有者になったのは偶々であるとのこと。

ヴォルケンリッターのリーダーであるシグナムから説明を受け終え、不意に皆の視線が僕へと向けられた。どうやら次はお前の番だ的な視線である、しょうがなく自分がサーヴァントまたは英霊と言われる存在であり、偉業を成した英雄ではあるものの異世界の英雄であることを伝えた。

ヴォルケンリッターたちは何やら納得していない様子だったが、とりあえず無視をして

「でライダー何故貴女はここに？」

少し疑問だったのでライダーがどうして現れたのかを聞くとどうやら僕が前に魔法陣描いた紙を落としていたらしく、それをはやてちゃんが拾ったとのこと。

そしてたまたまその紙で手を切り血が付着した際にライダーが召喚されたらしい。本来僕が召喚されるはずだったが、既に僕はこの世界に召喚されていたので魔眼繋がりでライダーが召喚されたようだ。

ちなみに彼女は前の僕の《世界》にいたメドユーサとは別人である。

まあ巨乳率が増えたので何も文句はありませんが………

肝心のはやてちゃんは何やら家族が増えたと大喜びして明日みんなの服を買いに行こうとかめちゃくちゃはしゃいでいる。

それを見たヴォルケンリッター達は蒐集しなくていいのかと何やら焦った様子で尋ねていたがはやてちゃんが蒐集を禁止したことにより愕然としていた。

ライダーはそんなはやてちゃんを見てしょうがない的なため息交じりに息を吐いている……激甘ですね。

で今日は夜遅いので寝ることになり、僕は狼形態になったザフィーラと一緒にリビングで寝ることになったのでソファで横になってるのだが……ザッフィーは僕を警戒してちよつとした動作でも起き上がれるよう気を張っている。うう〜見張られてると思うとストレスで胃が……

視線に弱いチキンな僕はザッフィーからの監視の視線に耐え切れず

ソファーから起き上がりザッフィーに声をかける。

「ザッフィーさん、監視の視線が痛いんで散歩に行きませんか？」

「……………」

散歩に誘ったら無言で立ち上がり玄関に向かったので、一緒に外に出た。

ザッフィーが一瞬だけ視線をどこかに送ったので《念話》でヴォルケンリッター達に連絡したのであると推測し、何も言わずに着いていく。

二人？で並びながら無言で歩いていると近くの公園についたのでベシに二人して座り、無言で空を見る。

僕は不意に口を開き、そちらを見ずにヴォルケンリッターのザッフィーに質問をした。

「ザフィーラさん……貴方が望むことは？」

すると質問されたザフィーラも空を眺めたまま

「……主の幸せを」

と答えてくれたので

「それは素敵ですね……まあ僕もですが」

と笑いながら返したら

何やら恥ずかしくなったので近くで隠れていた猫を捕まえて膝の上に寝かせて撫でまくった……主に乳狙いで。

ああちなみに僕に獣の趣味はありませんよ？

この猫ちゃんはやてちゃんの家からずっと迷わずについてきてくれたので、そのお礼にちょっと刺激をと思ひまして

ニコニコしながらザフィーラと一緒に空を眺めて

「今度一杯どうですか？」

「……………付き合おう」

互いに相伴する約束をした。

ザッフィーはようやく僕を信用し警戒を解いてくれたので家へと帰り、この後は視線を気にせずゆっくりと寝ることが出来てヴォルケンリッター達との距離が縮まったように感じられた……………それは綺麗な夜のお話だった。

《続く》

A・S編2話：ちよつとした説明をば……………（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

何やら色々ありますがお気にせず

次回もお楽しみに

ああ忘れてましたorz

よく考えたらA・S編がスタートするといってお知らせを
してませんでしたorz

まあ番外編がうまく纏められなかったという作者の
アホさ加減が原因ですが(泣)

とりあえずA・S編がスタート中です。
今まで通り7時更新に明日からなるのでお楽しみに?

ああこつという感じでゼロ魔が遅れていくんですね(泣)
ちなみにゼロ魔は先を製作中ですので更新を辞めたわけ
ではありません、お待ちの方は心配しないでください。

まあとりあえずリリカルマジカル頑張ります!
……………だっけ?

次回もお楽しみに?

A・S編3話・我は最強の魔法使いなり!!出来ぬことなどないわ! (前書き)

何やら作者暴走orz

ヤツチヤツタヨ

さすが自重を知らない作者

誤字脱字は報告お願いします

A・S編3話：我は最強の魔法使いなり！！出来ぬことなどないわ！

殆どの人間は幼児期を終えたとおっぱいを触る事が叶わずにその寿命を終えてしまうのだが、極稀に何のリスクもなしにおっぱいを素手で触ることの出来る人間が出てくるという。

その人間は畏怖と尊敬と嫌悪と崇拜と嫉妬と憎悪と悪意を込めて《リア充》と呼ばれており、素手で触る事がどうしても叶わない人間たちの間ではリア充を狩る計画が立てられているらしいが真偽の程は不明である。

しかし！！

おっぱいを素手で触るなどおっぱいへの冒涇に等しいので僕も、もしそのような集まりを見かけたら参加しようと思わずにはいられない。

紳士は遠目で眺め慈しむ者と知れ！！

「オッパイ、オッパイ、夢いっぱい！」

触りたい、吸いつきたいという夢や希望が詰まる程大きくなっていき背徳感、越えてはいけないその先にある夢や希望を与えると小さくなるというが

見えない触れられない想像力、欲こそが紳士の原動力である！！

ジークオツパイ！

それでも尚、神秘の頂であるオツパイに挑む男たちを《勇者》と呼び、彼らは《リア充》とはまた違った方法でオツパイを求めてその頂にたどり着こうとするのである。

彼らはそこにオツパイがある限りオツパイを揉むことを諦めはしない！！

正に《勇者》であると言えるだろう。

そんな《勇者》に成りたいユウキ・エンドリオール・ル・デファン
ス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

まあ軽く暴走してますが、何が言いたいかというと……僕
はシグナムとシャマルとライダーの部屋に行つて無防備な彼女たち
の乳を見学しなくてはいけないのではないのだろうか？

いや、当たり前だ！見学しなくて何が乳帝王だ！何がオツパイ魔神
だ！イケ！行くんだ僕！！

ということですが皆さんが起きるまで毎朝糞虫状にされ放置されること
になりました。

つい熱いパトスをはやてちゃんとぶつけ合っていたら皆さんに聞か

れまして、てへっ と可愛らしく舌を出して小首を傾げてみたので
すが、普通にフルボッコにされましたorz

既にヴォルケンリッターたちとの生活もはや三ヶ月皆さんがようや
く馴染んできたところですかね？

で話を戻して

何がいけなかったのでしょうか！？

あんなに乳について語れるはやてちゃんがよくて僕は駄目なんて！？
あれほど語れる人はいませんよ！？思わず同志！と言って手を握り
あつたぐらいですからね！！

それにしても年齢ですか！？年齢のせいで駄目なのですか！？年齢
ぐらいならいくらでも外見変えられますよ！？（オツパイへの溢れ
んばかりというか溢れてる情熱・・・むしろ欲望のせいで基本的な
法律とか色々を忘却している）

それに頑張れば・・・・・・・・ああそうか。最初からそうすれば）
（

クッククッククク・・・・・・・・

最初からアレを変えればよかったんですよ！！

畜生盲点でした！

アツハハハ！

我が手中に乳を得たり！

フツハハハハハハハ！

朝早くに八神家に男の高笑いが響き渡った。

そして……

「むっ？」

「どうしたの、シゲナム？」

「いや風呂が・・・」

「あっ？壊れちゃったのか？」

何やら集まっているヴォルケンリッターたちを不思議に思ったライダーは近づき何をしているのかを尋ねると

「何をしているのですか？」

「ああライダー。実は風呂が沸かないんだ」

八神家のお風呂はボタンを押して沸かすタイプのお風呂なのだが、いくらシグナムがボタンを押してもお湯が出てくることはなく、試しにシャワーを出してみようとしたのだが水滴一つすら出てこない。

「どうやら壊れてしまったようですね」

それを見てライダーは水道が壊れたと推測した後でクラアンに電話しておくとしグナムに伝えたのだが

「むう」

シグナムは何やら浮かない顔を浮かべていた。それを見たヴィーダは

「さすが八神家一の風呂好きだな。そんなに入りたいのかよ」

とからかったが、どうやら結構本気で入りたいらしく何やら人の話を聞いていなかった。

497

「おや皆さんお揃いでどうしたんですか？」

そこに何やら怪しげな笑みを浮かべた我等が主人公デザイナーヴァー
がまるで盗み聞きしてたのではないかという素晴らしいタイミング
で現れた。

そんなデザイナーヴァーにライダーは風呂が壊れてしまったことを告
げるとデザイナーヴァーはニコニコしながらどこからともなく出した
チラシを皆に見せつけてきた。

「健康ランド？」

そう新設されたという健康ランドのチラシである。そこには沢山の種類の風呂が用意されているとのこと、それを聞きシグナムは嬉しそうに首を刻々と振っていたが……ライダーは懐疑的な眼差しでデザイナーヴァーを見ていた。

確かにこの男はいつまでも眼帯で困っていた私に魔眼殺しの眼鏡をくれたりと女性に優しいが……実際の限のない変態であることは疑いが無い。ライダーはかなり失礼なことを思いながらもその魔眼殺しの眼鏡越しに見通すことの出来ない包帯で覆われた目を見つめた。

「なあここって混浴ってわけじゃないんだろ？」

狙われたことのないヴィーダも一応警戒心をあらわにして危険がないことを確かめているが

「ええもちろん」

どうやら目に見える危険はないようだった……目に見える危険は

そして主である八神はやてにお風呂が壊れてしまっていることを伝え、皆で健康ランドに行くこととなったのだがファイラが留守番を申し出て、男がデザイナーヴァー一人だけと何やら不安な状態になつてしまった。

健康ランドにつき皆（被害者たち）が危機感を胸に宿す中、はやてが余裕を持つて「さすがにデイスさんも公共の場でそういうことは出来んやろう」と言つてデザイナーヴァーに見せびらかすようにライダーの豊満な胸に飛び込んでいた。

デザイナーヴァーはそんなはやてを見て何時と変わらないどこか胡散臭い笑みを浮かべながら男湯と書かれた暖簾をくぐり風呂へと向かつていった。

皆（被害者たち）はそれを見て安堵の息をつき仲良く女湯と書かれた暖簾をくぐつていった……
……
……のだがそれを見計らつたか
のように男湯からデザイナーヴァーが出てきて何処か人気のない所へ

と入っていく、数分後そこから出てきたのは長く艶やかな黒髪を流した紅い目をした美しい女性だった。
そして女性はどこか邪悪な笑みを浮かべながら女湯と書かれた暖簾アヴァロンをくぐり理想郷へと入っていく・・・果てなき夢を掴むために

《続く》

A・S編3話：我は最強の魔法使いなり！！出来ぬことなどないわ！（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

しょうもない話なのに何故か前後編に別れる羽目にorz

次回もお楽しみに

A・S 編4話・我至りしは遙なる理想郷（アヴァロン）（前書き）

シリアスとギャグが混ざりすぎてシリアス（笑）になっているor
z・・・・・・ああいつもか

誤字脱字は報告お願いします

A・S編4話：我至りしは遙なる理想郷（アヴァロン）

7 6、 8 7、 7 2、 無、 7 4、 無、 7 3、 8 2、 7 9、 8 0、 8 4、
7 1、 測定に働せず、 6 5、 7 7、 9 0！！、 8 9、 7 2、 8 3、
無、 9 4！！、 7 1、 7 3、 無、 8 1、 8 3、 8 8、 7 0、 7 4、
8 2、 7 6・・・・・・フツハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

あんな乳くこんな乳くいつぱいあるけど大きなオツパイが大好きデ
ス！！

あつ私デスか？

私はユウキ・エン・・・・・・間違えましたユウリ・パラドックス・
トウラーヴと言いますデス。

キャピキャピの女の子デス、キャツ！

ちゃんとオツパイだってアレだってありますよ？

スリーサイズは96、65、90デス！

素敵なボンキュッボンボディーを所持してます！

いやあまさかこんな方法があるとは思いつきませんでしたよ！
同性になれば覗いても問題ではないと！

盲点でした！！

いつもはいかにしてバレずに覗くかを重点に起きすぎて
不穏な気配を察知され止められていましたか……

今の僕は完全なる淑女！！多少目が血走ったり、息を荒げたりして
はいますがレディーであることには変わりません！！

ああ神よ！

いまだけあなたに感謝します！

ありがとう知り合いの神（幼女）というか同志！！

今まで神の加護：E - というスキルというか呪いのせいで数々のイベントに巻き込まれ、お前には色々恨みがつもっていたが今日だけで全てをチャラにしてあげましょう！！

テンションが上がり大盤振る舞いになりつつも、血のように紅い目を爛々と輝かせ乳を見まくる。

アツハハハハハハハハ！！

もうずっと女の子でいたい気分ですね！

フツハハハハハハハハ！！

周りの人に怪しまれないよう脳内で爆笑してニコニコと笑顔を浮かべる……しかし心のどこかで、何故か満足しきれない自分があった。

どうしたユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラ
トリス！？

目の前に広がる理想郷アウアロンを見なさいっ！！

乳、乳、乳、乳、乳、乳、乳、乳、乳、乳溢れんばかりのオツパイ
が広がっているのにどんな不満があるというのですか！？
大いに愛でようじゃありませんか！！

『なあ僕・・・・・・・・お前はいいのか？』

なっ何がですか？

『僕』は漢だろ？・・・・・・・・・・見ているだけでいいのか？』

っ！？

『僕』は見ていただけで満足なのかと聞いているんだっ！！』

．．．．．ない

『聞こえないぞ！』

満足なんかじゃない！！

『ならなんでそんな格好をしている！？何故相『棒』を捨てたんだ？』

っ．．．僕は．．．．．僕は．．．僕は．．．．．僕は！

「『漢だっ！！』」

その言葉と共に女湯から出て、着替えて更衣室から飛び出し元の姿

に戻る。

くっ僕は忘れていた、僕が‘漢’であるということをし！！！！

‘漢’であるならば真つ向から理想郷に立ち向かわなければいけないということをし！！！！

そして眺めるだけではなく、いつかあの頂きに登るために！

燃えたぎるパッションを抑え皆が風呂から出てくるのを待っている
と後ろから皆が来るのを感じそちらを向くと・・・・・・・・・・・・・・・・
・魔眼殺しを外そうとしているライダーと目が合い微笑まれ、キュ
ブレイ（石化の魔眼）を喰らった。魔眼使いが魔眼を喰らうとは・・・・・・・・
・しかも包帯越しに

どうやらライダーは性別を変える際に発生した微妙な魔力を感じ取り警戒したらしい。

もちろんライダーがこうしているということは皆さんも知っているというわけで迷惑になるからと石化した僕を引きずり家まで運んだ後、先程から笑顔で僕の足を車椅子で引きまくるはやてちゃんやどこからともなく出した武器でどついてくる（少なくとも普通なら致命傷レベルの威力）シグナムとヴィーダちゃんに失敗した料理を僕の口に挟んでくるシャマル……僕はディスプレイ（ゴミ処理機）じゃないんですが

まあ石化しているので抵抗しても無駄なわけで潔く罪を受け入れ石化したまま庭に放置される僕……夜風が身に染みますね（泣）。

そしてそんな僕を視界に映そうとはせずに（なんか置物とかになった気分ですね）プリンセスホールド（お姫様だっこ）ではやてちゃんを抱え、屋根の上に登り空を眺めるシグナム……青春してますニヤア〜

あまりの青春ぽっさに語尾が浸蝕される。

「やな！シグナム」

何やら会話をしているので聞き耳をたてることにした。

「……本当にいいのですか、主はやて？」

「ええよ」

「蒐集すれば主はやての足だって治すことが！」

「確かに足は治したいんですよ？でも誰かに迷惑をかけるのはあかん。だから闇の書の主である八神はやては蒐集することを禁止します！ええな？」

510

何やらシリアスな空気だったので茶化さずに夢中で会話を聞いていく

「………はい」

「約束やで？破ったらお仕置きやからな？それに私はみんなと一緒にいたいだけなんや……だから蒐集なんかせずにと一緒にいてや？」

「はい主はやて・・・我が剣に誓って」

はやてちゃんがすごい迷子の子供が母親を探すような必死な顔でシグナムと約束をしている・・・アレは手に入れた何かを二度と失いたくない、そういう顔でしたね。

「みんなシグナムやライダーやシャマルやヴィーダやザフィーラやデイズさんと一緒に・・・家族でいるんや」

はやてちゃんがようやく手に入れることが出来た家族というものに自分が入っていることを素直に喜びながらも、あんな小さな少女にあんな顔をさせるほど孤独を味わせてきた世界に苛立ちを覚えた。

本当に、世界はままならない。

だから貴女の願いは僕が守りますよマスター。

そして世界に苛立ちを感じつつもはやてちゃんがライダーやシグナムやシャマル、ヴィーダちゃん、ザフィーラそして僕に出会えたことに感謝する……願わくばこの幸せが永久とは言いませんが永く続きますように

そんなことを、似合わないとは分かっても祈らずにはいられなかった……幸せというものは絶望の上に薄氷一枚で成り立っていることをしっていたから……

《続く》

A・S編4話・我至りしは遙なる理想郷（アヴァロン）（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

何やら不穏な空気が出てきましたね、まあ今回は日常編の予定なのでバトルではないです

次回もお楽しみに

A・S編5話・日常とは相対してろくなものではない。(前書き)

今気づきました・・・上げ忘れてたorz

前後編に別れてます

前編は短め

誤字脱字は報告お願いします

A・S編5話・日常とは相対してろくなものではない。

ふんふん〜

どうもユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

今日は全日本巨乳連盟・・・ゲフンゲフン、所用があつて海鳴市を離れています。

以前、身体が崩壊し始めたので会長の座を譲つたのですがせっかく戻つてこれたので様子を見に行くことにしたのである。

もちろんバレたら庭に埋められることは分かっているので皆には内緒である。一応ザツフィーにだけは言つてあるが微妙な顔をされたのは言うまでもないだろう・・・ザツフィーは貧乳派に違いない。

下らないことを考えつつも会議が行われる遊園地へと向かう。

何故遊園地かと言うと基本的に遊園地はカップルや家族が多いため我々巨乳連盟がいても目立つことはなく、につつき全日本貧乳連合の奴らに見つかるともないからである。

我々全日本巨乳連盟と全日本貧乳連合は敵対しており、骨肉を相争うような状態なので、貧乳派などサーチアンドジェノサイドです。

まったく巨乳の素晴らしさが分からないとは悲しい奴らめ。何がただの脂肪の塊だ！オツパイに愛が詰まってるんですよ！それが分からないなんて！！

貧乳なんて所詮発育不良、壁じゃないですか！僕はロッククライマーじゃないからあんな断崖絶壁には挑もうとなんて思いませぬ！

貧乳派に対する文句をぶつぶつと呟きながらも集合場所である遊園地へと入り、観覧車に向かう。そして入口にいる係員に暗号を言う。

「目指す山頂は？」

「チチレスト・・・我等が向かうは？」

「高き頂きのみ」

「久しぶりです！会長！！」

暗号のやり取りを終え係員が僕に握手を求めてきたのでそれを握り返して、列から外れ関係者以外立入禁止の場所へと入る。

517

ここのスポンサーとある契約をして一室まるごといただいたのである。

まあ契約と言っても警備員みたいなもので・・・何故か異様に高い戦闘力を所持している全日本巨乳連盟の奴らに働き場所を与えたのだ。

そして警備員になれる程戦い慣れていない者や新入隊員は遊園地によくあるヒーローショーで稽古をしていく、基本的には最初にやられる悪役の手下としてやられ役に徹してもらおう。

これは最初に受け身を覚えてもらうためである。受け身とは馬鹿に出来るものではなく、受け身が出来なければヒーローショーはもちろん警備員すらやらせはしない。

何故なら受け身に慣れていないものは怪我をしやすいのはもちろんだが、受け身が出来るといことは相手が受け身を取りやすい、安全に相手を投げるやり方がわかるということでもあるのだ。

そして慣れてきたらヒーロー役や幹部クラスの悪役をやってもらうことにしている。これはどう身体を動かしたら相手に当たるか相手に当たらないかというのを知ってもらうためである。

極稀にだが俳優志望やスタントマン志望の人達が来て、色々教わりに来ているのを見かけたことがある。どうやらこのヒーローショーは僕のせいでリアリティーが高く、あるマニアたちの中ではかなり人気らしい……。まあ普通はただの巨乳スキーマジックの集まりだとは思えない

ちなみにヒーローショーから警備会社に転属する者も多々いる。ここは警備会社にとっての登竜門的存在でもあるらしい。

さらに蛇足だが今現在日曜日の朝にやっている戦隊物のレッドとブルーは全日本巨乳連盟の幹部である。

で今現在本部にて会議（巨乳に対する熱いパトスやらパッションのぶつけ合い）を終え、新人育成のためにヒーローショーの見学をしているわけなんですが……………

「むっ！モグモグ、あの者の動きは中々ですね」

「……………」

「こっつて見るとヒーローショーもクオリティーが高いわね！」

「うん、ウチの一番の人気アトラクションみたいなものだから」

「……………」

「へっへえ〜そうなの。凄いわね！」

何故貴女たちがいるんですかね？

確かにすずかちゃんがいるのは分かりますよ？ここは月村家の傘下の遊園地ですから

でも何故弁当を食べながら真剣に見ているちえいばーとなんかめちやくちや暗いなのはちゃんにいやにテンションの高いアリサちゃん
と異常にジメジメした空気を放っている桜ちゃんにそんな桜ちゃん
を気にして楽しめていない凜ちゃんがいるんですかね？

分かってますか？

貴女たちが僕の目の前に現れるということとはろくでもないイベント
の発生率が極限まで上がるといふことなんですよ？

そこんとこ理解して僕の前に現れますか？

とつかなのはちゃんと桜ちゃんが暗いのはもしかして僕のせい
ですか？

違いますよね？自意識過剰ですよ？被害者意識ですよ？

まあとにもかくにも……………

- 弾つ！ -

「全員動くなっ！！」

ほら、ろくでもない。

《続く》

A・S編5話：日常とは相對してろくなものではない。（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

活動日記を書き始めてみたのでよければそちらも……見な
くていいかWWW

あんまりまともな事書いてませんし

しょうがねえ見てやるか程度に見るのがベストですWWW

次回もお楽しみに

A・S編6話・運命なんてただの嫌がらせに過ぎない(前書き)

グダグダ！

それを察知したのかコメントがない今日この頃
皆さんからの感想がないとやっていけません(泣)

まあ多分に嘘ですが

誤字脱字は報告お願いします

A・S編6話：運命なんてただの嫌がらせに過ぎない

じーぞす。

何やらテロリストらしき集団が遊園地を占拠したようです。

最初は全日本貧乳連合の奴らかと思いましたが、憎くても彼らも乳を至上と唄う戦士たちこんなことをするわけがないのである。

むしろ彼らはこれを見て怒り狂うであろう・・・貧乳の象徴とも言える少女たちが銃口を向けられ恐怖で身を震わせているのだから。

間違いなく彼らは狂戦士バーサーカーと化しテロリストどもを完膚なきまでに粉砕するであろう。

みたくもない現実から逃避しながらも正体がバレないように舞台の端に置いてあった予備のヒーローショーのスーツを着る。

言つなれば巨乳戦隊チレンジャーと言ったところであろうか？

もちろん僕はチチレッドである。

巨乳戦隊のリーダーは譲れないな。

また現実逃避を始めようとしたが

- 弾! -

再び発砲され、辺りに響き渡る火薬が弾ける音がそれを許さなかった。

そしてそんな音を聞き恐怖で身を抱き寄せあい泣きじゃくる子供たち……不快だな、手加減間違えて肉塊にしちまいそうなくらい

若干キレかけながらも今手を出すと銃口を向けられている子供に被害が出るかもしれないので迂闊には手を出せずにいた。

何やら彼らは月村家に恨みのある連中らしく、この場に月村家の令嬢がいることを見計らったテロのようで、まあぶっちゃけると人質の解放をする代わりに金を用意しろとそういうことらしい。

テロリストは視認出来る限りは16人、しかし隠れて様子を窺っている可能性もあるので安易に動くことは赦されない。

慎重にテロリストたちの動きを見ながら周囲を警戒していると大声で泣きじゃくる小さな男の子に銃口を向け恫喝している奴がいた。

「うるせえガキだな！黙れって言ってんだろっが！！」

「うええええええーんっ！！」

男の子は銃口を向けられ恐怖を感じたのかさらに大声で泣きじゃくる。横にいる母親が必死に宥めているが一向に収まる気配がない・
・まずいですね、下手に刺激するとあの手の奴は発砲しかねませんね。

チッ

舌打ちが出る程場が硬直してしまっている。子供たちの安全を考えずに突っ込めば全員鎮圧出来るんですが……少しこの人数だと単純な身体能力だけじゃ心許ないですね。魔力を使うとちえいばーたちに感づかれかねませんし、今バレルのは大変よろしくありませんからね。

まあ悠長なことを言ったらられないレベルになったら微塵も躊躇わずに使いますが・・・

ああどうやってこの場を乗り切りましょうか!?

己が身の擬装を最優先に考えながらも無傷で子供たちを救うために頭を働かせる。

考える

長考していると

- 弾! -

発砲音が聞こえたので、すぐにそちらを見ると上に向かって威嚇射撃をして男の子を無理矢理黙らせようとしているバカがいた。チツあのバカ短気過ぎますね・・・しのごの言っていないでもう魔法を使うしか

そう思い足に魔力を練り上げていくと・・・

「幼子に対して何をやっているのですか!?!」

威嚇射撃をしたバカに騎士王（小）が怒鳴り声をあげて突っ掛かっていく

あのアホタレっ！

「んだてめえは？」

バカなテロリストはいきなり突っ掛かってきたちえいばーに目をやり銃口を男の子からちえいばーへと移す。

「幼子に武器を向けて恥ずかしくないのかと聞いているのです！！」

激昂しているちえいばーはそんなことを気にせず怒鳴りつけるが

「てめえもつるせえガキだな。これが見えねえのかよ？」

男はそんなちえいばーに苛立ちをあらわに自分の優位性を見せるために銃を見せ付けるが・・・

「はあっ！」

- - 剛っ！ - -

ちえいばーは一瞬で男の懐に入り込み、男の腹に渾身の蹴りを放ち吹き飛ばす。
蹴られた男は錐揉みになりながら吹き飛び後ろにあったステージへと突き刺さった。

ちえいばーが動き、それと同時にその隙をついてテロリストたちを鎮圧しようとしたのだが・・・

「そこまでだ、嬢ちゃん」

チッ

どこか荒事に慣れたような威つい男が近くにいた子供を抱き寄せ、そのコメカミに銃口を押し付けちえいばーに動かないよう命令した。

あの男はヤバいですね、ああいうことに慣れている感じがします。恐らくですが、ちえいばーに勝てないことを悟り一瞬で人質を取り脅すとは……………

「くっ」

ちえいばーは子供を人質に取られ再び身動きが取れない状態になってしまっている。

勢いで突っ込むからそういうことになるんですよと安全圏にいるくせに偉そうなことを考える。

男はちえいばーに動かないよう命令した後子供を抱き寄せたままちえいばーに近づいていく

そして

「クソガキが！」

男がちえいばーの頬を叩いた。

さすがに体格差があつたせいかちえいばーは地面にたたき付けられ、叩かれた頬を抑えながら下から男を睨みつける。

ギリツ

……野郎……殺す。

ちえいばーに手を出され、既に堪忍袋が爆散した僕は男を一撃で掻き消せる魔力を右腕に込めて、気配を消し男に近づこうとすると……

「おっお姉ちゃんに手を出すな！」

先程まで泣きじゃくっていた男の子が男の前に立ちはだかり、ちえいばーを守るうとする。

「なっ！？下がりなさい！！」

ちえいばーはそれを見て焦ったように男の子に下がるよう言っが男の子は決意を宿した眼差しで

「駄目だよ。ヒーローが言ってたんだ………男の子は女の子を守らなくちゃいけないって」

そう言った。

それは支離滅裂だったが、怒り狂っていた僕を正常に戻すには十分で………

「フツハハハ！！」

「「「えっ！？」」」

ヒーローショーのコスチュームを着たまま、その場へと飛び出した。

「一つ！可愛い女の子は守り通す！」

ポーズを取りながら決め台詞を言っていく僕をテロリストたちは啞然とした目で見つめてくる。

「二つ！女の子を苦しめる醜い悪を倒してみせよう！」

皆の意識が場についていけなくなった瞬間

「三つ！全力で……お前たちを潰す」

身体能力を限界を超えて魔力で強化し、残像が出る速度でテロリストたちを吹き飛ばす。

「なっ!?!」

それを見開き愕然とした面持ちでちえいばーが見つめる中、僕は衣装を着たまま男の子に近づき少しだけ乱暴に男の子の頭を撫でて

「カッコイイ正義の味方だったぜ！」

と男の子を褒めると男の子は満面の笑みを携え

「うん、僕の夢は正義の味方だからね！」

と言うので、頭を撫でくり回した。

いまだに状況が掴めず皆が呆然としているので、そのままその場から立ち去った。横目で何もしようとしなかったのはちゃんを見つめて……

急いで衣装を脱ぎ、魔法で自分の身体を作り替える。

黒髪は銀髪へと変えた後、顔をキリツとイケメン風に変え身長を少しだけ低くして声を少しだけ高くして青年のような感じにした。拘

束衣も脱ぎ捨て今時の若者のような格好に変える。

そして急いでその場から立ち去ろうとした瞬間

ドンッ

誰かとぶつかってしまった。

僕にぶつかった何者かは転んでしまったようなので、手を差し出し
……固まった。

「大丈夫デスカ？」

「ええすいませんよそ見をしていたもので……あのこちらに黒髪
で貴方と同じように目に包帯を巻いた男性がいませんでしたか？」

じーぞす。

包帯取り忘れた。

「いや見かけなかったな」

内心冷や汗を流しながら焦ったようにキョロキョロと辺りを見回す
アルトリア・ペンドラゴンを見つめる。

子供から姿を変えわざわざいつもの姿に戻ってまで僕を探しにくる
とは……………

翡翠を思わせる透き通るような緑色の瞳に金砂を集めて作ったよう
な綺麗な金髪。
細く華奢な身体は抱きしめたら折れてしまいそうなほど儂いが、瞳
には何者にも負けない強靱な意思の強さが宿っている。

ほんの少しだけ抱き寄せそうになる。

「どうかしたのですか？」

ずっと顔を見つめている僕を不信に思ったのか、僕を見つめてくる

セイバー

「すまん、綺麗な顔だったから」

「なっ！？いやその・・・」

その言葉に顔を真っ赤にして俯いてしまうセイバー

「人を探している途中だったのだろうか？」

「あつ、すいません。これで失礼します！」

僕の言葉でハツとしたように正気を取り戻し駆け足で去っていくセイバー・・・その後ろ姿を無言で見つめ、姿が見えなくなつたところで踵を返し八神家と帰ろうとしたら

「あ・・・」

何故か後ろにセイバーがいた。そして・・・

「貴方の名前は？」

なぜか名前を尋ねてきた・・・チツ直感スキルか？

「リク・・・八神リクだ」

「・・・そうですか。リク・・・貴方は・・・
とても私の好きな人に似ている」

そう言って弾丸のような早さで僕の前から消えていった・・・
・・・なんなんだ今のは？

八神家に帰り、二三日上の空だったのは言っまでもないだろう。

《 続 》

A・S編6話・運命なんてただの嫌がらせに過ぎない(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

何やらセイバーとすれ違いましたね。

ヤレヤレセイバーさんは何をやっているのやら

次回もお楽しみに

A・S編7話：何！？『今明かされ面倒な伏線』だと！？見るしかないな！（前

最近サブタイトルを日々考えるのが億劫ですorz

いやはやアホな僕

誤字脱字は報告お願いします

A・S編7話：何！？『今明かされ面倒な伏線』だと！？見るしかないな！

「再び見る世界は、塵と残像、淡い、影。」

ト
ト
ト
ト

「凜とした背中には、その全てを背負う、覚悟がある。」

ト
ト
ト
ト
ト
ト

「どうしたいの？どうして？孤独な旅、そう決めたはずだったのよ。」

「……ワン（デザイナーヴァー）」

「この手を離さないで〜 君から伝わる〜思いから〜 心、に眠る
願いが目覚める〜 強i「ワン！（おい）」……………なんです
かザッファイ？人がノリノリで歌っている時に？」

「ワン（肉屋を通過するぞ？）」

「ああすっかり忘れてました」

「ワン）……………やれやれ、主からの命令なんだぞ？」

「分かってますよザッファイ、さあて行きましょう……………は
っ！ザッファイGO！！」

意気揚々と5歳時ぐらいまで身長を縮め、犬「ワン（狼だ）」形態
のザッファイの上に跨がり肉屋へと向かう。

僕もザッフィーも車程度に轆かれたぐらいじゃどうにかなったりしませんがね。

立ち上がり荷物を拾って轆かれて吹き飛ばされた際に転がって付いてしまった埃を払いつつ、再びザッフィーに跨がると

「大丈夫!？」

車というかりムジンから紫色の髪をした女の人と女の子が飛び出してきた。

………じーぞす。

「やっぱりファリンに運転させるよ!」

「そんなあ〜」

「ああもうとにかく！！君大丈夫・・・夫・・・つ！？」

心配していた女の人は何やら僕に近づいた瞬間、異様に警戒し始めた。

そして同じように何故か怯え始めるすずかちゃん・・・すずかちゃん
は久しぶり！

なんて悠長なことを言ってる場合ではなく、女の人がズボンのポケットに手をやるうとしている・・・それはいただけくないですね。

仲間を呼ばれて身の危険を感じたので

「うわぁ~~~~ん！ママの所に帰るうう~~~~！！」

ザッフィーの上で両手で目を抑えて泣いた振りをする。
しかし

「泣きまねは通じないわよ？」

「チッ」

一瞬で見透かされすぐに泣きまねを止め舌打ちをする。

全くこんな可愛くてチャーミングな幼児に何を怯えたり恐れたり・・・ああアレか。

なんとなく怯えられて怖がられている理由がわかり、原因の元を排除すると

警戒のレベルを緩めてくれたのか女の人はポケットから手を出してくれ、すずかちゃんは怯えるのを止める。

まさか彼女たちがバロールに警戒しているとは思いませんでした。ユウキ・アンペラトリスになっていた時は無意識に封印のレベルを最強にしていたからすずかちゃんにバレてはいませんでした。普通の状態の時は封印なんてないに等しいですからね。

分かる人から見たら『死』をばらまいているように見えなくもないでしょう。

まあ分かる人と言つても……魔族とかハーフとかに限りま
すけどね。

複写眼で見えていなかったせいかまさかすずかちゃんが魔族だったと
は知りませんでしたよ。

内心己の迂闊さに文句を垂れながらも
女の人たちに向き直り頭を下げる。

「すみません、無防備に変なものを垂れ流していたせいで警戒させ
てしまったようですね」

「……貴方は何？」

謝ったのだが女の人は最低限の警戒は解かずにすずかちゃんを背中
に隠し、こちらを睨みつけてくる。

しょうがない……………

「人に物を尋ねる時はまず名乗るべきではないかな？」

少し嫌味な口調でそういうと女の方はピクリと頬を震わせ

「月村忍よ。後ろの子は妹の月村すすが」

「ふむ……忍ちゃんにすすかちゃんか」

すすかちゃんについては聞くまでもなかったが一応確認のため

「ちゃんって……目上の人には敬語を使うべきじゃないかしら？」

と嫌味を返してきたので

「なら敬語を使うといい、こつ見えても私は23歳だからね」

「「ええ!？」」

それを聞き呆けたような顔をする忍ちゃんにすずかちゃん……
・美人はどんな顔してても可愛いですね。

からかうのも飽きたので周りに人がいないのを確認してから
5歳児スタイルから普段の姿へと戻るとさらに目を見開き愕然とする二人がいた。

「お久しぶりですね。すずかちゃん」

「ディザヴァーさん!？」

元の姿に戻ったことにより、ようやく僕が誰か気づき驚きの声をあげるすずかちゃん。

そんなすずかちゃんを訝しげな目で見ながらも警戒を強める忍ちゃん………面倒ですね。

多少億劫になりながらも自分が魔法使いであることを告げ、高町家でお世話になっていたと伝えると少し考えたあとに彼女たちも警戒を解き、自分たちがどういいう存在かを教えてくれた。

夜の一族とか言う吸血鬼みたいなものらしい。

もちろんたいした感想もないので「そうだったんですか」と軽く流すと

「怖くないですか？」と拒絶されることを怖がるような目をしてすずかちゃんがそう尋ねてきたので

「僕は己が身に『死』の魔神を宿す、最悪の英雄ですよ？吸血鬼ぐらいで恐怖を感じたりはしません。僕を怖がらせるなら、桃k・・・ドラゴンぐらい連れてこないダメですよ」と嘘か本当か分からないような笑みを浮かべて、優しくすずかちゃんの頭を撫でてあげた。

すずかちゃんは撫でられ、最初は驚いたような顔をしていたがすぐに微笑んでくれた。やっぱり美少女には笑顔が似合いますね・・・
.....僕はロリコンじゃありませんよ？

そして何やら誰にも話すことなく一生友でいることを誓わされた。別にそんなこと誰にも言う気ないんですがね、一応誓いながらも不服に思いつつ誓うかわりに自分の存在をなのはちゃんに伝えないでくれと頼んだ。

すずかちゃんはよく分からないといった顔をしていたが、とりあえず約束してくれたので一安心である。

その後すずかちゃん達と別れザッフィーに跨がったまま八神家へと帰る。

家の前で再び猫を見つけたので、ゴールデンフィンガーでいじくりまわし悶絶させた後解放した。
ふういい仕事しましたね……額に浮かんだ汗を拭い家へと入る。

この平和が続きますように……

綺麗な星にそう願いながらも

《 続 》

A・S編7話：何！？『今明かされ面倒な伏線』だと！？見るしかないな！（後
お楽しみいただけたでしょうか？

早く・・・早く・・・あと2〜3話で
あの人を・・・

次回もお楽しみにw

A・S編8話：日常は壊れた、後はただ潜るだけ・・・深く、ただ深く（前書き

ギャグ成分薄め！

優しい感想がないということとは・・・「そろそろマンネリだぜアホ作者」的な皆さんからのメッセージだと受け取り

頑張らせていただきます！

誤字脱字は報告お願いします

A・S編8話：日常は壊れた、後はただ潜るだけ・・・深く、ただ深く

最近商店街やらスーパーでアホ毛をリーダーのようにヒョコヒョコさせた腹ぺこ王を見かけるユウキ・エンドリオール・ル・デファン
ス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

アレは間違いなく僕を探してますね、血眼になって探していると
言っても過言じゃないでしょう・・・あんな臭い台詞を
吐いたこちら側としては会いたくないんですよ汗

あああああああああああああああああああー！

-----っ！！

思い出すだけでも恥ずかしくて悶絶しそうです。
家のリビングでジ ジョばりに変な恰好でブリッジしながら悶えて
いるっ

「・・・・・・・・・・。」

可哀相なものを見るような眼差しではやてちゃんに見下された。やめて！そんな目で見ないで！！

はやてちゃんの視線から逃げるように身をくねらせるが逆効果らしくどンドン視線に込められた温度が下がっていく

あまりにも冷たかったのでおふざけを止めて立ち上がり直立不動となり、はやてちゃんの視線から逃げた。

すると

「・・・・・・・・・・はあ。デイズさん、皆がどこにいるか知らんか？」

ため息をつかれた後に皆の所在を尋ねられた、どうやらライダー以外ようはヴォルケンリッターたちがいないらしい。

「確かシグナムが剣道場、ヴィーダちゃんがゲートボールで、ザッフィーが散歩、シャマルは料理教室じゃありませんでしたか？」

朝出ていくときにそんなことを言っていた気がしましたが、まあシャマルは料理教室に行っても無理でしょう。無味無臭の料理なんて初めて食べましたから、シャマルは食感だけを楽しむという新たなジャンルを開拓しようとしている先駆者ですからね。

内心シャマルをいじめながらもはやてちゃんにそう告げると

「いやそれにしてもみんな遅いから」

確かに既に夜の7時ですね、剣道場はシグナムの気分によりますがゲートボールなんて日中で終わるでしょうし散歩にしては長すぎますし、料理教室は爆破でもしたんでしょうか？

なんとなく気になったので

「では探してきますね」

とはやてちゃんに告げていつもの拘束衣スタイルで家から出て皆を探す、ブラブラと歩いていると変な魔力を感じたので、そちらに向かうと大規模な人払いの結果が張られていた。不審に思い『複写眼』で術式を《解析》し感知されないよう割り込み結界の中へと侵入する。

・・・・・・・・・・・・・・・・そして見てしまった。黒衣を纏った金髪の少女が、怯えて縮こまる茶髪の少女を背中を守りながら持っていたその鎌を振り、それを襲うピンクのポニーテールの女性と赤毛の少女に白髪の男性・・・・・・・・これはなんですか？

何故フェイトちゃんとなのはちゃんをシグナム、ヴィーダちゃんにザフィーラが襲ってるんですか？

内心動揺と怒りで穏やかじゃない心のうねりを静めつつ状況を確認する。

フエイトちゃんはシグナムから放たれる鋭い剣線を必死に弾いているが、あれではあまりもたないだろう。体勢が崩れた瞬間にヴィーダちゃんが持つていたハンマーを振りかぶり襲い掛かる。

状況が分からないが不快だったので足で結界に触れ、莫大な魔力を擦込んだ、すると「ガツシャー」と硝子の割れるような音ともに結界を崩れ、それを見たヴォルケンリッターたちは焦りだす。余計な横槍を入れられたら堪らないと言わんばかりに

結界が壊れると同時にこちらに疾風より尚速く駆け抜ける金の残滓を確認し、その場から無言で離れた。

状況が理解出来ない状態で動くのは得策ではないと理解しているの
で一旦引き下がり、素知らぬ顔で家に帰り皆が帰ってくるのを待つ。

ようやくヴォルケンリッターたちが帰ってきたが、敢えてその場では何も言わずいつもの人をくったような笑みを浮かべ、皆をからかう。

はやてちゃんもそれを見て先程まで浮かべていた悲しそうな顔を消し去り屈託なく笑っている。

ヴォルケンリッターたちも何時と変わらぬように日々を過ごそうとしているが、彼らは何をしているかが当たり前のように気になった。しかし普通に尋ねても答えてくれないのは目に見えているので、暫く様子を見守ることにした。

そしてその日からヴォルケンリッターたちの帰りが遅くなり、はやてちゃんとライダーと三人でいることが多くなっていく。

その間もヴォルケンリッターたちは色々な世界を渡り歩き、色々な生物から魔力を奪い続けている。

そんな日々が続き日に日にはやてちゃんの笑顔は掠れ、泣き出すような顔をしていた。
耐え切れずはやてちゃんの横に座り頭を撫でていると不意にはやてちゃんが口を開き

「なあデイズさん、私みんなに嫌われてるんやろつか？」

「・・・・・・・・・・。」

「ようやく家族が増えたと思ったのに、みんないなくなつて・・・
なあデイズさん・・・シグナムたちは私のことがどうでもよくなつ
たのかな？」

「・・・・・・・・・・。」

話ながら悲しくて耐え切れなくなったのかはやてちゃんは泣き出し
僕に抱き着いてくる。そんなはやてちゃんの頭を優しく撫でながら
何も言わずフツフツと怒りを高めていく、ようやく泣き止んだかと
思ったらはやてちゃんは目を赤く腫れさせ泣き疲れたのか眠ってし
まっていた。

眠っているはやてちゃんをライダーに預けて玄関の前に立ち、己が
封印である腕の拘束を解き放つ。

『封印概念2：完全解除』

静かに己が身を全てを砕き挫く力へと変えていく

『我は、全てを挫く者なり』

ただ静かに吹き上がるうとする魔力を高密度に練り上げていく

もはや既に限界などとうに越えていた。

そして

「今まで何をしていた？」

ようやく帰ってきたヴォルケンリッターたちの前に立ちはだかり睨みつけながらかなり強い口調で問い掛けると

「関係ない」

と正面にいたシグナムに目を逸らしながらそう言われ、完全にスイッチが入った。

『墮ちろ、贖罪の石柱』

四本の巨大な石柱がヴォルケンリッターたちの上へと落ちて彼女たちを地面へと叩きつける。

「ガッ!？」

「グッ!？」

ヴォルケンリッターちは突如落ちてきた石柱に驚愕するも、それにより叩きつけられた衝撃により呻き声をあげたが、それを無視して

「二度も言わせるな。何をしていたかと聞いている」

その目に地獄すら生温いと言わんばかりの業火を燃やした怒りを込めて彼女たちを問い詰めた。

《続く》

A・S編8話：日常は壊れた、後はただ潜るだけ・・・深く、ただ深く（後書き）
お楽しみいただけただけでしょうか？

ディザスターブチ切れモード
自分はマスターに心配かけさせておいて他人はダメなのかよとかは
言わないようにorz

今更ながら活動報告って何をかけばいいのか分からんorz

次回もお楽しみに

A・S編9話：さあ地獄の始まりだ、準備はいいか罪人よ？（前書き）

タイトル考えのが面倒です。
ディア
感想ありがとうございます

HPが7ぐらい回復したので連続でお願いしますww

誤字脱字は報告お願いします

A・S編9話：さあ地獄の始まりだ、準備はいいか罪人よ？

拘束を終えたので目を覆っていた包帯を取り、血のように紅い目を外気に曝す。

「早く話せ、僕は気が長い方じゃないんだ。贖罪で済むうちに答えろ」

一切の虚偽を赦さないと言う強い眼差しと傲慢とも言える押し潰すような圧迫感を放ちヴォルケンリッターたちに問い掛けた。

ヴォルケンリッターたちは頭上から落ちてきた石柱に全身を拘束され五体投地で地面に這いつくばさせられている。

なんとか、もがき這い出ようとするが石柱は背中に張り付いたように全く動く様子がない。

「・・・・・・・・・・。」

そして目の前にはそれを為した家族の一人と言える男がいつもしていた腕の拘束を取り払い、いつ何時も外さなかった目の包帯すら取り身を震わせたくなるような怒気を放っている。

ヴォルケンリッターたちは目の前の青年に問われたことに無言を貫き通し、歯を食いしばり石柱の重みに堪える。それを見た青年は顔を歪めて手を振るう

「答えないのか？ならば『相変われ、地獄の柱・・・第一柱：等活』
・・・・・・・・これならどうだ？」

先程まで有った石柱は鉄柱へと姿を変え更にヴォルケンリッターたちを苛む、彼らは砕けんばかりに歯を食いしばり堪え、もがき這い出ようとすがあまりの重さにそれも叶わずにいた。
ミシミシと身体が悲鳴をあげ軋み始める。

「ぐっ！？」

前衛ではなく、サポートに徹していたせいかあまり頑丈ではないシヤマルが耐え切れず呻き声をあげるがディザーヴァーはそれを無表情で見つめる。

ピキッ

何かひび割れするような音がどこからともなく聞こえた、ヴォルケンリッターたちは最初仲間の誰かの骨が折れた音かと勘違いし焦ったが杞憂だったらしく誰にも骨が折れた様子は見られない、目の前にいるディザーヴァーはその音を聞き小声で「《契約》に反してるから崩れようとしてんのか？」といったもの彼らしくない乱暴な様でブツブツと文句を言っている。

「まだ答える気がないのか？^{キアス}命令してもいいんだぞ？僕はこうしながらもお前たちの口から聞きたいから我慢してるだけなんだからな」
背筋に氷を差し込まれたような冷たい声でそう問い掛けられ、シグナムは地面に這いつくばったままキツとディザーヴァーを睨みあげ

「お前には関係ない」

痛みには堪えながらも淀みなく毅然とそう言うと、ディザーヴァーは冷めた目でそれを見つめた後

「なら次だ『第二柱：黒縄』……………チッ」

振るおうとしていた手を止めた。

手には鎖が巻き付いており、ディザーヴァーの手が振るわれるのを止めたのはこの鎖であった。

ディザーヴァーは射抜くような眼差しで鎖の先を見つめ

「何故邪魔をするライダー」

問いただすような口調で鎖の持ち主であるライダーに話しかけた。
ライダーは鎖でディザーヴァーを拘束したまま

「やり過ぎですよ、ディザーヴァー」

珍しく激怒しているディザーヴァーを諫めようとしたが彼の怒りは
底知れず

無表情ながらも怒りを込めた視線をヴォルケンリッターたちに送り

「僕はお前たちが何をしようがしたこぢゃない。ただ……お前たちは、はやてちゃんを泣かせた。それだけでお前たちはいくら責め苦を受け、地獄に苛まれようともしゃれないものになった。……何故寂しいと泣く少女の理由が家族でなければならぬ？」

答える、ヴォルケンリッター……！！」

途中までは冷めた口調で責めていたが途中から怒りが滲み出始め最後は咆哮だった。

獅子の咆哮が雑音に竜の咆哮が話し声に聞こえる程、大地を震わせ大気を轟かせる咆哮であった。

その咆哮に身を震わせながらも自分の主である八神はやてが泣いていたという事実を聞き悄然するヴォルケンリッターたちそして

「……訳を話そう」

ヴォルケンリッターのリーダーであるシグナムが耐え切れずに折れた。

しかし

「シグナム！」

ヴィーダはそれに納得出来ず反対の声をあげるがシグナムが首を横に振りそれを許さなかった。

「くっ」

ヴィーダはリーダーであるシグナムの決定を否定しながらも反対出来ずに渋々肯定する。

それを見たデザイナーヴァーはようやくヴォルケンリッターたちを押し潰そうとしていた鉄柱を消し去り、立ち上がったシグナムを真っ正面から見据え全てを説明させた。

はやてちゃんの足の原因が闇の書であるということをはやてちゃんの足の麻痺が段々と上に上がってきており、いつか心臓をも麻痺させてしまうということも

闇の書の蒐集を終えはやてちゃんを完全なる所持者と認めさせれば麻痺が消え命の危機が消えるということも

しかし説明を聞いてもデザイナーヴァーの無表情は変わらず、ただ無言で話を聞いている。

そして全ての事情を話し終えデザイナーヴァーは不意に口を開き

「僕はそれを許容することは出来ない」

真っ向からヴォルケンリッターたちの行為を否定し叩き潰した。

「君達は主から他人に迷惑をかけてはならない。そう命令されたはずだ」

冷めた口調に戻りヴォルケンリッターたちを責めるように見つめるデザイナーヴァー

「だけど！はやての命が！」

しかしヴィーダはそれに反発し怒鳴るようにそう言つとデザイナーヴァーは視線の温度を更に下げ

「だからどうした？それがはやてちゃんを泣かせたことには関係ないだろう？今の彼女の願いは家族と共にあること……僕たちはただそれを叶えていればいいんだ。命令に背いて何かを為す必要など全くない」

吐き捨てるようにそう言い、その場にいるヴォルケンリッターたちから踵を返し家の中へと入っていく
誰にも見られずに何かを決意したような眼差しをしながら

《続く》

A・S編9話：さあ地獄の始まりだ、準備はいいか罪人よ？（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

何やらシリアスマードに突入

多分ゼ口魔より必死に案を練ってますねw

次回もお楽しみに

A・S 編10話：屈してしまったレイジングハート（前書き）

さあてリクエスト通りなんです

が
OHANASII成分がないorz

グダグダになったし

ううスランプです

誤字脱字は報告お願いします

A・S編10話：屈してしまったレイジングハート

side アルトリア

『なのはちゃんを頼みましたよ、セイバー』

彼は私にそう言ってなのはと共にいることを命じた。

この前私を助けてくれたのが彼かどうかは分からない・・・しかし私はいつまでも止まっているわけにはいかないのだ。

ずっと、前に進もうとするたびに彼の笑顔が私を苛んでいた。

彼と一緒に在りたかった、彼のいない世界で何を果たせばいいのかと

けれどいるかも分からない彼の影を見てようやく気づいた。

いつ何時も彼は私達を見ていてくれると、ならば私は立ち止まるわけにはいかない我が名はアルトリア・ペンドラゴン、赤き竜の因子を持つイングランドの王・・・そしてユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスのサーヴァント。

さあ行きますよディザーヴァー？私は負けず嫌いですからね。
貴方に負けたままではいられないのです、必ず貴方と再び会ってみ
せます。

探しに行きたいところではありませんが、まずは貴方に言い渡された
使命を果たしましょう。

なのはを必ず立ち直らせます。

s i d e o u t

ここは生物のいない荒れ果てた荒野、摩耗した大地は潤いがなくひ
び割れ、完全に死んでしまった世界である。

そしてそんな世界の真ん中に翡翠を思わせる透き通るような緑色の
瞳に金沙を集めて作った絹糸のような綺麗な金髪を持ち青いドレス
のような服の上に鎧を纏った凜とした少女が不可視の剣を地面に突
き刺し、目を閉じてある人物が来るのを待っていた。

不意に少女が目を開いた瞬間に少女の目の前に複雑な記号を絡み合

わせた魔法陣が現れ、そこから茶色の髪を二つに束ねた少女が現れる。

現れた少女は胸に赤い宝石のようなものを抱き、ビクビクと目の前で待っていた少女に目を向ける。

茶髪の少女は目の前の少女に何故呼ばれたのか分からないと問い掛ける。

「構えなさい、なのは。ここはプレシアに探してもらい、管理局にバレないように結界を張ってもらった生き物なき世界。ここなら思う存分戦えます」

金髪の少女は不可視の剣の先をなのはと言われた少女へと向け、武器を構えるよう促した。

しかしなのはと言われた少女は頑なに首を横に振り

「どうしてセイバーさんと戦わなきゃいけないの!？」

戦う理由がないと武器を構えることを拒否する。

それに対してセイバーと言われた少女は

「以前魔導師に襲われた際に貴女は武器を構えることすらせず、友の背中に隠れ震えていた……。なのは、どうして戦わなかったのですか？」

問いただすようになのはに声をかけ戦わなかった理由を尋ねた。するとなのは身を震わせながら

「戦ってたら・・・魔法を使ったら・・・思い出しちゃうの」

悲しそうな、何かを我慢するような声で俯きながらそう言うとセイバーは目を細め

「何を思い出すというのですか？」

と先程より厳しく冷たい声色で尋ねる。
なのははそれに対して俯いていた顔をあげ

「全部だよ！デイズさんと一緒にいたこと、一緒に笑ったこと。楽しかったことも悲しかったことも全部、全部思い出すの！・・・いい子じゃいられないの。デイズさんのことを思い出すとなのはいい子じゃいらなくなるの！！」

溜め込んでいた感情を爆発させるように大きな声を出し、悲しみのあまり目から涙を流しながら叫び続ける。

「いい子でいなきゃ、ディズさんは帰ってきてくれないの……
・だから私は！私は！」

もはや自分でも何を言っているか分からない状況になりながらも自身の感情を発散させていく
しかしセイバーはそれを冷めた目で見据え

「いい子にしていようとディザーヴァーは帰ってきません」

潰れそうな幼心をバツサリと切り捨てた。

「泣こうが喚こうがディザーヴァーが帰ってくることはありません」

さらになのはを傷つけるような言葉を続けていく
そう言われたのはは目を鋭くしセイバーを睨みつけ

「どうしてそんなことが言えるの！？セイバーさんはディズさんのこと好きじゃなかったからそんなことが言えるの！ディズさんのことが嫌いだから！私が彼のことが嫌いなどいつ言った！！」っ……
「……。」

なのはが言った一言に対しセイバーは激怒し獅子のような咆哮でなのはを威圧し黙らせる。

「いつ何時私が彼のことを嫌いなどと言ったのですか？」

先程の怒鳴り付けるような怒りをあらわにする声ではなく、泣くのを我慢するような声でセイバーはなのはにそう言った。なのははそんなセイバーの声を聞いて気づく、彼女が自分以上に彼がいなくなってしまったという苦しみや悲しみを堪えていたことにそこにいるものの騎士のような姿はなく愛する人に別離され悲しみに明け暮れる少女がいた。

「私だっと思って出さないと言えば、嘘になる。彼と過ごしてきた日々は今までの何よりも代え難いものです……。けれどいつまで停滞するわけにはいかないのです」

「……………」

少女から騎士へと戻り真っ直ぐになのはを見つめ凜とした声でそう言うとなのはは再び俯いてしまう。

しかしセイバーはそんなのは見ながらも言葉を続け

「貴女は進まなければなりません。一度ディザーヴァーから伸ばさせた手を払い、こちらの世界に来てしまったのだから……」

「……………」

「貴女が持っている武器の名前はなんですか？」

「……………」

「不屈レイジングの心でしょう？屈してしまった心など武器にはなりえません・
・……立ち上がりなさい、なのは。貴女がその武器を持つ限り
ディザヴァーは見ていてくれます」

「……………」

なのははそう言われ無言で自分の相棒であり、武器である赤い宝石・
・レイジングハート（不屈の心）を見つめ握りしめる。
そんなのはを見てセイバーは不可視の剣を構え

「さあ構えなさい、なのは」

再びなのははに武器を構える促した。

するとなのはギュツと力強くレイジングハートを握りしめ
俯いていた顔をあげ強い決意を秘めた眼差しでセイバーを見つめ

「レイジングハート、set up!」

『yes master』

空に響き渡るような大声で折れることなき心を込め、戦いを始める
ための呪文を叫ぶ。

そしてバリアジャケットと言われる白い服を纏い、右手には己が武器である杖を握り杖の先をセイバーへと向け

「行くよ、セイバーさん!」

セイバーへ高らかに宣戦布告をして自分の魔力を練り上げていく、
セイバーはそんな少女の決意を見て微笑み

「行きますよ、なのは!」

己が武器を携え、なのはへと切り掛かっていく

そして二人は交わりあった。

折れてしまった不屈の心は立ち上がり、少女は戦いの場へと戻っていった。

物語は更に先へと進んでいく

《続く》

A・S編10話：屈してしまったレイジングハート（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

感想がないのがすごい不安なんですけど・・・
もしかして・・・いやもしかしなくてもつまらないですか？

テコ入れでもしようかな？

いやでも変なテコ入れするとゼロ魔みたいに崩壊するし・・・

まあとにかく次回もお楽しみに

A・S編11話：スリーサイズは上から8「ダメっ！！」ギャアアアーっ！！

暖かいコメントありがとうございます。

皆さんのケアルのおかげで××は戦い（執筆）が出来ます！

シリアス（笑）パートに入りました。

これなら大丈夫！

誤字脱字は報告お願いします

A・S編11話：スリーサイズは上から8「ダメっ！！」ギャアアアーっ！！

「・・・・・・・・・・58回目」

木が生い茂る、地球とは全く違う世界に彼はいた。

右手に現代とは違う昔の錠を開けるような1m程の巨大な黒い錠を右手に携え、黒いフード尽きの銀細工のついたコートを纏った青年は低い声で数字を告げる。

目の前には傷ついた灰色のドラゴンが横たわり、フードを被っているため顔の見えない青年は錠を持っていない手をドラゴンの胸部に突き刺し

589

「謝りはしない。罪は必ず甘んじて我が身で受けよう」

そう呟いてドラゴンの胸部から丸い玉のような物を取り出した。青年は脈動するそれを握りしめた後、不意に上を向き

「まだ足りないのか？」

青年は一人ボロボロのコートを纏ったまま、そう呟いた。そして握っていた丸い玉をどこかへとしまい姿を消した。

辺りを見回すとそこには先程のドラゴンと同じように傷ついたドラゴンたちが死屍累々と並んでいた。その数は58匹……青年が告げた数と同じだった。

.....

「いつか？いつして欲しいのか？」

「……」

「ほらほら、んどつした？」

「……」

「もっとやって欲しいのか？だったら何をすればいいの分かるよな？」

「……」

「何かマアアぶってんだよ、早くおねだりしろこの雌が!!」

「.....」

「よ〜しい子だ。ちゃんとおねだり出来たい子にはご褒美がないとな」

「.....」

「これがいいんだろ?この雌!だったらちゃんと獣らしく服従をしろ!」

「.....早朝から何をやっているんだお前は?」

何やら呆れられたような声を後ろからかけられたが、そちらを向かずに

「ドSの口調で猫をなじりながら僕のゴールデンフィンガーの虜にして調教してただけです」のユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

不機嫌そうな声で後ろにいるシグナムに何をしていたかを告げる。毎日のように執拗になぶり……撫で続けたので猫たちは僕の奴隷も同然です。僕に出会った瞬間に腹ばいになり服従の仕草を見せ撫でてとおねだりしてきます。

「……………」

後ろから冷たい視線を感じながらもそれを無視してゴールデンフィングァーで猫を撫で続ける。猫は喘ぎ声をあげるように「ニャアアアアア」とか言っているがそれすらも無視する。

シグナムはそんな僕を見つめ問いただすように

「止めないのか？」

と聞いてきた。何を？などと愚かなことは聞かない、彼らの蒐集活動について決まっているから

「好きにしたらいい。僕には関係ないことですから」

にべもなくシグナムの言葉を切り捨て話はないと言わんばかりに立ち上がり、シグナムの横を通り家へと戻る。

その場に残されたシグナムが「どうしたらいいと言うのだ」と悔しげな声で怒りをあらわにしていたが、そんなことは関係ない。

これでも僕はいまだに彼らに対しての怒りが消えたわけではないのだから

家の中へと戻り、台所に立ち皆の朝食を用意する。

この家でまともな料理が作れるのははやてちゃんにライダーと僕だけである……このメンバーがいなかったら彼らの食事はシヤマルの無味無臭の素敵に無敵にイカれたファンタスティックな料理になるので、彼らは料理を作れる僕たちに逆らえず、手伝いなどを徹底させられている。

そして朝食を作り終え、料理が乗った食器が並んだ食卓は何故か陰悪だった。

「……………」

無言で僕を睨んでくるヴィーダちゃんを無視して食事を続ける僕とそれに対して何も言わず食事を取るシグナムにシャルがいるせいである。

ライダーは昨日の事件を知っているので全く気にせず食事を取り、事情を知らないはやてちゃんだけがオロオロと焦っていた。

「さっ 最近天気がええなあ〜」

そんな空気に耐え切れず、はやてちゃんはテキトーに話題をふつたが

「そうですね、天気が良すぎて皆さん途中で睡魔に負けて眠りこけているみたいですから」

「チッ」

言外に家に帰るのが遅いヴォルケンリッターたちを責めるディザーヴァーに対して、ヴィーダは舌打ちで返す。

更に険悪になっていく食卓にとつとつ主である少女がキレた。

「あぁー！朝からうざりたい！何喧嘩しとるんやー！」

はやてちゃんは僕とヴォルケンリッターたちを睨みつけ怒鳴り何故喧嘩をしているのか尋ねてきたので

「それはですね、彼らが「ディザーヴァー!?!? 貴様!?!」

真実を告げられると思いさすがに耐え切れずに立ち上がり僕を威圧するシグナム。しかしそんなことで止まる僕でもなくシグナムを無視して言葉を連ね

「ヴォルケンリッターたちが僕の魂のカケラである。巨乳Fileを捨てたんですよ!?!」

「「「「「はっ?」「」「」「」

予想外の答えに固まるヴォルケンリッターたちとはやてちゃん固まってしまった彼らをおき、僕は怒りをたぎらせていく

「酷いと思いませんか!?!?目を酷使して集めた女の子たちのバストサイズを集めたファイルを、こいつらは!?!こいつらは!?!くっ」

はやてちゃんは熱いパッションをほとばしらせ僕を冷たい目で
見据え

「……………はあ。デイズさん……ハウス」

「な…………ん…………だ…………と…………？」

外に出てデザイナーヴァー専用お仕置き場所、通称：渴望者の穴に戻るよう命じてくる。

「でもはやてちゃん！はやてちゃんなら分かりますよね！？せつか
く実らせていた果実を寸前でもぎ取られたような僕の気持ちか！」

必死に抵抗するが、更に視線の温度は下がっていき

「ハウス」

「……………くうん。」

ダメでした。

渋々命令通り潔く掘られていた穴に入り込み、放置される。

幾許かの時間が経ち、大人しく穴に入っているとシャマルがやってきて首だけ出ている僕の前に座りこんだ。

「・・・・・・・・。」

僕はシャマルを無視してただひたすら穴に籠る。
ふいにシャマルが口を開き

「どうして嘘をついたんですか？」

そう尋ねてきたので、人を喰ったような笑みを浮かべ

「はやてちゃんが悲しむからです」

そう告げるとシャマルはニコニコとこちらを見た後に・・・・・・・・
何故か砂をかけてくる。Why?

A・S編11話：スリーサイズは上から8「ダメっ！！」ギャアアアーっ！！
お楽しみいただけただけでしょうか？

スリーサイズを気にするシャマルWWW

ユウキくんのスリーサイズ測定眼はデフォですWWW

次回もお楽しみに

あああの御方の登場がだんだん遠のいていくorz

A・S編12話：再開と戦闘は紙一重・・・いや全然違っから（前書き）

グダグダorz

睡眠不足で文が変になってるキガス

誤字脱字は報告お願いします

side シグナム

ディザヴァーに言われたことを無視して私達は蒐集を続けた。

正直ディザヴァーには失望した、彼はいつ何時も主はやてのため
に行動し、我々と共にある存在だと思っていたのに・・・

ヴィータも私と同意見らしく蒐集に行くたびにディザヴァーの悪
口を繰り返して呟いている。

それに対してシャマルとザフィーラは別意見らしく、ディザヴァ
ーに対して何も言わずにいる。

ライダーは蒐集することについてとやかく言うつもりはないが主は
やての傍を離れる気はないと言われたので彼女には主はやての護衛
をしてもらっている。

・・・ディザヴァーについては何も言うまい。いつも通り
の日々を繰り返しているようであるが、我々は最近家にいることが
少ないのでその状況を把握してはいない。

しかしディザヴァーは主はやてがどんな状態であろうといつもの
ように人を馬鹿にしたような笑みを浮かべて日々を過ごしているの
であろう。

・・・家族だと思っていたのに

何故、受け入れてくれないのだろうか！？

これしか主はやてが幸せになる方法がないではないか！

ディザーヴァーに対する怒りをたぎらせながらもそれを発散するために、他の世界の原住生物へと怒りをぶつける。

攻撃を受け弱り切った熊のような生物からリンカーコアを蒐集し、闇の書へと収める。
全然足りんな。

この前魔導師の少女たちを逃がしたのは痛かったな・・・あの少女たちはかなりの魔力を内包していたからかなりのページが埋まるはずだったのだが
今一步というところで邪魔が入ってしまったからな。

以前逃げられてしまった少女たちを思い出し、更にその時の状況を思い出し舌打ちをする。

そういえば結界が崩壊した直後に飛び込んできた鎧を纏った金髪のあの女はただものじゃなかったな。

風を切り裂くように我々の前に立ちはだかり少女たちを守るように立っていたということは少女たちの知り合いなのであろうと推測し、一旦あの場から撤退した。

さすがに結界がない状態で戦闘を行っては管理局に見つかってしま
うからな。

撤退し家に帰った時にディザーヴァーと対立したのだったな。

今もあの時のことを思い出すと齒軋りが止まらない。
まさか四人全員が無力化されるとはな

あれ程までに強かったとは……..
それだけにディザーヴァーが我々を認めてくれないのが……
赦せない

あれだけの力を持ちながら主はやてを救おうとしないのが……赦
せないのである。

再びディザーヴァーへの怒りをたぎらせていると

『見つけたぞ！』

ヴィータから念話で以前取り逃がした少女を再び見つけたたと連
絡があり、その場へと向かう。既に終わってしまったているだろうと
楽観的に向かい、たどり着くとその場に広がっていたのは……..
……ボロボロにされるヴィータとザフィーラに無手……いや
見えない何かを向けている鎧を纏った金髪の女……いや青き騎士
がいた。

女はやはり取り逃がした茶髪の少女を守るように立っている。
茶髪の少女のデバイスが半壊している様子を見るとウィータが奇襲に成功し、その途中でこの女が現れたのであると推測できた。

宙に浮きながらこちらを睨みつけている女に対し、私はデバイスを取り出し構える。

「レヴァンティン」

『ja』

剣となったレヴァンティンを携え、青き騎士へ前へと立つ。

「我が名は烈火の将シグナム、貴公の名は？」

「賊に名乗る名前は持ち合わせてはいないが、敢えて名乗るであれば我が名はセイバー。騎士王なり」

名乗り返してきたセイバーに対し、腰だめにレヴァンティンを構え

「では参るぞー」

「応！」

セイバーに向け切り掛かる、セイバーはそれを不可視の何かで弾き切り返してくる。

手の握りにより位置を判断しレヴァンティンにより弾くことに成功し、一度距離をとる。

この女は強い！

間違いなく剣の腕はあちらが上・・・しかし戦いは技だけではない！

再び切り掛かるが袈裟、胴、唐竹に打った斬撃を全て弾かれ圧倒的な速度で繰り出された袈裟切りを受けてしまう。

「チッ」

あまりの力量に舌打ちが出ると同時にこれだけ強い相手と戦えることに高揚する。

血が滾り、アドレナリンが迸る。

戦え、戦え、戦えと心臓の鼓動が私をせき立てる。

繰り返し切り掛かることにより、何合も刃をぶつけ合うが一太刀も

いれることが出来ず疲労していく

そして疲労のせいで決定的な隙が出来てしまい、そこをセイバーにつかれ剣が振り下ろされようとしていた。

目を閉じ迫りくる刃を受け入れようとしたのだが、いつまで経っても痛みは来ないので目を開くと

目の前にはフード付きの黒いコート着た青年の背中があった。

青年の右手には鍵の形を模した黒い剣が握られており、それで私に突き立てられるはずであったセイバーの不可視の剣を弾いたようである。

青年は無言でセイバーへと鍵の剣を向ける。

そんな青年に守られた私は状況についていけず、目を見開き事態を見送っているとセイバーが青年へと切り掛かっていく

青年は不可視であるはずの剣をかわして、鍵のような剣を振ると同時に右足を振るった。

セイバーは鍵のような剣を弾くことには成功したが、僅差で連続に

迫る右足をかわすことが出来ずに腹部に蹴りをつけ吹き飛んでいく

・・・この男も強い。
戦い慣れている。

そんな男に感心しつつも吹き飛ばされたセイバーから目を離さずにいると、青年から発せられた低い声で

「退け」

そう言われたので、納得出来ずに反発しようとしたら

「主が捕まるぞ」

と私にしか聞き取れない声量でそう言われ渋々引き下がる。

本来こんな不審な奴を信用するはずはないのだが・・・・・・何故か信用してしまった。

男はいまだ吹き飛ばされたままのセイバーへと向き直り
どこからともなく出した球体を宙に浮かべ

『いでよ、アポカリックビースト』

そこから頭が多量にある獣を生み出しセイバーへと向かわせた。

眼差しを強くしたまセイバーがいるであろう方向を睨みつつける男を横目で確認した後、シャマルに念話を送りその場から退避する。

セイバーが青年と獣に気を取られて隙に茶髪の少女からリンカーコアを蒐集し、結界を破壊し逃走した。

……彼は何者なのだろうか？

s i d e o u t

《続く》

A・S編12話：再開と戦闘は紙一重・・・いや全然違っから（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

コートの青年のイメージはキングダムハーツ2のリク
武器もキープレードwww

次回もお楽しみに

A・S編13話：信じられるものと信じたいと思つもの（前書き）

.....じーねす。

もはや何も言ひないorn

誤字脱字は報告お願いします。

A・S編13話：信じられるものと信じたいと思つもの

「くっ邪魔をするな！」

「ほう、アポカリックビーストを退けるか」

「貴様っ！何者だ！」

「自分のことなど理解出来る奴などいないさ、そう尋ねるお前こそ何者なんだ？」

「なっ！？馬鹿にするなっ！お前のような奴に教える名前などないっ！」

「別にお前の名前なんて聞いていない」

「くっ……貴様名を名乗れ！」

「自分は名乗らずに人に名乗ることを強いるのか？笑える騎士道だ。」

それに名前を聞かれて馬鹿正直に答えるわけがないだろう、阿呆め

「貴様・・・あまりにも度が過ぎるぞ」

「真実を言ったまでだろう」

「・・・切り捨てる」

「やってみろ、戯けが」

.....

生まれ変わることが出来るのならばクーンブイドとか巨乳だらけの世界で生まれて乳に埋めたいユウキ・エンドリオール・ル・デフアンス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

なんでこんなことを考えているのかと言うと乳分が足りないのですよ！

実際は魔力なんですけど・・・最近少しハッスルしすぎまして、魔力と乳分が足りないんです。

ついそれを食卓で呷いたらシグナムに生ゴミとか虫けらを見るような眼差しで見下されました。
僕ドSなのに・・・

ああでもシグナムに首輪と犬耳と尻尾つけて調教してみたいな」

「ほう」

「裸で公園を散歩させたりとかワンしか言わせなかったりとか・・・
夢（欲望）が膨らみますね！」

「そつだな」

「です・・・よ・・・ね・・・じーぞす。」

いつものまにやら口から溢れ出ていた妄想を冷たい眼差しで後ろから
聞いていたシグナム
・・・じーぞす。

.....

.....

.....

んっここは？

あれ？祖父ちゃん？久しぶり、こんなところで何してんの？

綺麗な花畑だね祖父ちゃん。アレ？川の向こうは何なんだ？

気にするな？

ああ分かったよ。

えっ悔いのない生き方をしたかって、祖父ちゃん？

わかんないよ、祖父ちゃん。好きなように生きることが悔いのないことなのかな？誰かのために生きることが悔いのないことなのかな、祖父ちゃん？

僕にはよく分からないんだ。

えっおっばいは待つてくれない？駆け抜ける？

祖父ちゃん……………

なに、祖父ちゃんにも夢があったのか？

諦めたのかよ、祖父ちゃん。

なら祖父ちゃんの夢は僕が継ぐよ。

分かったよ、僕が性戯の味方になってやるよ

ああまかけ「孫にそんなことを任せるなあああああああああ
あああああああ—————っ!」

「はっ!? 夢か」

「どんな夢見てたんよ、デイズさん？」

シグナムに殴られ気絶している状態から目を覚ますと目の前に呆れ

た顔をしたはやてちゃんがいた。

「いやなんか懐かしい人物に会った記憶が……」

思い出そうとすると頭にモヤがかかって……
アレ僕は誰に会ったんだっけ？

最後に祖母ちゃんがいたような気がしなくもないんですが……

まあいいです。

過ぎたことを悩んでもそこにあるのは停滞だけですからね。

「でどうしたんですか、はやてちゃん？」

そう聞くと何やら悲しそうに顔を歪め俯きながら

「んっ……皆がどうしてるんかなあ〜と思って」

ポツリと呟いたので、微笑みながらはやてちゃんの頭に手を置きサラサラの髪を撫で

「大丈夫ですよ、ヴォルケンリッターたちは貴方の家族なんですから。ここ以外に帰る場所なんてないんですよ?」

励ますように話し掛けた。

はやてちゃんが顔をあげるまで優しく頭を撫でつつける。

「……………」

嫌がるそぶりを見せず目を細めおとなしく撫でられた後、不意に顔をあげ僕に抱き着いてくるので苦笑しながら受け入れ背中を撫でる。やっぱり寂しかったかもしれないね、言葉だけじゃ信じられないものがありますから……

寂しさを紛らわせるために優しくはやてちゃんの背中を撫でる。

貴女は一人じゃありませんよ、という気持ちを含めながら

暫く撫でていると落ち着いたはやてちゃんが目元を赤めながら頬を朱くし、僕から離れていく

「えへへ」

恥ずかしそうに笑っているので

「家族なんですから、気にしないでいいんですよ」

微笑みながらそう伝え再びはやてちゃんの頭を軽く撫で、すぐに手を退けると「あっ」と物欲しそうな声を出すはやてちゃん。

やれやれしようがないですね。

嘆息しながら再びはやてちゃんの頭に手を置き少し長い時間頭を撫でてあげると満足したようなので、手を退けるとはやてちゃんはその場から移動していく

それを微笑みながら見つめ

アホなヴォルケンリッターたちに怒りを沸かせる。

ああいつか絶対に全員吊します。

side ヴイータ

あの茶髪の奴からは20ページも蒐集することが出来たけど、あいつは何者なんだ？

あの鎧を着た金髪の女はなんなんだよ!?

ベルカの騎士であるヴォルケンリッターが一对一で全く手が出ず、まさかシグナムまで負けちまうとは・・・

あの鎧の女も気になるが・・・コートの男も気になるぜ

シグナムがアッサリと負けちまった鎧女と拮抗して変な獣を操りアタシたちを逃がしてくれたアイツは何者なんだ?

いつもならあんな奴信用出来ないのに、どうしてか信用しちまった。

わけがわかんねえ・・・・・・・・・・ああイライラする!

なにもかもディザーヴァーの奴がいけないんだ!

手伝わなくせに偉そうに説教しやがって!

どうせヘタレだから戦うのが怖いんだろ!

畜生畜生畜生畜生!・・・ディザーヴァーのバカヤローっ!!

あいつなんか・・・
あいつなんか・・・

くそっ

s i d e o u t

《 続 》

A・S編13話：信じられるものと信じたいと思つもの（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

Hahaha

またヤッチマツタZE

投稿画面で爆睡しちゃいましたorz

次回もお楽しみに

A・S編14話：再会・・・じーぞす。新たなる出会い（前書き）

ヤッチマッタよー

まあ元からやるつもりではありましたが

ネタバレがあるので色々と注意してください

誤字脱字は報告お願いします

A・S編14話：再会・・・じーざす。新たな出会い

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」ああ僕買い物に行かなきゃいけなかつたんです。忘れてました、ディザーヴァーうっかり、てへ」

「……………」

「ああ早く行かないと卵1パック50円が売り切れちゃいますね」

「……………」現実逃避しても何も始まりません？」

大丈夫ですよ、ギャグじゃないからみんなコメントしづらいだけですって！

馬鹿止めなさい！僕を消そうとしないでください！！
何削除ボタン押そうとしてんですか！？

ハア・・・ハア・・・ハア・・・アホ作者め、全く手間をか
けさせてくれますね！

額に浮かぶ汗を拭い、自室に籠る。

今問題なのは作者のグラスハートじゃなくて、はやてちゃんですよ。
アホヴォルケンリッターたちはとりあえず放置するとして

問題はセイバーですね、非常に邪魔くさい。街中でウロウロウロウ
ロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウ
ロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウロウ
ロウロウロウロウロウロウロウロウロウと幽鬼かゾンビかキョンシー
のように僕を探し歩いていて非常に行動しづらい。

いつそのこと帰ってきたのを告げてみますか？

なのはちゃん達には黙っているよう言った上で・・・

正直見つかった際に必ず甘い展開ではなく戦闘が繰り広げられると
思うので自分から存在を申告した方が被害が少なくなると思ひ・・・
・・・信じてます。

しょうがなくセイバーを呼び出すための魔法陣を作りあげていく、
基本はサーヴァントの召喚と同じ要領で後はこれに召喚するサーヴ

アントの特徴を書き足していけば完成です。会いに行くのが手っ取り早い方法なんですが、普通に会ったら間違いなくヤラれるでしょ？だから強制転移のような召喚で一旦驚愕させて思考能力を奪うしかないんです。そうして抱き着いちゃえば多少は甘い展開に持ち込めるはず！！

ささやかな希望を身に宿し魔法陣にセイバーの特徴を書き連ねていく

まずは『男装』次に『剣』、『身分の高い』、『絹糸のような金髪』、『翡翠のような目』、『あと』、『チビ』に『猪突猛進』と『短気』ですかね？こんだけ書いとけばあいつ以外が来るはずありませんからね、多少の確信を持ち魔法陣を起動させセイバーを召喚する。

『いで頭れよ、セイバー！！』

すると魔法陣が金色に輝きその中から絹糸のよう金髪で翡翠色をした目を持った男に見えなくもないドレスを着た少女が現れた。

「サーヴァント、セイバー。呼びかけに従い参上した。問おう、ソナタが余の奏者か？」

ただしドレスは赤く、セイバーより偉そうで胸があった。

赤セイバーにドロップキックされ吹き飛ばされる。その衝撃で詠唱を中断せざるをえなくなり、明滅しサーヴァントを送り還そうとしていた魔法陣が光を失う。

ああ僕の希望が!?

包帯で見えないであろうが涙目になり赤セイバーを睨む

「何をするんですか!?!」

「召喚されてすぐにサーヴァントを送り還そうとする奏者がどこにいるのじゃ!?!それすら赦し難いのに余を見てチェンジじゃと!?!余を愚弄しているのか!?!」

何やら一人でブチ切れている赤セイバーを無視してサーヴァントを送り還すための呪文を再び詠唱しようとしたら・・・

「貴様っ!また!ええい奥の手じゃ!!喰らえっ!!」

そう言って詠唱のため無防備になっていた僕を頭を掴み唇を奪って

いた。

しっしまった〜!!

「ふっふっふもつパスは繋いでしまったぞ？先にパスを破棄する魔術を行使しなくてはならんな？」

ニヤニヤと勝ち誇った笑みを浮かべる赤セイバーに対しorzポーズでうなだれる僕。

「まあもつともパスを消す魔術を行使している間にお前さんの意識を奪い、それ以上続けられないようにするがな」

つまりわざわざパスをつなげることにより僕に手間をとらせ、時間稼ぎしようとする算段なのであろう。

くっさすが最優のサーヴァント。頭がいいし、先程の踏み込みは見切れなかった。

そして冒頭に戻るわけだ。

ああミスしました、最近うつかりがなかったからつい安心してorz
くっ魔法使いには許されないことですね。多少落ち込みながらも色
々と考えていると赤セイバーが何やらイジイジモジモジしているの
で不思議に思い声をかけると

「どうした、赤セイバー？」

「いや、その余としたことが名前を聞き忘れておっとな」

ああだから恥ずかしがってるんですか、まあプライド高そうですも
んね。

「僕はユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラト
リスことディザヴァーです、気安くディズとお呼びください」

「うむ、しかとソナタの名前を把握したぞ奏者よ。奏者が名乗った
のであれば余も名乗らなくてはならんな、余の名前はネロ・クラウ
ディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクスである」

「……………じーぞす」

マジデスカ？

《続く》

A・S編14話：再会・・・じーざす。新たな出会い（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

Fate/Extraからセイバーが参戦！

オツパイ、オツパイ、オツパイ、オツパイ！！

沸き上がるオツパイへの衝動

赤セイバー最高！

次回もお楽しみに

A・S編15話：おお乳よ、悔い改めよ。さすればバストサイズが・・・（前書

うんなんかグダグダだおorz

9月30日が楽しみですね

映画版見られなかったのでDVD買わなきゃ！

魔法使いの夜は・・・やめておこう

誤字脱字は報告お願いします。

A・S編15話：おお乳よ、悔い改めよ。さすればバストサイズが・・・

ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス
帝政ローマの第5代皇帝にして、生涯を謀略と毒とに彩られた悪名
高き暴君、ネロ・クラウディウス。

本人曰く、男装をしているのは男として育てられたわけではなく、「
男も女も好きだから」との事。

あらゆる宗教勢力やローマ元老院を弾圧した事から『暴君』と呼ば
れてはいるが、生前は市民を愛し、第一と考える為政者であった。
しかし、彼女の市民に対する「愛」は彼らの求めた「愛」と違い、
彼女は誰からも愛される事無く、最後には何度も躊躇しながらよう
やく喉に短剣を突き刺し自決したが、彼女は自分の人生を思う存分
楽しんだと、苦悩に塗れた自身の人生を悔やむ事は無かったらしい。
唯一心残りなのは市民を愛したが市民からは愛されていないかったこ
とらしく、誰からも愛されずこの世から去ったこととのこと。

635

「また難儀なサーヴァントを引き当てましたね」

「奏者よ、難儀とはどういふことじゃ？」

「別に」

前から睨みつけてくる赤セイバーから目を逸らす。
にしてもここでこういう失敗をしますか・・・

「まあとりあえずネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスよ。我が剣となることを誓うか？」

「主ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリスの名にかけて、我が身を汝に預け剣となることを誓おう」

「ここに契約は完了した。これからよろしくお願いしますね、赤セイバー？」

「うむ！と了承したいとこなのじゃが、その赤セイバーという呼び方はなんとかならんか？」

「いや普通にセイバーだとアルトリアと被りますし、他の呼び方は・・・」

区別するために呼び方を考えていると何故か目の色を変えた赤セイバーが襟を掴み前後に揺さぶってくる。

「奏者よ！余以外にセイバーというかサーヴァントがいるというのか！？」

「はい、彼女も僕のサーヴァントですよ」

面倒なので正直に打ち明けて、今の状況について全て伝えると

「フッフフそうかそやつのせいで余が赤セイバーなどというふざけた名前で呼ばれ、余以外のサーヴァントがいるせいで奏者の寵愛を一身に受けることが出来ないのじゃな!？」

「えっちょっネロさん!？」

何やら低く笑い暴走している赤セイバー

「余以外に奏者にサーヴァントがいるなど赦せぬのじゃ!待っているがいい奏者よ!今からその不埒ものを仕留めてソナタの信用と寵愛をこの身に受け入れようぞ!」

結局赤セイバーは暴走したまま剣を振り回し部屋から飛び出していく数分経った頃

『奏者よ!不埒ものの真名はなんじゃ!??』

何やら焦りぎみの念話が届いたので嘆息して赤セイバーの疑問に答

える。

『アルトリア・ペンドラゴンかの騎士王ですよ』

『なんとアーサー王であったか！うむ剣を交えるのが楽しみになってきたぞ！奏者よ、身体を清め床にて待っているがいい！』

興奮したような声と共に念話が切られ、赤セイバーと連絡がつかなくなつた。

というか身体を清めつてなにさらす気なんですか？

しかも完全に暴走している、そんなに他のサーヴァントを従えているのが気に入らないものなんですかね？

というか何する気なんですか？ちゃんと味方だと説明したのに、まさかセイバーを襲撃するとか？いやいやさすがにしない……しそうですね……扱いづらいサーヴァントです、あの娘。

……お仕置きと調教が必要なようです、上級者用緊縛教本であの娘の身体に上下関係というものを刻み込む必要がありますそうですね。

クックク

DSな笑みを浮かべながら紐を用意して赤セイバーの帰りを待っている主人公……変態以外の何者でもない。

- - - - -

「邪魔をするなああああーっ!」

「はあ!」

「ちっ」

この赤い少女と戦うのはこれで二度目である。少女が力強く振るってきた槌を弾き、横一文字に斬り返す。少女は迫りくる刃をバックステップでギリギリでかわし事なきをえて、舌打ちをしつつ再び槌を構える。

なのはと会うために高町家を訪れたフェイトが高町家から帰る途中でなのはを襲った集団に襲われ、それに気づき迎撃しているのである。

なのはを守ることが出来ずにいたのに再びフェイトまで襲われるわけにはいかない!!

デイズヴァーからの願いを守ることが出来ず無様に退くわけにはいかないのだ!!

「そりゃあそうだったな！…いくぞ！」

少女とシグナムは軽口をきくように会話しあい再び武器を構え、こちらに向かってこようとしている。

しかし

「見つけたあああああああーっ！！！」

突如乱入してきた何かにより、戦闘が中断される。その何かは私に向かって剣を振るい私を弾き飛ばした。

「フツハハ八見たか！余の力を！あんなペチャパイには負けはせんぞ！…！」

私を吹き飛ばし高らかに笑っている者の前まで戻り驚愕する。

「っ！？貴様っ！何者だ！？」

それは私にそっくりな少女でところどころ違う少女が巨大な剣を肩に担いでいたのである。

「余の名はセイバー！貴様からセイバーの座を奪いにきたのじゃ、この前後不明瞭！！」

「なっセイバーだと！？貴様サーヴァントか！？というか先程から何を言っているのですかっ！！」

登場からずっと私の胸部を馬鹿にした発言をしてくる。
………許しません。

「ふっ余と汝の優劣を決めておるのじゃ。まず余の方がセクシーじゃ！そして余の方が可愛いくてキュートじゃ！」

「なっ！？」

「そして何より！余の方が乳があるということじゃ！！ハッハハ、やあ〜いペチャパイ、貧乳！」

「………潰します」

こうして新しいセイバーの登場により皆が呆然としている中、再び戦闘が開始された。

《続く》

A・S編15話：おお乳よ、悔い改めよ。さすればバストサイズが・・・（後書）
お楽しみいただけただけでしょうか？

次回はセイバー同士の醜い争いWWW

次回もお楽しみに

A・S編16話：アレ？僕の活躍は？主人公の出番は！？（前書き）

今回はユウキくんが活躍しません

誤字脱字は報告お願いします

A・S編16話：アレ？僕の活躍は？主人公の順番は！？

- - 斬！ - -

- - 轟！ - -

セイバーの不可視の剣と赤セイバーの巨大な赤い剣が激突し、二人は互いの剣がぶつかつた衝撃で吹き飛び二人の間に距離が開く

「くっ」

「ちっやりおるな！！さすが騎士王、剣技においてはそちらに一日の長があるようじゃな！！」

「なっ貴様！？どうして私の真名を知っている！？」

「フツハハ！！何故余がそのようなことを教えなければならぬの

「くっこの馬鹿力めっ!!」

「その馬鹿力に打ち合っている人がよくそのようなことを言えますね!!」

「余は剣の遠心力を剣撃に加え、威力を上げているのじゃ! オヌシのような野蛮な腕ではない故にな!」

「何を言うのですか!! 私は魔力放出により肉体が強化されているだけです!! たかが遠心力だけでそれに肉薄する貴女に野蛮扱いはされたくありませんね!!」

「はっ!! 何を言うか遠心力の偉大さも分からずに遠心力を馬鹿にするとは地に堕ちたな騎士王!」

「何を意味の分からないことを言っているのですか、この両刀使いが!!」

「ふんっ!! 美少年であろうと美少女であろうと美しければよいのじゃ!! まあオヌシには理解できるとは思えぬがな!」

「わかりたくもありません!!」

口論は醜い争いではあるがそれに比べ、剣撃の放ち合いは互いに剣兵として呼び出される程であり、魅了されるほど美しく圧倒されるほど凄まじい。

そして止むことのない斬撃の応酬が続く中、不意に二人は再び距離をとり互いの獲物をそれぞれの得意な位置に構え、次の一撃で決着をつけると言わんばかりに二人が放つ威圧感が高まっていき

- - 爆! - -

爆発音のような二人の踏み込みと共に

二人は交錯した。

その際に生じた衝撃波により、周囲にあったビルが悲鳴をあげ煙が舞い散り二人の状況が見えなくなる。

その場にいた者たちが見えたのは二人が剣を振るった瞬間のみ、勝敗が分かるのは剣を振るった二人のみとなる中で濛々と立ち込めていた煙が晴れる。

そこには……………

「なっ!?!」

以前現れた黒いコートを着て顔の見えぬようフードを被った青年が右手には以前使っていた黒い鍵のような剣を持ち、それでセイバーの剣を防ぎ、左手には以前とは色の違う白い鍵のような剣を携え、それで赤セイバーの剣を防ぎ二人の真ん中に立っていた。

「……………赤セイバー。マスターからの命令だ、退け」

青年は押し殺したような声で赤セイバーにそう告げると

「なっ!?!マスターからじゃと!?!くっ……………」

驚愕した後に苦虫を噛み潰したような顔を浮かべ

「この勝負預けたぞ、騎士王!…………して黒い外套の者よ、何故奏者を知っておる?」

そう吠えた後、再び剣呑な雰囲気を出していきなり現れた青年を疑いの眼差しで見るが

青年はそれを全く気にした様子を見せずに

「早く帰ってこなければ《座》に帰すとも言っていたぞ」

それを聞いた赤セイバーは顔色を変え、青年を気にせず駆け始める。

「くっおのれ奏者めっ！！まだ諦めておらんかったか！！」

赤い彗星のような速さで駆けぬけ、すぐに目では追えぬ速度となり、見失ってしまう。

相対していた人物の一人が消えたことにより、場が動かずに固まるが、いまだセイバーは隙を見せず黒いコートを着た青年を睨みつけている。

「私の偽物は逃がしましたが……貴方は逃がしません」

セイバーは不可視の剣を黒いコートの青年へと向け威嚇するが青年は顔を隠したままフードの奥でクツと低く笑い

「この前逃したのに今度は捕まえられるとでも？」

セイバーを馬鹿にするような声色でそう言った。するとセイバーから膨大な魔力が放出され風が荒れ狂う。

「……………」

無言ながらもどこか逆らい難い威圧感を発するセイバーはそのまま青年へと肉薄し剣を振るう。

「ふっ」

青年はそれを予想していたかのように右手の鍵剣でそれを防ぎ、左手の鍵剣を振るいセイバーの腹部を叩こうとするが

「甘いっ！…！」

セイバーは防がれた剣を高速で引き戻し、剣で青年からの攻撃を弾く

青年は基本的に片方で受けそれと同時に片方で攻撃するという手段をとっているが、セイバーの人並み外れた速度により防がれ中々決着が決まらないでいる。

先程と同じように凄まじい剣撃が続く

しかし先程の赤セイバーとの戦いにより疲労が溜まっていたセイバーに一瞬の間が出来たのを青年は見逃さず、片方の鍵剣を振るう同時に反対側の鍵剣を追走するように振るい強引にセイバーを吹き飛ばし距離をとる。

そしてその隙にセイバーと青年の戦いに魅入っていたヴォルケンリッターたちの近くまで飛んでいき彼らを引き連れ

『テレポート』

姿を消した。

セイバーはそれを見て歯噛みし、再び青年を取り逃がしてしまったことに怒りを覚えながらも、フェイトを守り抜けたことに安堵した。

ヴォルケンリッターたちは違う次元世界へと飛ばされ、砂嵐が吹きすさぶ世界にて再び青年に助けられたことに疑問を感じながらもいきなり現れたセイバーと同じ強さを持った赤セイバーを警戒しながら、助けてくれた青年に礼を告げた。

顔の見えない青年はそれに対し気にするなと言うように手を振り、懐から丸い球体に入った瓶を闇の書を携えていたシヤマルへと渡した。

「これはなんですか？」

シヤマルは不思議そうに瓶を見回し、色々な色に輝く球体を観察している。青年は口を開き

「リンカーコアだ」

青年曰く、色々な世界へと飛び蒐集したものを一つに集めたものらしい。

正体の知れぬ者からの贈り物なので警戒しつつも、少しでも足しになればとあまり期待せずに闇の書へと納めると

「300ページ!？」

「「「なっ!？」」」

一気に莫大な量が埋まり思わず驚愕の声をあげ、それを聞いた仲間たちが愕然としたような声をあげる。

シヤマルはどのようにして蒐集したか尋ねようと闇の書から顔をあげる青年がいたはずの場所に姿はなく、いつの間にか姿を消していた。

「いつの間に……………」

ヴォルケンリッターたちは彼の正体が気になったが、今分かることは何もなかった。

そして何事もなかったかのように八神家へ帰宅すると……

「うむ、よく帰ったぞ」

赤セイバーが堂々と居間でお茶を楽しんでいた。

《続》

A・S編16話：アレ？僕の活躍は？主人公の出番は！？（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

何やら後半が杜撰な感じになってますが、そこらへんは気にせずに

次回もお楽しみに

A・S編17話：理不尽なんかいくらでも世間に転がっているけど・・・あくま

・・・。

激励と感想ありがとうございました。

皆さんのおかげで××は少なめに元気です

誤字脱字は報告お願いします

「ぬっ奏者よ。こやつらは家族ではなかったのか？」

夜遅く家に帰ってきたかと思えば、居間にて僕の横でのんびりとお茶を啜っていた赤セイバーを見て驚愕をあらわにし、目を見開いて無言で挨拶を返さずにいるヴォルケンリッターたち。

固まってしまっている彼らを見て、赤セイバーは眉を寄せ訝しげな眼差しを送り、そう尋ねてくるので質問の意味が分ならず小首を傾げながら聞き返すと

「ええそうですけど、それがどうかしたのですか？」

少し怒ったように頬を膨らませて

「家族であれば、ただいまと返すのがこの国の伝統ではないのか？」

ヴォルケンリッターたちを睨みつけるように言うので、その様子を
見て苦笑しながら

「彼女達はシャイなので、初めて会った貴女に緊張しているのですよ」

多少ヴォルケンリッターたちを責めるニュアンスで言うと
呆然としていたシグナムがそれを聞いた瞬間

「・・・ディザーヴァー」

「なんですか？」

「・・・体育館の裏でお話しないか？」

「なんですか、その典型的なイジメスポットは？」

目から光が失われながらそう言われたのでシャレに聞こえないんですか？

しかもどこの体育館！？

するとそれを見咎めたのかシャマルがシグナムの肩に手を置き

「シグナム」

「なんだシャマル？」

「手近なトイレとかで済ませましょう」

「最近の定番ですね、分かります」

とおほざきになられた。うん、ブルータスブルータス。

「いや庭に埋めて、スイカ割りみたいに潰そうぜ」とエターナルロリータレッドが提案するので

「もう皆さん完全にやる気満々じゃないですか……………」

多少呆れながらゴゴゴ！と威圧感を発しながら背中から何かを出しかけている三人を見つめていると

ポンッ

ザッフィーが僕の肩に前脚を置き慰めるように肉球を押し当ててくる。僕の味方はザッフィーだけなんですね！！ザッフィーの優しさに涙していると……

「……ザッフィーラ」「」

「ワン」

ザッフィーは名前を呼ばれると同時にパブロフの犬の如く、条件反射で僕の首襟を噛み、庭へと引きずっていく

うん、仲間なんかいない。

先程まで奏者、奏者とうるさかった赤セイバーは何やら楽しげにライダーとはやてちゃんとの会話に花を咲かせている。減点3と・・・10溜まったら絶対に《座》に帰してやります。

どうしようもないことを心に誓いながらも庭に放り出され、赤セイバーについて詳しく説明されるよう迫られる。

最初は関係ないと言い張っていたのだが、そう言うたびに近づいてくる剣と鎚が怖くてガタガタと震えながら間違えて召喚してしまつたサーヴァントであると伝え、自分以外にセイバーがいるのが許せないと家を飛び出していき今さつき帰ってきたことを告げる。

その後、黒いフードの男に伝言頼んだかと尋ねられよく分からなかったので首を傾げていると餅つきのお餅の如く、速く重く振り下ろされる鎚がギロチンのように迫ってくるので知らないと言うとヴォルケンリッターたちは何やら困惑した様子を浮かべていた。

その後、地面に埋められて長時間交代交代で虐められ既に次の日の朝となり、ヴォルケンリッターたちは僕を放置し朝食とっている。

日曜日なのに何故こんなことを？

自分の待遇の悪さに絶望しつつも

これ以上あの場においてもロクな目には合わないだろうと思い、庭からヴォルケンリッターたちの隙をみて全力疾走で逃走した。

いい汗かいたぜ的な笑顔を浮かべつつ、額に浮かぶ汗を拭い息を荒げながら公園へと入る。いつの間にかくつついてきていた僕のペット（仮）である猫たちを抱き上げ、一緒にベンチへと座り猫を遊ぶ。

「ニヤツ!?ニヤア〜ン!」

何やら甘ったるい嬌声に聞こえなくもないが気のせいであろう、うん気のせい気のせい。

えっ?別に悪魔の笑みとか浮かべながら撫でてないですよ?複写眼で猫ちゃんたちを確認したりなんかしてませんよ?

・・・ニタリ(・・・)

猫たちを僕のゴールデンフィンガーの虜にしつつ、公園を見回していると・・・

優しそうな笑みを浮かべた巨乳の素敵なお姉さんを発見した。
うん、今日はまだ乳分を摂取していませんから彼女から摂取しまし
ようー!!

そうと決まれば変身っ!!

久方ぶりにユウキ・アンペラトリスへと姿を変え、迷子になって泣
きそうな子供の顔をしながらお姉さんへと近づいていく

ふっこれなら大抵の女の人は母性本能をくすぐられ、僕へと引き寄
せられます。そして近づいた瞬間、不安げな上目遣いをして女の
人に抱き着き乳を楽しむのです!!

664

最低最悪なプランを実行しようとした瞬間

「・・・えっ?」

聞き覚えのある柔らかい声が聞こえた。

錆び付いたロボットのようになりぎぎと後ろを見るとそこには、藍色

の髪をリボンで縛った可愛らしい少女・・・通称、遠坂桜が僕を見つめ呆然と立っていた。

「・・・・・・・・・・じーぞす」

予想外の出来事に混乱しつつ、ジリジリと後退していく

このままここにいたら狩られる!!
ライオンの前に引きずり出されたウサギのような気分で再び駆け抜けようと下半身に力を込めていると

「ふえ・・・ふっつわあああああ~~~~~~~~んっ!!」

「えっちよっ!?!」

泣きながら抱き着いてきた。さすがに泣かれるとは思っていなかった。たので焦ってしどろもどろになっていたら

「桜を泣かしてんじゃないわよ!?!」

横から弾丸のような速度のドロップキックを喰らい吹き飛ばされ、公園にあった藪の中へと突き飛ばされる。

ちなみにその際桜ちゃんは泣きながらも腕を離して、一緒に吹き飛ばされないようちゃんと安全を保っていた。

突き飛ばされた藪から這い出て、くっついていて小枝やら葉っぱを払ってるいると

「あれ？あんだ、ユウキじゃない！」

今気づいたと言わんばかりに驚きの声をあげ、こちらに駆け寄ってくるあかいあくま（小）
どうやら相手を確認せずに蹴り飛ばしたようである。さすがとした言いようがないですね。

心裡で凧ちゃんを褒めているか、けなしているか分からない評価を付けつつ、駆け寄ってくる凧ちゃんを待っていると

ドンッ！

「桜に心配かけてんじゃないわよー!」

再び助走つきの強力なドロップキックを喰らい藪に叩き込まれた。

「……………だから君達があかいあくまっって呼ばれるんですよ
吹き飛ばされながらも平行世界にいるであろうあかいあくまも含め
て遠坂凜に脳内で文句を言った。」

《続く》

A・S編17話：理不尽なんかいくらでも世間に転がっているけど・・・あくまで
お楽しみいただけただけでしょうか？

劇場版 Fate の DVD 買いました

うん or z としか言いようがありませんね
好きな台詞は言わねえし

(つゝ、) もうダメポ・・・

次回もお楽しみに

A・S編18話：・・・・・・・・データが喪失しましたorz（前書き）

サブタイトル通り

全部消えたorz

執筆中の作品だけでよかつた

頑張つて書き直しましたorz

誤字脱字は報告お願いします

A・S編18話：・・・データが喪失しましたorz

「あんだ今までどこ言ってたのよ!？」

「ひぐつ、うわあ〜ん、ユウキくうっくうっく〜ん
! !グスッ」

「ちょっと聞いてんのアンタ!？」

「スンッ、もういなくなったりしませんよね?グスッ、もう私の前から消えたりしませんよね？」

何このカオス、どうもユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーことユウキ・アンペラトリスです。

前回、駆り立てる欲望のまま行動した結果遠坂姉妹に見つかり、姉にロケットドロップキックというキンマンも真つ青な威力の必殺技をくらい吹き飛ばされ捕獲されました。

モンで捕まったモンスターの気持ちがかかりますね

軽口を聞きながらも、収集のつかない状況に辟易しつつなんとか場を納めようと努力する。

「落ち着け」

久しぶりにユウキ・アンペラトリスになったので口調を忘れそうだったが、変身して喋ってみると案外簡単に思い出せた。もしかしたら身体が記憶していたのかもしれないな

真面目な顔して色々考えてはいるものの一人には首を絞められ、もう一人には肋骨を折らんばかりに抱き着かれているので格好も何もなかった。

しばらく経ち漸く落ち着いた二人に席に座るよう促し、今までどこにいたかを嘘八百で説明して、とりあえず両親が亡くなり親戚に引き取られたという設定にしておいた。

両親が亡くなったと聞き二人が暗い顔をしてしまったので二人の頭を撫でると二人共顔を真っ赤にして俯くまでは一緒だったのだが、片や恥ずかしそうにもじもじとし、片や全力で中国拳法の一つである鉄山扉（肩からぶつかる体当たり）をかましてきた。

この娘は間違いなく、あの愉快型礼装の力（対象の可能性を引き出し、平行世界においてその人物が使っている技術などを使える）を借りて平行世界の‘遠坂凜’の力を獲得してますね、あんな重い鉄山扉は小学生が放てるものじゃありませんから

何時ものように藪に吹き飛ばされ、藪から這い出たあとに二人にベンチに座るよう促しと共に他愛のない話を始める。

学校が楽しいかとか今日は日直だったとかお弁当の中身とか・・・まるでこの場で別れたら二度と会えない人と話すように、その人と少しでも離れたくないと言わんばかりに話し続ける。

桜は一生懸命話題を探しながら話し続け、凜はそんな桜を悲しげな表情を浮かべた眼差しで見つめながらも相槌をうっている。

大分日も暮れていき、話すこともなくなってきた・・・

「それですね」

「もう遅いから帰るぞ」

「っ・・・・・・・・」

それを聞き流暢に話していた口を閉じ、ビクツと身を震わせる桜そんな桜を見ないようにしながらベンチから立ち上がり、その場から離れよつと歩き出した時

「待つてくださいつ！！」

桜が僕の袖を掴みイヤイヤと駄々をこねるように、必死に引き止めようとしてくる。凜はそれを見て何も言わずに悲痛そうな顔をしていた。

桜に捕まれた袖を見て、しょうがないと言わんばかりにため息をつき、桜の頭に手を置き優しげな笑みを浮かべながら

「泣くなよ桜。大丈夫、言っただろ？お前が《渴望》する限り僕はお前の友達でいると。会えなくなるわけじゃないんだ、必ず何時でもお前に会いに来る」

髪を撫でるように手を動かし、俯いてしまった桜をあやすように優しく話しかける。

桜は漸く納得してくれたのか沈痛そうな面持ちのまま俯き、首を縦に振って言外に理解したことを告げてくる。

そのまま桜を撫で続け、しばらく経ってから手を離し今度こそその場から離れようとしたら・・・

「・・・結界だと？」

公園に結界が張られ、公園内へと閉じ込められる。既に公園内には僕と桜と凜しかおらず、完全に逃げようがなくなっていた。

「チッ」

舌打ちをしながらも急いで凜と桜に駆け寄り、状況を理解していない二人の手を取ると

「ちよっ！？」「えっ！？」

何故か手を握られ、顔を赤らめている二人。

それを気にせずに手を引きながら結界の端まで走ろうとすると

「待って」

聞いた覚えのある声で静かに停止することを促され、しよすがなく二人の手を握ったまま停止した。

そして頭上からピンク色の髪をポニーテールにした女・・・シグナムがゆっくりと降りてくる。

僕の背後にいる二人は空中から現れたシグナムを警戒しつつギョッと僕の手を握ってくるので、握り返して「大丈夫だ」と言葉を用いずに二人に伝える。

そんな二人を守るようにシグナムに立ち向かい、縮んでしまったので下から見上げるようにシグナムを睨みつける。

「何の用だ、乳のでかい姉ちゃん？」

そんな軽口を聞いた瞬間、後ろからお尻を蹴り上げられたがシリアスシーンなのでカットしつつシグナムを見据える。

乳のでかい姉ちゃん呼ばわりされたシグナムは頬をヒクヒクと引き攣らせ、怒りをあらわにして武器であるレヴァンティンを構えたので、背後の二人を後ろ手で抱き寄せ庇う。

「お前には用はない、あるのは後ろの二人だけだ。潔く魔力を渡せば傷つけたりはしない」

そんなことをほざくなら最初から武器構えるなよと思ったが口に出さずに、人を喰ったように口元を歪め笑う。

再びレヴァンティンを構えた瞬間、シグナムの背後に赤い髪をオサゲにしたヴィータと金髪のショートカットのシヤマルに白髪の筋骨隆々なザフィーラが現れ、ヴォルケンリッターがこの場所に一同となった。

「遅えぞシグナム」

どうやら遅いシグナムを心配して駆け付けたようなのだが・・・面倒なことこのうえない。

「お仲間が勢揃いか？」

「そうだ我等はヴォルケンリッター、主の剣となり、楯となるものたちだ」

軽口を聞くとともに返されてしまい、話が続き後ろの三人もシグナムに立ちはだかる僕に注目している。

「なんだそのガキは？」

ヴィータがハンマーを構えながら訝しげ眼差しでこちらを見てくる

嫌われてしまうのを恐れるよりも……やることがあるんじゃないのか？
あるんじゃないんですか？

糸の切れた人気のように立ち上がり、再びシグナムに立ちはだかる。

「っ!？」

そんな僕を見て驚愕な面持ちをするシグナムに対して僕は低く笑いながら後ろにいる二人に謝る。

「今まですいませんでした」

「「えっ!？」」

二人は何故謝られたか分からないというように声をあげ驚きをあらわにしているので、そのままシグナムを見つめ

「最初からこうするべきだった……姿がバレても守りたいものなんだから」

そう吹き力強く、困惑するヴォルケンリッターたちを睨みつけ、魔力を解放する。

「……なっ!?!」「……」

吹き上がる魔力は土埃を巻き上げ、僕の姿を隠し、外から僕の姿が見えなくなつた。

僕から発られた膨大な魔力に驚愕するヴォルケンリッターたちと土埃の中に隠れる前に目があり、それを見て笑う。

「ふんっ!?!」

元の姿へとディザーヴァーの姿へと戻って力強く右手を振り払い、舞い散っていた土埃を消し去り

「サーヴァント、ディザーヴァー。友を守るべく推参した」

威圧するようにヴォルケンリッターたちを睨みつける。

そして、そこに友を守るべく魔眼を持ちし霸王が君臨した。

《続く》

A・S編18話：・・・・・・・・データが喪失しましたorz（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

急いで書いたのでやっつけ仕事のような感じですが
今日はこれで勘弁してください

次回もお楽しみに

A・S編19話：関係ないことは関係ないんだ（前書き）

どうも皆さん感想ありがとうございます

リアルが多少落ち着いてきたのでこれから送られてきた感想にはコメントを返して行きたいと思います

ちなみに昨日は祖母の四十九日のため更新をお休みさせていただきました

何とぞご容赦を

誤字脱字は報告お願いします

A・S編19話：関係ないことは関係ないんだ

突然の事態に呆然とする凜ちゃんと桜ちゃんを尻目に彼女たちを守るように背中に庇いながら

凜ちゃんと桜ちゃんに襲い掛かろうとしていたヴォルケンリッターたちを睨みつける。

「退け」

強烈な威圧感を込めてそう告げると、威圧されながらも気丈に振る舞い

「くっ……今退くわけにはいかんだ！」

シグナムが万感の感情を込めてそう叫んでくる。

「彼女たちは戦う者じゃない。戦う者から蒐集するのであれば、僕は決して文句やケチをつけたりはしない」

「……………」

僕がボソボソと何かを呟くのを必死に聞き取るうと無言になるヴォルケンリッターたち。

「でも本当は君たちがあの娘を襲っていた時も止めたかった、あの娘を守りたかった……けどな、あの娘は僕の手を振り払い、この道を通ると決めたんだ。なら僕が手を出すことは間違っている、そう思ったからあの時はどんなに辛くても、悔しさのあまり唇を噛みちぎるうとも手を出さなかった」

「何を言っているんだ？」

一人で勝手にぶつぶつと何かを呟いていた僕の世界を聞き取れずに困惑を感じているようだ……そんなこと知るか！！

「けど！今は違う！！彼女たちは僕の友達！そして守りたい者だ！僕からそう簡単に大切な者を奪えると思うなよ？」

言葉だけで揶揄し伏せるような威圧感を発してヴォルケンリッターたちの行動を制して戦う意志を口上で言い放つ。

「我、魔眼王！！友を守り、家族を糾すために推して参る」
身動きのとれない四人の真ん中へと移動し、全員を四方へと蹴り飛ばす。

それをきっかけにヴォルケンリッターたちと僕の戦いが始まった。

不意打ちをくらい見事に吹き飛ばされたヴォルケンリッターたちは、すぐに体勢を立て直し一番最初に体勢を整えたザフィーラが拳を振り上げ、僕に突っ込んできたので

「よっつと」

「ぬっ！？」

殴り掛かってきた右腕を掴み、体勢を整えこちらに来ようとしていたシグナムに投げつけ、二人をぶつける。

次に呪文の詠唱を開始していたシャマルの前に《転移》し、足を掴み今度は後ろから突撃していたヴィータちゃんにシャマルを振り回してぶつけてシグナムとザフィーラのところまで吹き飛ばした。

4人が重なったのを確認して、変身と同時に自由になっていた右腕をあげ

『地獄の石柱・劣化：お仕置き石柱くん』

空中に細い石柱を多量に待機させる。

その石柱が乱立している様を見たヴォルケンリッターたちは過去に僕がブチ切れた際に喰らった石柱を思いだし、その時の恐怖で顔を青ざめていくのに対して、僕はそれを口元を歪め獲物を見つけたようなドSの笑顔を浮かべながら右腕を振り下ろす。

『降れ、お仕置き石柱くん・時雨』

右腕を振り下ろすと共に雨のように石柱が次から次へとヴォルケンリッターたちへと降り懸かり、彼女たちが防御に専念し身動きがとれないようにした。

その状況に追い込まれたヴォルケンリッターたちは再びの敗北が近づいていることに気づき、自分たちの無力さに怒り歯を食いしばりながらも必死に障壁を張り降ってくる石柱の雨に堪えている。

このままだと散らばった石柱が自然環境に悪いし、石柱を出すのも億劫になってきたので再び右腕を振り上げて、よく狙いをつけてから

『お仕置き石柱くん・雨垂れ』

右腕を振り下ろすことにより巨大なお仕置き石柱くんをヴォルケンリッターたちの真上に落とし、障壁に輝を入れる。

輝が入った障壁に向かって小さなお仕置き石柱くんが再び降り注ぐちなみに地獄の石柱はただ単に物理ダメージを与えるだけだが、お仕置き石柱くんはぶつかつた人物が過去に体験したことのあるちよつと嫌だつたことを思い出させるという厄介な嫌がらせ魔法である。

この魔法は中々人の言うことを聞かない困つた部下たちを懲らしめるために作つた魔法なのでこの場においての相性は抜群であろう。

あつ石柱が障壁を貫通してシャマルに直撃しましたね。

石柱が直撃したと同時にシャマルは棒立ちになり、次の瞬間

「・・・・・・・・オバサンじゃないもん」

という言葉と共にorzポーズに崩れ落ちひたすら地面にのの字を書きはじめた。

クックク交換抜群ですね。急なシャマルの変化に残りのヴォルケンリッターたちは驚愕し、漸く気づいたようだこの石柱の効果に

「地味な嫌がらせだな！！この程度ベルカの騎士である我々には効かん！」

何やらシグナムが叫んでいるがその割には本人必死でお仕置き石柱くん避けてますし、というか一人既に犠牲者が出てますから

いまだにブツブツと何かを呟いているシャマルを尻目におきながら必死に石柱を避けつつけるヴォルケリッターたちを無視して、ずっとこちらを睨みつけるように見ていた遠坂姉妹に向き直る。

「今まで騙していてすいませんでした………やっぱり嫌いになり「ナメないでくれるかしら！！」痛っ！？何その言葉に今のピントは必要不可欠なものなんですか！？」

謝罪の念を込め頭を下げた瞬間、その頬を凜ちゃんに思いつきり叩かれ怒鳴られる。

多少の理不尽に突っ込んだ後、頭を下げた状態から真面目な顔をしている遠坂姉妹の顔を見上げると

「……ふぁにをふるんでふか？」

姉妹によるコンビプレイにより両側の頬をそれぞれにつままれる。

「私はユウキ君がどんな存在であれ、ユウキ君とは友達なんですよ」

「さっ桜がそう言うからしょうがなく友達になってやるんだからね
!！」

桜ちゃんには春のような暖かさを込めた微笑みで言われ、凜ちゃんにはツンデレのようなツンデレさを込めたツンデレで「ツンデレしかないじゃない!!」そう言われた。

690

そんな二人の言葉に一度は啞然としたが、真摯に僕を見つめる二人の眼差しを感じて微笑み

「ありがとうございます」

二人の暖かさに感謝した。

……一つ目の問題はほぼ解決しましたがあとは

「次会った時に必ず事情を説明します」

二人に向かってそう言ってから今なお石柱を避けつづけるヴォルケンリッターたちに向き直る。

後ろから

「早く会いにきなさいよ!!」「待ってますからね」

という暖かい声を聞き、微笑みを深めて指を鳴らす。

《転移》

後ろの二人に被害が行かぬようヴォルケンリッターたちをまとめて人のいない次元世界へと転移させ、そのまま一緒に転移し再びヴォルケンリッターたちと向かい合う。

「……道を選ぶということは必ずしも安全な道を選ぶことではありません。貴方たちが選んだ道は最も安易で最も愚かな道です……その先に待っているのは行き止まりだけですよ」

「うるさい！！貴様に何が分かる！！」

それを聞き付けたシグナムが石柱を気にせず怒気をあらわにこちらを睨みつけ怒鳴りつけてきた。

「だけど、正しかろうが間違いだろうが突き進もうとした信念に間違いはない・・・だからその信念は否定はしません」

「・・・・・・・・。。。」

石柱を降らせるのをやめるとヴォルケンリッターたちは静かにこちらへと向き直り、僕の話の聞く

「けれど・・・だからと言って僕の友達に手を出させるわけにはいきません・・・退いてはくれませんか？」

真面目な顔をしてそう頼みこむとシグナムは苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた後に渋々と頷き

「分かった」

了承してくれた。ヴィータちゃんは何やら不満げだったがとりあえず解決したことに安堵し、皆に笑顔に向けて

「さあ帰りますか、我が家に・・・ねえマイファミリー？」

そう言った後、多少意地の悪い笑顔を浮かべ直した。

《続く》

A・S編19話：関係ないことは関係ないんだ（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

中々A・S編が終わる目処が立ちませんorz

次回もお楽しみに

A・S編20話：シリアスでシリアスのシリアスなお話・・・の予定（前書き）

クダクダorz

シリアスパート突入

そろそろ最終回ですね

いやはや先が長い

誤字脱字は報告お願いします

・・・・・・・・カゾクだと思ってたのによ

あゝもういらつく!!

セイバーはもう一人のセイバーが来たら嬉々として相手をしてくれるからやっぱり仲間だけど・・・ディザヴァーは・・・

それに比べてあの黒いコートの奴・・・・・・・・ええとアンセムだったっけか？

いつも蒐集の時、何故か近くで見守っていてくれてピンチになったら助けてくれて・・・・・・・・ディザヴァーなんかよりずっとカゾクぽいぜ!!

ケツ、この前だって少し話したけどいい奴だったし、アタシが好きな種類のチョコくれたし!

それと管理局の奴らがいる時だけ、アンセムの奴をマスターと呼ぶことをあいつとみんなで相談して決めた。

もし捕まった時に絶対にはやてに罪を与えるわけにはいかねえからな!

アンセムには悪いけど、手伝ってくれてるって言ってたしな!!
本来なら信用しちゃいけないんだけど・・・

なんか知んねえけどアンセムは信用出来ちまうんだよなあゝ

・・・・・・・・これであいつが・・・いや

.....

「ほれほれ」

「ニヤアニヤツニヤアアア~~~~ンっ!」

「くっくくほれほれ」

「ニヤアニヤアア~~~~ンっ!」

今日も元気だご飯が旨いユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことデイザーヴァーです。

最近の趣味は雌猫を弄って従順な奴隷に返ることです。

ここ最近の趣味である猫弄りを鼻歌を歌いながら続ける。きっと今頃ヴォルケンリッターたちはいそいそと蒐集に励んでいることでしょう……まあ今の僕には関係ありませんが

でもそろそろ根回しをしないといけませんからね
・・・動きますか

残像が出る速度で指を動かし猫ちゃんを撫でながら、そんなことを
考え・・・・・・・・・・決意する。

うん動きましょう。

今まで撫でていた手を止め、目を覆っていた包帯をずらし複写眼で
猫ちゃんを見つめて魔力の供給源を探る。

見つけました。ニヤリと口の両端をあげ笑いながら《転移》し、猫
ちゃんたちの飼い主であり、八神家を見張っていた奴の近くへと行く

猫ちゃんたちはいきなり場所が変わり、自分たちが知っている場所
に《転移》され小さな目を見開き精一杯の驚きをあらわにしている。

「さあて御主人様に合わせてもらいましょうか？」

そんな猫ちゃんたちに人を喰ったような笑みを浮かべ、主の元に行

くよう促すと猫ちゃんたちは互いの顔を見合った後頷き人間へと姿を返る。

ネコミミと尻尾を生やした灰色ぽつい茶髪のロングヘアーとショートヘアー女の子へと変わった。

一瞬逆らうような意思を見せたので、威圧感を込めた眼差しで睨むとビクツと身体を震わせ、無言でついてくるよう促してくる。

クックク従順な下僕へとなりかけていますね、DSの笑みを浮かべつつ調教の進行状況を確認する。

尻尾をぴーんと立てて僕を警戒している二人の後ろを静かについていき、どこかの部屋の前まで連れていかれた。二人は部屋の前で立ち止まり

「ここに父様がいます、御主人様」

「父様は御主人様とお会いなるそうです」

と中に入るよう促してくるので、二人を引き連れ中へと入る。

二人が自然に、何の気概もなく僕を御主人様と呼んだことには触れずに……

部屋の中に入ると白髪の老人がソファアールに座って僕のことを見ていたので、ニヤニヤと笑いながら老人の対面にあるソファアールに座り元猫ちゃんたちにお茶を持ってくるよう命令した。

そしてそれを普通に了承してしまう元猫ちゃんたち………うん、完全に下僕化してますね。

二人の従順さに笑みが止まらず、ニヤニヤ笑いを更に深める。

元猫ちゃんたちが持ってきたお茶を受け取り、元猫ちゃんたちが老人の背後に立つと

「私の名前はギル・グレーム……しがない管理局員だよ」

老人が自己紹介をしてきたので、ニコニコしながら

「ユウキ・エンドリオール・ル・デフランス・ド・アンペラトリス
ことディザーヴァー……《渴望》のサーヴァントです」

自己紹介を返しておいた。
互いに他愛のない話をしながらお茶を啜り腹を探ろうとするが、相
手は無表情、僕は笑顔なので互いに表情の変化はなく、相手の感情
の動きが分からずにいる。
ちっ

あまりの老獪さに内心舌打ちをしながら、外に出ぬよう必死にポ
カーフェイスを保ち情報を引きずり出そうとする。

しかし、のらりくらりとかわされたせいで中々欲しい情報を得られ
ず、だんだんいらついてきたので

素直に

「どうして八神家を監視してたんですか？」

強烈な威圧感を発しながら問い詰めることにした。
人はそれを脅迫というが気にしてはいけない

するとギル・グレアムはあまりの威圧感に身を震わせながら漸く口
を開き

「闇の書を主ごと永久封印する」

ブチッ

ナニカがキレル音がシタ

《続く》

A・S編20話：シリアスでシリアスのシリアスなお話・・・の予定（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

最後らへんが多少投げやりですねorz
時間があつたら直して置きます

時間もお楽しみに

A・S編21話・我は謡う、渴望の歌を・・・暖かい日々を（前書き）

どうも××です

今回はギャグなし

シリアス過ぎます。

身もたえようなクサイ台詞を考えましたが、それはまた違う機会に

誤字脱字は報告お願いします

A・S編21話：我は謡う、渴望の歌を・・・暖かい日々を

完全にキレたぞ、コノヤロがつ！！

いつ何時のよう敬語は全て飛び散り粗野な自分があらわになる。

- - 豪! - -

グレアムと僕の間に行った机を力一杯蹴り上げ、グレアムの視界を奪い拘束衣を解き自由になった右腕を振るう。

『縛れ、魔性の鎖よ』

それをきっかけに四方八方から飛び出した紫色をした毒々しい鎖が元猫ちゃんたちを四肢を縛り、空中に浮かせ更に地面を《錬金》し作り上げた多量の剣を空中に待機させ剣先をグレアムたちへと向け、いつでも射出できるようにし冷静な声色でギル・グレアムを問いたです。

「何故、我が主八神はやてが封印される必要がある？」

虚言は赦さないと言わんばかりに無表情で見据え、剣群が狙いを定める。

「お父様！？くっ御主人様止めてください！！」

「お止めください御主人様」

必死に懇願し、ジャラジャラと音を鳴らしながら縛られた鎖から抜け出そうとする元猫ちゃんたち。

しかし、どれだけ暴れても鎖から逃げ出すことが出来ずにいる何故なら元猫ちゃんたちを縛り付けている鎖は特別製で縛り付けた者の魔力を吸い上げ強度を増すというもので、魔力を込め力尽くでちぎろうとすればするほど鎖に魔力を取られ強度が上がっていくのだ。

「くっ」

「取れない！」

そんなことを知らずただひたすら鎖を解こうと暴れ続ける元猫ちゃんたち

僕はそんな元猫ちゃんたちを無視してギル・グレアムに真実を言うよう無言で促すと、俯いて無言を貫いていたギル・グレアムは決意を宿した目でこちらを見返し何故八神はやて・・・・・・・・闇の書の主を封印しようとするのかを語り始めた。

11年前、彼が艦隊司令として「闇の書」を護送している際に闇の書の防衛プログラムが暴走し、クライド・ハラウン（クロノの父親）の乗艦「エステリア」が闇の書に取り込まれてしまう事態となり、最後まで艦に残ったクライドごと闇の書を破壊したこと。

そしてその件について深く思い詰めており、「闇の書の永久封印」に密かな執念を燃やし、自らの調査によって闇の書の次の主がはやてであることを突き止め、身寄りのない彼女に「両親の知人」と偽って生活の援助を行いつつ、はやてもるとも闇の書を封印するという作戦を進めていたということを僕に語った。

彼は語った。

最後にクライド・ハラウンに言われた『まかせた』という言葉が忘れられないと

彼は語った。

最後にクライド・ハラウンが向けてきたあの強い・・・・何かを託すような眼差しが忘れられないと

故に彼は闇の書を永久封印すると誓った・・・・・・・・一人の少女を切り捨て、友の遺言を守るために

彼のためにと・・・・・・・・

でもそれは……

「くだらない、くだらないぞギル・グレアム」

「なんだと!？」

そう言われたギル・グレアムは温厚そうな優しげな顔を歪め憎々しげに僕を睨みつけてくるが、それを無表情で見返す。

「僕は誰かを間違えてると批判出来る程高尚じゃないが分かっていることはある。

死者は黙して何も語ることはない、何も望まず、何も責めてくることはない。お前がしたいことはただの自己満足だよ、死者で生者を汚すな」

僕に冷たく切り捨てられ、焦ったように取り乱し頭を抱えながらギル・グレアムは自分の心を発露させる。

「くっ……確かに私の自己満足かもしれない!!ならば、クライドのあの目は!私に何かを託すようなあの日は!?!一体なんだというのだ?」

彼は怯えるように身を震わせ自分の身体を抱くように叫ぶ
あの眼差しが何なのかと……

簡単だ

同じような場面に出くわした僕なら分かる。

「死者は何も語らないし、何も望まないが……死にゆく者は別だ。死にゆく者が共に望むものは一つ……敵討ちなんかではなく生きている者の幸福。愛している者の幸せだよ・貴方が託されたのは彼の家族だよギル・グレアム。彼は貴方に家族の面倒を……友と言える貴方に家族を幸せにして欲しかったんだよ」

それを聞きゆつくりと顔をあげ涙を流すギル・グレアムは優しげに見つめながら思い出す……自分が死んだ時を

魔神の体内に囚われ内側から自らの命を持って封印しなければなら
ない時、幾度も躊躇した。

こんなところで死にたくはないと・・・
まだあの姫様に愛を語ってすらないのに・・・
幾度も幾度も躊躇してようやく決意し封印をした。
皆の笑顔が守りたいから・・・
この国を守りたいから・・・
自分が原因なのだから自分で蹴りをつけなければという義務感から・・・
嘘だ。

ただ彼女を守りたかっただけ・・・
彼女と共に在りたかった。
彼女に生きていて欲しいと

そして気づいたんだ・・・
僕がいなくなっても幸せになつて欲しいと

傲慢と言われるかもしれない、馬鹿とけなされるかもしれない

けれど・・・
誰でもいいから彼女を幸せにして欲しいと心から望んだ。

故に僕はクライド・ハラオウンの気持ちが分かる。

・・・分かってしまう。

世界を救った《英雄》だけど、愛しい者を救えずに幸せに出来なかったクソツタレな《英雄》だからこそ

何かを託したいという《渴望》を理解することが出来る。

ギル・グレアムは泣き崩れ叫び始めた。

自分の今までしてきたことを悔やんで

それを見た僕は剣群と鎖を全て霧散させ、元猫ちゃんたちを自由にさせる。

元猫ちゃんたちは泣き崩れているギル・グレアムに駆け寄り抱きしめる。

自分たちがいるからと・・・

まだ終わっていないと・・・彼を立ち直らせようと家族を抱きしめ続ける。

そんな暖かい光景を見て僕は新しい家族に想いを馳せ優しげに笑う。

今も主のために身体を削り、身を粉にして蒐集しているヴォルケン

リッターとセイバーたちそしてはやてちゃんを守るために警戒を怠らないライダー

はやてちゃん、ライダー、ヴィータちゃん、シャマル、ザフィーラ、シグナムにネロ……みんな大事な家族なんです。

みんな、みんな笑わせて笑顔で来年を迎えてやるんです。

だから誰ひとり欠けさせるわけにはいかない。

包帯の下に隠れた血のような深紅の瞳に決意を宿し《渴望者》は望む

暖かい未来を……

だからこんなにも早く

暖かい日々が更に遠退き崩壊するとは思っても見なかった。

はやてちゃんが倒れたのだ。

《続く》

A・S編21話：我は謡う、渴望の歌を・・・暖かい日々を（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

笑いながら死ぬってどんな気分なんでしょうか？

生憎死を体験したことのない作者には分からず

死を最も畏れる作者には分かりたくもないという気持ちがあります
がね

今回の言葉は自分が死ぬときに何をするかを考えたら出てきました
まあ所詮優柔不断のあまちゃんなんで

次回もお楽しみに

「エラー」話・F t e / アラ ドザわ ぶ？ (前書き)

ガーガガ -

続きみたい？

一時説明をするために桜ちゃんから取り出した《聖杯》のかけらを手で弄びながらマスターと桜ちゃんが落ち着くのを待つ。

マスターが贗作したとおもわしきロンギヌスをへし折り大気中に霧散させる。

一方あかいあくまは自分の思考の中に入りこちらには関心がないようだった。

かけらで遊びながらも蟲爺をどうやって滅殺するかを考える・・・
・ 悪いが女の子を苦しめた奴を救う気はないんだよねと思いつつ
も殺さずに性格改変させてみるかとDSのようなことを考慮に入れ
ておく。

もしくは多少ボケさせて後は煮るなり焼くなり桜ちゃんには任せま
しょう・・・老人介護の本を持ってたはずですからね、タイ
トルは確か『終末の老人介護。首をぎゅっとね』でしたか？・・・
・ まあ大丈夫でしょう。

ああワカメも裸でどっかに吊して写真を撮りまくって生意気な鼻を
グチャグチャに潰すもとい折らないといけませんね。

やるつとしてゐることは清々しいぐらいに外道だった。

「やっ」

悪巧みをして悪魔のような顔をしているとどうやら桜ちゃんが気がついたらしく僕の顔を見て怯えている……死のうかな？

ついでにマスターも目が醒めそうだったので足で蹴って起こした。モテる主人公に対しては何をしてもいいと世界二次小説連合で決まっているのです。

蹴られた腹部を抑えながら立ち上がるマスターを無視して桜ちゃんに向き合う。

「やっ」

「……やっ」

やはりいきなり槍で刺したのはよろしくなかったらしくめっちゃくちや警戒されている。言ったらやらしてくれないと思ったからやったのに……orz

落ち込みながらも話を続けることにした。

「君の中にいた異物は全て取り除きました」

「えっ!？」

桜ちゃんはそれを聞いて目を見開き驚きの眼差しで僕を見てくる。

「あの汚物もかけらも全部です」

「………本当ですか？」

どうやら今まで自分を苦しめてきたものがそう簡単に消えるとは思えないらしく半信半疑なようだったので

「サーヴァント嘘ツカナイアルヨ！」と言ったらあかいあくまから半眼のジト目で見られた。

「まあおふざけはここまでにして……………」

おちゃらけた空気を消し包帯を取り除き、血のように紅い目で見透かすような真剣な眼差しをして桜ちゃんを見据えて

「今から《救済》のサーヴァントであるセイヴァーから汝・間桐桜に3つの選択肢を与える」

「……………」

いきなり雰囲気が変わったのを感じて皆は唾を飲み込み無言となる。

「一つ……………汝の中に存在する絶望を記憶ごと消し去り新しい記憶を植える」

「えっ？そんなこと出来るんですか？」

驚いてこちらに詰め寄ってくる桜ちゃんを宥めながら話を続ける。

「二つ……このまま何もせず終わる。誰にも何も話さずに全てを終える。もちろんここにいる奴らの記憶は全て消し去る」

「「なっ!?!」」

マスターとあかいあくまは話の流れはわかっているため黙っていたが記憶を消すと聞き声をあげた。

もちろん僕はそれを無視して三つ目を提案する。

722

「そして三つ……ありのままを話し皆に受け入れてもらう……まあ最初から全員はハードルが高いのでお姉さんからで」

「お姉さんって誰だ?」

とかKY発言をするマスター……黙ってるおっぱいブルジヨアが!

そう思った瞬間に隣にいたあかいあくまが肘をマスターのえぐいところに入れて黙らせていた。

ナイス！あかいあくま！みんなに出来ないことを無表情で平然とこなす！そこに痺れる憧れるううううううーっ！

シリアスムードなのに内心おふざけをしながらも表情は真剣な僕ってすごい！

「本来僕は《救済》したらアフターケアなんぞせずにポイツと放ります。一時の《救済》を与えたら後は僕の前以外だったら野垂れ死にしようが、覗きをしようが、痴漢をしようが・・・まあそこらへんは呼んで欲しい・・・ゲフンゲフン・・・関係ないんですよ」

「・・・・・・・・。。。」

桜ちゃんはそんな僕を無言でこちらを見返してくる。

「ただ貴女の在り方はとても……悲しかった。日々を隠し辛い日々を周りに見せないようにする在り方は儂く……あの笑い方は赦せなかった」

「「？」」

あかいあくまと桜ちゃんは姉妹仲良く首を傾げているので何が赦せなかったかを伝える。

「僕は強欲なんです。僕の周りで心の底から笑っていない人間がないと赦せないんですよ……貴女の笑い方は辛いことを押し殺したものが浮かべる笑い方だ。それは笑顔を侮辱している……僕はそれが一番赦せなかった！」

「……………」

桜ちゃんの心に伝わるように言ったのだが無言で俯いてしまった。

「貴女はお姉さんやそのヘタレが信用に値しないと思っているんですね」

少し馬鹿にしたような言い方をすると顔をあげ憤慨したような声をあげる。

「そんなことはありません！」

「なら話してあげてください」

「……………」

「確かにifを考えると怖いですよ。もし話して嫌悪されたり、軽蔑されたりしたら嫌ですよ。でも話してくれない人達からしたら悲しいですよ」

「……………」

「それに貴女は女の子ですよ？辛くて、悲しくて、押し潰されそうになったり、立ち上がれなくなりそうになったら誰かに甘えたって文句を言う奴なんかいませんよ。もしいたら……………KILL

します。貴女のように可愛い女の子が泣いている世界なんてぶち壊れてしまえばいい」

そう言つとようやく桜ちゃんは顔をあげ

「でも、先輩や姉さんの迷惑になったら……」

ととても悲しそうに言い再び俯いてしまう。

あかいあくまとマスターはそれを見て何かを言おうとしているので片手で諫めて代わりに言う……貴方たちが言ったら庇つた
としか思われないでしょうが

「僕はそうは思いませんよ、むしろ目の前で家族や親しい人が何もいわずに無理したり悲しんでいたのを救えない方が僕的にはつらいです。」

貴方じゃ力不足ですって言われてるような気がして……自分
分を許せなくなるぐらいに悔しいです」

言いたいことを代わりに言つたらよく言つたと言わんばかりにサム
ズアップしてくる二人……やれやれ

「でございしますか？」

「……………」

いまだに答えを出さない桜ちゃん……………はあ
可愛い巨乳美少女に酷いこと言うの嫌なんだけどなあ

しょうがありません

「間桐桜……………貴女の憤ましさは美点ではあるが行き過ぎた
憤ましさはただの溝だ。相手を拒否することになんら変わりはない。
今の貴女は無言でマスターたちを侮辱している」

「っ!？」

少しだけ厳しい言い方をすると「クロス」と言う眼で見ってくるあか
いあくま……………そちらを見たら殺される。

「……………番で」

「聞こえません」

まあ聞こえたのだがわざと確認させる。

「・・・番です」

「聞こえないぞ、間桐桜！」

「3番です!」

「その願い《救済者》セイヴァー確かに聞き受けた! 汝に幸あれ!」

桜ちゃんの叫びに微笑み手から光をばらまく、桜ちゃんを祝福するかのようにな……

「うお」

「うわあ〜」

「綺麗ね」

皆はその幻想的な光の輝きに目を惹かれ感嘆の声をあげた。

その後既に日が暮れ夜が訪れる中

桜ちゃんとかいあくまは二人きりで話すことがあるので男連中は中庭へと出る……暇だったので僕はそこら辺から木の棒を拾って地面に落書き中

「なあセイヴアー……いや……いいや」

どうやら桜ちゃんにの話を聞こうとしたようだが桜ちゃんから直接聞くのがいいと思ったのか話し掛けてきたのを中断しそっぽを向くマスター、そしてそんなマスターを冷やかな目で見つめるアチャ男さん……やれやれこの二人も面倒ですね。そう嘆息しながらも手を止めずに落書きを続ける。固定と安定はこれでしたっけ？

まあこれだけ書けば……

正直この二人ほど面倒な存在はいないのでつい呆れた目で二人を見つめてしまう。

ゾクッ

不意に背中に毛虫を入れられたような嫌悪感を感じ、嫌悪感を感じた方向を見る。どうやら僕だけではなくアーチャーも感じたようだ。アーチャーが感じたのは敵意のようでお馴染みの黒白の双剣を《投影》し構えている……。ああもちろん我らがマスターは僕たちが発する緊張感を察知してようやく身構えました。

そして硝子が割れるような音と共に地面にある闇から多量の名状しがたい嫌悪感を秘めた蟲たちが沸き上がってくる。

……轟っ!!……

ついそれを発見した瞬間に地面を《鍊金》して作り上げた劍群を投擲しまくった。

飛んでいった劍は縦に回転しながら風を切り裂くような音を出し、蟲たちを切り裂き、爆発音と共に地面に突き刺さる。

「ああ……ついっつかり……」

口に出して自分のやったことを反省してみるも、その有様は酷く地面はえぐられ生えていた木はバラバラになってしまっている。

しかし・・・

「呵々呵々！」

気持ち悪い哄笑と共に先程吹き飛ばした蟲たちが再びはい上がってくる。

「やれやれ・・・ラスボス1の登場ですか。あと2体いるんで早めにお仕置きして終わらせたいんですがね」

肩を竦め自棄を前面に出しながらも地面に剣群を用意することを止めずに、再び投擲する構えをとる。

「呵々呵々良きかな！良きかな！」

言葉と共に蟲たちが形作り老人となる。

「どうも間桐の当主・・・気持ち悪いんで今すぐ去勢してくれませんか？」

冷たく吐き捨てるように蟲爺に言ったのだが爺は気持ち悪い笑顔を浮かべこちらを見てくる。

「呵々呵々つれないのう、お主がその身に宿す魔性を見せてくれたら考慮しようかのう」

「なら結構」

・・・投っ!!・・・

言い終わらないうちに持っていた剣4本全てを全力で投擲する。剣は全て爺の身体を切り裂いたが爺は笑いながら蟲を纏ませ身体を再生させる。

その様を見て

「なっ!?!」

マスターが愕然としたような表情をして声をあげる。気を抜くな！

思いつ切り怒鳴り付けたかったが爺が油断ならないので注意をそちらに向けろわけにはいかない。

アーチャーも油断なく爺を見据え殺意を向けている。

また気持ち悪い哄笑をしながら爺がこちらを見て

「お主が桜の中の蟲と《聖杯》のかけらを取り除いたんじゃない？」

と観察するような視線交ぜてほざくので、笑い返して

「だったらどうしますか間桐臓硯？」

と殺意を前面に押し出し睨む。

「呵々！やはりお主は面白いな！是非とも我が物にしたい！！！」

「ナンパならビーチでやってきてください……ああその前に去勢するんで盛る必要ありませんね。
まあ話し合いが出来なさそうなので……お別れといきましようか」

辛辣な言葉を吐いたが爺はニヤニヤ笑いを止めないので……お別れということとで地面に書いていた落書きを剣で突き刺した。

《起動：awake》

《固定：hold》

《受肉：dawn》

《経過：elapse》

「があっ!?!?……ぐっ……」

地面にある落書きが光り輝くと同時に爺が苦しみの声をあげ、僕にありつただけの憎悪と怨嗟を込め問い掛ける。

「貴様っ!?!?……わっ僕に何をした!?!」

「なあゝにただ貴様の《魂》を一体の蟲に《固定》させて、それを核に新しい肉体を《受肉》させて、貴様が生きてきた年数分をちゃんと《経過》させてあげただけですよ……まあ人間の脳みそで何年記憶……ああボケちゃうかもしれないですね……テヘツ セイヴァー失敗しちゃった」

茶目っ気溢れる少女をイメージして舌を出してみたのだが、確認のためアーチャーを見ると「似合わん」と切り捨てられた。

「……ぐっ……諦めん！諦めんぞ！」

いまだにボケないよう頑張る爺に優しげな笑みを浮かべて近寄り……

「早くボケる爺」《強奪：rob》

爺の欲望全てを奪った。性欲も食欲を全て最低限まで落として他の欲望は全て睡眠欲に書き換えてやった……ケツケケ救ってあげましたよ、貴方の理想が叶わない世界から

……まあ七三で嫌がらせが強いですが

まあ桜ちゃんから轟とかけらを取り除いた時点で爺がなんか仕掛け
てきそうな気がしたんで、罫を仕掛けといて正解でしたね、マスタ
ー？」

と実は会話文だったのでマスターに話しをふると

「あの落書き魔法陣だったのか！？」

とか失礼なことを言われた。

そしていくばくかの時間が経ち縁側で和んでいると、宝石を構えた
あかいあくまとあかいあくまの背中に隠れながらこちらを見てくる
桜ちゃんがきた。

どうやら戦闘音がしたので危険を感じて部屋に籠っていたらしく、
音がなくなり安全を確かめるためにこちらに来たそうだ……
お茶が旨い。

ノンビリとお茶を啜っていると

「あっ………あぁ………」

何故か桜ちゃんが怯えて後退りし始め、それに合わせてあかいあくまも宝石魔術を使おうとしている。

「どうして御爺様がここに!?!」

ああ爺に怯えてのかか……ようやく桜ちゃんが何に怯えているのかに気づき、僕と同じように横でお茶を啜っている間桐臓硯をやら見つけた。

「くっどうして!?!みんな間桐臓硯がいるのに!?!」

何やらあかいあくまが焦ったような声を出して実際に慌てていた……
……あぁなんか操られたとも思ってるんですかね?

「りっ」喰らいなさい!」「ぐっあ!?!?」

「アーチャー！？とお」「このヘッポコが目を覚ましなさい！」「ばっ
!？」

「……………死ねっ！」……………」

あかいあくまは洗脳された皆の目を覚ますために宝石を惜し気もなく投擲したり、ガンドを撃ちまくってくる……………勿論というか言うまでもなく何発か僕にも被弾している。

僕の時だけ殺意が混ざっていたのは気のせいもしくはツンデレのツンの部分だと信じたかった。

738

どうやら妹を酷い目にあわせ続けていた元凶を前にして焦って《うっかり》がでたようで……………巻き添えをくうのは当たり前のように運がEランクの我々三人。

爺はどうやら幸運がCランクらしくラッキーなのかかなんなのか僕たちが楯になってしまい当たってはいなかった。

勿論楯になっている僕たちを見てあかいあくまは更に危機感（こいつら操られて楯に!？）を覚えたようでガンドの威力が増したのは……………ふっ、言うまでもないだろ？

もはや止める気は起きないので無言でガンドを喰らい続ける。

ようやく落ち着いたのか疲れたのかは分からないがあかいあくまは肩で息をしながらこちらに事情を尋ねてくるのだが………後ろに正義の味方たちが転がっていたのは気にしないことにした。

「間桐の爺にはもう危険性はないですよ」

「……どうして……？」

「……」

後ろにいた爺をあかいあくまの前に差し出すと

「………ご飯はまだかのう？」

「「はっ?」」

驚愕し目を見開く遠坂姉妹

「オツキ食べたでしょう」

「…….…….…….」

「…….…….」

あかいあくまは信じられないと目元を指で揉んでいる。

「ほらおじいちゃん」

「美津子さん…….…….飯はまだかのう?」

うん完全にボケましたね！
美津子さんって誰ですか？

「では後は煮るなり焼くなり砕くなりもぐなり切り落とすなり好きなようにしてください」

桜ちゃんに爺を差し出すと桜ちゃんは少し怯えた顔をしながらも引き取り

何か話し掛けているが

全て「ご飯はまだかのう」しか返ってきてはいなかった。

あとはワカメですか。

にしても少し急過ぎましたね。まあ桜ちゃんと出会った瞬間に身体が動いてしまっていましたから言い訳しようもありませんね。それによりリカルな世界で桜ちゃんと友達になりましたからね、同じように「桜ちゃん」を救わなきゃ僕の何かが歪んでしまう。

こんなのはただのエゴですけどね、間桐……いや遠坂桜には一片の微塵の隙もなく笑顔で幸せになって欲しい。それが前々からの僕の想いでしたから……

あんな人生を送らせたくはないんですよ、衛宮士郎と遠坂桜には……
好きな人と殺し合いをして命を奪ってしまうことほど辛いことはありませんからね。

いやはや偽善者ですね、でも届くのには手を伸ばさないで後悔すること程嫌悪感の沸くことはありませんし

うんこれでよかったですよ
そう自分に言い聞かせる。

衛宮士郎が誰を選ぶかは僕が口を出すことではない、しかし彼がもし間桐桜に何があったかを知ったのであれば彼は罪悪感から彼女と共にあるつとめるだろう、だがそれだけは駄目だ。それは彼女を侮辱しているように感じてしまう、自分が救えなかった、だからこれからはずっと救い続けなければ……そんな責任感で愛され

る女の気持ちを考えて欲しい。愛が手に入れたいと言つやつもいるかもしれないが……せめてせめて衛宮士郎の意志で誰かを選んで欲しい。
説にそう願いますよ

反吐が出る偽善だがそれが何よりも僕らしいと言えるだろうな

ニタニタと笑いながら空を見上げる。

どこも空だけは変わりませんね

《続く……のか?》

「エラー」話・F t e / アラ ドザわ ぶっ? (後書き)

みたかったら
教えてください

とりあえず中編というところで投稿しました

A・S編22話：〈渴望者〉、絶望に落とされる。(前書き)

今回のお話しはあんまり好きじゃありませんが、しょうがないのです。

このお話は必要だったのです！

誤字脱字は報告お願いします

て息を飲んだ後、すぐに我を取り戻し青年の右手を治そうとする。

しかし、治癒されると分かった瞬間に青年は暴れだし、女性と女の子から逃げだそうとする。

「ええい止めぬか、奏者よ!!」

「止めなさいディザーヴァー!!」

女の子と女性は青年を止めるために、抑えつけながらも青年に呼び掛けるが、青年は全く耳に入っていないのか狂ったようにもがいている。

「間に合わなかった!僕には何も出来ない!!何も出来やしない!」

己の内にある負の感情を吐き出すように暴れ狂い叫び続ける。

・・・ディザーヴァーがギル・グレアムと密約を交わし、手を出さないよう約束させ上機嫌で家と向かっていると

急にライダーから念話が届き、焦った声で

『はやてが倒れました』

そう言われ、ディザーヴァーは血の気が引いたような顔をした後、すぐに病院へと《転移》し八神はやての元へと向かった。

ディザーヴァーが着いた時には八神はやては既に目を覚ましており、ヴォルケンリッターたちとセイバーも急いで駆け付けたのか息を荒げながらその場にいる中、八神はやては笑いながら

「ちよお貧血が起きただけやのに、心配性やなあ〜」

とからかい半分で駆け付けたディザーヴァーたちをからかう。

ヴォルケンリッターたちはそれを見て安堵の息を吐き、主たる少女と二、三会話をしてすぐにセイバーを引き連れどこかへと去ってい

った。

いつも少女の傍にいるライダーは主治医に主の症状を聞きに行っており、その場にいたのはディザーヴァーと少女だけだった。

ディザーヴァーは無言で外を見ている少女を見つめっていると、少女が不意に口を開き
何の感情も籠ってない声色で・・・

「なあデイズさん・・・・・・・・私、死んでまうんかな？」

ディザーヴァーはそれを聞き、主である少女の異変を感じとった。
少女は無表情で小さな声を発して

「私、死んでまうんかな？
・・・まだ皆とお花見もしてへんのに
・・・まだ皆と海に行つてへんのに
・・・まだ皆とカラオケ行ったり遊んでへんのに
・・・私、死んでまうんかな？」

少女は何も籠ってないような声色で話していたが、話していく内に声が震え少女の頬を涙が伝っていく

少女は信じたくないと言うように、目の前の出来事から目を逸らすように無表情で涙を流し続ける。

ディザーヴァーはそんな主を見てはおれずに、少女を引き寄せ抱きしめながら

「絶対に助けます！はやてちゃんを死なせたりなんかしない！！」

叫ぶように少女を助けることを誓った。それを聞き抱きしめられた少女は無表情を崩し、顔を歪め抱き留められたディザーヴァーの胸元に顔を埋め泣き叫ぶ

死にたくない

まだやりたいことがいっぱいあると

少女は泣き叫び続ける。

しばらく泣きつづけた少女は泣き疲れたのか、ディザーヴァーに抱き着いたまま寝てしまったので、そんな少女を優しく剥がしてベッ

ドに横たわらせる。

少女の涙を見てしまったデザイナーヴァーは凄まじい決意を宿しながらも、すぐに全ての元凶である闇の書をヴォルケンリッターたちから借り、複写眼で解析を始めた。

複写眼による解析はうまく行き、闇の書の構造も分かり、いざ弄ろうとした時デザイナーヴァーの魔力が消し去った。

自分の魔力が消えたことに愕然としながら何故魔力が消えたのかを考え、思い至った。

今回、彼を呼び出した《渴望》は八神はやての家族と共に在りたい、家族を守りたいという感情である。

そして家族を傷つけようとした場合、彼は契約違反として身体に罰を受けてしまう。

以前、本気で激怒した際にヴォルケンリッターたちを痛め付けようと魔法を振るったら、彼の身体に影響が出ていた。

しかし、お仕置きなどの際には全く影響が出なかったことを考えると生死に関わりのあることでなければペナルティーが発生しない、逆に言えば闇の書を弄ろうとしてペナルティーが発生したということとはヴォルケンリッターたちに生死に関わる影響が出てしまうことを示唆しているということだ。

それに気づいたデザイナーヴァーは苛立たしげに歯を食いしばり、次にヴォルケンリッターたちの身体を解析し始めた。
闇の書から切り離すことが可能かどうかを調べるために・・・

しかし

『複写眼：起動不可』

「なっ!?!」

拒絶するかの如く複写眼が起動することはなく、ヴォルケンリッターたちを解析することが出来ない。
「私たちを解析することが出来ない。まるでヴォルケンリッターたちを調べてはいけないと言わんばかりに・・・」

そして一時的とは言え、魔力と“目”を失ってしまったデザイナーヴァーの衝撃は大きく、八神はやてを助けられないという絶望が彼を襲い

彼は“折れて”しまった。

彼は主を救えないという虚無感に耐え切れずに自分を責め、違う次元世界へと飛び暴れていたというわけである。

英雄と言えど元は人間。

いくらでも渴望し、いくらでも絶望する。

「フッーフッーフッー」

魔力の強化もなしに暴れ回ったディザーヴァーは当然、疲れ果てライダーとセイバーに取り押さえられ、息を荒げながら地面に組み伏せられていた。

ライダーは息を荒げながら取り押さえられいまだ暴れようとする意思を持ったディザーヴァーを見て、“怪力”を持ってディザーヴァーをビンタした。

――破！――

ライダーの右手がディザヴァアの左頬に叩きつけられ、ディザヴァアの左頬が赤く染まり、ピンタを喰らったディザヴァアは糸の切れた人形のように動かずに、力が抜け崩れ落ちた。

そんなディザヴァアを見つめ、ライダーは独白するように

「《渴望者》が《渴望》することをやめるつもりなのですか？」

悲しげに呟き、それにセイバーも頷き、優しい仕草でディザヴァアを撫でながら

「奏者よ、諦めるにはいささか早過ぎはしないか？英雄たるものの程度の危機は乗り越えなければ」

からかい半分の言葉を吐き、青年を立ち直らせよつとする。
青年はピクリと身体を震わせ、反応を示したかいまだ立ち上がることはなく……

《渴望者》はいまだ絶望の淵から抜け出せずにいた。

《続く》

A・S編22話：《渴望者》、絶望に落とされる。(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？

いつも飄々としていた青年は絶望に捕われいまだ立ち直れず・・・

さてはて《渴望者》は立ち直ることが出来るのでしょうか？

次回もお楽しみに

A・S編23話：〈渴望者〉は絶望を笑い続ける（前書き）

すいません寝不足でした

誤字脱字は報告お願いします

A・S編23話：〈渴望者〉は絶望を笑い続ける

後悔がないなんて言えば嘘になる。

最初から闇の書が原因ではやてちゃんの足が動かないことは分かっていた・・・すぐにはやてちゃんにヴォルケンリッターたちを家族と認識させる前に彼女らを消してしまえばいいだけの話だったのに

もしくは彼女たちに賛同して、無差別に蒐集を繰り返して躊躇いなく魔力を集めて闇の書を完成させてしまえばよかったのだから

彼女たちすらも救おうと思ってしまったから
悲しげな顔をしている彼女たちに安住の場を与えたいと思ってしまったから

10（全て）を救おうなどと言う甘い考えをしたから

所詮、英雄なんか10（全て）を助けられる通りなんかなくて、
1を捨て9を助けることしか出来ない・・・それが僕たち英雄なんだ。

打ちひしがれるような絶望に苛まれながらも思う。力が在ったから彼女たちを助けようと思ったのだと……。力が無い非力な僕は決して彼女たちを助けようなどとは思わなかったはずだ。故に力を失って無力となった僕に助けられる通りなんかなくて……。それでも助けたいと思うことは間違いないんだらうか？

魔眼も通じず、魔力を失い力を失った僕が彼女たちを助けようと思うことは間違いないんだらうか？

こんなものは無力なものの言い訳でしかない……。力が欲しい。

心の底からそう思った。

一生懸命に僕を立ち上がらせようとしていたライダーと赤セイバーが悲しげな眼差しでこちらを見てくる中、無力感に身を任せながら横たわっていると紫電が僕に襲い掛かってくる。

ライダーとセイバーが僕の前面と出て紫電をそれぞれの武器で弾き、紫電が放たれた方角を睨みつけている。

弾かれた紫電により、土埃が舞い散る中無言の時間が続き、ようやく土埃が晴れた時目の前に立っていたのは……

「あら、何をそんなとこでくたばっているのかしら？」

長い黒い髪を持ちサデイスティックな笑みを浮かべる20代ぐらいの女性だった。そして金髪をツインテールにしたアリシアちゃんと茶髪のショートカットでネコミミを生やしたりニスちゃんが後ろに控えている。

「プレ……シ……ア」

声を振り絞るように名前を呼ぶとプレシアは嫌悪感をあらわにして

「今の貴方には名前を呼ばれたくないわ」

そう言われた。

セイバーはそれを聞き不快そうに顔をしかめていたが、プレシアは

それを気にせず僕を睨みつけている。

「フェイトを襲った愚かものの魔力を感知して、ここに転移したら懐かしい顔を見たから話を聞いていたけど……ふざけないでくれるかしら？」

プレシアは怒りに身を震わせながら、苛立ちをあらわに言葉を続けていく

「貴方は私の目的を躊躇なく完膚なきまでに粉碎したのよ？私の渴望を踏みにじったのよ？」

そんな貴方がこんなところで不様にねっころがていいと思ってるのかしら？」

どうやらまだ根に持っていたらしい。

アリシアちゃんは頬を膨らませて私怒ってますって表情をしながら、力なく横たわっている僕に近づき

「今のお兄ちゃんはクライー！！アリシアの好きなお兄ちゃんはこんなお兄ちゃんじゃないもん！！」

そう言って優しく僕の頬をペチッと叩いてブンブンと可愛らしく怒ってプレシアの後ろに戻っていった。

そしてリニスちゃん。
久しぶりに会ったリニスちゃんは何時とも変わらない笑顔を浮かべながら

「マスターがどんな状況であれ、私は貴方についていきますよ・・・
・・・たとえ貴方が貴方を見失ったとしても
力付くでも貴方を取り戻して見せます。それが高町家の方針なので」

何やら悪影響が出ているようだった。早めに高町家から引き離れた方が良さそうだ。

リニスちゃんはプレシアの後ろにすぐに控えて直し、プレシアが言葉を発するのを待っている。
プレシアは不機嫌そうに髪を撫で鼻を鳴らして

「ふんっ、アリシアとリニスが優しくてよかったわね。私だったら

半身に下ろしてすり身にして海にばらまいているわ」

と毒を吐きながら激怒している。

「だいたい貴方は《渴望》の従者なんでしょう？
だったら死ぬまで《渴望》し続けなさい。

身が削れようと、血が吹き出ようと、身体が欠けようと……
……私は貴方が立ち止まることを決して赦さないわ。
だって私の友達だったあの憎たらしい男はそういう男だったんです
もの。

絶望を笑い、簡単に奇跡を起こしてくれるお伽話に出てくる魔法使
いみたいな奴なんですもの。

そんな奴がこんなところで這いつくばっているなんてあるわけない
じゃない……そんな資格なんかないわ」

心底気に入らないともはやこちらに視線を送ることすらなく、独白
するように話続ける。

「不様でもいい、立ち上がりなさいディザーヴァー。今の貴方は、
救われた私を侮辱しているに等しいわ。

私は貴方に救われたのよディザーヴァー？なら私に誇らせなさい、
貴方に救われたと胸を張って言える……そういう貴方でいなさい」

そう言うと満足げな顔をしてアリシアちゃんとリニスちゃんを引き連れ去っていった。

そうでした。

僕に立ち止まることは赦されない。

不屈の心を持ったのだから………

ライダーとセイバーはいきなり現れ辛辣な言葉を吐いていったプレシアさんに驚いているが、それを気にせず不様に立ち上がる。

僕に絶望することは赦されない。

騎士の王から信頼を貰ったのだから………

糸の切れた人形のようになんの助けもなく、なんの確信もなく不様に立ち上がる。

二度と諦めないと誓いながら

「やれやれ母は強くなって奴ですか？」

軽口を聞きながら異世界にいる母上を思い出して笑う。

あれには勝てませんね
母上はなんせ最強ですから

啞然とした目でこちらを見てくる二人を見据えながら口元を歪めて笑う。

「いきましよう、はやてちゃんところに………《渴望者》に
絶望は相応しくない」

その言葉を聞き立ち直った僕を見て微笑む二人を引き連れはやてちゃんの元へと《転移》する。

はやてちゃんの病室へと入り静かに寝ているはやてちゃんの頬撫でながら誓う。

「我が名はユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリス。奇跡を生み出す魔法使いなり、我が身は汝が剣、汝が盾、汝が槍、全てを打ち払い、全てを守る。

ここに今再び誓う。汝がサーヴァントとして絶望を振り払い奇跡を

生み出すことを」

敵かにそう告げて、その場から踵を返す。

真剣な顔立ちを歪めて、人を喰ったような笑みを浮かべ始める。

さあ奇跡を生み出すための前哨戦を始めるとしましょう！

《渴望者》は笑う、絶望など気にも止めずに

《渴望者》は進む、奇跡など簡単に起こせると

《続く》

A・S編23話：〈渴望者〉は絶望を笑い続ける（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

そろそろクライマックスです

次回もお楽しみに

ガタキリバが楽しみだぜ！

あれ話が違っw

A・S編24話：天下一武道会！？いやまあ嘘だけど………（前書き）

……ずうーん

お腹が痛いです。

現在6時39分

投稿20分前に書き終わるとか………アホですね

誤字脱字は報告お願いします

A・S編24話：天下一武道会！？いやまあ嘘だけど……

どうも立ち直って絶好調なユウキ・エンドリオール・ル・デファン
ス・ド・アンペラトリスことディザーヴァーです。

あんな僕は黒歴史ですね、ほらよくある14歳病って奴ですよ

うっ俺の魔眼が蠢いて……ああそういえば本当に魔眼持っ
てました。

五つ目の魔眼が邪気眼とかだったら嫌ですね……この作者
だったら有り得そうで怖いですが

まあもう把握してるので先に言っておきますが邪気眼ではありません

そこっ！がっかりだよ！！とか言わないで！

『浮け、アースグラウンド』

……轟！……

ゴツゴツゴッー！

くだらないことを考えながらも思い出してみればプレシアが若返ってましたね

『削れ、エアロカッター』

――斬！――

バラバラバラー！

軽く瀕死状態だったんで、ちゃんと確認はしてないんですが多分僕がセイバーにかけておいた《年齢変更》の魔法を参考に作ったんでしようね。

『形取れ、アースクリエイツ』

さすが大魔導師ですね、複写眼もないのにいとも簡単にあの魔法を模倣するなんて、手放しであるドS女帝を褒め続け手を止めることなく魔法を行使していく

えっ何を作ってるかって？

そんなもの出来てからの楽しみですよ。

さてと細工は隆々後は結果を御覧あれと言ったところですかね？

ああ後は・・・っと

『落ちれ、アースクラック』

・・・轟！・・・

ガッガガガ！！

うわぁ〜完璧ですね。見事過ぎて鳥肌が立ちましたよ……………
ふっさすが僕

さあ褒めたたえなさい！！

まあ勿論冗談ですが……さすがに疲れたんで帰ってエッチ
雑誌見て寝ましょう。

- - - - -

side シグナム

アンセムが加わり、更にセイバーが加わってから邪魔するものを追
い払う手間も少なくなり蒐集は滞ることなく、早いペースで行われ
ている。

あの金髪の少女テストアロツサからも蒐集することに成功したしな・
……まあその後現れた黒髪の女性が恐ろしく怖かったが
歴戦の戦士である我等ベルカの騎士をあそこまで震え上がらせると
はただ者ではないな……

とにかくにもこれならクリスマスというヤツぐらいには主を真の
主にすることが出来るだろう。

アンセムとセイバーには感謝しても仕切れないな。

セイバーがもう一人のセイバーの足止めをしてくれている間に我々は対象の蒐集が出来たからな。

あの中で脅威と言えたのはもう一人のセイバーだけだったので、セイバーが足止めしてくれているから安心出来た。

あのセイバーを足止め出来るのはもう一人……面倒だな、青セイバーを足止め出来るのは赤セイバーとアンセムぐらいだろう。

赤セイバーは真っ向からの剣撃のぶつけ合い

アンセムは搦手を使った戦い方で使い魔を操りながら援護したり、たまに自ら鍵みたいな剣を取って戦ったりと多彩な戦い方だった。

多少アンセムには真っ向から戦えと文句を言いたかったが、恩人である彼には言い難く……。何より青セイバーに武器を振るうのを多少躊躇っているように感じられて何も言えずにいた。

まあ青セイバーとどんな関係であれ、アンセムが仲間であるということには関わりがないがな・・・瑣末事だ。

アンセムはアンセムだ

・・・だが、やはりというかなんとというかアンセムの顔を見たいと思ってしまう

こう思ってしまうのは私だけではないはずだ！

ヴィータもアンセムのフードが揺れるたびにキョロキョロとアンセムを見ていたしな！！

・・・我々はあのフードの下に包帯に黒髪と人を喰ったような笑顔があることを願っているのかもしれない。

あいつとは完全に仲たがいしたとは分かかっていても、どこかあいつが手を貸してくれているような・・・そんな気分になってしまう

それ程までにあいつの存在は我々の中で大きなものとなってしまっている。

最初はアンセムの正体はデザイナーヴァーではないかと、すぐに疑っ

た……しかしいつも主と共にいるライダーからディザーヴァーも一緒に主はやての近くにいると聞き

違つと分かつた……けれど

やはり彼はディザーヴァーのような気がする。

そんな気がしてしまうのだ……そして……

『来てくれ』

取り留めのないことを考えていると念話でアンセムから感情の籠つていない声で呼び出される。

蒐集で散らばっていた皆を引き連れ、アンセムに言われた次元世界に行く

荒れ果てた砂漠しかない世界のど真ん中で自然体で立っているアンセムとその横に「服が汚れるではないか！」と文句を言いながら足を上下させ地団駄を踏むように砂を避け立っている赤セイバーがいた。

対照的な姿勢で立ち続けている二人へと近づき、何用で呼び出したか尋ねようとしたら・・・

「三日後に管理局と蹴りをつける」

「「「「なっ!? / えっ!?」「」「」

アンセムが先に口を開き、信じられないようなとんでもないことを静かに言い始めた。

それを聞き多少慌てながら

「なっ何を言っている?! 管理局と蹴りだと!?!」

尋ねると、同じくヴィータもまた取り乱しながらアンセムへと詰め寄りアタフタと質問している。

「そっそんなことどうやってやるんだよ!?!」

アンセムはそんなヴィータを抑えるように手を伸ばし頭を抑えながら

「管理局に6対6の対決を申し込み、勝った暁には一週間の休戦を迫る」

そう言い放ち、どういふことかの説明を始める。

「管理局は次元世界を飛び回る我々の尻尾を掴めなくて、右往左往しているはずだ。いい加減チヨロチヨロと動き回る我々への苛立ちを我慢出来ずにローラー作戦へと出る筈だ。

そして我々は後少して闇の書の完成へと至る……ならばローラー作戦が行われる前に管理局へと対決を持ちかけ対決に勝利し、休戦状態に持ち込んでその間に闇の書を完成させてしまえばいい」

私はその提案に疑問を持ちながらも眉を寄せて尋ねる。

「しかし管理局がそう簡単にそんなものに食いつくだろうか？」

するとフードで見えない筈の顔からまるでニヤリと笑っているかのような楽しげな口調で

「釣れないなら餌を用意すればいい……6対6の対決で我々が負けた際には潔く管理局に降ると言えば、必ず食いついてくる」

「なっ!?!しかし・・・」ベルカの騎士が負けるわけなかるう?」「くっ・・・いいだろう、その作戦で行く!」

多少挑発されたもののアンセムの言う通り、一度邪魔な管理局を止めた方がいいかもしれない・・・

「管理局へは俺がそれを伝えるに行くが・・・ついてくるか?」

「いやお前を信用している」

言外に信用しているか?というようなアンセムの問い掛けを切り捨て

先にある戦いへと心をたぎらせる。

待っているがいい

必ず勝利を勝ち取り、主に幸せを!!

《 続 》

A・S編24話：天下一武道会！？いやまあ嘘だけど………（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

そういえばこの前××特製ネタの走り書きが消滅しましたorz

あの時はさすがに崩れ落ちましたね

あと20程言いたい台詞やら書きたい行動が書き並べて在ったのに・
……

781

立ち直れないorz

次回もお楽しみに

A・S編25話：向かいたい場所・・・向かう先にあるものは・・・（前

何も言つまい

誤字脱字は報告お願いします

・・・読み返して気づいたんですが
この作品・・・
絶対に女性読者いませんねww

A・S編25話：向かいたい場所・・・向かう先にあるものは・・・

side リンディ

今さっき闇の書の主と思われる黒いコートのフードを被った男・・・
本人はアンセムと名乗っていたが多分偽名でしょう・・・から連絡
があった。

アースラをハッキングして逆探知出来ないようにした上での連絡と
は随分と手が凝っているわね。

一番油断出来ない相手からの連絡とあってアースラ内には緊張した
張り詰めた空気があったが、アンセムが提案してきたことに疑惑や
驚愕が走り皆が動揺してしまっている。

まさかいきなり6対6の正式な対戦を持ちかけてくるとは・・・

ルールは6対6の対決で他の人物が手を出したら負け、殺したら負
け、一定ダメージ量を与えるか降参及び気絶で敗北となる。

一度敗北となったものが戦闘に参加することは禁じるなど簡単なものばかりだった。

あちらの情報をまったくと言っていい程手に入れらず尻尾すら掴めていない状態だったから渡りに船ではあったものの……勝敗がついた後がちょっとまずいわね

あちらが勝った場合、一週間彼らを発見しても蒐集活動に手を出さないよう約束させられない

こちらが勝った場合、大人しく投降するよう約束させた。

……組織としては信用するわけにはいかないけれど

今回はなのはちゃんたちもヤル気（誤字に非ず）だししょうがないわ

……巻き込まれたくはないもの

こちらが勝った場合は問題ないが、あちらが勝った場合一週間手が出せないというのは管理局の体面的に些か問題がある。

まず上に報告することは出来ないわね

そして集合場所は海鳴市の公園……恐らくそこから邪魔が入らないよう転移する気でしようね。

こちらからの参加メンバーはなのはちゃんにフェイトちゃんにクロノ、ユーノくん、プレシアさんにセイバーさんと完全に勝つ気ではいるが油断は全く出来ない。

あのアンセムという人物はこのメンバーですらまったく安心することが出来ない。

まず使っている魔法体系が分からない、ミッドでもベルカでもなく、セイバーさんの言う魔術というものでもないらしい。どちらかというところとデイズさんの《魔法》に近いわね、デイズさんは最後まで《魔法》に関しては教えてはくれなかったから詳細は分からないわね（無理矢理調べようとした局員が便秘や痔や廃人になりかけて帰ってきたので誰も後に続くとは思わなかった）……そんな詳細の分からない怪しげなものを使い、ウチのエースであるなのはちゃんとフェイトちゃんとクロノを纏めて手玉に取るセイバーさんを相手に拮抗できる相手なんて信じられないわよ。

しかもセイバーさん曰く、あれでも本気を出していないらしい。

彼は基本的には召喚したモンスターに前衛を任せ、後衛として援護しているが

過去に前衛としてセイバーさんと打ち合っていたのも確認している。

モンスターと同時に前衛として攻めてきたらセイバーさんでさえ手のだしようがないとのこと

にも関わらずそのようなことはしないし、退けるためにしか剣を振らず。

追い打ちをかけたりとどめをさしてくるような真似も決してしない。

何よりセイバーさんそっくりな赤い人物が蒐集に参加し始めてからも二人同時にセイバーさんを攻めるようなことはしなかった。

まああの赤い人物がセイバーさんと決着をつけたがっていたから助力を拒否していたのかもしれないが……

彼は強いが、よく分からない存在であるということが分かった。

ともかくにも、早く引退して地球に根を張りたかった。

もうずっと二次元に埋もれて生活していきたいわ……福

潤とかの後をつけていきたい。

どうせこの件で責任を取らされるのは私でしょうし……早くめに新しい住まいを見つけておきましょう

……子供たちがやったことの責任を負うのが大人の仕事とはよく言うけど、本当にそうだと思うわ。

ええ本当に……何度訓練室を壊したら気が済むのかしらあの娘たちはっ！！

なんで艦内で収束魔法なんてものを撃とうと思えるのかしらっ！？

ああ胃が……

狂ったように砂糖が欲しいわ
糖尿病になっても構わないわ！

身体は糖分で出来ている！

血潮は砂糖！心は蜂蜜！

シクシク……現実逃避しても、もう保険が下りないので、
私。
なのはちゃん……止めて

アースラのライフポイントはもうゼロよ……

s i d e o u t

- - - - -

s i d e ? ? ? ?

私は暖かいまどろみの中にいた。

それが夢だと気づいた理由は簡単だ。

顔の知らぬ母と父がそこにいたのだから……

もちろん顔を知らないということは夢の中にいた両親の顔などはなく、本来顔の在るべき部分が黒く染まっている。

本来であれば、恐怖を感じるのもあるが……顔がないのに二人が暖かいということだけは感じられた。

そこには両親だけではなく、デイズさんがいて、シグナムがいて、ライダーがいて、ヴィータがいて……皆がいた。

私も足を自由に動かすことが出来て、皆が暖かい笑顔を浮かべ、かかったり、ちょっとしたこと喧嘩をして直ぐに仲直りをしたり、一緒に楽しいことを続けた。

でも、それは夢でしかない。

両親はいないし、今みんなは私から離れてしまっている。

デイズさんは必ず帰ってくるって言ってたけど、それでも怖かった。一緒に居てくれないことが裏切られているような気がして、もう二度と隣に居てくれないような気がして……怖くて堪らない。

そう思い、恐怖で身体を震わせた瞬間暖かい夢は崩れ去り、暗い闇の中に閉じ込められた。

そこで一人、身体を震わせているといつの間にか目の前に綺麗な銀髪の透き通るような肌をした女性が悲しげな目をして立っていた。

「誰？」

顔をあげて誰か聞いたがその女性は悲しげな顔をしたまま、こちらの問い掛けには答えてくれず

「あら、こんなところに来ちゃったの？」

その代わりに私の後ろから金髪に褐色の肌をした明るい女の子がこちらに笑顔を向けながら現れ、話しかけてきた。

「……ぱっと見は可愛い顔をした少女なのに何故か恐怖を感じてしまう。」

「もうこんなところに来たらダメだよ」

女の子は頬を膨らませ、私怒ってますと言わんばかりにこちらに近づいてくるが

「……………」

怖いっ！

身を震わせていると銀髪の女性が女の子の前に立ちはだかり、私を守るように女の子から私を背中に庇う。

「何のよっかしらっ」

「。。。」

「酷い！私そんなこと思ってないのに」

「。。。」

何の感情も籠ってないような無機質な眼差しをこちらに向けて消えた。

そして私を守るように立っていた銀髪の女性がこちらを向き、私の頬を撫でながら

「眠ってください、主」

「はっ………!？」

「んっ?どうかしたんですか？」

目を開いた時目の前にあったのは目を包帯で覆い胡散臭い笑みを浮かべたデイズさんやった。

「………アレ?私は何を見てたんやろ？」

何か夢を見ていた気がするんやけど、どんな夢を見ていたかまったく思い出せへん

「何か怖い夢でも見たんですか？」

そう言っつて胡散臭い笑みを浮かべながら私の頬を撫でてくるデイズさん

その手の平の暖かさを頬に感じながら、どんな夢を見たか思いだそうとするが記憶にモヤが掛かったようにハッキリとせず思い出せない。

なんか知らへんけど器用に東京弁を使っつた気がするんやけどなあ
く？

そして物凄い怖い夢だった気がするんやけど……

眉を寄せ手を顎にあて小首を傾げながら思考の海に潜っているとデイズさんがニヤリと三日月のような歪んだ厭な笑みを浮かべて

「クツクク・・・あんまり小難しい顔をしてる隈と皺が出来てコダヌキからタヌキにRevolutionしちゃいますよ?」

「誰がコダヌキやねん!というかなんか発音がええのがムカつく!」

ニタニタと笑いながら厭味を言ってくるデイズさんに文句を言いながら顔を狙って使っていた枕を投げるが、ヒラリと簡単にかわされてしまう。

めっちゃ腹立つわ!

「ケツケケ」

ああ分かった上でああいう笑い方をするデイズさんが更に憎たらしい!

笑っているデイズさんに向かって色々なものを投擲するがかわされたり、キャッチされたりして一回も当たらずに疲れて息を荒げる。

「ダメですよ、病人が暴れちゃ」

「デイズさんがそうさせたんじゃないか！」

デイズさんの更なる追い打ちに苛立ち、近くにおいてあったお見舞いの林檎を投げるが

「あつ美味しそうですね」

簡単にキャッチされ、そのままシャリシャリと林檎を食べ始めている。

先程までの厭味な笑みではなく、本当に嬉しそうな笑顔を浮かべながら食べているのを見て多少ドキッと来てしまったのははやてちゃんとの秘密やで？

軽いボケを混ぜながらトキメキをごまかして

デイズさんと同じように林檎を食べようとしたが

「女の子が丸かじりはダメですよ」

と言いながら手にとろうとしていた林檎を取られ

『切り裂け』

空中に投げた瞬間に一瞬で林檎の皮を剥かれ、バラバラにされ皿の上に乗せられたものを差し出される。

その光景を見てアホみたいに口を開いていると

「口に虫が入りますよ」

と言いながら開いていた口に林檎を差し込んでくる。

「モゴオモゴモゴウモゴ」

「食べ終わってから喋ってください」

林檎が入ったまま行儀悪く喋ると怒られてしまったので、急いで食べ終えてから

「魔法って凄いやな!!」

感動を前面に出すとデイズさんは苦笑しながら

「はやてちゃんも魔法使えるんですよ?」

そういえば今はまだ使えないが足が治れば魔法が使えると、ヴォルケンリッターのみんなにも言われておったなあ

今更ながらに自分もファンタジーの一部になっていたことを思い出しながら笑っているとデイズさんも更に苦笑しながら笑みを深め頭

を撫でてくる。

そうしてくだらないことを話していると

「今戻りました」

用事があつたらしく、部屋にいなかったライダーが帰ってきた。デイズさんはライダーが帰ってきたのを確認すると立ち上がり扉の方へと向かっていく

デイズさんが帰ろうとしているのを見てライダーは眼鏡の位置を直しながらデイズさんに尋ねる。

「どこに行くんですか、デイザーヴァー？」

すると呼び止められたデイズさんは振り返りニヤリと人を喰ったような笑みを浮かべて

「「づいつ時に言いたかったことがあるんですよ」

何やらブツブツと呟きながら更に笑みを深め

「ちよいとハッピーエンドまで」

冗談みたいにそう言って部屋をでていった。

・・・ハッピーエンドか
デイズさんらしいなあ

それを笑顔が零れた。

ハッピーエンドは楽しみやな！

side out

《 続 》

A・S編25話：向かいたい場所・・・向かう先にあるものは・・・（後

お楽しみいただけただけでしょうか？

最後の台詞は大好きなラノベから借りましたWWW

次回もお楽しみに

更新予定について

どうも皆さんお久しぶりです

××です

はてさて最近まったく更新できていない今日この頃な素敵な感じですが……まあ軽口はともかく

スランプです
しかも極度の

とりあえず更新停止させていただきますが

必ず帰ってくることを誓います

嘘は付きませんが約束は破る気はありません

ですから首をながくしてお待ちくださいWWW

たまにストーリーが涌いたら更新しますが

今までよりも頻度は低いものとなります

感想など皆さんの応援をお待ちしております

ではまた

「Weishma」話：千の雨を超えて（前書き）

お久しぶりのリクエストシリーズ

「Welshma」話：千の雨を超えて

仏説摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄。

舍利子。

色不異空、空不異色、色即是空、空即是色。

受・想・行・識亦復如是。

舍利子。

是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減。

是故空中、無色、無受・想・行・識、無眼・耳・鼻・舌・身・意、

無色・声・香・味・触・法。

無眼界、乃至、無意識界。

無無明、亦無無明尽、乃至、無老死、亦無老死尽。

無苦・集・滅・道。

無智亦無得。

以無所得故、菩提薩、依般若波羅蜜多故、心無礙、無礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃。

三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

故知、般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等等呪、能除一切苦、真實不虛。

故説、般若波羅蜜多呪。

即説呪曰、羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶。
般若心經」

心頭滅却すれば巨乳もまた貧乳に見え・・・・・・・・くっ

見えないっ！！

「おい、怖いから人の後ろで般若心経を唱えるの止める」

厭味ったらしく、本当に嫌そうな顔をしながら言っているであろう少女の方向を見ずにそちらに背を向けながら

「くっ、マスターが余計なことを提案しなければ!？」

「ここでマスターって言うなって言ってるだろうがっ!！」

突如大声を上げた少女に教室中の目が集まる中

「あつすいません、彼女ちよつと疲れてるみたいで」

あはつと明るい感じのおとぼけ笑顔を向けて適当にごまかす。すると近くにいた少女の一人が

「でも本当に仲良いね、アンタ達」

と楽しそうに絡んできたので能天気な笑顔を浮かべながらもそちらを見ずに

「モチロンですとも〜ボ・私と千雨ちゃんは仲良しこよしのマブダチですから！ねっ千雨ちゃん？」

「……………」

すごい冷たい眼差しに晒されています。

なんでサーヴァントのフォローをしようとしなんでしょうかね、マイマスター？

少し責めるような目つきで見ると案の定、誰がお前に巻き込まれたたまるかと言うような相変わらず僕を全否定するような眼差しを向けてくるマイマスターこと長谷川千雨ちゃん、通称ちうちう

うん、なんか知らないけどちうちうって思ったら臆蹴られました。

……じーぞす

変な直感がありますね!!

セイバー!?

「でもアンペラトリスさんはこの前転校してきたばっかだよな?」

不思議そうに首を傾げながらそう尋ねてくる声だけじゃ分からない
誰か

「千雨ちゃんとは寮内で同室ですし、むしろソウルメイトで同志と
「余計なこととは言うな!」yeah」

ごまかそうとしたのだが上手いかず千雨ちゃんに黙るように促された(勿論ボディーランゲージ)。

「ふう〜ん。あとなんで着替えの時端っこでコソコソ着替えるの?」

なんだ畜生質問大会ですか!?

突然始まった僕弄りにアタフタしながら法螺を吹こうと口を開くと

「アンペラトリスはシャイだからな」

ちうちうがフォローしてくれた。

ありがとう、ちうちちゃん！

野菜小僧なんかにはファーストキスは渡したりなんかしませんから！！

マスターからのフォローに感激していると

「なあくんだてつきり私は緊張してるのかと・・・顔とか真っ赤だし、息も荒いし」

・・・じーざす。

誰ですか、今余計なことを言った淑女は！？

本来その状態を人は興奮状態と言います！！

ええそうですね、興奮してますよ！

普通の中学生だったらマイロンギヌスも反応しませんが、何人が年齢にはおかしな装備をしている方たちがいるせいで・・・
しかもマスターの手前だから最初は大人しくしていたんですが、つ

いっつかりマスターの目の前で余計なことを口走ったせいで……

せっかく女の子に変身してるのに……
シクシク

多少悲しみにうちひしがれながらも急いで体操服を脱ぎ、制服へと着替える。

『令呪はないんだよ？』

くっ!?

誰だ!?!今僕に悪魔の囁きをしたのは!?!

『令呪がないと言うことはやりたい放題だぜ?うへへ』

くつまさかボクなのか!?!本能という名前の悪魔が僕にボク自身として囁きかけているのか!?!

『大丈夫、大丈夫たかがオツパイ眺めるぐらい』

……ダヨネ

令呪もないし……いざとなれば魔法で記憶を……

あっさりと悪魔の囁きに陥落しつつ振り込もうとした瞬間

「駄目だ!！」

心の中で誰かに呼び止められる。

『なっ!?! 貴様は! 理性という名の天使か!?!』

「ああ」

理性という名の天使の登場におののく本能のという名の悪魔

『まさかこいつに理性が在ったなんて!?!』

ええ!?! 驚くところですか!?!?

まさか脳内の人物までに馬鹿されるとは思ってなかったデス。

「理性というより漢としてのプライドでもある！！お前は以前女体化した時のことを忘れたのか！？あの時の魂の咆哮を忘れたというのか！？」

くっ確かに

覗きは漢にこそ赦された神聖な儀式（普通に犯罪です）！！
それをこんな状態でやるなんて！

「そうだろ？だったらとりあえずマスターの言うことに従って・・・」

『でもよく今お前の素体は女なんだから問題なくね？なんか問題あんの？』

・・・ダヨネエ

「心代わり早っ？！いいのか！？女のまま覗きしても！？あの時のことを忘れたのか！？」

いやまあだって・・・

『「それはそれ、これはこれ」』

でしょ。

臨機応変に行かなければ人生ままならないのデスよ

H a h a h a

プライド？ナニソレ？I s i t d e l i c i o u s ?

……ではまあ全部引つくるめて無視して待望の

アウアロン
理想郷タイムっ！！

本能という名の悪魔と意気投合しつつも胡散臭い笑みを浮かべながらインチキ外人のように笑って振り向くと……誰もいなかった。

キンコンカンコン

……Oh

葛藤している間に既に授業が始まるつもりとしていたようで、皆さん僕を置いて移動してしまったようです。

ああうん明日から修学旅行なんかやってらんねえっす

ユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・ド・アンペラトリスことユウリ・アンペラトリスことアセンターはやさぐれ始めた。

そうです、ワタクシ再び新たな世界へと召喚されたせいかな新しいクラスを手に入れてしまったのデスヨ。

何故こんなことになってしまったのかをマイマスター視点から送りましょう！

「リクエスト話：魔法先生ネギま〜魔眼を担う電子の賛同者〜」

ああ？黒髪の巨乳の巫女さん？

ちよつと狙いすぎじゃないのか？

確かに需要はあると思うけどなあ

このコスをするには乳が足らなねえよ

雪広クラスの乳がないとこのコスは無理だな……まあでも

巫女さんっうジャンルには手を出したことがないから

憧れるって言えば憧れるんだが……まあタブだな

よつと

ん？メール？

なんだファンからの応援メッセージか？

まあ早く返した方がいいか……

……別にアンタの為じゃないんだからね！！

・・・ああダメだカットカットカットカットカットカ
ットカットカット

3 徹だからさすがに頭のネジが緩んできてるな。
ちっファンから進められたゲームが異様に面白かったからついやり
込んじゃまったからなあ

F a t e は 熱 い な ! !

今度遠坂凜のコスプレがしたくなっただぜ!!

まあ返信返信と

何々、『いつもちうたんの可愛いコスプレを楽しんでいます!!これ
からも頑張ってください(*´、｀)』
ところでちうたんはこれを知ってますか? 《画像》
これはネットで噂になってるおまじないでこの画像に触りながら願
い事をするという願い事が一つだけ叶うらしいですよww
暇だったら試してみてください!

b y ・ な 幼 女 』

ファンから来たメールについていたのはよくRPGとかにある魔法陣とか呼ばれる奴だった。

「願い事ねえ」

3 徹明けな私は直前にFateをやっていたせいもあって軽く舞い上がっていたせいか、ふざけ半分でメールについていた画像の上に手を置き、本当に他愛のないことを願う。

『・・・・・・・・・・どうか私を裏切らない友達が出来ますように』

こんなことを思つのはガラじゃないが、私はずっと一人ぼっちだった。

どうしてかって？

当たり前だ。周りの奴にとつての“当たり前”が私にとつての“当たり前前”とは全く異なっていたのだから

何を言っても認められず何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も拒絶された。

だからこの時、つい心の底から自分の《賛同者》を望んでしまったのだ。

しかし“当たり前”の話だが、こんなことをしても何か起きるわけでもなく

「ああアホくさ」

ダメだ徹夜明けは本当にダメだ。

自分の行為を自嘲しながらパソコンに映し出された画像を削除しようとしてマウスを動かす。

「んっ？おいおいまじかよ」

しかしマウスに連動しているはずカーソルは動くこととはせず、画面に固定されフリーズしてしまっている。

「ああもしかしたらウィルスだったのかもなあ」

先程のメールにウィルスが入っていたことを疑いながらもパソコンに入っているファイヤーウォールが破られることはないだろうと推測し、強制終了させようとボタンに触るが……

「えっ？」

一向に画面が消えることはなく、むしろパソコンの液晶の光が増していき

パソコンに映し出された魔法陣が脈動するように紅く輝き始めた。

「なっ!？」

いきなり起こった不可解な出来事に驚きの声をあげつつも、急いでパソコンのコンセントを抜く

あまりやりたくはなかったが、今すぐパソコンの画面を消さなければ私の“普通”が消えてしまいそう……そんな予感がしたから

抜いたコンセントを握りつつもパソコンを見るが

「おいおい」

パソコンの光は色褪せることなく、更に輝きを増していく……
……まるで何かを生み出そうとしているかのように

そして

『OK！今日はちうの新曲を披露するよ！手拍子よろしくだぴょん』

「なっ!?!」

パソコンから聞きたくない音楽と共に聞き覚えのある声が部屋中に響き渡る。

『ほらほらちうに注目よー Jpg写真で、美貌を見せ付けろー
ちうちうちうちうアナタを虜にしちゃうからー』

「がああああああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
ー！ー！ー！何故この歌がつ！？完全に削除したはず！やめろつ！
私の黒歴史を引きずり出すな！！あるだろ！なんとなくポエム作っ
ちやったりとか！そんな感じで作っちゃったんだ！」

羞恥心に耐え切れず色々暴露しながら床に転がっている

『呼ばれて飛び出てジャジャジャー痛つ！？あれ引つ掛かった？魔
法陣ちっさ！？ん？というか封印！？対神用六乗結界？！えっちよ
っ！？』

変な声が聞こえたので床に落ちているノートパソコンを見ると画面
から黒い頭皮がはみ出しているのが確認出来た。

黒い頭皮は画面から抜け出せないうえに何やら予想外の事態が発生
したらしくジタバタと暴れ回っている。

「ふっそうか………夢かフツハハハハ夢だ。夢に決まって

を覆った目鼻立ちの整った美人だった……目が見えないから目鼻立ちが整ったとは言えないのか？

まあとりあえず美人だった。

しかし、口元に浮かぶ人を喰ったような笑みがいただけなかった。あれだけで性格の悪さが垣間見ることができる。

ニヤニヤと笑いながらも私が土下座のような状態で頭を打ち付けようとしているのを見ているので

「なんなんだアンタは？」

頭から血を垂らしながら一番最初に聞くべきことを聞いてみるとニヤリと笑みを深めて

「サーヴァント、アセンター。召喚に従い参上した………問おう、貴女が私のマスターか？」

「っ！？」

私はその台詞を聞いて動揺しながらも思い出す。本来どのような存在が言った台詞かを……………

「サーヴァントだと?」

まじか!?

Fateに憧れるあまりとうとう頭がおかしくなっちまったのか!?

動揺しながら色々考えているとアセクターと名乗った目の前の非現実実は私の額へと手を伸ばして

「やれやれ可愛い女の子に傷が残ったらどうするんですか?まったく『彼のものに癒しを』はいこれで大丈夫」

額に触れて呪文のようなものを呟き、私の髪を少し撫でた後に手を離した。

気になって額を触ると先程まで在った血が姿を消して怪我が消えている。

……………治したのか?

八八八、夢だ。夢に決まっている。

軽く現実逃避している私を見かねた目の前の非現実私の手を取り・
.....

これがアセンターことユウキ・アンペラトリスとの出会いだった。
ちなみに蛇足ではあるが、手を掴まれた後『僕という存在が認められないのなら身体に教えてあげましょう』とか言って空中に連れ出され悲鳴をあげ恐怖しているにもかかわらず、かなりの高さから紐なしバンジーさせられたりとか、明らかに現実にはならない動植物と触れ合いという名の命掛けの鬼ごっこをさせられてようやく目の前の非現実が存在して性格が崩壊していることを理解した。その後私の部屋に居候し始め、知らない間に転校してきたのである。

そしてアセンターから聞いた話では学校全体に一般人の認識を操作する結果があり、一般人は何が起きても疑問に感じないようで、その上我がクラスの子供先生は魔法使いらしく、我がクラスは魔法関係者もしくはこの先必ず関わるであろうもの、潜在的な魔法の素質があるものがあつめられた言つなれば非現実の温床のようなものらしい・・・ああクラス替えして欲しくてたまらない・・・明日の修学旅行が憂鬱でたまらねえ。

八八八八八八八八八八八八八八八八八八地球なんか滅べばいいのに

千雨 END

《続かない》

実は書こうと思ってたけど疲れたOTZ

「Welshma」話：千の雨を超えて（後書き）

結構がんばった

ああ続きかけない

ちなみに挿入歌はちうちうのキャラソンですWWW

「Date:delete」A's Final story(前書き)

ハッキリ言おう嘘予告であると

で生存報告
生きてます

続き書けないけど生きてます

まあ釣りだと思って読んでくださいな

注意：凄い中二病ぽい

「Date:dalete」A's Final story

「ちっ……邪魔ですよマザコン！」

「あっ」

「アンタウチの娘に！ぶっ殺すわよ！」

「状況見てくださいよバカ親」

闇に飲まれようとする雷を救う王。

「アハッ。アナタを飲めるなんて思わなかったけど……ワタシの糧になってね」

それを見て無邪気に笑う闇という名のバグ

そして王は……

「は……母上？」

「あらあらユウキどうしたの？怖い顔をして？」

在りし日のトリスティンにて母と出会う。しかし……

「……そうね。うちの子がそんな顔をしてるんですもの。何かあったのよね？ならこんなどこでウダウダしてないでさっさとなんとかして帰ってきなさい」

「さすが母上！ガッテン承知！」

あの母にしてこの子あり。くだらぬ幻想などに惑わされず。深き闇より這い出んとするが

「クフフ・・・さすがにアナタをそのまま吸収は出来なかったみたいね？でもまだワタシは遊びたいの！だから沈んで！更なる闇へ」

再び現れた闇へと更に深き闇へと静められる。

「ここは・・・・・・？」

「ちゃっちゃんと起きるか馬鹿息子！」

「えっ・・・母さん？」

それは第一の生を受けた世界。花村ユウキであった世界。

「何馬鹿面晒してんだい？だいたい母さんってなんだ母さんって鳥肌が立つよ」

ポニーテールにくわえ煙草をしてフライパンを持った若々しい母。

「オカン」

「ママとお呼び」

「・・・。。。」

「何シラけた目で見てんのよ」

フツフツと蘇る忘れようとした懐かしき記憶。

「何馬鹿な顔してんのアンタ？」

二度と会えるはずのなかった幼なじみたち。

「元から馬鹿な顔してなかったっけこいつ？」

「よし表出るや」

蘇る帰郷への感情。しかし……

「おいユウキ」

「なんだよオカン」

「ママとお呼び……じゃなくて……」
「……何をこんなくだらないところで足踏みしてる？」

「えっ？」

「アナタからも言っちゃってよ。この馬鹿息子に……」

「ユウキ」

「なんだよチャン」

「パピ〜と呼べ」

「……」

「ゴホンゴホン……んっ。花村家の男子が……こんなつまらんことで立ち止まるんじゃないっ!?!」

「……………」

「アンペラトリスの息子ですよ」

「……………母上。」

再び現れる母上。

「アンタが今何をしてるかは知らないよ。だけどねえ……私たちの息子は馬鹿なんだ。馬鹿は出来ることだけ愚直にやればいいんだよっ!?!」

「……………母さん」

「ええうちの息子はこんなところで止まるような子じゃないもの」
「……………母上。」

「壁があつたら殴って壊す!岩があつたら吹き飛ばす!道がなければこの手で作る!行く先に崖があるうと底無し沼があるうと突き抜ける!それが私たちの息子(だ)よ!?!」

「……………おう。おうおうおうおうおうおうおうおうおうおうおうおう!行きます!?!」

家族の応援を受け再び闇より這い出る王。

愛したくなるような女の色気を放つ身体。

何度も何度も夢に見た。

「どう？コレならアナタも攻撃出来ないでしょ？それに見てアナタからコピーしたのよ」

その瞳に移るのは紅い十字架。

「その人は誰なの！？」

「この女はその男が死んでなお愛し続けた一人の女よ」

「「「「「なっ！？」「「「「」

その言葉に驚愕の表情を浮かべる一同。

「うふふ愛した女を攻撃なんかできないわよね？」

そして醜い狂笑を浮かべる女王に化け、王をせせら笑う闇。

「ひどいの！！そんなの攻撃出来るわけ・・・」

・・・轟っ！！・・・

えっ？

「がはっ」

しかし闇に向かって打ち放たれた凄まじい拳打。

「っ!!・・・どうして!?!」

「誰であろうと例え神であろうとその女を汚す奴は殺す。アイツはそんな汚らしい笑い方をする女じゃない」

王から解き放たれる身も凍えるような凄まじい殺気

「くっ・・・ふざけるな!!」

「ふざけてなんかいない。アイツの事なら全て覚えている。例え地獄にいようと忘れることなんかあつてたまるか」

「ちつなら愛した女に無様に殺されなさい!今のワタシに魔法なんて効かないのだから!」

その姿のまま瞳の紅い十字架を光らせて王に迫る闇。けれど王はそれをかわし、目につけられていた包帯を外す。

「見せてあげましょう。この世界にきて開眼した第五の魔眼を」

「えっ?なにそれ?」

「気づくべきだった・・・どうして一つではなく。五つなんて中途半端な数だったのかを」

「何を意味のわからないことを!」

「僕に与えられた魔眼はたった一つ・・・そうこの瞳だけだった」

王は気づく最後にして最初の魔眼に

「V o t r e a m e e s t u n p a y s a g e c h o i
s i (君の心の風景は酷く歪に乱れている)」

「何よそれ!？」

王は歌う。己が魂の歌を

「Q u e v o n t c h a r m a n t m a s q u e s e t
b e r g a m a s q u e s

(美しい影たちが行進し)

J o u a n t d u l u t h e t d a n s a n t e t
u a s i

(音楽に踊る人たちが住んでいるが)

「・・・フランス語？」

「こんな詠唱聞いたことがないっ?!」

「T r i s t e s s o u s l e u r s d e g u i s e m e n
t s f a n t a s q u e s .

(皆一様に泣いている)

L a m o u r v a i n q u e u r e t l a v i e o p
p o r t u n e . (生命の喜びを歌っているが)

「何を言っているんだい!？」

「魔力が！？こんなに！？」

「Ils n'ont pas l'air de croire
à leur bonheur

(幸せな顔をした人はいない)

Et leur chanson se mêle au clair
de lune,

(歌声は月の光に消えていく)「

「Au calme clair de lune triste
et beau,

(静かな月の光は悲しくも美しい)「

「世界が歪んで！？」

「来る！？何か来る！」

「Moi, je n'en veux pas d'autre
s que l'étrange laquelle j'
aspire,

(我は望む、愛すべき君を)

Lune de L'Éternité!! (永遠の月を!!)「

世界は塗り変えられる酷く歪な世界へと

「ようこそ我が心象風景に」

「これは……城？」

「世界が変わった!？」

「位置の特定が出来ないなんて」

「……何よコレは」

驚愕する皆

「そこは月夜のトリステイン城」

頭れたのは満月のある闇夜に佇む城。その庭にとばされし闇と戦いし戦士たち

「どうして薄暗いのにこんなにハッキリと色々見えるの?それに……誰もいないの」

「ここは狂った世界ですからね。太陽がないのに……(明るいんですよ。人がいないのは……まあ聞かないでください)」

王は悲しげに笑う

「ぐっナニコレ!?姿が保ってられないっ!!」

「そりゃあそうですよ。この世界では絶対にその女は存在出来ない……そういう呪いを掛けられたから」

「……えっ」

王は笑う。悲しいように苦しいように泣き狂うように

「さて見上げよ！観客ども！我が喜劇を！」

その声と共に月夜の世界から多数の目が現れる。

「何これ……目」

その目は……色の違う目。蒼く透き通った目。六芒星の浮かぶ目。螺旋の浮かぶ目。三角形の浮かぶ目。多数の丸の浮かぶ目。手裏剣模様の浮かぶ目。黄金に輝く目。歪曲させられそうな目。全てを見通しそうな目。十字架の浮かぶ目。五芒星の浮かぶ目。鳥が羽ばたくような目。時計の浮かぶ目。

多種多様な目が空中に浮かび上がる。

「この世界は全ての魔眼が存在する狂った世界！さて招かれざる客人よ、退席する準備は整ったかな？」

> F i n e <

嘘
だけ
ど

お疲れ様でした！

いやこのような駄作をお読みいただき誠に感謝感激雨霞なわけですが

いやはやまさか最後の魔眼が固有結界だったとは誰も思い付かんかったでしょうか？

うんまあフランス語は全部テキストウですから悪しからず

いやあ久しぶりに書いたらアホみたいに大変でした

というかゼロ魔とリリカルでは最後の魔眼の種類が違います

ゼロ魔のは割りとシヨボいです

理由は色々とあるんですが話を進めないと理由も出せないし、存在自体出せないっていう……てへっ

あっやめて殴らんといて！

まあ小芝居はともかく

お楽しみいただけたら幸いです

ではまたいずれ会えたら

アディオス！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1603n/>

魔法少女リリカルなのは～呼び出された霸王～

2011年10月13日10時17分発行